
上手な修正液の使い方

和紙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

上手な修正液の使い方

【Nコード】

N4108A

【作者名】

和紙

【あらすじ】

男だけに囲まれていた高校生活をやり直して、女の子と甘く楽しい高校生活を送りたい欧介の熱い友情あり、シリアス&涙ありのドタバタ(?)ラブコメ。<現在、侠の闘争の場編>

一ヶ所目 1

「ぐしゅ ぐしゅ 欧介君……や やっぱ卒業式って感動だねっ
……うえっ……」

春の日差しがポカポカの今日この頃、ムサイ男達が歌う低音校歌に包まれながら、僕のオタク友人の宗夫君が涙を流しながら言った。

「そうだね……ハ ハッハ……」

（そんな、感動できるのかな？）

僕は、対照的に暗くドロツと相槌を打った。

（今日で、花の高校生活ともお別れ＆男だらけで友達含めオタクばかり、なにより自分もオタク仲間につきずり込まれ不良からはイジメられる暗く褐色の三年間だったなあ……）

そう思うとそんな相槌しか返せなかった。

そんなこんなで、僕が通う銘東男子高校卒業式も終了し、有志（7人）で企画したオタク仲間達の盛大（？）＆涙がこぼれ落ちた（自分以外）銘東卒業式も閉幕した。

最後まで惜しまれつつも第二次銘東卒業式の参加を拒否して家路に着いた。

「欧介、卒業しても、ずっと一緒にいてね……約束よ」

「夢子、安心してよ。どんな障害や困難が二人を隔てても僕の愛から産まれた恋の翼で二人を阻む壁を飛び越えてみせるから」

「欧介、大好き」

「僕もだよ…夢子」

（その後は…もちろん二人で…。ちくしょう…ちきしょう…痛いよお…心が…）

僕は、バス停で女子高生との甘い卒業式の妄想にダメージを受けつつも浸っていると、フンワリと人の気配がした。

気配の方に顔を上げると女子高生のフィギアが立っていた。

一ヶ所目 1（後書き）

初投稿しました。

まだまだ未熟者なのでご指導をお願いします。

一ヶ所目 2（前書き）

欧介の運命的な出会いの話

一ヶ所目 2

「えっ……」

思わず声が出てしまった。

その声で、女子高生フィギアがコッチを向いた。

「……」

「……」

（ヤバッ……妄想に耽りすぎた）

数秒見つめあった後、僕は急いで席から立ち上がりバス停から逃げ出そうと、三年間運動不足でダレきった足でディープリンパクト並のスピードを出して女子高生の横を走り抜けた。

僕は、近所の空き地まで駆け抜けて来た。もう、その頃には息も絶えだえて土管に座り込まずにはいられなかった。

そして、右手の妙な軽さに気付いた。

「あれっ……カバンが無いや……ヤバッ……」

そう、右手にいつもの重みが無かった。

しかもカバンには、我が母校の卒業証書と卒隊記念の色紙が入っている。

「まあ……いいや。卒業証書なんてただの紙だし。カバン取りに戻って顔を合わせるよりマシだよ」

自分にそう言い聞かせ苦笑気味に証書諦めた。

目の前には卒業式帰りの中学生の姿がチラホラ見える。

「はあ…三年前、中学生に戻れたら…もっと勉強して違う高校（共学）に入り直せるんだけどな…ド○えもんが来てくれないかな…」

三年間を棒に振ったと思ったたら突然悲しくなり、泣きたい気分だなあ…と思った。

ため息混じりに、ふと足元に目を落とすと紙が目に入った。

なんだコレ エロ本の切れ端か？

少し期待して手に取り、中を見てみると広告らしき文章が書いてあった。

《人生やり直したい方に朗報！！あなたが持っている修正液で修正したい過去を修正出来ますよ！！

詳しくは泉区5番地 雑貨ローズマリーの上》

僕は、数秒リアクションに戸惑った後に、

「ハハッ、タイミング悪っ…。ちくしょう…こんなインチキ広告誰が捨てたんだよお。」

怒りと悲しみに紙をグシャグシャに丸めて遠投した。僕の渾身の怒りのエネルギーが加わった紙クズは距離を伸ばす伸ばす…。

そして、突然高度を下げ空き地の草むらにパサッという音を虚しく響せ消えた。

僕は、一気にどっとへこんだので家に帰る事にした。

家で一段落して居ると一階から母さんの声が聞える。

「欧介、お客さんよお」

「誰だよ。くつろげる至福の時間なのにー」

母さんに不満たらたら文句を言いながら玄関に出た。

「ハイハイ、どちらさんっすか？」

来客から見れば、僕は明らかに迷惑な野郎だなあ。何の用だよ？というオーラを発しながら玄関に出た。

そこに立っていたのはバス停で、気まずい展開に包んでしまった女の子が立っていた。

改めて見るとフィギアと見間違えるほどの容姿だ。

軽くクセのかかった栗色のセミロングの髪に色白で整った顔立ち。

セーラー服がこの上なく似合っている。

（お人形さんみたいだな…）

僕は、思わずボーツと黙って見つめてしまった。

すると女の子は笑顔を作ってくれた。

「あのっ、真田欧介さんですか？」

女の子がヤンワリと切り出した。

僕は、突然名前を呼ばれたのでビックリしてしまった。

「はっはい。真田欧介は僕ですが何か？っていうか、さっきはごめんなさい」

自分でも驚くほど早く口が動いたので更に驚いた。

（うわっ、すごい久しぶりに女の子としゃべっちゃった……）

「カバンをバス停に置いてかれて、急に走り出したのでビックリしちゃって…卒業証書が入っている様なので届けにきました」

（ああ…そんな、銘東の卒業証書ごときで家まで届けてくれるなんて…）

何て良い娘なんだろうと感極まっていると、

「では、夜分に失礼しました。おやすみなさい。」

と、幸せな会話の時間は突如閉幕した。

一礼し女の子はドアのノブに手をかけた時、

「あっあの、もう夜も遅いし近くまで送りますよ」

と、僕の口が無意識に動いた。

（朝の占いじゃ、今日のラッキーアイテムって自分の口だったよう
な？）

と、頭をよぎった。

「あっ、じゃあ…でもそのカッ……」

「送りたいんです」

勇気を振り絞って言った。

すると、女の子は微笑んでくれた。

「では、お願いしますね。」

「はい」

自分の中で、今日のラッキーアイテムは自分の口で確信した。

二人で歩き出して気付いたが僕は、明らかに部屋用のパジャマを着
ていて左手には何故か筆箱を握っていた。

（き…今日のラッキーアイテムだよね？俺の口って？）

朝の占いを信じていた事に少し恥ずかしい気持ちになった。

一ヶ所目 2（後書き）

まだ、もう少し（一ヶ所目の話）が続きますが、気になる点やご指摘がありましたらお願いします。

一ヶ所目 3

二人で歩きながら色々な話をした。

彼女の名前は、楠木蒼（くすのき あおい）聖蘭高校を今日卒業したそうだ。

誠蘭と言えば学校行事が盛んで自由な校風な高校であり、銘東高より3ランクぐらい上の学校だ。

蒼ちゃんは、僕とは比べ物にならないお嬢様高校生だったのだ。

（高嶺の花ってヤツかな…）

そう、思いを巡らしていると、

「ココで結構です。この泉区から家は近いので、送ってくれてあげてくださいました。お話楽しかったです」

彼女が微笑んで頭を軽く下げた。

「ああ…お礼を言うのはコッチです。カバン届けてくれてありがとうございます」

僕も初めて笑顔で蒼ちゃんと向かい合う事が出来た。

「では、また…」

やんわりな雰囲気を残して蒼ちゃんは真っ直ぐ歩いていった。

（あんな子と学校生活してみたいよ…きっと薔薇色の学校生活なんだろうな。ホントに高校受験やり直したいよなあ…）

昼間、心に発生していた後悔が更に濃くなり雷雲のように僕の心を包んだ。

夜空を見上げると黄色く光っている月が見える。

「たまには、月を見ながら帰るのも高校生最後の夜を飾るのに良いかな」

神秘的な月の魅力に引き付けられて、そう呟き来た道を戻った。

帰る道の途中に住宅街の看板が目に入りその地名が妙に頭に引っかった。

《ここは、泉区6番地》

「泉区6番地？あの紙くずか…！」

その時、何かに引き寄せられるよう振り返った。

《雑貨屋　ローズマリー》

あの胡散臭い紙切れの店が建っている。

「えっ、なんで…」

だが雑貨屋は電気が消えていて閉まっているようだ。

「やつぱり、あんな広告ガセだよな。時間が戻せるわけないもん」
そう思った時、二階部分から色っぽい女の人の声が聞こえた。

一ヶ所目 3（後書き）

一ヶ所目の佳境に突入して、話がラブコメから離れていますが御理解して下さいと嬉しいです。

一ヶ所目 4 (前書き)

何だよ……この店

一ヶ所目 4

「ねえねえ、君は一階の雑貨屋のお客なの？それとも2階の私の店のお客？」

「うわぁー!!」

突然の声を掛けられたので僕は、思わず叫んでしまった。

僕の悲鳴は、夜の静寂に包まれている住宅街に木霊す。

「うわぁーって、アンタ!!失礼な男だわね」

二階から覗いている女の人は、怒ったように頬を膨らました。

「あの…ローズマリーの上って二階の店って意味ですか？」

まだ胸のドキドキが治まらない中、僕は一応礼儀のつもりで聞いてみた。

「そうに決まってるでしょうよ!!アンタそのくらい予想しなさいよ」

しかし、僕の礼儀は受け取って貰えず、逆に女の人の気分を害してしまっただけ。

(何か…変な人に捕まっちゃったな…)

そう思いこの場から逃げ出そうとした時、女の人の目線が僕の手に握られている筆箱に注がれているのに気が付いた。

（な…何なんだ？）

クエッションを浮かべている僕に女性が掌を返した様に笑いかける。
「アンタやつぱり私の店の客だわねえー。筆箱持つてるようだし。
もう、早く裏の階段から上がって来・て・よ・ね」

艶っぽい声で話しかけてきた。

「は はあ」

僕は相槌を打ち、階段を登って行く。

（もしかして店の中に入ると屈強な男達に身ぐるみ剥がれるのかな
…うっ…手の筆箱持つてなきゃ良かった…）

店の中から犯罪の匂いがプンプンしているような感覚に襲われながら、震える手で二階の店のドアを開けた。

「いらっしゃーい」

甘っるい声と共に、先程の女の人が正面の窓際に立っている。

店の中はアロマの匂いが漂い、正面の窓と部屋を中心に置かれた机と椅子のペア以外は、分厚い本や薄っぺらい本で埋め尽されている。

（うわっ…怪しさK点超えだな）

そう思い、辺りを見回していると女性が声を掛けてきた。

「さっそく始めよっか。例のアレ出・し・て」

僕は、その言葉の怪しい雰囲気にとキツとしながら呟いた。

「はい！！それで例のアレってなんでしたっけ？」

僕は、外見とは正反対の18歳を全面に押し出して笑う。

しかしその言葉は、彼女の怒りの導火線に火を付けるのに十分な火力を持っていた様で、赤鬼の様な顔で睨まれた。

「修正液。あとアンタの名前を10秒以内に言いな」

艶っぱさは消え、変わりにドスの効いた声が僕に向けて放たれた。

「なっ名前は、さなっ真田欧介です…」

一秒ぐらいでカミながら言い終え修正液を探した。

しかし、筆箱の中の修正液が見つからない。

（ヤバイよ…修正液無かったら高く積まれた本の中から屈強なムキムキが飛び出してくるかも…ドコだよ修正液…）

意味不明な妄想を抱きながら筆箱やポケットを掻き回している間に彼女は、すでに8まで数えていた。

「9…」

（あと一秒だ…。修正液発見！！）

「有ったあ!!」

僕は、叫びながら勢い良く修正液を取り出した。

「はあ…」

お互いため息をついた処で、女の人が手招きした。

「座んな」

女性は椅子を指差した。

「はっは…ひ」

僕は帰りたい一心で相槌を打ち、椅子に腰掛けて前に置かれた本を見た。

《真田欧介 18歳 男 18年間の記録》

そう題名が書かれている。

「それで…どこからやり直したいの？赤ちゃんから？それとも一週間前から？」

まるで、欠伸をするような当たり前な口調で女性が切り出した。

「うわっ!!嘘くっさあ」

突然の展開に、ついていけず僕は反射的に本音を溢してしまった。

言い終えてから僕は、しまったと思った。

しかも今日一日のラッキーアイテムの筈である口から衝撃的な発言してしまった。

（ま…また怒らせちゃったよ…）

そう思い身を怖張らせた瞬間、女性是不可思議な雰囲気をかもし出した。

「あんたは、強く人生をやり直したいと思ったでしょ？その強い思いがアンタをこの店に引き寄せたのよ」

女の方は、やや含みのある話し方で分厚い本を僕に渡した。

一ヶ所目 4（後書き）

ファンタジック要素が入ってきていますが、御理解いただけると嬉しいです。
もう少し辛抱をお願いします。

一ヶ所目 ラスト

確かに、本の目次には自分が産まれてから今日この瞬間まで18年
間が記されている。

修正液で文字を訂正するくらい何かのセールスの契約を結ぶ事には
ならないな。

とにかくこの怪しい空間から出なきゃと思い、僕は言われた通りに
中学3年生から今日までの目次を消していった。

最後の目次の18歳の3月に差し掛かった時

突然、女の人が真剣な口調で、

「今まで自分の記録を修正するという事は綺麗さっぱりやり直しが
出来て、変えたい過去を変えられるという事よ。その反面、今まで
築いてきたアンタの周りの人々との繋りも真っ白に元通り」

女性は、本の目次を意味有り気に撫でる。

「そう…今は良好な両親との絆や3年間で知り合った全ての人の絆
もね。やり直した先の未来でのアンタがどんな苦しみや悲しみを味
わっても全ては自分持ち、やり直せない未来になるという事をお忘
れなく。もちろん今より幸せになる可能性もあるけど……」

女の人が僕の目を強い思いが込められている様な目で見た。

「その覚悟が有るならどうぞ、今日までの自分を修正しなさい」

この言葉を聞き僕の腕は修正作業を止めまりガタガタと震えた。

何より、僕の心の奥にズシンと響いた。

（そうだった…修正するって事は後悔しながらも今まで歩いて来た3年間自分の記した道が消えるんだ。また、自分自身で新しい道を書き込む事なんだ。軽い気持ちじゃダメなんだ。そんな強い覚悟、僕にあるのか？）

僕は真剣に悩み、過去や現在の生活を考えたんだ。

もう、体が半透明になりつつあり、消えていくように感じる。

（マジだ……本当に、この修正は実行されてるんだ。怖い…だけど…変えたい…3年間の男に囲まれた暗い高校生活をやり直したい。もしかしたら、僕の人生の分岐点は今なのかも…）

その思いが浮かんだ瞬間、別れ際の蒼ちゃんの笑顔が浮かんだ。

もっと、蒼ちゃんの身近に居て一緒に高校生活を送りたい。

僕は、もっとたくさん蒼ちゃんの笑った顔が見たいんだ。

蒼ちゃんの笑顔が僕のの心に絡んでいた何本もの鎖を解いた。

僕の覚悟が決まった。

「僕は、何もしないで後悔するのより、行動して後悔したいんだ」
そう、女の人に笑いかけ一気に18歳の目次を修正液で修正した。

そして、目の前のウーマンに元気よくピースを叩きつけてやった。

辺りが修正液の白に包まれる。

今日までの三年間の自分が稀薄になっていく様に感じる。

意識が消える直前に女の人が、呟いた。

「じゃねーん。 good luck よん。 頑張って良い修正しなよ」
そして彼女の小意気なマダム流ピースに見送られ僕の意識は消えていった。

もしかして、今日のラッキーアイテムって修正液かな？

そんな事を思いながら。

一ヶ所目 ラスト（後書き）

この話が一ヶ所目のラストです。

次の二ヶ所目からは学校生活編が始まります。

二ヶ所目もよろしく願います。

シェイクシェイク（前書き）

転生編から学校編を繋ぐ話です。

シェイクシェイク

今日、僕は聖蘭の合格発表開場にいる。

修正液で、過去を修正して一年が過ぎようとしている。

一年前の卒業式が行われた日、僕は高校3年から中学3年の4月まで戻った。

この一年間、僕は15年間（まあ……ホントは18年間だけど……）生きてきた中で一番勉強した。

学校の犬と呼ばれようが気にしなかった。

全ては、聖蘭で蒼ちゃんと高校生活を過ごすためだから。

（まあ……合格してなかったら中学浪人なんだけど……そう、考えると掲示板見れないよあ……）

僕は人が行き交う掲示板で一人悶えた。

（どうか……受験番号07J63が掲示板にあって下さい。どうか……神様……仏様……ああ……女神様）

女神様に祈りをが通じたのか、受験番号07J63が07J61と07J64に矢印で書き足されていた。

「ベ○ダンディさま……!!」

自分の番号を見た瞬間、矢印の意味が分からず戸惑ったが、遅れて

戸惑い以上の喜びの波に包まれた。

「番号が試験官の手書きだって、後から付け足されたって合格は合格だあ」

意味不明な言葉を叫んで喜んでいると、目の前で蒼ちゃんが友達と涙ぐみながら手を取り合って喜んでいるのが見えた。

（うわあわあ…15歳の蒼ちゃんだあ！！聖蘭万歳）

僕が天にも昇る気持ちで蒼ちゃんに見とれていると一瞬、蒼ちゃんと目があつた。

「あつ、蒼ちゃん合格おめで…」

とつさに言いかけた瞬間、目を反らして友達と掲示板からソソクサと離れていった。

「グツ　ゲ」

僕はそんな光景を見てショックを受けた。

こんなにショックなのは、担任がヅラだった事を物語る見てはいけない瞬間を見てしまった以来だ。

「そうだよなあ…まだ、彼女と知り合っていないんだよなあ。気をつけなきゃ」

自分で行動を深く改め、今日は帰る事にした。

帰り道、何故か僕と目の会う学生、男の子も女の子も心なしに微笑んでいる様に感じる。

僕は、その微笑みを受けて改めて聖蘭の和やかムードに一人感動を噛み締めていると、突然笑い声と共に強く肩を叩かれた。

ビクツとして、振り向くと僕より7〜8センチ程背の高い赤毛の学生笑いながら立っていた。

（はあっ？い…きなりカツアゲですかあ…）

僕がビクビク固まっていると、赤毛君が腹を抱えて大爆笑しだした。

「あっははは〜お前さあ、ビビりだろ！！しかも合格発表で感動し過ぎ。ってか鏡見てから帰れよブサイク君」

そう言うと、ポケットティッシュを僕の胸に押し付けて、笑い続けながら去っていった。

（なんだよ、今のは…人を笑い物にして。おいおい…まだ、笑ってるし）

遠巻きに赤毛の姿を追いながら路上駐車されている車のサイドミラーに写った自分の姿を見ると、赤毛が言った意味が分かった。

ああ、そうゆう事ね。

顔には、涙と花水とヨダレの跡がクッキリついている。

周りの皆の笑顔は、僕に対する和やかな笑みじゃなくて嘲笑なわけ

ですか。

そりゃミナ、僕を見て笑うわけだぁ。ちくしょく蒼ちゃんに変なトコ見られちゃった…。

恥ずかしさのあまり、僕は顔をトマト色にしながら駆け出した。

春の香りが漂う木漏れ日の中、僕の聖蘭高校生活が無事(?)始まった。

シェイクシェイク（後書き）

次回からの話もヨロシクお願いします。

二ヶ所目

P、P、カチッ！

勢いよく目覚まし時計を止めて僕は、飛び起きた。

今日は、聖蘭高校の入学式だ。

（うわぁ…興奮して眠れなかったよ…）

ドストスと音を発て一階に降りていき、洗面台で勢い良く顔を洗う。

まだ夢見心地でボーッとしている自分を水の冷たい抱擁で覚まし、鏡に写る自分の顔をマジマジと見た。

「これが…僕かあ…」

昨日、初めて美容院で髪を切った。

とにかく、カッコ良い男の美容師さんを指名してカットしてもらった。

緊張でガチガチになってる僕に美容師の人は男でも惚れそうな笑顔で対応してくれた。

二人で相談して髪型も決めたので出来上がりには満足している。

メガネも辞めてコンタクトにした。

まだ、自分でも違和感があるけど…。でも、新しい自分になった事が心地良い。

リビングに入ると、母さんが起きてきた僕を見た。

「おはよう」鼻唄混じりに卵を焼いている。

着物姿で…。

「おはようじゃないよ母さん。どうしたんだよ…その服。っていうか、卵焼く格好じゃないでしょ」

ハラハラしている僕に向かって、母さんは自慢する時に見せる笑顔を作る。

「だって、欧介に見せたかったんだもん。入学式が楽しみだわ」

（だもん。って、母さん…何照れてんだよ…）

僕は苦笑しながら朝御飯を胃袋に奉納した。

支度を終わると、丁度出発の時間になっていて、僕は学ランを着た。

「じゃあ、欧介。入学式でね。いってらっしゃい」

「うん。行ってきます」

玄関で、母さんに見送られ出発した。

頭が少しスウスウするなあ。

そう思いながら歩いていると、ふと見覚えの有る後ろ姿が角を曲がったのが見えた。

あつ、宗男君だあ。そつかあ銘東も今日入学式なんだ。僕の母校だった高校かあ。

「宗男君、バイバイ。三年間楽しんで…」

複雑な気分で曲がり角で宗男の後ろ姿を見送った。

しばらくしてバス停でバスに乗り、過ぎていく風景を眺めていると、ブーーンという音と共に真横に原付が追いついてきてバスと並んだ。

ふと原付の運転手と目が合った。

運転手は、あの嫌味な赤毛だった。

赤毛は、僕を睨みスピードをあげてバスを追い抜いていった。

（や、やっぱりあの人も聖蘭だったんだあ。また、イジメられのかな…）

落胆している僕を乗せたバスが、学校最寄りのバス停に着いたらしい次々と人が降りていく。

落ち込んでても仕方ない。新しい生活が始まるんだ。

急いでバスから降りた瞬間、突然強い風が吹き、風に乗ってフワッと優しい匂いがした。

僕の目の前に蒼ちゃんが立っていた。

（うわっ、蒼ちゃん）

蒼ちゃんは、バスから駆け降りてきた僕にビックリした様な顔をしている。

（ヤバッ！！気を抜いてた）

僕は、恥ずかしさのあまりに目を反らして学校へ向かおうとした。

そう思い顔を反らそうとした時、卒業式の帰りの場面と重なった。

あの時も逃げた…。

また、逃げ出すのか？

外見を変えたって自分が変わらなかったら同じなんじゃないのか？

時間の修正の次は、自分の修正だ。

肩の力を抜いて、フーとリラックスする為に一息吐いた。

「おはようございます」

笑顔で蒼ちゃんに挨拶した。

「あっ…おはようございます」

一瞬戸惑った蒼ちゃんも、優しい笑顔で挨拶してくれた。

（自分らしくいこうよ。焦らなくて良いんだ）

気持ちが、ほんの少しだけ軽くなった気がした。

突然、蒼ちゃんの携帯が鳴った。

「あつ…私の」

そう言うと蒼ちゃんは電話に出た。

その様子を見て僕は、頭をペコリと下げ学校に向かった。

目の前には、アーチ状の校門がある。

僕は、立ち止まって目を閉じた。

この、一步を踏み出したら楽しい事やツライ事も有るだろうな…新しい友達も、嫌いな（赤毛が目に見えんだ）人も出来るだろうな。でも、何にしても絶対後悔しない道を進む。

心の中でそう決めた。

（新生…真田欧介……行きます！！）

そう呟き、僕は強く、大きな一步を踏み出した。

二ヶ所目 2

僕がアーチ状の校門に入った途端、後ろの方から呼ぶ声がした。

えっ、知り合いなんて居ないよな。

そう思い振り返った瞬間、僕の足は地中に根を生やした。

蒼ちゃんが、僕の方を指して走ってきている。

（あわわわ、蒼ちゃんが後光を出しながら走ってくるよ。まっ、眩しいっす…）

僕の目には、蒼ちゃんの後ろに後光が指しているのが見えた。

走ってきた蒼ちゃんは僕の前で止まると、軽く息を整えて、小さく笑った。

「あの、良かったら一緒にクラス表見に行きませんか？」

その言葉が蒼ちゃんの笑顔を一層引き立たせた。

「（あの、良かったら一緒にクラス表見に行きませんか？）」

この言葉がリピート機能が働いた様に僕の頭の中に、木霊した。

（えっ？蒼ちゃんが誘ってくれた？さ、誘ってくれたあ〜）

僕は、空から天使が降りてくるのを確認した。

天使っているんだねっ。パト○ツシュ。

パト○ツシュがワンと吠えた。

「あの…ダメですか？」

僕が、自分の世界でパト○ツシュと戯れていると、どこからか蒼ちやんの声が聞こえたのでパト○ツシュを放り投げた。

「僕で良かったら」

僕達二人はクラス表の前に着いた。

表の前で蒼ちやんが僕を見た。

「あの、名前は何ですか?? 私は、楠木蒼です」

ニツコリと微笑んで自己紹介してくれた。

ええ…もちろん知ってますとも（内なる欧介談）。

「僕は、真田欧介って言います」

「じゃあ…欧介君って呼んで良いですか？」

その響きに、また空から天使が舞い降りてくるのが見えた。

「良いですよ。僕は、蒼ちゃんって呼ばせて下さい」

僕は、照れながら言った。

「はい」

蒼ちゃんのOKしてくれた事に僕は溶けてしまいそうだった。

二人で表を見ていると、蒼ちゃんが口を開いた。

「私は、4組みたいです」

（僕は、何組なんだあ？真田…真田…）

真剣に表を探していると、蒼ちゃんが見覚えの男子の名前を指した。

「欧介君も、四組みたいですよ」

（マ、マジっすかあ？）

四組の名前を見ると確に真田欧介という名前がある。

僕の周りに天使が集まってくる。

あっ天使さん、次は僕の番なんです…。

パト○ツシュ 今行くからね……。

僕は、今とっても幸せなんだよ……。

一人で悦に入っていると、

「改めてお願いします」

蒼ちゃんが笑顔で頭を下げた。

「こちらこそです」

戯れてくる天使を強引に天に還して欧介も、頭を下げた。

二人で、体育館に向かおうとした時、誰かに後ろから呼ばれた気がした。

振り向くと、母さんが手をフリフリ立っていた。

「欧介、この方がカメラで写真撮って下さるって、記念写真撮ってもらっわよ」

さっ……最悪だあ……。

欧介が、僕は、母さんの姿に恥ずかし過ぎて他人の振りをしていると、蒼ちゃんが僕を見た。

「お母さんですか？えっと……じゃあ、私は先に体育館行ってますねえ。では、教室でまた」

そう言って歩いて行ってしまった。

あ、蒼ちゃん。

後方から、更に大声で母さんが呼んでいるのが聞こえる。

か：母さん、俺：消えたいよ。

そう思いながらテクテクと母さんの方に向かった。

入学式も始まって後半に差し掛かった頃、周りの父兄を見て思った。
聖蘭って結構、お金持ち率高いんだ。

明らかに父兄席から金持ちオーラが漂っている。

公立なのに私立並の金持ちの多さだな。と感心してしまった。

家の経済事情は大丈夫なのか？

何か心配になった。

「では、最後に一年生を代表して、四組の春日^{かすが} 大河君^{たいが}に新生生の
宣誓をして頂きます」

カッコイイ名前だなと思っていたと凜とした雰囲気を漂わせた黒髪の
学生が壇上に上がった。

黒髪の少年が宣誓を始めた途端、一瞬にして女の子がウットリし始

めた。

僕は、ガツクリした。

（はぁ、カッコイイ良すぎ。優等生登場ですね…蒼ちゃんもウツトリしてんのかな）

宣誓が終わった途端、拍手が大爆発した。

その拍手に、本人は軽く会場に会釈した。

更に会場に拍手が沸いた。

ここは、何かの授賞式の会場かよっ。

その時、拍手の中ではっきり舌打ちの音を聞いた。

うえっ、舌打ち？

後ろの列を見ると赤毛が壇上の彼を見ていた。

うわっ！！赤毛君も四組だったんですかぁ。

悪夢が蘇り更にガツクリした。

入学式が終わり父兄は自主解散となり生徒は各自のクラスへ移動する事になった。

移動する途中、母さんが僕とスレ違い様に素早く手を動かした。

（帰るわねっ。今晚はすき焼きよっ）

そっ、真田流手話を僕に送ってきた。

（了解）

僕は、コクリと頷いて手話を返した。

四組のクラスに着き、席に座って周りの誰に話掛けようか考えていると肩を強く掴まれた。

「よぉ〜鼻水君。お前さあ、イメチェンしたの？」

掴んできたのは赤毛君だった。

（い、いきなり赤毛君ですかあ…）

内心うわっと思いつつ、とりあえず笑顔を作る事にした。

「うん…どうかな？」

「はあ？似合ってるわけねえだろ。ダサ男君は、何してもダサイっつうの」

笑いながらサラッと毒を吐きかけて離れていった。

（ぐっわあわあ…）

その様子を見て、さっきの天使達が僕を見てエディーマーフィー並に爆笑している。

（あつ…天使さんが、えっ、パト○ツシュまで？）

僕が猛毒に耐えきれず机に倒れ込むと、教室に担任の先生が入ってきて初ホームルームが始まった。

先生からの、祝福の言葉と明日からの日程を聞いて今日は解散となった。

しかし僕の頭の中は、赤毛の言葉が頭に響いてもう帰りの時間だと気付くのに数分かった。

帰り際、校門付近で蒼ちゃんが別のクラス友達らしき女の子と話していた。

僕が、ボーっとしていて蒼ちゃんに気付かず側を通りすぎる際に笑顔で話かけてくれたおかげで、少し元気が出た。

と、同時に教室に筆箱を置いてきた事に気付いた。「あつ筆箱取りにいかなきゃ」

急いで教室に向かって戻って行く途中、頭に問いが浮かんた。

（僕って、まだダサイのかなあ？）

はつきり言って自分では、中々カッコ良くなったと思っていたので、赤毛の言葉に相当ショックを受けた。

（よし帰ったらもう一回鏡と雑誌で研究だ）

そう思いながら、教室の付近まで来ると四組の中から話声が聞こえた。

二ヶ所目 3

誰か、まだ残ってるんだ。もしかして、いきなり四組初カップルかな？

期待とあらぬ想像を巡らし四組のドア付近で聞耳を立てる。

「大河くーん。さぞご満悦だろうね。カツコイ宣誓決めてさあ、入学式早々一年生の期待の星になったんだから。俺も惚れちゃったよー」

赤毛が、甘えた声を出して一年生代表の宣誓をした春日 大河と話していた。

というより、一方的にカラんでいた。

「話っているのは、それだけか？」

大河君が冷ややかな雰囲気を出しながら、あしらう用に答えた。

（また赤毛さんかよ。しかも、大河君にカランでるし）

僕は、鼻で力無く笑いつてドアにもたれ掛かった。

「そんだけってさあー、一番肝心なのは……」

声の調子から赤毛君が、またフザケだした様だ。

僕は、どうしても良くなりアホらしくて筆箱は明日にして帰る事にした。

ドアから離れて家に帰ろうとした時、大きな衝撃音が耳に入った。

「お前が気に入らねえんだよ」

そして、怒声と共にドガンと再び机が蹴られた音がした。

その音を聞いて、ドアに戻って教室を覗いた。

「自分は、優等生です。みたいなオーラ出しやがって、僕はみんなの頼れる仲間だよってかあ？」

赤毛が更に、語気を強めた。

赤毛が鈍く、赤黒く見える。

「別にそんなつまりは無い」

大河君は、氷の様に冷やかな表情を浮かべ、何事も無かったかの様に教室を後にしようとした。

「待てよ、偽善者」

赤毛がピストルを弾く様に言った。

その言葉に、大河が立ち止まった。

「今…何て？」

大河が赤毛の方に向き直り、感情を込めて言った。

振り向いた大河君の顔には、怒りの色が見える。

「はあっはっ、やっぱり偽善者だっで自分で自覚してんだ。そりゃそうだよな。お前の事を友達だと思っで集まってくるヤツを見下して自分の評価を上げるための道具にしてんだもんな。今日だっで壇上から会場の人間を見下してたんだろ。お前は、生まれつきの偽善者だ」

赤毛君が、嘲るように言った。

大河君は、冷静さを無くし赤毛に掴み掛かろうと歩みよった。

「二人ともやめろよ」

僕は、思わず冷えきって凍りついた雰囲気が漂う教室に突入していた。

突然乱入してきた僕に二人は驚いた様な顔をしている。

しかし一番驚いたのは、僕自身だった。

つい数秒前まで家に帰ろうとしてたのに、なんで教室にいるんだ？訳が分からず目をパチクリしていると、赤毛君が、机を殴りつけた。

「おいっイメチェン野郎、何なんだお前はあ？」

どうやら怒りの矛先が僕に向いたらしい。

イメチェン野郎。

その言葉を聞き、合格発表の日の事、今日の事、今までの赤毛の理不尽な言動に怒りが込み上げてきた。

「今日初めて出会ったのにさっ。初日に、イガミ合っつのは辞めようよ。一年間…一緒に過ごす四組の仲間同士じゃん」

僕は、目を閉じて力を振り絞って言った。

目を開けると大河君が、僕の顔を真っ直ぐ見つめている。

「お前、バ…」

赤毛が言葉を発しようとした時、突然誰かが赤毛君の言葉を遮った。

「はいはいっ。そこまで」

手をパンッと叩きアゴに不精ヒゲを生やした先生が教室のドアに立っていた。

担任の先生では無かった。

「先公は…」

赤毛君が言いかけた瞬間、

「ハイハイ、興奮しない。今日の青春のドラマ第一回はオシマイ。
解散解散っ」

そう笑顔で言って強制的に解散を命じた。

「チィ」

舌打ちを残して赤毛君は机にガタガタ当たりながら荒々しく帰って行った。

大河君も、フウと一呼吸して入学式で見た凜とした雰囲気をもとめて帰っていった。

「あ、大河君…さよなら」

僕は小さな笑顔を浮かべて大河君に挨拶した。

大河君は、軽く笑い返した。

「お前も、気をつけて帰るんだよ。入学式は家に着くまでが入学式なんだからな」

ヒゲの先生は、お決まりのセリフを言うと微笑みを残して廊下に消えていった。

教室には、僕と夕暮れの光だけが残った。

（た、助かった！）

夕暮れの淡い紅に包まれながら安心してヘナヘナと座り込んだ。

その途端、強烈な尿意を感じてトイレに駆け込んだ。

勢い良く用を足しながら、明日からの事を考えてみる。

どうなるんだよ。マイクласの四組は

考える度に用をたす時間は伸びている様な気がした。

用を足し終わるとドツと疲れて家に帰る事にした。

（明日の僕はどっちなんだ？）

二ヶ所目 4

ピンポン

ガチャ

ドアを開けると蒼ちゃんが立っていた。

「良かったあ…あの一緒に、学校行きませんか？」

下を向きながら言ってきた。

心なしか照れている様に見える。

「良いですよ。」

「ありがとう……好きです。」

いきなり、蒼ちゃんが胸に飛込んできた。

(！)

「ぼ…僕もです…。」

戸惑いながらも蒼ちゃんを抱き締めようとすると、突然奇妙な感じに襲われた。

「気持悪いーんだよ。」

蒼ちゃんの顔をが、赤毛に変わっていた。

「勘違い野郎って醜いねえ」

赤毛が顔を歪めて大爆笑した。

（うわぁ！）

ガタンとハネ上がるとバスの中にはいた。

周りの人が僕を見て、笑ったりビクリしたりしている。

（いつの間にか、寝てたんだ…）

無意識に立ち上がっていた事に気付いて、照れながら席に座った。

窓からは、歩道を歩く沢山の人や車が見える。（はぁ四組が今日からスタートかぁ。どうなるんだよ）

外を見ながら、昨日の二人の様子が目に浮かんで憂鬱になった。

教室に到着して入ろうとした時、ドアの所で教室から出ようとしているサラッとした髪の男の子と出くわした。

「あっ…」

男の子は、そう言つと道を譲ってくれた。

「えっ……気にしないで良いよ」

僕は、何か悪い気がして男の子に譲り返した。

「ありがとね」男の子は、そう言つとニッコリ笑つて出ていった。

（何か、素直そうな子だなあ。背も同じぐらいだし、カワイイ男の子タイプって言うのかな）

そう思い、教室に入った。

矢の様に時間が過ぎ、一時間目になった。

「今日は、まずクラス全員に自己紹介をしてもらいます」

開口一番、担任が発表した。

「クラスメートを知る事が友達作りになり、しいては自分を肥やすかけがえの無い仲間になるんです」先生は、頷きながら話した。

「先生も昔はなあ………（長いので中略）………だった。では、男子から紹介ヨロシク。」

というわけで、クラス初のＬＴは自己紹介になった。

改めて見ると、やはり聖蘭の学生は金持ちが少なく無い。

自己紹介の中でも、鼻につく話方の人々が結構いた。

大河君の番になり、彼は教壇に歩いていった。

女の子達の間では、クスクス笑いや内緒話が矢の様に飛び交っていた。

（大河君かあ、やっぱりカッコいい人だ。背も高いし、黒髪だし？、顔立ちも整っている。できすぎ君とのび太って感じだよ）

大河を見ながらため息が出た。

「春日 大河です。趣味は、音楽鑑賞等です。一年間よろしく」

そう言い終わると一瞬目があつた。

（目があつた？）

直後、教室は破れんばかりの拍手に包まれた。

特に女の子から拍手が大爆発した。

（目が合ったのって…気のせいかな？）

僕の頭は、拍手の衝撃に混乱をきたした。

坂田君が終わり、とうとう僕の番になった。

教壇に向かいながら胸が高鳴ってくるのが分かった。

き…緊張するなあ…。

教壇に着いて前を見た。

クラス全体が見渡せた。

蒼ちゃんが見える。

（目が合うと笑顔をくれた。）

大河君が見える。

赤毛も目に入った。

（んだよ。って顔に書いてあった。）

サラサラ髪の男の子も見える。

（童顔だ やっぱり）

そう思うと何故が楽しくなった。

（みんなに、見られるのってちょっと良いかも）

「名前は、真田 欧介です。趣味は、フィ……」

（危ない……フィギア集めって、銘東時代かいつ……。）

気を取り直して、

「フィーリングミュージック鑑賞です。お願いします」

僕の頭の中で、セーフと、野球の塁審の声が響いた。
ホッとしていると、

「んだあゝてつきりフィギア鑑賞ってギャグがますかと期待して
やったのになあ。空気読めっうーの」

と、赤毛君の声が聞こえた。

（えっ赤毛さん、アンタ鋭い過ぎて怖いっすよ…）

赤毛の勘の鋭さに関心しながら席に戻った。

どんどんと自己紹介は進み、次は赤毛君の番になった。

赤毛君が、教壇に立って元気良く自己紹介を始めた。

僕は赤毛を見て、パツと見はナカナか男前だなあと思った。

（まあカランで来なければの話だけど…）

「オレは、中村 蓮。好きな事は楽しく遊ぶ事で嫌いな事は……」

その途端、元気な雰囲気は消えて昨日の赤黒い雰囲気になる、

「嫌いな事は、嘘や偽善」

多分大河に言ってるんだと分かった。

その発言に昨日の事がフラッシュバックして、凍りついた。

（あつ… やっぱりまだ昨日の事忘れてないや）

「んじゃ、よろしゅうに」

そう、元気に締め括ると教壇から離れた。

女の子達は、満更でも無い顔をしていた。

（赤毛君は、そんな良いヤツじゃないぞお）

そう叫びたいのを必死で我慢した。

気がつくと、女の子の自己紹介に入っていた。

草下さんが終わり、いよいよ蒼ちゃんの番がきた。いよいよだあ。

今日はこの話を聞くために教室にいるんだあ！。

興奮する自分を落ち着かせて耳を澄ました。

「私は、楠木 蒼です。趣味は、読書や散歩です。仲良くして下さい」

蒼ちゃんが、ペコリと頭を下げた。

大河君以来の拍手が溢れた。

特に男達から。

赤毛君は指笛を吹いているし、後ろの男はブーツとしながら手を碎かんばかりに拍手している。

かつ…感動じゃあ〜（内なる欧介談）。

アンコール。

アンコール。

感動しながら手を叩いた。

そして、ビデオカメラを持ってくれば良かったと深く後悔した。

その雰囲気、蒼ちゃん、タジタジになり、照れながらソソクサと席に戻っていった。

無事、全員の自己紹介が終わった。

「はい。ええーと、途中で大盛りあがりのような感じ（男女共に、照れた）楽しい自己紹介だったようですね。では、LTは終了。この後の授業も頑張れ」

そう言うとLTは終了した。

（はあー、LTって良いね）

僕は、大満足だった。

そして、その後の授業も何事もなく終わって家に帰った。

二ヶ所目 5

自己紹介から一週間が過ぎて、クラス内にもポツポツと友達関係が出来てきた。

女の子のグループも少しずつ出来始めたし、男子達も誰かカレかとつるんでいた。

僕も、近くの席の子と少しずつだが話をしたり、一日一回は赤毛に絡まれたり、たまに蒼ちゃんと話たりの一週間を過ごしていた。

あれ、以来赤毛君と大河君の間のイザコザも消沈気味なので少しホッとしていた。

今日も、授業が終わり学校から家に帰る為にバス停に向かった。

バス停で、ボケーツとしながらバスを待っていると、

「ちょっとアンタ！！なに、横入りしてんのよぉ。」

いきなり後ろから女の子に怒られた。

（いきなり何だあ？）

っと思い、後ろを向くと

「早くどきなさいよぉ」

女の子が腕を組んで僕を睨んでいた。

「横入りって、今まで居なかったじゃないか」

訳も分らず僕が言うつと、

「居たわよ。ここに」

と、斜め前のベンチを指差した。

「ココにつて…?」

ベンチの上には、マスコットが付いたカバンが置いてある。

「ちゃんと、私のカバンが順番を守ってたわ。」

女の子は、鼻高々に言った。

（カ カバンつて…。なんだよカバンつて！

「バス停でカバンで順番待ちなんて、むちゃくちゃだよ。しかも、こんな分かりにくい場所だなんて。だいたいカバン置いてどこ行つてたんだよ」

「あつ、あんた！女の子にそんな事よく聞けるわね！バカじゃないの。セクハラよ。セクハラだわ」

僕が理不尽さを主張した途端、女の子は、真っ赤に照れてなって叫びだした。

セクハラという単語にバス停に居た人が皆、僕の方を見た。

（うわぁ…。ま、周りの人に見られてるよ。ってか、俺噂されちゃってる）

「どつぞ…」

世間の白い目に耐えられなくなって欧介は、女の子に順番を譲った。

「それで、良いのよ。最初からそうしなさいよね」

女の子は、ブツブツ文句を言いながら欧介の前に並んだ。

（はぁ…）

僕は深くため息をつき、テンションは空気の抜けたゴムボールの様にヘコんだ。

やがて、バスがやって来た。

バスに乗り、女の子から離れた席に座った。

遠巻きから、女の子を見てみると以外に可愛いことが分かった。結構スタイルは良いし、茶色味を帯たショートも可愛い。

（あれで蒼ちゃんのような女の子だったならな）

残念だぁ。と、ドカツという音と共に座席にもたれかかった時、

ブーン

ブーン

マナーモード状態の携帯が電話を知らせた。

ビクツとなり、ポケットから震え続ける携帯を取り出すと、

<愛しの母さん>

と、携帯に表示されていた。

愛しのつて！母さん、いつの間に僕の携帯イジったんだよ？

周りに悪いと思いつつ電話に出ると、

「もしもし〜欧介？あのさ〜マグロの切身と豆腐一丁とネギ一本ヨロシクウー」

プチッ

（えっ？）

ツー

ツー

（切れた？僕には、イエス、ノーを言う権限も与えられないのかよ）

苦笑していると、

<次は、泉区2丁目です。御降りの方はお知らせ下さい>

バスの知らせが響いた。

（泉区かあゝ蒼ちゃんと会えるかもしれないし買い物もあるから降りてみるか）

蒼ちゃん会えるかも…、という微かな希望を信じてバスのベルを鳴らした。

ニヶ所目 ラスト（前書き）

長いですが、ご了承ください。
今回は、3人称で書きました。

二ヶ所目 ラスト

バスを降り、欧介はスーパーをバス停の案内表で探して向かった。

数分後、全国チェーンの某スーパーを見つけて入店した。

母親から頼まれた買い物を済ませて、レジに向かい代金を払い終えて帰ろうとした時、

週刊雑誌の発売日を思いでして雑誌コーナーに向かって歩いた。

その時、

「あつ、欧介君だよね？」

目の前から歩いてきた男の子（？）に声をかけられた。

「あつ…えつと…」

教室で会ったサラッとした男の子だというのは分かるが名前が思い出されず焦っていると、

「あつ、忘れちゃった？森島 花だよ。ヒドイなあ〜」

男の子は、ぎこちない笑顔を浮かべて言った。

「あつ、ゴメン…」

欧介は、忘れていた事を恥じた。

「あつ、嘘だよ。気にしてないよ」

花君は笑顔で許してくれた。

「それより、小さな女の子見なかった？」

そう言つと、足のモモぐらいの丈を示した。

そういえばさつき、女の子が走り回っていたのを見た気がした。

「女の子かぁ。そういえば、喫茶コーナーに入っていく女の子を見た気がする」

「そうなんだゝありがとう。じゃあ学校で」

そう言つと、花は立ち去ろうとした。

「待つて！僕も捜すよ」

欧介は、名前の事で花に悪い気がして手伝おうと思った。

「えっ、そんな良いよ。名前の事なんて気にしてないし」

「いや、二人で捜した方が早いと思うから」

欧介は、気にしてないと言われても引き下がれなかった。

「一緒に探しても良いかな？」

もう一度聞くと、

「ありがとう。じゃあお願いね」

二人は、笑顔を交して喫茶コーナーへ急いだ。

その頃、喫茶コーナーの一角のお団子屋では、

「すみません」

小さな女の子が元気良く声を出した。

「いらっしゃいっ」

女の子に負けないぐらいバイトの学生も声を出した。

「えっと みたあし3本下さあい」

「みたあし？ああ、みたらしね」

学生バイトは、みたらしを三本パックに入れると女の子に手渡した。

「ありがとう。おじ兄ちゃん。」

「おいおい、おじ兄ちゃんか。微妙な呼び方だな」

一瞬戸惑ったが、すぐに戻った。

「御代は１８０円だよ。おチビちゃん、お買い物かい？」

「チビじゃないもん。ちいだもん。」

女の子は、みたらしを食べながら目をウルウルさせて今にも泣きそうになった。

「あつ…ちいちゃん。お買い物なの？あと１８０円は？」

バイト学生は、ヤバイと思い急いで女の子をなだめた。

「あつ、ちいお金持ってないや。」

そう言う女の子は、みたらしの串を捨てて突然キョロキョロしました。

「お金持ってないか……お母さんは居ないのか？」

その時、女の子は歩いてくる男の元に走っていき抱きついた。

「花ちゃん！もうどこいったのぉ」

「どこって、ちいちゃんこそどこ行ってたの」

花はフト、学生バイトの顔を見た。

「中村君？中村君だよな？」

その言葉に、女の子と花のやりとりを見ていた欧介もバイトを見た。

「よう、森島にイメチェン。」

欧介は、赤毛の放った言葉の暴力を直に受けた。

「やあ……」

欧介は、苦笑した。

欧介の苦笑を気にせず中村は、

「えっ、ちいつて森島の妹なん？」

単刀直入に聞いた。

「あっ、おしいな。近所に住んでる親戚だよ」

花は、笑顔で答えた。

「そうなんだ。ってか、お前って名前の通り女子っぽいな。遠くから見たらパツと見、男とは分からねえ。」

赤毛は、カラカラ笑いながら花にもジャブの連打を放った。

その様子に欧介は、更に苦笑した。

「中村君は、いきなりだな」

花も苦笑していると、

「花ちゃん、みたあし食べて」

ちいちゃんが、花にみたらしを手渡した。

「みたらしって、ちいちゃん。このみたらしどうしたの？」

花がクエッションを浮かべながら聞くと、

「おいしいよお」

ちいが、最後の一本を食べながら言った。

「おいしいよお。じゃなくて…ダメじゃないか、勝手に食べちゃ。ココは、家の店じゃないんだよ。お金払わなきゃいけないんだよ」

「ちい、お腹減ったんだもん…」

ちいは、目をウルウルさせた。

ちいのウルウル攻撃に包まれて、胸をときめかせた欧介は、気づいたら財布を取り出していた。

「欧介君！」

花の言葉に、我にかえった欧介は照れながら財布をしまった。

「ごめん中村君。お金は払うから、いくらなの？」

花が財布を取り出すと、

「ぐう……ったく、いらねえよ。」

赤毛は、うつ向いてみたらしを二本焼きながら言った。

「えっ？」

花と欧介は戸惑った。

「いやいや、そんな悪いよ」

花が小銭を出すと、

「だから、今回だけは仕方なく、特別におごってやるよ」

そう言うのと、焼いているみたらしにをタレを塗って欧介と花に一本ずつ手渡した。

「ほらっ、森島食べな。」

花は、とびっきりの笑顔で受け取った。

「ほらっ、真田も食っとけ」

欧介は、タレの濃厚な香りと熱気が立つみたらしを受け取った。

「あ……ありがとう。」

ぎこちない笑顔しか出来なかった。

欧介は、初めて中村に名前を呼ばれたことに嬉しさを感じた。

急に、聖蘭のクラスメートだという事に実感が沸いた。

「ホントに、ありがとう」

欧介は、もう一度中村の顔を見て言った。

「お前、そんな真っ直ぐ目を見んなよ。恥ずかしいだろ」

中村は、照れ笑いした。

「ゴ…ゴメン。」

欧介も、何故か照れた。

「変な、おじ兄ちゃん達。」

ちいの頭の上にクエッションが3つ並び、首を小さく傾げた。

「おーい、蓮ちゃん。学校の友達かい？」

声と共に、奥から店主らしき初老の男性が出てきた。

「ああつ、そんなもんかな」

中村は、焼いている団子を回しながら言った。

「そうか。じゃあ、少し休憩してきな。色々話したい事もあるだろ

う」

店主は、微笑みながら中村の肩をポンポンと叩いた。

「良いの？」

中村は、振り替えて聞いた。

「ああ、良いとも良いとも」

店主は、シワがたくさん刻まれた笑顔を見せた。

「あんがと、おっちゃん。休憩から戻ったらバイト張り切るからさ
っ」

そう言うと、中村は店の奥へ引っ込んでいった。

「じゃ、ここで待つてよ」

花は、ちいがまた走り出さない様に、ちいの手を握った。

その横で欧介は、喉が渴いてジュースを買おうと財布を開いた。

財布の中には500円が佇んでいた。残りの500円を使えば雑誌
が買える。しかしジュースが欧介を誘惑していた。

苦渋の表情を浮かべながら欧介は、自動販売機に500円を弱々し
く投入した。

「ちいちゃん、何飲む？」

欧介は、ちいに笑顔に向けて言った。

「そんな、欧介君にま…」

「オレンジさんが良いなあ」

ちいは、花の言葉を遮って跳び跳ねながら言った。

「コラア…ちいちゃん！」

花は、ちいにダメでしょっ！！らしき顔を作った。

「おうしゅけ大好き」

ちいは、花の手を離して欧介の足元に抱きついた。

欧介は、照れながらちいの頭を撫でて聞いた。

「花君は、何が良い？」

「えっ、いやでも…じゃあ、お言葉に甘えて緑茶で」

欧介は、緑茶とオレンジジュースのボタンを押して二人に渡した。
残りは、260円と表示された。

雑誌が欧介を呼んでいる様な声が聞こえる。

キャラクター達の艶かしい声が。

欧介が、自販機の前で唸っていると、

「おっ…欧介君？」

花の声が耳に入った。

ビククリして、我に還った瞬間、

ガタン

コーラが取り出し口に落下した。

さよならジャンプ君。そう心の中で呟いて、続けてもう一本コーラを買った。

ちょうど、その時中村が裏から出てきた。

「わりいなあ。お待た」

イタズラっぽい笑顔を張り付けて。

「あつ、中村君。バイトお疲れ様。コーラで良かったかな？」

欧介は、中村に涙と苦渋の思いが詰まったコーラを差し出した。

「真田サンキュな」

中村は、その思いの詰まったコーラを何も知らずにヒョイと受け取った。

4人は、スーパーの外のベンチに向かって歩き出した。

「どうだった？一週間は？」

花がニコツと切り出した。

「ナカナカだなあ。オモロイ奴も居るしな」

赤毛は、小悪魔笑いを欧介に向けた。

欧介の喉にコーラの炭酸が痛く響いた。

「まだ、クラスにどんな人達が居るか分かんないからなあ…」

欧介は山の谷に赤い線を残して沈んでいく太陽を見ながら言った。

「そうだよね…」

「だな…」

二人も、沈み行く太陽を見ながら何故か黄昏た様な表情を浮かべて呟いた。

欧介には、二人が何故か悲しげに見えた。

そんな雰囲気を、

「ちい、もう帰るう」

という、最大限の不満を含んだ叫びが破った。

「ちいちゃん、もうす…」

「帰る帰る帰るう」

ちいは、花の問かけに全く答える様子が無かった。

「そつだな……そろそろ戻るか」

中村がベンチから立ち上がった。

「ゴメンね……中村君」

花が申し訳なさそうに謝った。

「気にしなさんなつて。じゃあな森島、また明日」

そう言うのと、背伸びをした。

「真田、コーラあんがとな。美味かったぜ」

中村は、肩をポンと叩いて歩いていった。

「ちいちゃん、団子美味しいって言ってくれてあんがとなあ」

振り返って、そう言う赤毛は店の中に消えて行った。

「欧介君、ホントに色々ありがと。嬉しかったよ」

花が微笑みながら手を握ってきた。

その柔らかな笑みに、欧介は花が男と分かりながらも照れた。

「おうしゅけっくバイバイ」

ちいも、手を握ってきた。

その柔らかさに感動を覚えた。

「じゃあ、僕達は車で帰るから。また学校でね」

そう言うと二人はバス停の反対側に向かって歩いていった。

欧介は二人を見送った後、明日からの学校生活に期待を膨らませてバス停に向かって歩き出した。

三ヶ所目（前書き）

事件編突入

今回も3人称です。

三ヶ所目

「ふぁ…眠い…」

欧介が、机に突っ伏せて数時間前までプレイしていたFFの世界観ファーストファンタジーに浸りながら欠伸をしていると、

「おはようゝ欧介君。」

花が、男でも胸キュンになりそうな笑顔で近づいてきた。

まだ、FFの世界に浸っていた欧介には近寄ってくる花の姿がFFのヒロインにタブって見えた。

ヒロインが近づいてくる、近づいてくる。

欧介は、何も言わずに立ち上がり花の両肩を掴んだ。

欧介に、両肩を掴まれた花は目をパチクリさせた。

「おっ欧介く…」

「もう離さないから…絶対」

欧介は、花の耳元に甘い言葉を囁いて抱きついた。

その様子を見ていた一部のクラスメートは、抱き合ってる二人を見て啞然とする者、興奮する者の二極化になった。

「ちよっ…ちよつと欧介君いきなり何すんだよ」

クラスの視線を感じながら花は、抱きついてきた欧介の腕から強引に逃げ出すと苦笑しながら後退った。

数秒後、花が暴れた衝撃でようやく現世に覚醒した欧介は自分の犯した過ちによりやく気づいた。

「うわぁゴメン！花君」

欧介は、慌てふためきながら花にひたすら謝った。

と同時に周りの皆のただならぬ雰囲気を感じた。

辺りを見ると、欧介と目が合うと顔を背ける者や拍手をするもの、様々な反応が返ってきた。

その中に蒼ちゃんの姿を発見した。

蒼ちゃんは目が合うときこちない笑顔を浮かべて顔を背けた。

「グハッ」

欧介は、まるでゴム人形のように床に崩れ落ちた。

欧介が、崩れ落ちたと同時にクラスの女の子が教室のドアにぶつかりながら駆け込んできた。

「大変だよ！大変！」

崩れた落ちた欧介には、何故か《変態》という単語に聞こえた。

（変態かあ。新生活二週目で早くも変態呼ばわれかあ。早かったなあ）

そんな欧介に気がつくわけもなく女の子は衝撃的な言葉を発した。

三ヶ所目（後書き）

久しぶりに更新しました。

気軽にお読み下さい。

意見などもお待ちしております。

三ヶ所目 2（前書き）

今回も3人称です。

三ヶ所目 2

「大変だよ！中村君が昨日、他の学校の生徒からカツアゲしたんだって！」

その一言には、クラスにいた人間を黙らせるぐらいの威力があったらしく、一瞬でクラスが暗い雰囲気にも包まれた。

「しかも、お金だけじゃなく相手の大事な時計まで盗ったんだって！」

クラスからヒソヒソ話が聞こえ始めた。

「欧介君、今の話ホントなのかな？」

花が不安げな顔をしながら欧介の方を見た。

「中村君が…どうなんだろう」

欧介には、今までの言動が目には浮かび曖昧な言葉しか言えなかった。

暗い雰囲気のクラスにぞくぞくとクラスの人間が登校して新たな好奇の波がクラスに押し寄せた。

数分後、クラスが騒がしい中いつもはニコやかな担任がえらく真面目な表情でクラスに入ってきた。

「今日は、STは無した。一時間目も担当の先生が来れないので自習」

そう、言つと担任は教室を出ようと足を進めた。

「先生！！やっぱり中村君の事で自習なんですよね」

クラスに爆弾を爆発させた女の子が弾かれたように立ち上がって叫んだ。

クラスの全ての目が担任に浴びせられる。

その言葉を聞いて担任は一瞬視線を曖昧に振った。

そして何も言わずドアの外へと出ていた。

その担任の行動でクラスの皆が中村の事だと確信した。担任がいなくなったクラスは各自がバラバラになった。

勉強する者、中村の処罰について話す者、寝る者、漫画を楽しむ者各自がバラバラになったせいで教室が更に騒がしくなった。

欧介は、自分の席で中村がホントにカツアゲしたのかを考えていた。

（ホントにやったのかな。でも…もしかしたら）

欧介の自分との対話は好奇心を含んだ叫びによって打ち碎かれた。

「みんなあ！席について下さあい！」

教卓に手をつきながら一人の女の子が笑いながら鼻にかかった甘ったるい声で言った。

（なっなんだ…いきなり）

女の子が何を提案するのかを期待して今までフラフラしていた皆が席に着いた。

その様子を見届けると、女の子は更に微笑んで、

「このう、自習の時間を使って犯罪者の中村被告（一部の人から笑いが起きた。）について討論したいです」

そう言うのと、女の子は自分で拍手をした。その拍手に合わせて、女の子といつもツルんでいるグループが拍手をした。

「私は、中村君、じゃなくて中村被告はカツアゲしてると思いません。だって、髪の毛もハデだし顔がちよつと良いけど…品が無いというかむしろ貧乏人って感じだし！お金に困ってますう！って顔ってやつ」

突然、欧介の脳裏に昨日の一生懸命たらしを焼く中村の姿が目に見え浮かんだ。

「そうだ！そうだ」

「あんな、うつとらしい貧乏人なんてさっさと消えちゃえば良いんだよね」

「そうそう！実際、問題起こした奴がクラスに居ると他の組からバカにされるし、この学校の品位に関わるよな」

（ちい、俺のみたらし美味いだろ??）

欧介の脳裏に夕日の中で、ちいとイタズラっぽく笑い合う中村の笑顔が浮かんだ。

「言えてる言えてる。っていうか、やっててもやって無くてもどっちでも良いよね!!どうせ消えてくれるんだし」

金持ちグループが嘲笑うかのような笑い方をしながら、再び拍手をした。

そのグループの勢いに吞まれてにつられてクラスのあちこちからパラパラと拍手が起こった。

（真田も食つときな。今回だけは…おごってやるよ）

照れながらみたらしを差し出す中村の姿が浮かんだ。

「他の人は、どう思うのかなあ?って聞くまでも無いなあ!!ミンナもおんなじ意見みたいだし」

一部を除いて静まりかえるクラスを見回して満足そうに笑った。

「よおしい!皆で犯罪者を追い出す計画を作ろうよあ。良いアイデアある人手を挙げてえ」

更に調子づいた藤井は話を続けた。

花は、クラスで起こっている異様な議題に知らず知らずの内にうつ

向いて手を握り締めていた。

クラスの雰囲気押し潰されそうな自分の不甲斐無さを悔しく思いながら。

近くの席に座る蒼も小刻に震えているのが見えた。

その時、ガタツと誰かが立ち上がる音がして音の方を見た。

欧介が教卓に向かって歩いていった。

欧介の姿を見て、花の拳に入っていた力が無くなった。

「うわぁ〜真田君ノリノリだねえ！みんなの前でアイディア言ってくれるなんて…」

「ふざけんな！」

嫌味笑いの藤井の言葉を遮り、教卓におもいきり拳を叩きつけて叫んだ。

そのすさまじい音と怒声にクラス全体が揺れた。欧介は、生まれて初めて怒りに身を任せた。

「何なんだよコレ！みんな何でも言わないんだよ！」

「ちよつとちよつと真田くん！！なに…」

「最低だよ！何で、誰も中村君を信じるって言えないんだよ！まだ

二週間しか経って無いけどクラスメートだろ！！これから一年間一緒に過ごすクラスの仲間じゃん！！それが何だよ…犯罪者を追い出す？全然意味分かんないよ！」

教卓から、蒼が涙を流しているのが見えた。

欧介は蒼を泣かせてしまった事に申し訳なく思ったが、言葉は止まらなかった。

「中村君の事何も知らないくせに偉そうな事言っなよ！」

欧介は、クラスに叫ぶと同時に数十分前まで疑う気持ちの有った自分自身に対しても叫んだ。

最後の怒りの炎を嫌味笑顔な女の子とその取り巻きに向かって大爆発させた後、自信を持って断言した。

「僕は、中村君を信じます！クラス全員が信じなくても信じる！以上終わり！」

有無を言わず欧介が話を終えた時、教室のドアに中村の姿が見えた。

三ヶ所目 2（後書き）

感想やご意見等お待ちしています!!

三ヶ所目 3（前書き）

今回作から欧介の視点（一人称）を強調するよう^に執筆します。

ご了承ください。

三ヶ所目 3

「な…中村君」

僕の叫びにクラス全体が驚くべき早さで中村君に注目した。

「うわっ…入りづら」

中村君は、苦笑しながら教室に入ってきた。

僕の爆発させた怒りの後で静まりかえった教室には、中村君が荷物をまとめる物音以外の音がなかった。

静まりかえる中で中村君が片手に持てるぐらい少ない荷物をまとめながら、

「いやね〜金欠でね〜ちょうど前を通りかかった奴を殴って援助してもらった訳よ」

いつもの様にカラカラと笑っている。

「真田っち！お前ならハリウッドで主演男優に選ばれるんじゃないかねえ？さっきのは、迫真の顔とセリフだったぜ」

（えっ …真田っち？っていうか、見られてた？）

カラカラと笑い続けながら話しかけてきた。

「じゃあな〜犯罪者は処罰が出るまで謹慎しますわ！あと、金持

ち自慢の奴らは気をつけろよ！今度は、お前から援助していただくかもな」

中村君は、嫌味な金持ちグループに向かって邪悪な笑いを投げつけた。

ひとしきり、笑った後でスタスタと軽快に歩き出し教室の出入り口に向かっていった。

ドアに着いた時、一瞬中村君がドアの前で立ち止まったように見えた。

僕は、立ち止まった中村を帰すまいと、

「待つ……」

と、言いかた瞬間、

ドガァン

中村君が、おもいつきり壁を殴りつけた。

ビクツとしてクラス全体（僕を含めて）が中村君の行動に啞然とする中、

「じゃあな！」

中村君は、ドアの外を見ながらそう言い残して消えいった。

僕は、その衝撃音にビビってしまい、その場から動く事が出来なかった。

クラス全体が金縛りにかかったかのように静寂が訪れる中、突然かん高い声が響いた。真っ白になった頭に、中村君の邪悪な笑いを投げつけられた金持ちグループがギャーギャーと騒ぎながら雑言を言っるのが聞こえた。

（中村君、何で話を聞かせてくれないんだよ）

僕の頭の中は、中村君の事を考えるので一杯になり、耳障りな雑言を聞かないように頭のダイヤルをヒネって机に突っ伏した。

いつ、自分の机に戻ったのかも分からず目を閉じた。

（もう…疲れた…）

直後、真っ暗な闇が目の前に広がっていった。

気づかない内に寝ていたらしい、一時間目が終わるチャイムの音が鳴り響いていた。

（うわぁ、だつるう）

気だるい気分で立ち上がった。

立ち上がったと同時に周りの視線が僕に向けられた。

偶然、目が合った一人がすばやく目を逸らして近くの席の人に話しかけた。

（あゝそういうことか。次は、僕がクラスの的ってわけね）
無性に腹がたち、とにかくこんな教室に一秒でも居たくなくて廊下
に向かい荒々しく歩きだした。

途中で、金持ち自慢グループが何か言ってきたので廊下に出た後、
おもいつきリドアを閉めてやった。

今の気分を表すならはうつせえよ！！だ。

今なら面と向かって言える。

僕が、怒りで無意識にトイレに向かって歩いてみると、後ろから名
前が呼ばれた。

だけど無視した。今は、誰とも（蒼ちゃんは例外だけど）話たくな
いから。

しかし、無視しても相手はなおも名前を呼びながら近づいてくる。

（しつこいな。こうなったらトイレの個室に隠れてやる）

そう思い、更にスピードを上げると突然、誰かに抱きつかれた。

（はあ？誰ですか…昼間から廊下で抱きつく人はあ）

いきなり抱きつかれたので反射的に振り替えると花君が抱きついて
いた。

「欧介君カッコよかったよ！サイコー！やっぱり欧介は良い人だね」

花君が、僕を見ながらこれ以上無いってくらいの笑顔で飛び跳ねていた。

（いや、何が？）

イロイロ有りすぎて&寝起きでいまいち気分が乗らない僕は、何も言えず立ち尽くした。

そんな様子を見かねたのか花君が、

「ご…ごめん！つい。あのね僕も、中村君がカツアゲして無いって信じてるんだ！だからクラスがあんな状況の中、欧介君がミナの前で叫んでくれたのが嬉しかったんだ」

バツが悪そうに言った。

「いや…あの時は我慢出来なくてついね…」

「僕を含めて3人は、欧介君の味方だよ」

（えっ、3人？）

その3人という単語に何故か、桃太郎の部下の動物3匹が頭に浮かんだ。

僕は、頭の中で桃太郎のテーマソングをリピートしながら花君の後方を見ると女の子が二人歩いてくるのが見えた。

僕は、まだ醒めきれない気だるい気分を引きずりながらボーツと女

の子を眺めていた。

えっと……軽くパーマがかかっている茶髪というかむしろ栗色で……（ももたるさん×2）、セーラ服がこのうえ無く似合う清楚な女の子で……（御腰につけたキビダンゴッ）。

あ 蒼ちゃん！と、その友達……（ねえ……欧介……一つ私に下さいな……もうイジワルしないでえ。）

女の子の正体に気づいた瞬間、歌っていた可愛らしい子供達の声が色っぽい不〇子ちゃんのコーラスに変わった。

（蒼ちゃんが僕の味方？マジっすか！って、もしかしてクラスの陰謀か？ドコだよドッキリカメラはあ）

「真田君。見直したよ。」

蒼ちゃんの友達が言った。

僕は、全く耳に入らず挙動不振に辺りをグルグルと見回した。

「欧介君……」

蒼ちゃんがポツリと言った。

「はいっ」

グルグル回していた僕の首は蒼ちゃんの一言でガッチリとロックされた。

「ありがとう。教室の空気を変えてくれて…。私、信じられなかったの…。昨日まで一緒に過ごしてたクラスのミンナがあんな事言うなんて。だから、悲しくて…。それに私…」

蒼ちゃんの目から大粒の涙が止めど無く溢れた。

（綺麗な涙だな）

蒼ちゃんの涙を見ていると心が洗われる様な気がする。

不思議とさっきまでのドキドキ感が無くなった僕は、持っていたハンカチで蒼ちゃんの頬を流れる涙を優しく拭きとってハンカチを手渡した。

「泣かないで…」

蒼ちゃんの涙を見ていたら僕まで泣きたくなってきた。

「だって私は、ミンナと同じで…。中村君を…。ただ震えてるだけで…」

「違うと思うよ」

「うつん…。私も、みんなと、同じで…」

「蒼ちゃんは、震えながら一生懸命クラスに抵抗してたんだと思うな」

ハッとした顔で蒼ちゃんが僕の顔を見つめた。

蒼ちゃんの涙で潤んだ目も、小刻にゆれる口元も薄紅色の頬も全て

を含めて、愛らしく感じた。

「だから、蒼ちゃんは何も出来ずにクラスの雰囲気呑み込まれた人達とは違うよ。一生懸命抵抗してたんだからね。言葉で抵抗したか態度で抵抗したかの少しの違いだけだよ」

僕は、とびっきりのスマイルで蒼ちゃんに笑いかけた。

僕の言葉を聞いて蒼ちゃんも優しく微笑んでくれた。

「欧介君は、ありがとう……」

蒼ちゃんが涙を拭きながら言った。

（当然だよ……僕は、蒼ちゃんだけの紳士さつ……）

って言いたかったが我慢した。

「やばっ、僕まで感動しちゃったよ。良い話だあ」

花君がパチパチと拍手をしながら頷いた。

「うん……更に、見直したちゃったよ」

蒼ちゃんの友達も涙ぐんでいた。

今になって、二人の存在に気づき蒼ちゃんにした行動も言った言葉も二人に筒抜けだったと分かり、かなり恥ずかしくなった。

「と とりあえず、教室に戻ろうか」

僕は、恥ずかしさのあまりに教室に向けて歩きだした。

「ちょっと…待ってよ！欧介君」

花君を先頭に3人が後ろについてくる。

僕は、いつの間にか気だるい気分も無くなり元気になっている。

（気分が晴れたなあ）

「ありがとう。3人のおかげで元気出た」

僕は、振り替えて伝えた。

3人とも頷いてくれた。

（よし！こうなったら、絶対中村君の無実を証明してやる。クラスになんかに負けるもんか）

僕は、決意を新たに教室のドアを開いた。

三ヶ所目 3（後書き）

気になる点等がありました指摘して下さい。
引き続き感想や意見をお待ちしています。

三ヶ所目 4

僕が教室に戻ると、相変わらずヒソヒソ話や金持ちグループからのム力つく目線が浴びせられたが気にしなかった。

蒼ちゃんが味方でいてくれるんだからクラスを敵に回してもどうってことない。

そんなこんなで、授業が全て終わり帰る時間になった時、

「今日は色々あったが明日も元気に登…」

「先生え〜」

担任の挨拶を金持ちグループの嫌味な笑顔女の声が遮った。

「どうした藤井？」

「今日、自習の時間にい真田君が大声で騒いでえ自習出来ませんでしたあ」

「はあ？」

僕は、いきなりのクリアパスに啞然としてしまった。

「なんだ。そうなのか？」

担任は顔をしかめながら僕の方を見た。

「おい真田、何で騒いだ？」

僕の周りを含めて誰もが黙って思い思いの方向を見ている。

自分関係ないっすよ。と雰囲気であらわしていた。

「そ…それは…」

「ちゃんと理由を言え。理由が有るんだろ」

どうやら担任は僕の回答を聞くまで帰らせないつもりらしい。

（ここで中村君の件について全てを打ち明けても藤井さんを筆頭にクラスのが否定すればより状況が悪くなるし）

黙ってうつ向いていると、突然誰かが喋りだした。

「先生。真田君からは言いづらいと思うから俺が理由を言いますよ」

突然の大河君の発言に担任を含めてクラス全員が注目した。

（えっ？大河君？）

戸惑っている僕を尻目に大河君は凜とした雰囲気で話だした。

「今日は、自習の時間にクラスの学級委員を決めていたんですけど…」

大河君が少し微笑んで、

「真田君の公約演説が熱くなりすぎちゃって…まあ具体的には教卓

を叩いたりですが。多分それで直前まで自習に集中していた藤井さんは自習中に騒いでいたと勘違いしたんですよ」

大河君の鮮やかな語り口に誰も口を挟まなかった。っていうか、挟めなかった。

何より大河君の話方には不思議と説得力があった。

「なんだ、そういう事か」

担任は納得したらしい手をポンッと叩いていた。

「真田：学級委員になりたいのは分かるが。あまりに熱くなるのは感心しないぞ。藤井もクラスの様子にもっと目を向けなさい」

僕は、藤井さんの悔しそうな顔を見て気分爽快になった。

「分かったのか真田？おい、ニヤニヤするな」

担任は困り顔を浮かべてため息をついた。

担任の様子から、今僕の顔が、恐ろしくニヤニヤしていることに確信した。

「はい…気をつけます」

「んで、結局誰が学級委員んだ？」

担任はワクワクした様子でクラスを見回した。

めっちゃめっちゃ肝心な場面だ……大河君は、どうこの場を切り抜けてくれるんだろう？

冷や汗をかきながら期待の眼差しで大河君を見たが大河君は丁度廊下にか、かなり重要な物を見つけたらしく夢中で廊下の方を見続けていた。

は い…？

僕は、あまりの衝撃に目が点になり、同時に更に冷や汗がモツサアと噴き出すのが分かった。

いやいやいや、廊下に何が見えるんだよっっ？助けるなら最後まで助けてよ……。

大河君の行動にパニック状態に陥り心臓が8ビートを刻んでいる。

(どうしよう…どうしよう…とおしお…としお)

ああ、そっかあ。どうしように繰り返すと

「としお」

になるんだあ…。

いやいや、何言ってた自分。

メダパニ状態がMaxになった時、フツと誰かが手を振ったように見えた。

その方向を見ると花君が小さく手を振っている。

えっ、もしかして花君何かいい考えが？

そう思い、

（助けてくれるの？ありがとう）

その意味を込めて手を振り返すと、花君の手の形がパーからOKマ
ークに変えて微笑んだ。

（花君頼んます）

そう思った次の瞬間、

「先生。学級委員はもちろん真田欧介君ですよ」

花君の自信タップリの響きがソフトに教室に木霊した。

その言葉に、もう何が何だか分からずカバの様に口をポカーンと開
けている僕に向かって、

（グッジョーブ）

花君が、ビシッと親指を立ててテヘッと笑って僕を見た。

（えっ…えっ…ええ！）

何言っちゃってくれちゃったりしちゃったり……。やっと僕の頭が
正常に動きだし、事の重大さに気付いたと同時に頭の中がグチャグ
チャになった。

「おつ、結局真田か」

「真田なんだな？」

担任は、最終確認のつもりらしく再び僕を見つめた。

もう、言い逃れ出来るハズもなく、

「ふえ…い」

力なく答えた。

「ふえい…ねえ」

担任は、またため息をついた。

「で、女子の学級委員は誰だ？」

（今この状況で僕と、学級委員やりたい女の子なんて）

嘘がバレる事を確信し机に突っ伏した。

「私が、女子の学級委員になりました。」

「ほう、楠木か」

（えっ楠木？）

ガバッと起き上がると蒼ちゃんが手を挙げていた。

僕は、嬉しさと今まで緊張感が解け無意識に涙を流してる事に気づいた。

担任もそんな僕に気付いたらしく、

「なんだ真田、学級委員がそんなに嬉しいのか？」

担任が微笑みながら言った。

（嬉しいです…ものスゴく嬉しいです）

僕の心の中にみんなに対する気持ちや色んな思いが浮かんだが、言葉にならず涙を拭った。

「よし、今日はここまでだ。明日も元気良くなっ」

僕は、ゴシゴシと涙を拭き蒼ちゃんの元に向かった。

「蒼ちゃん、ありがとう」

「うっん、欧介君に元気を貰ったお返しです」

「いや…そんな…」

「明日から二人で学級委員として頑張っていこうね」

「うん……」

僕は、蒼ちゃんの笑顔と《二人》という単語を改めて噛み締めてジ

ーンとした。

蒼ちゃんの友達が蒼ちゃんを呼ぶのが聞こえたのでバイバイと言い蒼ちゃんを見送った。

相変わらず金持ちグループがゴチャゴチャ言ってきたので彼等の存在を視界から消して教室を出た。

花君を廊下で見つけ下駄箱まで歩く間花君に花君の行動にどれだけビックリしたかをしこたま伝えた。

「ゴメン、かなり良い案だと思って」

まあ…、結果的に蒼ちゃんと学級委員になれたんだから良しとしよう。

下駄箱で、靴を履いていると大河君がやって来るのが見えた。

「あつ、大河君。今日はありがとう。すごく助かったよ」

感謝の気持ちを全面に押し出し伝えたが、

「別に、助けた訳じゃない。あの時は、担任の話が長くなるのが嫌だったただけだ」

教室での大河君とは、まるで別人の様に冷たい雰囲気ですらりと言われたので身動きがとれなかった。

「でも、学級委員になれてよかったな。中村の弁護をするのに十分な意味を持つな」

そう言つと軽く微笑んだ。

内心、僕はホツとした。

「大河君も中村君を助けるの手伝つてくれない？」

一瞬、大河君がとまどつた様だったが、

「真田…知つてるだろ？中村と俺の間を」

大河君の漏らしたその言葉で、入学式の二人のやりとりを思い出した。

教室の中で敵意を剥き出しにした中村君と冷ややかな大河君、そして間に飛込んだ自分。

まるで昨日の様な感じにがする。

「俺には、中村を助ける理由がない。それに俺が助けても…あいつは…」

言葉を濁し、大河君は歩き出した。

「ちょっと、大河君？」

「追わないであげよう」

後を追おうとした僕に向けて、花君がポツリと言ったのが辛うじて

聞こえた。

「うん。花君？」

何故か花君は悲しそうにうつ向いている。

「どうしたの？」

僕の問いかけに気付いたのか、元氣を取り戻したのか分からないがいつもの笑顔を浮かべた。

「欧介君、じゃあ…どうしよつか？」

「まず、被害者の人に会ってみようよ」

「どこの人なのか分かってる？」「確な情報によると三津高の生徒らしいよ」

「さっすが、学級委員だね」

「まあね……」

花君は僕を褒め称えたが、確な情報と言う名の盗み聞きですね…。

「じゃあ、いっちょやっちゃいますか」

花君は、待ちきれないって感じでアーチ状の校門に向かって走り出した。

しかし、花君を追いながら僕の頭には中村君と大河君の事がグルグ

ルと渦巻いていた。

三ヶ所目 5

僕と花くんは、学校最寄りのバス停からバスに乗って三津高方面に向かった。三津高は、聖蘭と並ぶ位の進学校だ。

しかし、自由な校風の聖蘭とは反対に三津高は御堅いガリ勉タイプの学校でもあった。

「何か、緊張しちゃうね」

花くんは三津高の校門を眺めながら言った。

「でも、もう後戻りは出来ないよ」

後戻りは出来ない…。

僕は、花君に言うと同時に自分にも言い聞かせた。

敷地内に、足を踏み込むと三津高の生徒らしき人々とすれ違った。三津高の生徒達は、すれ違い様に不審感を露にした視線を投げつけてくる。

「何か、警戒されちゃってるね」

「怪しい者じゃないのにね…」

僕と花君は苦笑しながら歩みを進めた。

しかし、ただヤミクモに歩くだけではラチがあかない事が三津高の敷地を二周回った時に気づいた。もういい加減足が疲れてきたから、覚悟を決めて三津高の生徒に事件について聞くことにした。

休憩も兼ねて、中庭らしき場所で座っていると、丁度本を読みながら学生がこちらに向かった歩いて来るのが見えた。

読書の邪魔をするのは悪いと思いつつ、立ち上がって服装を直して意を決して話かけてみた。

「あのお…」

僕の問いかけが聞こえたのか、本から顔を上げて学生は僕の顔を見た。

学生は、僕の顔をマジマジと見た後に僕の首に付いている学章を見ているようだった。

「あのですねえ…この三津」

僕が喋りだした途端、学生は全速力で僕と花君の間を駆け抜けた。

「えっ？」

僕は、鼻で学生のモノらしき柑橘系のシャンプー残り香を感じながら呆然としていると、

「欧介君。あの人なんか知ってるんだよ」

そう言うと同時に花君も駆け出している。

「あれ、花君？」

3秒後やっとなの成り行きに気づき僕も駆け出した。

「まつ…待ってよぉー」

中庭を抜けると花君が三津高の校舎に突入していくのが見えて息も絶えだえ後を追った。

くっそぉ…何で…僕は必死に走ってるんだ？

急激に疾走したせいか心身ともに大きな苦しみに包まれた。

もう…歩かせてくれ。

苦しみが最高潮に達したとき突然、体に充実感と解放感が溢れた。

あれ 何か、気持ち良い…どこまでも走れそうだ…僕はカモメ…
…。

この日を境に僕は長距離ランナーに目覚め、インターハイを目指す
ことになった。

「目指すは日本一のランナーだ。そして、アイツを倒す」

「頑張って欧介……」

「ああ、蒼。行ってくる」

こうして、インターハイ開場に向かった。

そんな都合の良い事が起こるはずもなく、あまりの苦しみを脳内に

勝手な想像が溢れた。

「ぐ　るじい…たしゅけ」

ヨロヨロと階段を上っていくと二階の廊下で走っていた学生が派手にコケるのが見えた。

「ラ　ラッキー」

苦しみからの解放を確信し安堵した瞬間、僕の足がモツレて開けっぱなしにされていた掃除道具箱に体ごと派手に突っ込んだ。

「大丈夫？欧介君」

遠くの方で苦笑気味に花君が叫んでいるのが聞こえたので、大丈夫だよと掃除道具箱の中から手を出して振った。

かなり恥ずかしくて痛いし。

とりあえず、男子学生を廊下に座らせて話を聞くことにした。

「何で逃げたの？」

花君が聞くと男子学生はガタガタと震えて、

「あの人に頼まれたんですか？僕を二人で暴行するんですか？」

学生は今にも泣きそうに顔を引きつらせた。

「いやいや、しないよ」

僕は、脅える彼に三津高に来た理由を説明した。

僕が、全てを話終えても彼は、まだガタガタと震えていた。

「僕のせいじゃない…あの時は仕方なかったんだ」

「君は何を知ってるの？」

花君が一步前に出て聞いた。

歩み出た花君に驚いたのか、彼は更にガタガタ震えパニックになったようだった。

「僕のせいじゃない…僕のせいじゃない…」

「ちゃんと答えてっ」

花君は、震える彼の両肩を勢いよく掴んだ。

「君の話で、友達の無実が証明されるかもしれないんだよ」
花君……。

知り合って初めて聞く花君の強い口調に僕も圧倒された。

「頼むから…話してよ…」

花君がゆっくりと手を離すと彼はガツクリとうなだれた。

「君の名前は？」

僕がうなだれる彼に聞くと、

「山下雄也」

弱々しい声で答えてあの日、中村君と自分との間に何が起きたのかを語り出した。

「あのひぼくはげーむせんたーにいていましたそのときゆい」

山下君は舌を嚙んだらしく顔をしかめた。

「山下君、時間はたつぷりあるんだし。ゆっくりで良いから」

僕は、反対側の窓から差し込む夕日によって染まった山下君の顔を見ながら諭すように言った。

山下君は、相変わらずうなだれていたが深呼吸をして改めて語り出した。

「あの日、僕は学校の帰りにゲームセンターに行きました。僕が最近稼働したKOFを^{キングオブファミリー}プレイしていると対戦乱入が入ってきて…その人がしつこくて…僕がその乱入者を7回連続で倒した時、乱入者ももう乱入しなくなっただんです…。僕がホッとしてゲームを続けていると、いきなり6人ぐらいのガラの悪い学生に囲まれて…そのままトイレに連れ込まれて腹を殴られたうえに財布と……」山下君が、言葉詰まらせ声を震わせた。

「おじいちゃんの形見の大事な腕時計を奪って…また、僕の腹を殴

ってトイレから出ていきました」

山下君は、学ランの袖で涙を拭った。

「僕は、しばらく立てなくて……やっと立てるようになったから、時計だけは返して貰おうと無我夢中でトイレから出ました。奪った6人の内、リーダー核の人は赤い髪だったんで……丁度クレイニングゲームをしていた赤い髪の人を見つけて……それで、その人に掴みかかって警備員の人を叫んで呼んだんです」

それが、中村君だったって訳か……。

僕は、その話を聞きながら夕焼けの色が痛く目に染みるように感じた。

「でも、その人は僕の持ち物を何も持つてなかった……だけど僕はホントに無我夢中で……あの人がやったとしか思えなくて……最終確認の為に事務所に連れていかれて確認をとらされて……その後、警察官に連れていかれる赤い髪の人を見ていたら怖くなってゲームセンターから走って出ました」

「ホントに、その……連れてかれた人が犯人だったの？」

僕の問いかけに再び山下君は震え出した。

「違ったんです……ゲームセンターから出た直後、僕から時計を奪った本当の犯人が僕を近くの路地裏に引っ張って……」

山下君は、激しく震え出して手で頭を抱えた。

「もし本当の事を言ったら次はお前の家まで行ってお前をリンチす

るって言われて……」

僕は、この話に絶句して何も言えなかった。

多分、山下君にとっては相当ショックな出来事であったに違いない。大切な物を取り返す事が出来ず、その上に更なる恐怖を植え付けられて無実の他人に罪を被せて今まで苦痛を背負ってきたという事が山下君の様子から痛いほど分かった。

「そんな事が……」花君が沈黙を破った時、

「コラア、お前らそこで何してんだ。」

三津高の教師らしき男が僕達の方角に走ってきた。

「ヤバイ……花君逃げなきゃ」

「でも、このままじゃ……」

「花君……!」

僕は、強引に花君の腕を掴んで反対方向の階段に向かって走った。

僕は、無我夢中で階段を駆け降り三津高の校門を目指した。

途中で、何度も人にぶつかったが気にする余裕すら無かった。やっとの事で、校門を出ると大きな虚脱感に襲われ膝をついた。

「はあ はあはあ……欧介君……はあ……」

「はあはあっ…何？」

「はあはあ…手離して…」

「ゴメン…はあ…」

僕が、勢い良く手を離すと花君は笑いながら息を整えた。

近くの自販機でジュースを買いバス停まで歩いていると、

「ねえ…欧介君どうしようか」

花君が、不安げな顔をして呟いた。

「僕は、これから中村君に会いに行こうと思うんだ」

僕は、空き缶になったジュースの缶をクジャリと潰した。

そしてちゃんと空き缶をゴミ箱に叩き込んだ。

地球の自然をまた一つ救ってしまった。

僕が誇らしげにしていると、

「僕も良いよね？」

そう言いながら花君がゴミ箱に缶を入れた。

「もちろんだよ」

花君に笑顔が戻った。

「欧介君っていつもアイデアがあるね」

ニコニコしながら花君が言った。

「まあね」

花君にはそう答えたが実際には考えなんて全く無くて、ただ中村君に会ってちゃんと話がしたいだけだった。

中村君のバイト先のスーパーに行く為に乗ったバスの中で今日は、乗っている乗客の雰囲気はやけに冷たく感じた。

三ヶ所目 6（前書き）

少し長くなってしまいました。

ご了承下さい。

三ヶ所目 6

僕達を乗せたバスが目的地に着き、僕はバスから降りた。

花君の方を振り返ると携帯が震えながら着信を伝えているらしく携帯を取り出そうしていた。

「あつ、電話だ」

「じゃあ、先に歩いてるよ」

「ゴメンね」

花君が申し訳なさそうに作った笑顔にキュンとしながら僕はスーパーに向かって歩いた。

僕は、歩きながらふと思った。

（よくよく考えたら…中村君って謹慎中だよ…。って事は、バイトも…？）

今更になって自分が勢いだけで行動していたこと気づき、足が重くなっっていく様に感じた。

「おまたせつ。どうしたの欧介君？歩くの遅いよ？」

花君が、元気良く走って僕に追いつき並んで歩き出した。

花君は、とてもやる気に満ちた顔をしていたので、思わず中村君が

バイトに来てないかも…という話を切り出すのを躊躇した。

（いや…こういうのって早めに言っただ方が良さな…）

覚悟を決めて、それとなく花君に切り出してみた。

「あのさ…中村君って謹慎中だよね？」

「あつ、そうだね。謹慎するって言ってたね。」

（花君、僕の言いたい事を察して下され…）

僕は、必死に念を送った。

しかし、花君は僕の念などに気付く訳もなく、新学期の金〇先生の様なやる気をみなぎらせているのが分かった。

結局切り出す事が出来ずに、僕達は他愛もない会話をしながらスーパーまでの道のりを歩いた。

スーパーに着くと、中村君がバイトに来てるハズが無いという悪い考えが一方的に膨らみ、僕は無口になっていた。

（ヤバイ…やっぱり、さっき花君に言えば良かった。今更、中村君いないかもなんて言えないし…どうしよう…）

「あははは」

「うえっ、花君？」

僕は、突然笑いだした花君にビックリして思わず変な声を出してキョトンとしてしまった。

「あははははっ。欧介君どうしたの？歩き方が変だよ」

「変？あっ…」

僕は、悩むあまり無意識に右の手と足が同時に出るという変な歩き方になっていたらしい。

（もしかして、スーパーに入ってからずっとこれで歩いてきたとか…？）

そういえば、やけに店員さんの視線を感じた気がする。

「中学の時に、変な行進してる人いたよね？」

そう言くと花君は、またアハハハと笑いだした。

（あのお…花君…笑い過ぎですよ…）

そうこうしていると、中村君のバイト先の売店に着いた。

売店の奥には店主（中村君が言うには、おっちゃん）らしき人物がたい焼きを焼いているだけで中村君は勿論、他の従業員の姿は見えなかった。

（中村君…いないよな…）

僕が、諦め半分で店の奥を見ていると店主と目が合った。

「いらつしゃ…」

おじさんに、数秒間見つめられたので妙な気分になった。

「あつ、蓮ちゃんの学校の？」

急におじさんとが大きな声を出したので、ビクツとなった。

「あつ…はい。中村君のクラスメートの真田です」

「僕は、森島です」

二人で自己紹介するとおじさんは、たい焼きを紙袋に包んで店の奥へ僕達二人を誘った。

店の奥には、小さなテーブルがあった。

（店の裏側ってこんな感じなんだ…）

僕は、初めて見る社会の裏側に感動してキョロキョロしてしまった。

「今日、蓮ちゃんに何かあったのかい？」

席に着くやいなや、おじさんがたい焼きを僕達に手渡しながら切り出した。

「えつ、何故ですか？」

まさか、おじさんの口からそんな話が出るとは思わず、一瞬花君と

向き合ってしまった。

「いやね…さつき、蓮ちゃんから今日は休むって電話がかかってきたんだよね…」

「もしかして中村君、元気無かったんですか？」

僕の脳裏に、教室から出ていく中村君の後ろ姿がよぎった。

「いや、逆なんだ…」

「えっ、逆って何ですか？」

花君がたい焼きを口に含み何度も噛み締めながら聞いた。

まるで、アズキを吟味している様に見えた。

「だから、むしろ元気過ぎたって事なんだよ…何か妙に声が大きくて…空元気というのか…」

「そうですか…」

「君達、今日蓮ちゃんに何があったか知らないかい？」

おじさんは、本気で中村君を心配しているようだった。

「実は…」

僕達は、おじさんに今日の出来事や今、中村君の置かれている状況について話した。

僕が話終わると、おじさんはとても悲しそうな憂いを帯た顔をして店のカウンター付近を眺めていた。

「そうか…そんな事が…」

「それで僕達は、中村君に会おうとココに来たんです」

おじさんは、相変わらずカウンターの方を見ながら静かに佇んでいた。

何故かしやべっちゃいけない気がして、僕達は無言でたいやきを頬張った。

「君達は、蓮ちゃんと会ってどうするんだい？」

僕が、たいやきの尻尾にカブリついた時、おじさんが静かに口を開いた。

「えっ…。僕達は…」

花君が、僕の方を向くのが分かった。

僕は、とまどってしまった。

確かに会って話をするだけじゃ、何の解決にもならない。

（会って、話して…どうするんだ…僕は…）

僕と花君は、何も言えずに、ただ黙ってうつ向き続けた。

そんな様子を見かねたのか、おじさんがたい焼きを、もう一つずつ持って手渡してきた。

「ごめんな…君達を責めた訳じゃないんだ。ただ、君達が同情や一時的な気持ちで行動したんじゃないかと思ったんでね」

おじさんは、ポリポリと額を掻きながら申し訳なさそうに笑った。

「あの子は、そうゆうの気にするんだよな」

「何故ですか？」

いつか、誰かに聞きたいと思っていた。

入学式や自己紹介の時も彼は、《嘘や偽善》という単語を匂わせていたからだ。

しかも、理由を知っている人物が目の前にいる。

だから僕は、無意識に口をついて出してしまった。

おじさんが目を閉じた。

僕達に話すべきか話さぬべきか悩んでいるように見える。

短い沈黙の後、

「こうゆうのは、本人に聞いた方が良いと思うんだが…」

「そうですね…」

おじさんの言うことが、もっともだったのでそれ以上は聞けなかった。

「そろそろ、店の片づけをせにゃいかん。それに君達の御両親も心配するだろう、もう帰りなさい。」

「あつ、はい」

僕は、立ち上がった。

しかし、花君はうつ向いたまま、立ち上がらなかった。

「花君？どうかした？」

「ああ…ゴメンね」

花君が、少し微笑んで立ち上がった。

何故か最近、花君はたまに元気が無くなる事がある。

（僕が、花君を連れ回したから疲れちゃったのかな？）

花君に対して申し訳ない気持ちが出てきた。

「たい焼きごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

二人でお礼を言いその場を後にした。

スーパーから出た後、僕はスーパーに連れてきた事を謝った。

すると、花君は不思議な顔をした。

「何で、謝るの？」

「だって、僕の行きあたりばったりの行動に花君を振り回しちゃったし…それにすごい疲れてる様だし…」

「えっ……ああ、違うよお」

花君が、テヘヘっと笑った。

花君の笑顔に僕の心配も少し軽くなった気がした。

二人で、バス停まで歩いていけると、

「あの時、何も言えなかったね…」

花君がポツリと呟いた。

「もしかして…おじさんの？」

「うん…」

花君が、道端の小石をコツンと蹴った。

「中村君に会ってどうするか…っか」

（僕は、何がしたいんだろ…）

色んな想いが浮かんでは消えていく。

その消えていく想いを見つめようと目を閉じた。

近くで花君の蹴った小石がコツコツと音をたてて転がっているのが分かる。

「やっぱり僕、中村君に会うよ」

僕は、花君は静かに、しかしハッキリ伝えた。

つというか、それしかない気がした。

「うん…」

花君は、小石を蹴るのを止めて小さく頷いた。

「僕は、ココで立ち止まったらいけない気がするんだ。中村君をもっと知りたいし…だから進んでみるよ」

花君に僕のとびっきりの笑顔をプレゼントしてあげた（返品はききません）。

「うん」

花君は、大きく頷いた。

まるで、何かを決心したかのようだった。

「あのさつ、欧介君…」

しかし、花君の話は凄まじいクラクション音にかき消された。

「花ちゃん。コッチだよお」

見ると、白いベンツのウィンドから小さな女の子が身を乗り出してコッチに向かって叫んでいた。

（えつ、あれって……ちいちゃん？）

数日前に会った花君の親戚のちいちゃんが元氣良く手をブンブンと振っていた。

（ああ…そんなに振ったら、マシユマロが取れちゃうよ…）

僕の手に、数日前に触ったちいちゃんの手感触が蘇ってきた。

「えつ、あつ…ちいちゃん…？なんで？」

花君も、突然ちいちゃんが現れたので状況を掴む事が出来ずオタオタしていた。

ちいちゃんは、そんな僕達をよそにベンツから降りてテクテクとコッチに走ってきた。

「花ちゃん見つけえ」

ちいちゃんは、花君に抱きついてニコニコと笑った。

「なんで？ちいちゃんどうしたの？」

しかし、ちいちゃんは花君の質問を聞かずに僕の方を見た。

「あつ、おうしゅけだあー。おうしゅけも見つけー」

（きゃ…きゃわいいよ～。ど真ん中頂きました～星三つですう～）

また、一つ僕のトキメキ萌えフェイスに新しい一ページが刻まれた瞬間が訪れた。

「ちいちゃんどうし…」

「花ちゃん、おかあさんが心配してるよお。。ちい姉ちゃんが連れて帰ってあげるう」

そう言くと、ちいちゃんは花君の手を掴んでグイグイと車まで引張っていった。

（あつ…マシユマロ良いなあ。でもすごい力だな…）

僕は、花君がグイグイと連れてかれるのを黙って見てるしかなかった。

「お…欧介君。ゴメンねー、また月曜日…」

そう言い残し花君は車の中に引きずり込まれていった。

「あっ… バイバーイ。 また月曜ね」

（花君も大変そうだな…。 でも、最後に何を言おうしたんだろう…）

「まあ、良いっか」

僕は一人でそう呟いて、暗くなった空にキラキラと輝く星の光を見つけた。バスを待った。

「この一週間は色んな事があったな。明日からの土日ゆっくり考えるか」

バスが、速度を落としてゆっくりと停まり、僕を中に招き入れた。

三ヶ所目 7（前書き）

話をスムーズにするため、三ヶ所目6の最後を少し変えました。

そちらを読書頂くと内容を掴みやすいと思います。

今回も、長くなってしまいました。

ご了承下さい。

三ヶ所目 7

土日が明けた月曜日、僕は朝から三津高に向かった。

もう一度、山下君に話を聞くために。

三津高の校門付近で15分程座っていると山下君が歩いてくるのが見えた。

「おはよう」

僕は、山下君に向かって最大限に爽やかな挨拶をした。

しかし、山下君は僕の顔を見るやいなや僕の目の前を走って通過した。

「ちょっと…待っ」

次の瞬間、僕の肩は強く掴まれる感覚を覚えた。後ろを見ると、三津高の生徒らしき5、6人の生徒達が僕を囲むように立っている。

「お前って聖蘭か？」

「そうだけど…」

（えっ？何この人達？）

僕は、いつの間にか囲まれていたのでビビってしまった。

彼等は僕の目を見据えて、

「山下から聞いたケドさ…アイツの気持ち考えてやれよ」

「何で、こんな事出来るわけ？お前のツレがやった事だろ？」

「もう山下君に関わらないで下さい…」

「ってか、金とかは良いから時計は帰してやってくれよ」

三津高の生徒は、口々に僕を避難した。

さすがに、僕も怒りを覚えた。

「なんだよそれ？中村君は、何もやってないんだよ。山下君も昨日
そう言っ…」

「最低ですね…中村っていう人。そしてあなたも…」

その言葉に、僕の怒りがリミッターが吹き飛ばした。

「お前に…僕と中村君の何が分かるんだよ？」

僕は、最低と言った痩せた学生に掴みかかった。

「ひいいい」

「おい、先生呼んでこいって…！」

僕を囲んでいた生徒が、あたふたとなって三津高の校舎に向かって走り出した。

（ちくしょ…コイツをグニヤグニヤのボコボコにしてやりたい）

僕は、初めて他人を力いっぱい打ちのめしたいと強く思ったが、必死に理性を保とうと努力した。

「山下君を呼んで来てくれよ」

僕は、ガリガリ君を更に絞めあげたてやった。

「こらあ！！そこのお前：ああ？この前の奴か？いったいなんなんだあ！！」

昨日、三津高の廊下で追い掛けてきた教師が、僕に向かって突進してくるのが見える。

（くっそお…何でこうなるんだよ…）

僕は、急いで校門を出た。

目の前には、これから登校してくる生徒の波が見えた。

しかし、いちいち避けてるわけにもいかなかったので大声で叫びながら波に突入した。

全速力で、走っていたので事故的に何人かの女の子の柔らかい部分

を触ってしまったたり、男のフニヤとしたブーツを強打してしまった
りした。

僕が通り抜ける度に男女から悲鳴があがった。

「僕は、怪しい者じゃありませんので…」

人の波を通り抜けた後は一応伝えておいた。

（まあ、この状況じゃ…ただの変態にしか見えないケドさ…）

一人で失笑してしまった。

バス停まで走って行くと丁度、バスが発車する所だった。

「乗ります、乗ります」

大声で、叫んでバスに駆け込んだ。幸いな事に乗客は少なかった。

僕は、目についた席にドカツと座り息を整えた。

携帯を見ると、8時45分だった。

（遅刻確定だし…まあ、学級員だって遅刻するのさっ）

ため息混じりに外を眺めた。

（山下君を説得するのは絶望的だな…どうしよう）

僕は、学ランを脱いでシャツのボタンを少し外した。

二つ程バス停を通りすぎた時、見覚えのある、原付が路肩に寄せ付けて有るのが見えた。

僕は、バシッとバスの《次降ります》ボタンを叩きつけ、次のバス停に着くのをガタガタと貧乏揺すりをして待った。

（早く停まれ…早く）

バス停に到着すると、全速力でさっきの原付の場所に戻った。

まだ、原付は路肩に泊められていた。

（はぁはぁ、これって、中村君の原付だよな…？多分…？）

「うおい！ほまへふぁにひとんら」

ペタペタと原付を触っていると、ぐぐもった叫び声が聞こえた。

振り向くと、情けなくヘナヘナと笑ってしまった…やっと会えたんだから。

「中村君…」

中村君は、片手に大量の何か（パン？）で膨れた紙袋を持ちながら、パンを口にくわえている。

僕の姿を確認すると、目の前に立っている僕に驚いているようだった。

「ふぁなだ？なぁにひいてんら？」

「あっ…うん。とりあえずパン飲み込んでからもう一回言つてよ」

「ふあかつは」

中村君は、紙パックのコーヒーを口に含んだ。

数秒間の沈黙が僕と中村君の間に出来た。

「まあ…良いや。取り合えず、どっか行こうぜ」

一息ついて、中村君が僕を別の場所に促した。

中村君の後について行くと、やがて公園に入った。

適当に公園のベンチに座ると中村君が、紙袋の中をあさった。

「メロンパン（未来の猫型ロボット風）」

そう言うと、僕の目の前にメロンパンをつき出した。

「あっ…ありがとう」

つてか、未来の秘密道具じゃないくて…普通のメロンパンじゃん！
！っとツツコミたかったが我慢しておいた。

「んで、何してんだ？」

中村君が、手についたパンの粉をパンパンとはたきながら言った。

「えっ…」

「学校サボって何してんだって聞いたんだよ」

「僕は、中村君の事で…」

「はぁ？俺の？」

「うん。そうなんだ…僕と花君で中村君の無実を証明しようとしてるんだ。手始めに、中村君を犯人と間違えた被害者の子に会ってきたんだ」

中村君は、無言で遠くの方を眺めていたが、僕は続けた。

「それで、被害者の子に話を聞いて、中村君の誤解を解いてもらおうと説得したんだけど…」

「お前何なんだ？」

突然、中村君が冷めたい目で僕を睨んだ。

「だから、僕は中村君を…」

「助けるって言いたいのか？笑わせんな。お前に何が出来るんだよ？お前は、俺を助ける為に頑張る自分が善い奴だと思っていただけなんだよ…！」

「ち…ちがうよ！！落ち着いてよ…。僕は、中村君の友達として…」

「友達なんて軽々しく言ってるじゃねえ…！」

中村君は、持っていた紙パックコーヒーを地面に投げつけ立ち上がった。

コボツという水しぶきを感じさせる音とともに紙パックがくしゃけてコーヒーが溢れた。

「俺は、お前をツレだと思ってねえよ！！勝手に友達面してんじゃねえ！！偽善野郎！！」

「僕の……」

数十分前に駆け巡った激しい感情が、また僕を支配した。

「僕のドコが偽善者なんだよ！！」

僕は、立ち上がっている中村君に掴みかかる。

中村君も、僕の胸元を力一杯掴んできた。

「すぐに、偽善偽善っていうケドさ、君が偽善者を作り出してるんだよ！！過去に何があったか知らないし知りたくも無いけど、君が人を信じなきゃ……人が君を信じるわけないじゃん！！」

「ぐうつ……」

中村君が、胸ぐらを掴んでいた手を離れた。

「僕は、本当に君を助けたいんだよ！！だから、僕を信じて欲しい」

「消える…」

「中村君…!」

「今さら、お前に出来る事なんて何もないんだよ…。もう俺には、構うな…」

そう言う中村君は去っていった。

(なんだよ…。それ…。結局、僕の事信じてないんじゃないか…)

「僕は、絶対諦めないから!」

僕は、寂しげに去っていく中村君の後ろ姿に向かい叫んだ。

独り残された公園で立ち尽くす僕の視界がボヤける。

(ちくしょう…。ちくしょう!)

僕の両目からは、涙が止めどなく流れ落ちた。

力無くベンチに座ると、僕は感情の赴くままに泣いた。

最近よく泣くなあ…。と、思いながら心も顔も涙で濡らした。

号泣した後の、気だるい気分にはまり込んでいたと、携帯が震えた。

「はい…」

電話の主は花君だった。

花君は、今日僕が学校に来ていた事を心配して電話を掛けてくれたようだった。

「えつと欧介君、伝えたい事二つ有って…一つは、カツアゲの現場は三津高の一駅向こうのゲームセンターらしいよ。大河君が教えてくれたんだ」

「えつ、大河君が？」

「あ…うん。それで…もう一つは、中村君の処分は明日出るらしいよ…多分、退学だって」

（今さら、お前に出来る事なんて何もないんだよ…。もう俺には、構うな…）

僕の中に、中村君の言葉が頭に蘇った。

（そうか…そうゆう意味で言ったんだ）

僕は、花君からの電話を切ってゲームセンターまで走った。

総てが上手くいくと信じて…。

三ヶ所目 7（花）（前書き）

今回は、花が主役です。

三ヶ所目7で、欧介が中村と会っている時の花の物語を書きました。

今回も、少し長くなりました。

ご了承ください。

三ヶ所目 7（花）

今日も、学校の最寄りのバス停まで車で送ってもらって登校する。

（やっぱり、欧介君に話すべきだよな…）

僕は、ここ最近ずっと悩んでいた。

僕と中村君と大河君の事を話すべきなのかと。

（でも、二人とも僕の事を忘れてるみたいだし…まあ、短い間しか一緒に居なかったから仕方ないかな…）

天気とは裏腹に、晴れない気分で校門をくぐった。

教室に着くと、いつも通りの景色が広がっている。

いつもは気にならない、友達と学校生活を送る希望に満ちたクラスメートの笑顔が今日の僕にはの痛く眩しい。

（早く欧介君来て欲しいな…）

自分の席で携帯を意味もなくイジった。

無意識に顔を上げると大河君が登校してきたのが見えた。

（大河君ホントに覚えてないのかな？）

幼い時の記憶が蘇る…。

あの頃は、公園の中で3人楽しく笑い合っていた…。

お互いにずっと友達だと誓ったのに…。

「おい席に着け。朝のSTだ」

僕の回想は、先生の声で打ち切られた。

「なんだあ…初日から学級委員が一人居ないじゃないか…」

先生が、不満を込めて言ったのが分かった。

（楠木さんは、僕の席から見えるから…って事は欧介君？）

「真田は、どうしたんだ？誰か知ってるか？」

先生がクラスを見回し聞いている。

斜め後ろから笑い声が聞こえた。

金持ちグループの人達だった。

「おい藤井、知らないか？」

「知りまあせえくん」

この鼻につく話し方が僕は嫌いだ。

「仕方ないなあ…楠木。号令を頼むよ」

「は、はい」

先生が苦い物を噛んだような表情を浮かべてため息をつく。

「きりーっ」

教室に楠木さんの声が響きわたりSTが始まった。

数分後、一時間目が始まった。

欧介君が、息を切らして教室に駆け込んで来るのを期待しけど、残念ながらそんな事は無かった。

（あーあ…つまらないなあ。欧介君何してんだろ…）

僕は、授業に集中出来る訳も無く適当に教科書を眺めた。

（どうやって…中村君を助ければ良いんだろ…良いアイディアは無いかな）

「ココが、今日の授業の一番のポイントです！！テストにだ…」

（ポイントかぁ…中村君を助けるポイントは…）

ノートに考えつく方法を書いたが、どれもチンプンカンプン過ぎてグチャグチャとシャーペンで塗り潰した。

「では、ココまで復習するように…終わります」

「きりーっ」

（あつ…授業のポイント聞き忘れちゃった…）

僕は、何やってんだと自己嫌悪に陥った。

（つまらないな…学校来た意味ないよ…。もういいや、欧介君に電話しよう）

僕は、次の授業までの時間を確認してポケットから携帯を取り出した。

携帯の液晶を見ながら廊下に出ようとした時、男の子に呼び止められた気がして振り向いた。

僕を呼んだのは大河君だった。

「やあ、おはよう」

僕は、いつもと同じ様に挨拶をする。

というか、もうこの関係に慣れちゃっていた。

初めの頃は、会うたびに気付いてくれるのかな？とか思ってドキドキしていたが大河君は完全に僕の事を忘れているらしい…。

「ああ。少し話があるんだ…真田はまだ来ないのか？」

「ああ…うん。今電話しようと思って」

「そうか…じゃまず森島に伝えるよ。中村が巻き込まれた現場は三津高から一駅向こうのゲーセンらしい」

「えっ…どうして？」

「三津高の知り合いに聞いたんだ」

そう言いながら大河君は窓から外の方を見た。
僕には大河君が照れてる様に見えた。

「ありがとね!!」

僕が電話を掛けようとした時、大河君が僕の方を見た。

さつきとは違い、冷たいとも悲しいとも取れる目をして。

「あともう一つ…中村は明日、多分退学になる」

「えっ…」思わず携帯を握り締めてしまった。

「何で…」

「警察沙汰が不味かったらしい…」

それだけ言うと大河君は教室に戻っていった。

(どうしよう…どうしよう…)

僕は、急いで欧介君に電話を掛けた。

呼び出し音がすごく長く感じる。

「はい…」

「もしもし！！欧介君？」

「えっ？ああ…花くんか…」

「そっだよ！！何で学校来ないの？今どこにいるの？」

「えっ？色々あつてね…今は、公園いるかな」

（何か、今日の欧介君は元氣無いなあ）

欧介君の様子が気になったけど、とりあえず大河君から聞いた話を伝えた。

（ちゃんと伝えれたかな？）

僕は、ドキドキしながら欧介の反応を待った。

その時、肩をトントンと叩かれたので振り向くと、後ろに楠木さんが立っていた。

「やあ、楠木さんどうしたの？」

僕は、楠木さんの話を聞く為に携帯を耳から離れた。

「あの…欧介君と電話してるの？」

「えっ…うん。そっだよ」

僕は、楠木さんが不安そうにしていたので、優しく笑いかけた。

「あの…替わってもらっても良いですか？」

「えっ…」

（どうしようかな…今、大事な話してるし…。でも、楠木さん学級委員だからな…まあ良いかな）

「うん！！良いよ」

僕は、携帯を楠木さんに手渡した。

「ありがとう。森島君」

楠木さんが笑顔を見せてくれたので少し安心した。

「もしもし…楠木ですが…」

（中村君が明日で…どうすれば良いんだろう）

僕が、窓の外を見ていると楠木さんが電話を返してきた。

「あの、電話切れちゃってました」

「えっ？」

確かに電話からは、欧介君の声は聞こえない。

「あっ…ゴメンね。僕がもう少し早く替わってれば…」

「ううん、気にしてないです。ありがとう」

楠木さんと僕は、教室に戻った。

二時間目が始まったが、やはり僕は授業に集中出来ない。

（中村君：どうやって助けよう…。欧介君は、学校に来ないし…。山下君は頼りないしな）

「では、森島君！…この場面での筆者の心情は何ですか？」

「はあ…お先真っ暗ってヤツかな…」

僕は、無意識に心の叫びを口走ってしまっていた。

一瞬にしてクラスの皆の視線僕に向けられた。

「も、森島君？それが筆者の心情ですか？」

「そっそつです…！」

僕は、何とか誤魔化せる様に必死に取り繕った。

（今日の僕…どうかしてる…）

数十分後、授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

僕は大河君に相談するのが一番良いと考え、席に向かった。

大河君は、本を片手にノートに何やら書き込んでいる。

「大河君。今良いかな？」

僕が話しかけると大河君が振り向いた。

「ん？森島。真田は今日病欠か？」

「うっん、今公園に居るらしいよ」

「公園？」

大河君は、少し顔をしかめた。

「あっ…うん。」

「場所を変えよう」

大河君は、僕を廊下に促した。

「もう一度聞くけど真田は、公園に居るんだな？」

「えっ…うん」

大河君は、何故か緊張感が滲んでいる顔をしながら僕の顔を見た。

「真田に、事件の現場を伝えたんだよな？」

「うん。欧介君驚いてたよ…でも感謝…」

「不味いな」

「何が不味いの？」

僕は、何故大河君が不味いと呟いたか見当もつかない。

「もし、真田が朝から三津高に行っていたとして、明日中村の処分…しかも退学になる可能性があると知ったら、何処へ行くと思う？」

「それは、現場のゲームセンターだよ」

（当たり前じゃん！！それぐらい僕だって分かるよ）

「犯人は中村じゃないんだろ？」

「そうだよ！！犯人はグループだって…」

僕は、大河君が言っている意味が分かった。

「それって、つまり…」

「そうだ！！真田は必ず犯人グループに接触するだろう…それも死にも狂いで」

「欧介君…犯人グループのリーダー格の特徴知ってるよ…どうしよう…」

僕は、あの時考えも無しに欧介君に喋った事を後悔した。

同時に、足もガクガクと震えて立っていられなくなった。

「大変だよ…どうしよう…」

「落ち着いて…」

「どうしよう…僕のせいだ…」

「花ちゃん！！落ち着いてくれ！！」

「えっ…」

僕は、その呼び方に懐かしい響きを感じた。
幼い頃、大河君がそう僕を呼んでいた。

大河君の顔が、一瞬固まったのが分かった。

「大河君？僕を覚えてるの？」

「ああ…忘れては無い…」

「なら…どうして今まで…」

「今はそんな事を話してられないだろ！！」

突然、大河君が声を荒げたので僕はビクツとなった。

「じ…ごめん」

「いや…良いんだ。それより真田を助ける方法が一つだけある」

「えっ、何？」

キンコーンと授業の開始を告げるチャイムが聞こえる。

大河君が、はぁーと大きくため息をついた。

まるで、自分自身を納得させるようため息をだった。

「今から真田を助けに行くんだよ」

「えっ…大河君…授業は良いの？」

「そうゆう事言われると俺の決心が鈍る…」

大河君が腕組みをして口をへの字に結んだ。

「ありがとう…大河君」

「別に良いよ…」

後ろから、先生が教室に入るよう注意する声が聞こえたが僕達は声を振り切って外へと駆け出した。

欧介君には悪いけど…僕は何故か、とてもワクワクしていた。

三ヶ所目 7（花）（後書き）

もうすぐ事件編が終わります。

新しい章まで、もう少しお付き合ひ頂けたら嬉しいです。

三ヶ所目 8（前書き）

今回の話の中には、暴力的なシーンが多数含まれています。

予めご了承ください。

三ヶ所目 8

「ははっ！ー！気持ち良いだろお」

蹲る僕の脇腹に強烈な蹴りが深々とめり込む。

「グッ…」

（ぐる…し…い…助け…て…）

「ナイスキツくク！！ジッコもビクリってやつくハハハハア」

僕を囲んでいる5人がゾツとするような高笑いをした。

「オラオラく時計取り返して友達助けるんでつしょおくとお！！」

黒いジャージを着た坊主頭が喋りながら僕の背中を空き缶を潰すように容赦無く踏みつける。

「寝てちゃダメじゃくん」

今僕は、ゲーセンから少し離れた廃屋に居る。

こんなはずじゃ無かった…全てが上手くいくと思っていた。

数十分前、僕は大河君が教えてくれたゲーセンで赤毛の人を探した。

目的の人を見つけ、時計について訪ねた。

赤毛の人は、申し訳無かったと謝り、僕に時計を返したいと言った。

僕は、赤毛の人の丁寧な態度をすっかり信じていた。
何より、中村君を助けられるという喜びに酔いしれていた。

赤毛は、僕をこの廃屋に導いた。

そして、数人に囲まれてゲームの様に何発も殴られた。

そう、僕がバカだった。

山下君を恐喝した奴を信じるなんて…。

「返…せ…時計…」

立ち上がろうと、膝を曲げると真横から蹴りが飛んできた。

「頑張つてえ！！立つてえ」

蹴りをいれた金髪が、笑いながら痛さで蹲る僕を仰向けに転がして、
胸ぐらを掴んで引きずり起こす。

「おっとつとっ立ち上がったご褒美だぞお！！ダアコ！！」

次の瞬間、僕の顔面に強烈な痛みが走った。

鼻の奥に鉄の匂いがして、生暖かい何かが出てきた。

「ナイスパンチ！！良いの入ったね」

サングラスが裏声で叫んだ。

再び、冷たく残酷な笑いが廃屋に木霊した。

（ち…く…しょ…う…）

「おい、顔は殴んなー！」

突然、今まで離れた場所に置いてあるソファで寝転がり雑誌を見ていた赤毛が僕を囲む5人に向けて喋った。

「遼…何だよ。いきなりさあ…」

「お前ら、もつと頭使えよ！！アシが付くだろー！！」

「はいはい…遼の言う通り腹にしますよぉあ」

「う…っ…」

手で鼻から滴り落ちる血を押さえていて、無防備になっていた僕の腹を金髪が踏みつけた。

内臓が裂ける様に痛い。

しかし僕の頭には痛みより、時計の事でいっぱいだった。

「ゴホゴホ…と…とけ…い」

「おい…そいつ連れてこい」

赤毛が、舌打ちをして誰かに命令する。

「ちっ…分かったよ」

坊主とモヒカンが僕を赤毛の所まで引きずっていった。

二人が手を放すと同時に、上手く体重を支えられない僕は、赤毛の目の前で膝を折って倒れた。

「座れ」

赤毛が目の前のボロボロになったソファを顎で示した。

僕は軋む体で、ゆっくりと立ち上がりソファに崩れ落ちる。

「気分は？」

赤毛が煙草の煙を僕に吹きかけて聞く。

「べ…っに…」

「そうか。それで…何でお前が時計を取り返しに来た？」

「ゴホッ…友達の…為に…必要だから…」

「そうか…」

そう言っていると、突然鋭い狂気を露にして赤毛が肩を震わせ笑った。

「ハハッ！…お前のお陰で、また山下って奴から何か奪えるぜ！…」

僕の目の前に山下君の学生証と時計をちらつかせる。

「山下君…の、時計を…返して…くれ」

「何だあ？」

「返してくれ…」

立ち上がるうとしたが、膝がガクガクして動けなかった。

「ダメだな！！時計は返せない。金に換えなきゃいけないからな」

「返し…てくれ」

赤毛が、二本目の煙草に火をつけてプカアと煙を吐きながら天井を見た。

そして、僕の顔を覗き込んだ。

「分かった…ただし条件がある！！お前が俺らに20万くれるんならな！！」

「20…万…？」

「そうだ！！俺らに20万よこせ！！そうするなら、もう山下には近付かないし、時計も返してお前も解放だ。どうだ？」

僕の、預金から引き出せば何とかなる金額だった。

「全ては、お前次第なんだよ？もう痛い思いもしたくないだろ？お友達を助けたいんだろ？俺らは、金さえ手に入ればそれで良いんだ

よ」

煙草を美味しそうにフカしながら赤毛が笑う。

（ちくしょ…母さんが貯めてくれた…お金が…ゴメン…母さん…友達の為なんだ…）

「分かった…」

僕は、悔しさを噛み締めながら頷いた。

「賢いぜえゝお前は!!」

赤毛を筆頭に六人が嘲る様に笑った。

「じゃあ…契約にハンコを押すか。おい!!コイツのシャツ捲れ!!」

歯が抜けた顔色の悪い男が、気味の悪い笑みを浮かべて僕のカッターシャツを乱暴に捲る。

「なっ…何するんだ…」

赤毛が口から煙草を外しながら笑う。

「契約にはハンコがいるだろう。契約したんだから」

僕は、逃げだそうと暴れたが三人に押さえ付けられて動けない。

「嫌だ…やめろ…やめてくれ!!」

「大丈夫だつて！！一生モノの傷が残るだけだからなあ」

真っ赤に光る熱源が僕の腕に近づく。

「やめてくれー！！」

僕は、力の限り叫んだ。

と同時に、やがて来るだろう熱さと痛みを覚悟し、目を瞑った。

しかし、腕に熱さも痛みも走らない。

目を恐る恐る開けると赤毛を含め六人は、僕では無く別の方向を睨んでいた。

「んだゝお前は？」

モヒカンが入り口に向けて叫ぶ。

モヒカンが叫んだ方を見るとスラリとした男が立っていた。

「真田を放せ……」

入り口に立っていたのは大河君だった。

（た…大河君…どうして？）

「おいおい。正義の味方ってか？」

ヘラヘラと坊主頭が笑みを浮かべて喋った。

圧倒的不利な状況にも関わらず大河君は、ゆつくりとコツチに向かってくる。

「入場料払えや!!」

坊主頭が拳を振り上げて大河君に向かい突進する。

二人の距離がどんどん近くなりやがて坊主頭の背中で大河君が見えなくなった。

（大河君…逃げて…）

次の瞬間、坊主頭が腹を押さえてよろめき、前のめりに倒れて大河君にもたれかかった。

大河君は無表情に、もたれかかる坊主頭を地面に向けて投げ落とす。坊主頭のみぞおちを突いたらしく、大河君の手には角材が握られていた。

「もう一度言う…真田を放せ」

静かに大河君が喋る。

「嫌だと言っただら？」

赤毛が挑戦的な言葉投げつけて笑う。

大河君は、立ち止まった。

「そつか…だったら、窮屈な生活を送るんだな」

大河君は、微笑した。

その顔は、勝ち誇った笑いにも見えた。

「なんだと…」

「コツチです、お巡りさん達！！ココに友達が居ます！！」

しきりに叫ぶ花君の声と数人の荒いく走りの躍動が聞こえる。

「さあ…もう真田を放さ無くても良いんだ…そのままずっと掴んでる！！じきに、窮屈な生活への扉が開くんだからな！！」

大河君は、今まで見た事も無い全てを見下す様な冷酷でゾツとするような笑みを浮かべ、赤毛に向けて言葉を吐き捨てた。

「テメエ！！」

赤毛が叫ぶ。

「コイツ、絶対ぶつ殺してやる！！」歯抜け男が拳を震わせ熱り立つ。

「ほら…殴れよ」

大河君が、笑いながら手招きした。

どんどん僕の耳に、花君の声と走る振動が伝わってくる。

「タケシを起こせ！！」

赤毛が、怒りに震えながら言った。

「遼！！」

「うるせえ！！捕まりてえのか？？」

モヒカンと金髪が、坊主頭に近付いて引きずり起こした。

僕の目に花君の姿が映った。

「お前らぜってえ殺すからな！！」

そう言うつと赤毛達が後ろを向く。

僕は、逃げようとするす赤毛の足元に飛び付いた。

「は…放せ！！コラア！！」

僕の顔面に再び痛みが走った。

「こはっ…時計…返せ…よ」

「うるせえんだよテメエ！！おい、テメエら助けろよ！！逃げんな
！！」

赤毛が逃げていく仲間に向かって怒声を浴びせた。

そして、完全に冷静さを失った赤毛は何発も僕の顔面を蹴った。

口の中に、生臭い鉄の味が充満する。

しかし、僕は放さない。

歯や鼻が折れても構わないと思った。

「返せ……の……」

「おつ、欧介君……」

「真田……」

朦朧とする意識の中で数人の大人の声と花君と大河君の声が聞こえた。

「わっ分かった……返す……返すから放せ……放してくれ……」

僕の真横に時計等の山下君の持ち物が散乱した。

僕は、赤毛を掴む手を離れた。

赤毛は、全速力で逃げていった。

「お前ら止まれ……」

二人の警官が叫びながら僕を通り越して駆け抜けていく。

「君、大丈夫か？」

年輩の警官が僕の顔を覗き込む。

「だ…いじょ…びです」

「こりゃ酷いな…。すぐに救急車呼ぶからな」

そう言つと、年輩警官は出口に走っていった。

花君と大河君が近寄ってくる。

「お、欧介君」

花君は声を震わせて蒼白な顔で僕を見ている。

「真田！…しっかりするんだ」僕に向けられている、大河君の暖かい目を見ていたら緊張の糸が切れ体がブルブル震えて涙が溢れた。

「ゴホゴホツ…これ…中村君…助か…るかな？ぼく…を…信じて…くれる…かな？」

「しゃべるな…」

「山下…君…本当の…事…話してくれ…るかな？」

「黙つてろ…！」

大河君が真剣な顔をして僕に言った。

「これを…山下君に…わた…して…」

僕は、今ある力を振り絞つて大河君に時計を手渡した。

「中村君…を…おねが…い…」

直接、僕は何も聞こえなくなり痛さも苦しさも忘れ、安らかでとても深い闇の底へと吸い込まれるように落ちていった。

三ヶ所目 8（後書き）

朝の通勤や通学中に読んでいただいた読者様：すいません。

少しバイオレンス過ぎました。

感想やご意見をお待ちしております。

三ヶ所目 9（蓮）（前書き）

今回は、蓮の視点で物語が展開します。

三ヶ所目 9（蓮）

ジリリリリリ。

一人暮らしの部屋に、持ち主を起こそうとする目覚まし時計の音が響き渡る。

俺は、バシッと目覚まし時計を叩き付けた。

チンー！

目覚まし時計は怒ったような音を残して沈黙した。

「お前まで俺に説教かよ…」

俺は、そう呟いて布団から出た。

朝の訪れを喜ぶように小鳥がさえずる。

いつもは、（よっしゃー！！今日も楽しく遊びますかー！！）と背伸びをしながら気合いを入れるが、今日はそんな気分になれない。今日、俺は学校で処分を受ける。

偽りの罪によって退学するだろう。

これで、何回目だろうか…人に裏切られるのは。

クラスの男子生徒の顔が浮び上がる。

（まあ…今回はまだ裏切られて無いか…でもじきにアイツも裏切る…。）

自分の皮肉に笑いを浮かべながら冷蔵庫から朝飯を作る為の材料を探す。

冷蔵庫の片隅の置いた、昨日実家から手紙と共に送られてきた大量の鮮魚には目もくれずに。

（開始2週間で家に帰ったら…ミナ何って言うんだろうな…）

目についてしまった鮮魚の山に家の皆の顔が浮かぶ。

（柳さんは、また心配すんだろうな。シゲや太一は、犯人捜しに町を駆け回るんだろうな。母ちゃんは、味噌汁作るのか…？親父は…）

ハア…と、体の奥底からため息が漏れてくる。（このバカがぁ！！お前が決めた道だろうが…男なら自分で決めた道ぐらい最後まで進みやがれ！！）

まだ家に帰ってもないのに親父の怒鳴り声が耳に響く。

（あとアイツもか…）

手を腰に据えて俺を怒る幼馴染みの姿が頭に浮かぶ。

（あゝあ…また修行の日々に逆戻りかよ…。久々に握る練習しとか…）

そう考えると気が重くなった。

俺は、家業を継ぐのが嫌で高校に進む事を決意した。

親父は、高校に行くのを了承する代わりに条件を出した。

高校3年間の間に自分の力で進むべき道を決めると。

そして、実家からの生活支援は一切無し（まあ…二週間しか自力で生活してないし何故か魚は送って来るが…）、自力でバイトをして稼ぎ賄えと言う。

（何なんだ…この世の中って？）

卵をフライパンに入れながら考えた…が、メンドイのですぐに考えるのを止めた。

朝飯を食べ終えて、少しテレビ見る。

「次のニュースです。昨日、東泉区の空き店舗で集団暴行事件が起きました…」

ニュースキャスターが淡々と記事を読み上げる。

「はいはい！！毎日の様に起こってる事件を…いちいち報道すんなや」

俺は、テレビに向かい毒づいたが《東泉区》と単語が頭に引っ掛かった。

隣町でもあるし、昨日の真田の様子を思い出したからだ。

（アイツ…？まさかな…）

真田欧介の顔が頭に過る。

（僕の事信じてよ！！）

アイツは俺の胸元をガツシリと掴み真剣な顔と真っ直ぐな目で俺の目を見る。

「うるせえよ…何も知らないくせに…」

俺は、真っ白な天井に向かい言葉を吐き捨てて寝巻きを脱いだ。

短ランをハンガーから外して椅子に投げる。

「最後までい学章を付けてやるか…」

タンスの引き出しの、家の合いカギや通帳が入った段の中を探ると奥の方に目的の物を見つけた。

指を伸ばして掴み引き上げると古びたお守りが一緒に出てきた。

「嫌な物を出しちまったぜ…」

今は消え失せた幼い日の友情の残骸を見つけてしまった。

脳裏に蘇る幸せな時間。

「これあげる…だからずっと友達だよ」

名前を忘れてしまった女の子が、ニコニコと微笑み俺にお守りを手渡す。

「何これ？」

俺は照れながら聞いた。

「友達の証だよ。大河君もハイツ」

「ありがとう」大河も優しく笑っている。

「短い間だったけど遊んでくれてありがとう…。いつか絶対帰ってくるから…忘れないでね…」

次の日、女の子は去っていった。

そして、俺と大河の友情も消えた。

最後に残ったのは、思い出の公園に広がる大河が切り刻んだアイツのお守りと消したい記憶だった。

「あんなに一緒に笑い合ってたのに…約束したのに…」

「蓮…違うんだよ…僕じゃ…」

涙を流す俺に、大河は手にカッターを持ちながら弁解する。

「お前しかいないだろ…」

何より、手にカッターを持っている事が犯人を示していた。

「待って…僕じゃ…」

「お前なんて友達じゃねえ!!」

俺と大河は、それ以来疎遠となった。

俺は、友達を作るのが怖くなった。

しかし、まだ微かに人を信じる気持ちは残っていた。自分が仲間を大切にすれば大丈夫だと思い、中学では仲間を作ろうと必死に頑張った。

注目を浴びるために髪も真っ赤に染めた。

結果的に裕福な家柄も手伝ってか仲間は沢山出来た。

だが…中学でも…。

それ以来、どうせ裏切られるという思いが俺を孤独にした。

周りのヤツの態度は全て偽りや偽善だと感じるようになった。

俺は、回想を止めてお守りを元の場所戻す。

（あの女の子は、何処にいるんだろ…ホントに帰ってくんのか？）

そんな、考えが浮かんだが頭を振って強引に消した。

（あんな口約束を信じんなよ…）

そう自分に言い聞かせて短ランを着る。

最後の登校をする為に愛用の原付に跨って何度もフカす。

排気音と共に朝までのモヤついた気分を吐き出して学校に向かう。

通学の途中、楽しそうに話ながら歩く聖蘭の学生を何組も追い抜いた。

みたらしを握って俺に笑いかける真田の顔が浮かんた。

未練も何も無い筈なのに音を発てて心が軋む。

（ツレなんて要らねえって決めただろお！！）

俺は、真田の幻影を振り切るようにスロットルを開いてスピードをあげた。

学校にそのまま原付に乗りつけると校門付近にいた学生達が俺に注目して目があった。

俺は学生達にガンを飛ばして校門をくぐり抜ける。

その時、誰かが俺に駆け寄ってくる気配がした。

振り向くと駆け寄って来たのは、同じ聖蘭に通う幼馴染みの柚夏ユズカが立っていた。

「蓮…退学するの？」

いつも元気いっばいで学校で会う度に俺を叱るユズが今日は震えている。

「多分な」

「問題起こしたの…蓮じゃないんでしょ？」

「ああ」

「何だよー!!」

今まで必死に堪えていたのか、ユズの瞳から大粒の涙が溢れた。

「何で…ミナに何も言わないのよ」

何言っても無駄だろう。と言いかけたが止めておいた。
校舎に入ろうとするとユズが俺の手を掴む。

「何でいつも蓮だけ…アタシ嫌だ…行かないで…」

ショート髪と肩を小さく震わせてユズが泣き出した。

俺は、泣いているユズを見ていられず手を振り切った。

（お前なら俺の分まで高校生活を楽しむって…）

心の中でそう呟いて、指導室に向かった。

指導室に入ると、担任が席に座ってくれと言い椅子を指差した。

俺は最後になるであろう学校の景色や匂いを噛み締めた。

やがて、校長や生徒指導部長（教室での俺と大河の一件を止めた無精ヒゲ）が入ってきた。

そして、俺の処分についての話がタラダラと続く。

校長がゆっくりと俺を見た。

深い悲しみ帯た瞳で俺を見る。

俺は、その哀れむ様な目が気に食わなくて派手に音を発てて立ち上がった。

「こんな学校なあ俺から」

「失礼します」

俺の怒りの叫びは、突然の来客によって無惨に中断された。

ドアを開けた奴を見ると、大河と俺を犯人呼ばわりしたヤツだった。

大河は、ごく自然に指導室に入ってきた。

「なつ、何ですか？君達は！！」

教頭が、ビックリした様子で叫んだ。

「すみません。彼が少しお話を聞いて貰いたいらしくて」

大河は凛々しい顔で一礼し、もう一人の男を紹介した。

「今回の被害者である山下君です」

オドオドと紹介された男が頭を下げる。

この瞬間から俺の目の前で、俺には予想も出来なかった事が急速に動き出していった。

三ヶ所目 10（大河）（前書き）

今回は大河の視点です。

事件編の終わりが秒読みに入りました。

今回も長くなってしまいました。

ご了承下さい。

三ヶ所目 10（大河）

「おはようございます。大河様」

もう還暦も近いであろう執事長の清水が俺に一礼し、車のドアを開ける。

「おはよう」

俺は、機械的に言葉を返して車に乗り込んだ。

ゆっくりと車のドアを閉めると清水がすばやく運転席に潜り込む。

「では、発車致します」

音も無く車は動き出した。

俺は、毎日車で送ってもらうが別に楽しみたい訳じゃない。

父親の言いつけだからだ。毎日毎日、仮面の笑顔を張り付けたような執事や女中に囲まれ生活している。

家族は、皆外国を飛び回っているので居ない。

別に、家に帰ってきてても話す事は何も無いので帰ってこなくても良いと思っている。

特に兄は。

高校裏の駐車場に着くまでの時間、窓から過ぎ去る景色を眺めるのが朝の日課だ。

しかし、今日はやらなければならない事がある。

山下という名の学生を聖蘭まで連れて来なければならない。

今は、病院のベットに居るであろう真田欧介に頼まれたからだ。

俺は、真田の様な人間を見たのは初めてだ。

ただ一人でクラスの陰湿な雰囲気跳ね返し、自分の事を省みず他人を助ける事が出来る人間…。

そんな人間は美談の中の存在だと思っていた。

「大河よ、私達の一族以外の人間で価値の有る人間は少ない。余計な人間とは付き合わずに切り捨てろ。そして価値の有る人間とだけ付き合うのだ」

物心ついた時からの父親の教えが今も頭に染み付いている。

（真田は価値の有る人間なのか？）

ここ最近、その問いが頭に浮かんで離れない。

かつて、俺は価値があると思った人間が二人居た。

高校で偶然再会した中村と森島だ。

この二人は、俺に友の暖かさや安らぎを教えてくれた。

二人と居ると本当の自分でいられる気がした。

しかし、やはり価値は無かった。

中村も他の人間と同じだった。

幼かった日の光景が広がる…。

あの日、俺は目の前に広がった事を受け入れられず呆然と立ち尽くした。

不意に落ちているカッターに見覚えを感じて拾った。

背後で音がして振り向くと、後ろに目を見開いて中村が立っていた。

「蓮…僕じゃないんだ…」

俺は、必死に無実を訴えたが中村は信じなかった。

その日を境に心の何かが崩壊し善い人間を演じるようになった。

他人に対して優しく健全な人間を演じる日々。しかし内面では、他の人間は自分の価値を高める為の踏み台にしか感じなくなっていた。

だが、今俺は真田との約束を果たそうとしている。

何故なのかは分からないが、真田と知り合ってから自分が少しずつ変わってきている気がする。

中村の事件を調べたり、自分から森島に授業を抜け出そうと提案をした。

しかし、不思議と悪い気分はしない。

むしろ楽しい？

「大河様：今日は楽しそうでございますね」
窓を見ながら思案を巡らしていると清水が声をかけた。

「そうか？」

俺は、自然に微笑む。

「私も嬉しゅうございます」

清水の声がいつもより弾んでいる。

「三津高に向かってくれ」

「かしこまりました」

清水は嬉しそうに言葉を返した。

三津高に着くと校門に一人の男が立っていた。
俺の姿を確認したらしく走ってコッチに向かってくる。

やがて、俺が立つ位置までやってきた。

「春日君、久しぶり。」

同じ中学だが名字しか覚え出せない男子学生が顔を輝かせて言った。

「うん」

俺は、面倒に感じたが一応笑いかけた。

「で、山下君はどこ？」

「コツチに居るよ」

学生は、俺を案内した。

「君が山下君？」

俺の目の前に気の弱そうな学生がいる。

「えっ？あなたは？」山下は、俺に疑惑の視線を投げる。

「俺は、真田の代理の春日です」

「えっ…あっ…」

山下が俺から逃げようとしたので、逃げられないようにガッチリと学ランを掴む。

「これ忘れ物」

反対の手で時計や財布等の盗まれた物を手渡した。

「僕の時計!!」

「真田が取り返したんだ。一緒に聖蘭まで来て真実を話してくれ!!」

俺は、山下に有無を言わせない様に強い口調で言った。

「えっ…あっ…あ」

山下は、顔を動かさずに目を素早く左右に動かした。

逃げる方法を考えているように見えた。

「もし来ないなら、君は盗みをした奴らと何ら変わらなくなるが…
良いのか？」

俺の言葉に動揺したのか山下の呼吸が荒くなった。

「僕は…」

そう言いながらうつつ向いた後、

「分かりました」

静かに山下が呟いた。

俺と山下は急いで聖蘭に向かった。

時計は、すでに8時40分を過ぎている。

十数分後、聖蘭に着いた。

校門に入ると見覚えのある女が蹲って泣いているのが見えたが気にしている余裕がなく通り過ぎた。

通り過ぎる一瞬、蹲る女子が俺の事を見ている様な感じがしたが気にとめなかった。

俺達は、迷わず指導室に向かう。

山下は聖蘭の校舎の中を物珍しそうに見ながらフラフラと歩いている。

やがて指導室に着いた。

中から教師の声が聞こえるので、中村の処分が始まっているらしい。

「ちゃんと言えるか…緊張します…」

山下が時計に目を落としながら呟いた。

「自信を持って話してくれば良いよ。あと…ここまで来てくれてありがとう」

俺は、山下を安心させる為に笑顔を作った。

「では…行こうか」

「はっ、はい」

ドアを開くと同時にガタンとイスが倒れる様な音が聞こえた。

教室の真ん中に中村が立っていた。

俺は、とりあえず一礼して教室入る。

教頭が、突然入ってきた俺達に向かい叫ぶ。

俺は教室の流れを支配する為、冷静な雰囲気を滲ませてゆっくりと山下を紹介した。

「てめえら！！冷やかにきたのか？」

中村が意味不明な怒声を飛ばした。

俺はイラッとしたが、とりあえず目の前のバカを放っておき山下に発言を促した。

「ぼつ、僕は三津高に通っている山下です。今日は、大事な話をす為に聖蘭に来ました」

「ほお…何かな？話したい事とは？」校長が楽しそうな視線を山下に注ぎながら言った。

「しかし、校長！！」

「まあまあ…教頭。ここは話を聞きましょうよ」

顎ヒゲの教師がポリポリと頭を掻きながら教頭に言った。

教頭は、ぶつぶつ言いながら椅子に座る。

「ほら…中村も席に座りなさい」

「ちい!!」

担任のなだめる様な口調に従って中村も座った。

「では、続けなさい」

校長がニツコリと微笑み山下に話を促す。

「はい…。言いたい事と言うのは…ここに座っている中村君は…犯人では無いと言う事です」

言い終わると山下は、大きく息を吐いた。

山下の告白に担任と教頭は目を見開いた。

ただ、校長と顎ヒゲ教師だけは動じず静かにコチラを見てる。

突然教頭が椅子をガチャつかせて立ち上がった。

「なつなな、何を言い出すんだ君は? いったいどうして分かるんだ?」

山下を指差した教頭の手は小刻に震えていた。

「それは…」

山下が拳を握った。

「僕が…時計を恐喝された被害者なんです!!」

教頭が指差していた手をダラリと机に落とした。

「それは本当の事かな？」

校長が静かに喋った。

「はい。僕はあの日、中村君を犯人だと言いました。しかし、僕は初めから中村が犯人では無いと知っていたんです…でも本当の事を話したらお前をリンチするって犯人グループに言われて…それで中村君に罪を着せて…犯人に仕立てあげたんです!!ごめんなさい…本当にごめんなさい」

山下は、声を大にして叫んだ。

そして、膝から崩れ落ちた。

多分、今の告白は外の廊下まで聞こえただろう。

俺は、4組の誰かが偶然聞いてくれた事を願った。

「つまり…中村君は犯人では無いと？」

校長が微笑みながら山下聞いた。

校長の笑顔から暖かさが滲み出ていた。

「はい…そうです…」

「その言葉を警察でも伝えてくれるかい？」

言葉と共に顎ヒゲ教師が男臭い笑顔を浮かべるて笑う。

「はい…話します…」

「では…中村蓮に対する処分は意味を無くしたのう。あとは中村君の意志じゃな…」

そう言う校長が中村に歩み寄った。

「我々が君を退学させる理由は無くなったが…どうする？」

校長は、中村に処分の内容が書かれた書類を手渡した。

「俺は…」

中村は、俺に恩を着せられたと感じているらしく俺を強く睨みつけた。

（意地張るなよ…バカが）

俺は、中村を鼻で笑った。

「友の助けや勇気ある告白を踏みにじるなら…」

「ツレじゃねよ…。それにそんな言い方しなくても学校辞めねえよ！！」

中村は、ビリビリと書類を破り捨てる。

「中村くちゃんと掃除しろよ!!」

顎ヒゲ教師がそう言って笑った。

「俺かよ!!」

（真田：お前の願いはこれで達成出来たか？）

目の前に広がる穏やかな光景を見て俺の心の碎けた部分が少しだけ直った気がした。

（真田も笑うだろうな：いつものあの笑顔で）

そんな事を思うと演技では無い本当の笑顔で俺も笑えた。

指導室から出て、山下を校門まで送ろうと歩いていると中村が後ろから走ってきた。

「お前!!どうゆうつもりだ？」

中村は指導室の中と同じように俺を睨む。

「何が？」

「何で俺を助けたんだ？」

俺は、説明に面倒臭さを感じたが説明する事にした。

「真田との約束を果たしたまでだ」

言い終えると、俺は中村から目を反らす。

「真田が…？」

「そうだ。お前を助ける為に犯人グループに接触したんだよ」

「まさかニユースの…アイツどこに居んだよ？」

中村が俺の肩を掴んで語気を強めた。

「泉総合病院だ」

中村の目を見て伝えた。

「てめえ！！先にそれ言えよ！！」

「お前が説明しろって言ったんだろ？」

俺は肩をすくめた。

「何処だよ？泉総合病院って？」

中村が、愚痴を溢しながら携帯をイジリ出したので仕方無く、

「案内しようか？」

そう提案した。

「お前にだけは貸しを作りたく無いんだよ」

中村は、俺を見る事無く言った。

「じゃあ…僕を病院に連れて行って下さい」

山下がボソツと呟く。

「ああ。では行こうか」

俺と山下は、中村を残して歩き出した。

「おい待てよ!!」

中村がまた後を追って来た。

「まだ何か用か？」

俺が振り向くと中村は腕を組んでいた。

「仕方無いから案内してもらおう…」

「はあ？」

「だからお前が、どうしても俺を連れていきたいって言うのなら一緒に行ってやる」

相変わらず素直じゃ無いな…と思い俺は笑う。

「別に連れて行きたく無いが…仕方無いから連れて行ってやる」

「そうそうそれで良いんだ…ってデメエ!!」

「黙って付いて来い」

俺は、少しだけ昔に戻れた様な感覚を感じながら真田が居る病院に向かった。

三ヶ所目 10（大河）（後書き）

いかがでしたが大河編は？

大河の性格が、上手く表現出来たか心配です。

ご指導や御感想をお待ちしております。

三ヶ所目 ラスト（前書き）

今回もボリュームがあります。

御了承下さい。

三ヶ所目 ラスト

目を覚ますと、僕は家の自分の部屋に居てベッドに寝転がっていた。
あんなに殴られたのに体のどの部分も痛くない。

不思議に思っ て自分の顔の状態を見ようと手鏡を覗き見ると陰気な男のしかめっ面が鏡に映った。

「はいつ？誰？」

僕は驚きの余り手鏡をベッドに投げる。

（まだ体が本調子じゃ無いんだ…多分）

そう思い気分転換に外の空気を吸おうとカーテンを開けると、また陰気な男が映っていた。「だから…誰これ？」

僕は無意識にそう呟いたが何故か見覚えがあった。

窓に映る陰気な男をじつと見ると、やがて正体に気づいた。

僕はそのまま床に崩れ落ちる様に座る。

「戻ってる…修正前の僕に戻ってる…何で？」

意味不明な現象にショックを受け、途方に暮れて独り言を呟いていたら部屋のドアが勢い良く開いた。

「久しぶりい」

薄いローブを身に纏った艶めかしい女の人が色っぽく笑いながら部屋に入ってくる。

「えっ…あなた誰？」

僕の記憶の中の何処の引き出しを開けても目の前の女性に関する情報は無かった。

「あんた相変わらず失礼な子ね!!」

女性は、腰に手を置いてプクリと頬を膨らました。

「ローズマリーのお姉様よん」

女性は、僕に向かってパチリとウィンクする。

「ローズマリー？ローズマ……あっ、あの時の怪しいおば…」

「ん〜と、何か聞こえたな〜。怪しいおば……何？」

女性は、ニコやかな笑みを浮かべながら両拳をバキバキと鳴らす。

「あっあわ…そんな事より…」

「そんな事で終わらしちゃダメよ〜男なら最後まで言いなさい…怪しい何なの？」

女性の拳は途絶える事無くバキバキと音を出し続けている。

「ローズマリーの綺麗なお姉さまです…」

僕は、声を震わせて女性に言った。

「もおゝ正直な子ね！！照れちゃうわ」

僕の言葉に満足したらしく女性は手を顔の前に持っていてって照れたポーズをとった。

「で…何で僕の顔が戻ってるんです？」

「あゝそれね。残念だけどアンタ死んだわよ」

女性は、あっけらかんと言った。

「えゝっ…死んだ…」

僕は、ポカーンとだらしなく口を開けてしまった。

（死んだ…僕死んだの？まだ大人の一段も階段登って無いのに…）

蒼ちゃんの顔が浮かぶ。

（あゝああ…蒼ちゃんとあんな事や…）

「はいはい。嘘なんだからその辺で妄想やめな」

女性は、苦笑を浮かべて僕に言う。

「えっ…嘘…?」

「そうよん!!御盛んだわねこのスケベチャンプ」

「変な事言わないで下さいよ!!」

妄想していた事がバレていたので、ものすごく恥ずかしい気分になった。

「それで…アンタまだ続けるの?」

「えっ…」

女性が急に真面目な顔で話を切り出したのでビックリした。

「まだ…修正するの?」

「そりやしますよ」

まだ、学校が始まって二週間だし友達も出来たし、蒼ちゃんと学級委員に成れたんだから辞める訳が無い。

「そう…。前にも言ったけどあんた自身や大切な人が不幸になる可能性もあるのよ…」

「そうかもしれないけど…。僕、今とても楽しいんです。まだ二週間だけど、前の高校生活よりずっと楽しい…」。

好きな子と一緒に空気を吸って生活出来るのも…それに、まだ知らない人との出会いがあると思うとワクワクするんです」

僕の本心を包み隠さずそのまま女性に伝えた。

女性は、はあ…と溜め息をついた後で僕の頭に手を置いた。

「あやわああなあ…」

近くで見ると薄いローブ越しに女性の体のラインが、ハッキリと分かったので僕はドキドキして意味不明な言葉を吐いてしまった。

「アンタその言葉…忘れんじゃないわよ!!」

その言葉を聞いた瞬間、僕の周りが真っ白になった。そして、真っ白な液体に包み込まれるような感覚を覚えた。

目を覚ますと天井に付いた染みが目に入った。

僕の鼻は、ガーゼで塞がっているらしく呼吸がままならない。

周りの様子から病院に居るらしい。

母さんが、僕のベット横でタオルを畳んでいた。

「母さん…」

僕は母さんに声をかけた。

すると、ゆつくりコツチを見た。

「あらお寝坊さん。お目覚め？」

母さんは、少し潤んだ目で笑った。

母さんの笑顔を見たら母の笑いつて暖かいな…なんて思った。

「今日は…何曜日？」

「金曜日よ…。アンタよく寝たわねえ」

金曜日という単語を聞いて、中村君の顔が浮かんた。

「ゴメン…心配した？」

「全然。アンタはこんな事じゃ死なないわよ」

「酷いな…心配してよ」僕は、少し苦笑してしまう。

夕焼けが差し込む部屋に母さんがタオルを畳む音だけが響く。

「じゃあ…お父さんに電話してくるわね」

そう言つと母さんは、立ち上がった。

僕も、ゆつくりと起き上り棚の上から携帯を取ろうと手を伸ばす。

そんな僕を見かねたのか、母さんが棚から携帯を取って僕に手渡し

た。

「毎日友達がお見舞いに来てたわよ…電話してあげたら？」

そう言つて母さんが優しく笑う。

「そうするよ」

僕は、着信履歴から花君に電話を掛けた。

（夕方だから授業中つて事は無いよな…）

そんな事を考えていたら花君の声が携帯から聞こえた。

「もしもし」

「あつ…真田欧介です…」

「欧介君！！気がついたの？」

「あ…うん。お陰さまで」

「良かったあゝ」

「ゴメンね。毎日お見舞いに来てくれたのに…」

「えっ…良いよーそんな事。それより今からそっち行つて良い？」

「えっ…もう遅くない？」

「気にしない気にしない…」

そう言つと花君の声はブツツという音と共に消えた。

僕は、花君が来るまで寝ていようと思い、ベットにもたれた。

寝転がったのも束の間、病室のドアがコンコンとノックされた。

（医者の人かな？もしかして尿の時間とか！！）

「どうじょ……」

在らぬ考えが浮かんでつい噛んでしまった。

「じゃーん！！欧介君元気？」

現れたのは看護婦では無く花君だった。

花君は、いつもの笑顔でドアからぴよこんと顔を出している。

「花君！！」

「ビックリした？」

花君は、悪戯っぽく笑う。

「うん…びっくりだよ」

「ちょうど欧介君から電話貰った時、病院に着いてたんだ」

（だから電話口が騒がしかったのね…）

そんな事を思っていると、また誰かが病室に入ってきた。

入って来たのは、大河君だった。

「やあ真田。気分は？」

大河君が僕を殴った赤毛と同じフリーズを喋ったので身が強張ったが、大河君の僕に対する目は暖かいモノだった。

「良いかな」

「そうか…」

僕は、一番気になっていた事を聞く事にした。

「あの…中村君は？」

「アイツは退学にならずにすんだ」

そう言って大河君が微笑する。

「良かった…」

僕は安堵感でベットでグイと伸びをした。

「ありがとう大河君、花君…」

「中村を助けたのはお前だよ…真田」

「うん。そうだよ欧介君!!」

「いやいや僕は…」

「お前に森島も俺も動かされたんだ…もちろん山下も…だからお前が居なかったら中村は助けられなかった」

「いや…そんな…」

大河君からそんな言葉を聞けるとは思ってたのですごく照れた。

「実は、もう一人来てるんだ」

突然花君が僕の耳元で囁いた。

「えっ？」

僕は、中村君が入ってくると予想したが僕の予想は大きく外れた。

蒼ちゃんが緊張した面持ちで部屋に入ってくる。

「あ…おいちゃん？」

予想外の来客に心臓が激しく暴れる。

「欧介君、こんにちは」

蒼ちゃんが、頭をペコリと下げた。

「こっこんちゃわ」

（何言つてんだ僕？）

僕はドキドキを隠せずシーツをグツと掴んだ。

「じゃあ後は若い人に任せますか！！」

ドギマギしている僕を知ってか知らぬか分からないが花君が元気よく言った。

（いきなり何言い出すの花君！！）

「じゃあまたね！！欧介君」

花君がニコニコして手を振って出て行く。

大河君も後に続く様に歩き出した。

「真田またな」

そう言うつとドアを開けた。

出ていく直前に大河君がコツチを振り向いた。

「真田が紳士なのを祈るよ…」

大河君は、軽く笑いを残して出ていった。

（大河君まで、どうしちゃったんだよ…）

二人に善行（？）によって妙な雰囲気になった病室に僕と蒼ちゃんだけが取り残された。

蒼ちゃんのが照れた様にうつ向く姿を見ていたら更にドキドキしてきた。

（えっと…会話…会話…）

会話と言う単語が頭の中をグルグルと周るだけで言葉が何も出てこない。

妙な雰囲気になえかねたのか蒼ちゃんが立ち上がった。

「あの…林檎でも剥きましようか？」蒼ちゃんが照れ笑いを浮かべて僕に聞く。

「あつ…お願いします」

僕も照れ笑いしか返せ無かった。

「じゃあ、まず手を洗いますね」

そう言うと、蒼ちゃんが病室の洗面台に向かった。

蒼ちゃんが手を洗っている間に僕は棚から林檎を取って深呼吸を何回もする。

（よし…落ち着いて…）

蒼ちゃんが戻って来た時には、ドキドキが少し落ちついていた。

「この椅子に座ってね」

「はい」

蒼ちゃんは、椅子に座って林檎を剥き始める。

僕は、蒼ちゃんの林檎を剥く姿に釘付けになった。

優しい目をして林檎を剥き、林檎を掴む手はとても綺麗だった。

ボーッと蒼ちゃんの小さな口を見ていたら目が合ってしまった。

また僕の心臓が暴れて脈が早くなる。

「あつ…ゴメンね…私林檎剥くのヘタかな？」

蒼ちゃんが少し歪に剥かれた林檎を切りながら照れた。

「そんな事無いよ…僕は」

（僕は蒼ちゃんに見とれちゃって…）

そんな気の利いたセリフを言おうとしたが、口はピッタリと閉じたままだった。

「はい、お待ちです」

そう言う僕に林檎を一切れ手渡した。

「ありがとう…」

蒼ちゃんの剥いてくれた林檎はいつもよりも甘く感じた。

林檎をシャリシャリと食べる僕の姿を蒼ちゃんはジッと見ている。

蒼ちゃんの円らな瞳に見つめられていると思うと甘かった林檎の味が途中から解らなくなった。

「良かった…欧介君が元気そうで」

「あ…うん」

「でも痛そうだね…」

そう言いながら蒼ちゃんは僕の顔を触る。

蒼ちゃんの手からは柑橘類の香水の香りがした。

（蒼ちゃんが近くに…）

近くで、じっと見つめられると共に蒼ちゃんが僕の顔の傷を優しく撫でたので興奮してしまった。

僕は、目の前に座る蒼ちゃんを無性に抱き締めたくなったが…我慢した。

「私心配したんですよ…先生から欧介君の事聞いた時」

「ゴメンね…」

「でも良いんです！！欧介君の元気な顔が見れたんだから」

そう言うと椅子から立ち上がった。

「そろそろ帰りますね。学校には何時頃来れるんですか？」

「あと二日ぐらいだから週明けには行けると思うよ。ゴメンね……今週は学級委員の仕事を蒼ちゃんに押し付けちゃって……」

「気にしないで。月曜日に元気な姿を見せてね」

そう言うと蒼ちゃんは笑いながら手を小さく振って部屋から出ていった。

僕は小さく溜め息をついて今の今まで味わっていた幸せな時間の余韻を噛み締めた。

（早く学校行きたい……もっと長い時間を皆と過ごしたいな）

そんな事を思うと自然に笑ってしまう。

ロープの女性が言った言葉が頭に引つ掛かっていたが、何故か僕はこれからの学校生活がとても楽しくなる予感がした。

やがて母さんが林檎を持って病室に戻って来た。

（母さんと蒼ちゃんの林檎どっちが美味しいかな？）

そんな事を考えていたら、また笑ってしまった。

三ヶ所目 ラスト（後書き）

今回で三ヶ所目（事件編）が終わりました。

ひとまず主要キャラの絡んだ大波を越える事が出来ました。

三ヶ所目の流れは恋愛じゃない話が多いので批判が来るかと心配しましたが…読者様からは暖かい目で見て頂けました。

ありがとうございました。

次の話を書いたら、これまでの話で溜っている誤字脱字修正をしたいと思います。

ここまでの感想や御指摘をして頂けると大変嬉しいです。

お願いします。

シェイクシェイク 2

「じゃ、行つてきまゝす!!」

元気良くドアを開けて外の空気を吸う。

今朝の外の空気は、何だか良い匂いがした。

週が明けた月曜日、やっと僕は学校に行く事が出来る。

まだ顔の傷跡やガーゼが付いているが大分痛みも退いてきた。

（何か：一週間振りの学校つてドキドキするな）

そんな事を思いながらバス停に向かった。

バス停で立っていると誰かが僕の肩を叩いた。
振り向くと意外な人が立っていた。

山下君が、モジモジした様子で僕を見ている。

「久しぶり!! 元気？」

僕は、少し傷が残る顔で出来る精一杯の笑顔を作った。

すると、僕の顔で表された笑顔が余程恐ろしかったのか山下君が怯えたような顔をした。

「許して!!」

「えっ…許してるよ…」

「嘘だ…だったら何でそんな恐ろしい顔するの？」

「あの…僕は今笑ってるんだけど…」

「うっ、嘘だ!!」

山下君が叫んだ時、バスが来るのが見えた。

「あ…バスだ。じゃあね山下君!! 時計大事にしてね…今度は渡しちゃダメだよ」

僕は、小さな笑顔を浮かべる。

プスウーという空気が抜ける音がして、バスがバス停に着いた。

「あの…ありがとう!! 本当にありがとう!! でも…色々とゴメン」

「だから、気にしてないって!!」

僕は、山下君に手を振ってバスに乗り込んだ。

やがてプウーという音と共にドア閉めてバスは発車した。

山下君の姿が次第に小さくなっていき、やがて消えた。

僕は、バスの座席に座りながら山下君のこれからに幸が有る事を祈った。

学校に着き四組に向かう。

しかし、階段を上がる度に心拍数が10上昇する気がする。

（何で…一週間振りの学校ってこんな緊張するんだろ…）

僕は、緊張のせいか強い尿意を感じ落ち着く意味も兼ねてトイレに向かう。

用をたしていると幸福感に満ちた。

（あゝあ…トイレって良いっすね…！）

一人で悦に入っていると、トイレに誰かの叫び声が木霊した。

「お、欧介君だあ…！欧介くうーん」

花君は、飛びっきりの笑顔を浮かべて僕に抱き付こうと走ってくる。

僕は、まだ勢い良く用をたしてる最中だ。

（もし抱き付かれたら…）

「花君ダメだよ…！花君止まって…！お願い…NOオオオ…！！」

僕の絶叫がトイレに木霊した。数分後、僕達二人はトイレから出た。

花君は、まだクスクスと笑っている。

「良かった〜欧介君が学校に来てくれて！！やっぱり欧介君と居ると面白いやあ」

そう言つて再び腹を押さえて笑い出す。

「は…ははっ、楽しんでもらえて良かった…」

（花君：君のお陰で朝から危つい状況に成りかけるといふ貴重な体験が出来ましたよ！！）

僕の思いを知るよしも無く花君は楽しそうに笑い続けている。教室に入ると僕の姿に中に居たクラスメートが注目した。

（まだ…みんな中村君を疑つてんのかな？）

僕の頭に、そんな疑問符がチラついたが、すぐに消えた。

数人と男女が僕に謝りに来てくれたのだ。

「真田君に辛い態度とつてごめんなさい…」

「真田ゴメンな…」

彼等は口々に、申し訳なさそうに謝罪の言葉を溢す。

僕は、その言葉だけで十分だった。

やがて、大河君と蒼ちゃんが登校して来た。大河君は軽く微笑んでくれて、蒼ちゃんは僕の席まで来てくれた。

「欧介君おはようございます。今日から、また学級委員と一緒に頑張ろうね」

「おはよう蒼ちゃん。あの…病院に来てくれてありがとね…すごく嬉しかったよ」

僕は、少し恥ずかしかったが本音を漏らす。

「そんな…学級委員の仕事として当然の事です」

（学級委員の仕事…!）

蒼ちゃんの言葉を聞いて僕の心に稲妻が走った。

（そうか…僕の見舞いに来たのは学級委員の仕事の一つだったんだ。だから、花君や大河君も一緒に来たと…。確に…もし僕に気が有るなら一人で来るよな…）

「あの…大丈夫？どつか痛むの？」

僕が自惚れていた事を自覚して、口をアワワワと震わせていると蒼ちゃんが心配そうに僕を見た。

「大丈夫だよ…タハハハ…」

（痛いな…僕って…）

口の中で、ほろ苦い何かが充満し朝からの清々しい気分からは想像も出来なかった苦味が僕に訪れる。中村君を助けた勢いで蒼ちゃんと更に親密な関係に成れるかと、密かに期待してた僕は大きく肩を

落とした。

（甘く無いっすね…世の中は？）

青空を流れる雲に問いかけたが、雲は何も答えずフワフワと流れていく。

「おゝい！！朝のSTだあゝ」

担任が肩をトントンと叩きながら教室に入ってきた。

「じゃ…またね」

蒼ちゃんは、曖昧な笑顔を残して自分の席に戻っていった。

「おっ！！真田復活かあゝ」

そう言つて、担任が教卓に配布物を置いた。

「あ…はい。おはようございます」

僕は、ぎこちなく笑う。

「おはよう…じゃなくて起立の号令でしょうが！！」

担任は、いつものように溜め息混じりに喋った。

「あ…すみません！！えっと…起立！！」

号令を掛けた瞬間、教室のドアが勢い良く開いた。

というか、僕には思いっきり叩きつけた様に見えたが。

「セーフ！セーフ！！」

中村君は、手を野球のセーフを表すジェスチャーをしながら駆け込んで来た。

「中村！！お前何度言ったら…」

「明日は、ぜってえー早く来るさ！！」

中村君は、笑いながら先生に手をブラブラと振って自分の席に向かった。

一瞬目が合ったが中村君は何事も無かったかの様に自分の席に着いた。

（中村君とも仲良くなるまでは…遠いな…）

「起立…礼！！」

そんな事を思い僕の学級委員初仕事は終了した。

授業が順調に終わり、花君と昼ご飯を食べる事になり、二人で他愛も無い話をしていると中村君がやって来た。

「やあ中村君。どうしたの？」

僕の問いかけに中村君は、閉じている口を無意味に動かすだけだっ

た。

「何か用かな？」

すると、突然口を開いた。

「…こい」

「えっ、恋？恋の話は…僕苦手かな…恋って難しいよ…」

僕は、蒼ちゃんの顔を浮かべながら言う。

「僕も恋したいな」

僕に感化されたのか、花君もおにぎりを掴みながら言った。

「何お前ら、ぽあーってしてんだ！…ちげえよ！…今日、お前ら二人で泉区二丁目のメトロっていうマンションに来たって言ったんだ！…」

「マンションに？」

「そうだ！…絶対来いよ！…あと、春日にも伝えてくれ」

「分かつ…」

僕達の返事を聞かずに中村君はそそくさと廊下に出ていった。

「マンションで何するんだろうね…」

僕が問掛けても花君は楽しそうにオニギリを頬張るだけだった。

「中村が…分かった」

昼休みの終わりがけに教室に戻ってきた大河君に話すと、意外な程すんなりと承諾してくれた。

僕は、てっきり大河君は来ないって言うと思っていた。

（来たら来たで、二人が揉めないか心配で嫌な汗が出そうだし…）

そんな僕の心配をよそに時間は早送りの様に過ぎた。

気が付くと僕は帰りの挨拶の号令を掛けていた。

帰りの号令を終えた僕は、蒼ちゃんと共に黒板を消しながらクラスの皆が自宅に帰ろうとパラパラと教室を出ていく姿を見てた。

クラスに僕達二人が取り残された時、突然一人の女の子が四組に駆け込んできた。

「真田君…真田欧介君って誰？」

駆け込んで来たショートの髪型をした女の子は、僕の目の前でガランとした教室を見回しながら叫ぶ。

「あれ…もう帰っちゃったかな？」

一頻り叫んだ後で落ち着いたのか、周りの状況を把握出来たのか、
分からないが小さく呟いた。

「欧介君なら、ここに居ますよ」

蒼ちゃんは、女の子に歩み寄り女の子に話しかけた。

「えっ…ありがとう!!」

蒼ちゃんの方を振り向いて礼を言うと、女の子は僕を見た。

元気に輝いていた女の子が表情が、僕を見た途端疑いの眼差しに変
わっていった。

「アンタ…この前バス停で会ったよね？」

「えっ？」

僕は毎日のバス停の出来事を回想する。

（先週は、中村君関係で忙しかったから誰とも会って無いし…。そ
の前は…）

「セクハラ…」

回想中の僕に、微かに女の子の言葉が聞こえる。

（セクハラかぁ…セクハラなんて言われ…セクハラ!!）

僕の忘れかけていた記憶が《セクハラ》という単語によって呼び覚

まされた。

目の前に居るのは、二週間前の夕方のバス停で横入りで揉めたあのショートの女の子だった。

「あの時の女の子だ!!」

「そうよ!!」

女の子が、しかめ面で腕を組んだ。

「まさか…あのセクハラ男だったなんて」

女の子は、ブツブツと呟く。

僕は、蒼ちゃんの目の前でセクハラ呼ばわれたので、イライラしてきた。

「セクハラって呼ぶなよ!!何もしてないだろ」

「まあ…良いわ…」

「良くない!!僕はセクハラじゃ…」

急に女の子との距離が近付いたので、僕はビクツとなる。

次の瞬間、僕の手は暖かくて柔い感覚に包まれた。

僕が、ドキドキして握られた手を見た後、女の子の顔を見ると今の今までしかめ面だった女の子が笑った。

「蓮を助けてくれてありがと！！アンタ勇氣あるね！！セクハラ宣言も撤回する」

そう言いながら僕の手を優しく擦る。

「ひいんです…」

僕は、良いんですと言おうとしたが恥ずかしいやら気持ち良いやらで、上手く言えなかった。

「本当…ありがと」

そう言いながら更に近付いて僕の顔のガーゼや、かさぶたを撫でる。

病室で、蒼ちゃんに触られた時に感じた気持ちよさが蘇った。

（女の子に、優しく顔を撫でられるのって良いね…）

僕は、完全に魅了されてしまった。

「私は蓮の幼馴染みの内海 うつみ 柚夏 ゆずか。ヨロシクね」

そして、女の子は手を顔から離れた。

ドキドキが最高潮に達した僕は無意識に蒼ちゃんの方を振り向いた。

蒼ちゃんは、目の前で起きた事に驚いているようだった。

「じゃあね。蓮と仲良くしてあげてよ」

そう言い残し柚夏ちゃんは四組から出ていった。

僕は、まだ興奮が抑えられず立ち尽くす。

音がしたので振り向くと、蒼ちゃんは何も言わずに黒板消しを持っていた。

沈黙が僕達を支配している。

数秒後、少し興奮が治まったので蒼ちゃんに話しかけた。

「中村君の幼馴染みが聖蘭に居たなんてね。知ってた？」

僕は黒板を消し始めた蒼ちゃんに話しかけたが、蒼ちゃんはまるで反応しない。

僕は、聞こえなかったと思いもう一度話かける。

「中村君の幼馴染み…」

「知りませんでした!!」

蒼ちゃんは、突然ピシャリと言う。

「あ…あつ、そうだね。知らないよね」

僕は、突然言われたのでビックリしてしまった。

蒼ちゃんは、黒板を半分程消して黒板消しを少し強めに置く。

「半分消し終わりましたので帰ります」

蒼ちゃんは、僕の顔を見る事無く言う。

僕は、何故蒼ちゃんの機嫌を損ねたのか解らず挙動不審に陥った。

「あのあ…の蒼ちゃん？」

「ではまたね」

蒼ちゃんは、最後まで僕の顔を見ずに教室から出ていった。

ポツンと僕だけが教室に取り残された。

二人きりで話せる絶好のチャンスが突然潰れたショックや、普段の蒼ちゃんなら絶対手伝ってくれるのに等と考えながら、僕は冷や汗をかき黒板を消していると、花君が教室にやってきた。

「遅いよー欧介君まだ？」

花君は、頬を膨らましりへこましたりしながら言う。

「あ…もう少しだよ…」

「何か元気ないね。どうしたの？」

花君が首を傾げながら僕に聞く。

「別に…何もないよ！…」

僕は詮索されない様、元気に言った。

「なんだ…てつきり楠木さんの事かと…」

「えっ…！」

僕は、楠木と言う単語にビクツとなった。

「えっ…知ってるっていうか…見てたの？」

僕は、半笑いで花君に聞いてしまった。

「いや…全部じゃないよ！！ショートカットの女の子が教室に入つて、楠木さんが出て来るまでかな！！」

花君は、慌てた様子で手をパタパタと振りながら言う。

（それって…一言で全部って言えるよね？）

「女の子に顔を触られたからって、あんなにニヤニヤしたのは厳しいかも…」

「えっ…」

僕は、花君がポツリと呟いた言葉を聞き逃さなかった。

「そんなに僕…ニヤついてた？」

「うん…いや…少し…」

花君は、微妙な笑顔を浮かべて歯切れ悪そうに言った。

（少して…花君、今厳しいって言ってたよね？）

僕は、花君にツツコミを入れる事無く、力が入らない腕で黒板を消した。

黒板を消し終わると、花君が顔をやけに輝かせた。

「さあメトロっていうマンションに行こうよ!!」

元気いっぱいに言うと僕の肩をトントンと叩いた。

僕は、力無く笑いとボトボと教室から出た。

シェイクシェイク 2（後書き）

前回の後書きで、あと一回更新したら過去の修正をすると書きましたが、今回のシェイクシェイク2で書きたい事が入りきりませんでした。

ですので、あともう一回更新します。

訂正をお知らせしました。

シェイクシェイク 3

僕と花君は、バスに乗って泉区一丁目を目指す。

僕の隣で楽しそうに笑う花君を見ながら小さな溜め息をついた。

（蒼ちゃん…何で急に帰ったんだろ…僕がニヤけたから？）

色々な考えが浮かぶ度に心が揺れて、溜め息の数も増えている様に感じる。

僕がバスの座席で一人考え込んでいると花君が心配した様子で話しかけてきた。

「欧介君？さっきから溜め息をばかりだよ…どうしたの？」

「あ…うん、蒼ちゃんが機嫌悪くした理由を考えてたんだ」

僕は、痒くもない頭をポリポリ搔きながら話した。

「気にし過ぎだよ。楠木さんなら明日には絶対機嫌直ってるって。大丈夫だよ！！」

花君は、僕を慰めようとしたのかポンツと肩を優しく叩きながら言った。

「そうかな…」

そう呟いたら急に蒼ちゃんの笑顔が頭に浮かんた。

いつも僕に見せてくれる笑顔が、僕の手から広大な空に向かって離れていった風船の様に感じられて寂しい。

しかしこれ以上悩んだら頭が完全にフリーズすると感じ、明日にはいつも通りの関係だ！そう自分に言い聞かせ考えるのを止めた。

バスの心地好い振動を受けて僕は目を閉じウトウトとして、夢と現世を行き来していたがバスの運転手が渋い声で泉区一丁目を告げたのを聞いて覚醒した。

運良く母さんに連絡していなかった事に気づき《遅くなるから》とメールを打っていると、横に座っている花君が鼻唄混じりに楽しい様子で停車ボタンを押した。

バスが完全に停車して降り口から出ると大河君が足を組みながら待合ベンチに座って本を読んでいた。

「えっ大河君？」

僕は大河君が予想外の場所に居たので驚いた。

「学校ぶり！！大河君早いね」

驚いて立ちつくす僕の後ろから花君が走って大河君に駆け寄っている。

「数十分前に現地到着するのが社会の基本条件だろ。まあ、今回は集合場所も時間も決めて無かったが」

大河君は軽く微笑を浮かべながら読んでいた本を閉じた。

「男の条件があゝ。デートの時には必須ですねえ」

花君は、腕を組んで何度も頷いた。

「そうだな…」

大河君が腕時計に目を向けて呟いた。

「そろそろ時間だ。マンションの場所は俺が知ってるから付いてきてくれ」

大河君は片手に持っている高そうな雰囲気黒い革製の鞆に本をしまい歩き出した。

「出発」

花君は嬉しそうに言って大河君の隣で歩いていく。

学校で見る白のシャツ姿とは違う私服姿の大河君は、今から何処かのパーティーに出席してもおかしくない様な格好をしている。

淡い青色のネクタイを緩めに締めて白と黒のストライプのシャツを黒のタイトなパンツの中に入れている。

そしてさりげなくシャツの袖口にはブランド物のカフスが付いていてGUCCIのバックルと共に電灯の光を受けキラキラ輝いている。

家柄の良さを感じさせ普段から知的な印象の大河君を更に知的に見せていた。

僕は、大河君の隣で歩く事に引け目を感じて数歩後ろに下がって歩いた。

（あーあ…僕も大河君ぐらいカッコ良かったらなあ…そしたらモテモテで…）

神様を恨めしく思い、顔も修正出来ないかな等と考えながら、トボトボと二人の後ろを歩いていると大河君が振り返って僕を見た。

「真田どうかしたか？歩くの遅いぞ」

大河君は、少し心配そうな顔をして僕を見る。

「いや元気…」

「欧介君は楠木さんの事を気にしてるんだよ」

僕が大河君に笑いかけた時、突然花君が僕の言葉を割った。

直後、僕達は無言でその場に立ち尽くした。

横の車道では帰宅の途につく運転手達が制限速度を超えたスピードで駆け抜けていく音が聞こえる。

「楠木の事？」

大河君はキョトンとした様な表情を浮かべて呟く。

「そうなんだー欧介君は…」

「違う違うよ！！花君違うよ！！」

僕は、駆け寄って花君の控え目な口をしっかりと手で押さえた。

これ以上自分の失態が広まるのを恐れたのもあるけど…何より蒼ちやんに気があるとバレる事がとても恥ずかしい。

「さ…なんだ？」

そんな僕達を見ながら大河君が言葉を濁す。

手で閉じられた口でフガフガと花君が僕に向かって何か言ってるが無視して、大河君に気にしないでと苦笑しながら伝えた。

「分かった。では、先に進もうか」

大河君は、軽く笑いながら言って、また歩き出した。

「何するの！！」

花君は、恨めしげな表情を浮かべて僕を睨む。

その表情が、昨日DVDで見たアニメの幼馴染み役の女の子のすねた表情と重なってドキドキする。

「きよ、今日の帰りの出来事は僕達だけで留めて欲しいんだ…」

僕は、ドキドキ感と顔がニヤケそうなのを必死に隠しながら花君に伝えた。

「えっ…うん。良いけど…」

「ありがとう。じゃ出発!!」

僕の脳裏には女の子のすねた顔がこびり付いていて、顔がニヤけるのを堪え切れそうに無かったので早足で花君の元から離れた。

「ちょっと…待ってよ!!」

花君の少し怒った様な声が後ろから聞こえたが僕は振り返らず、とつか振り返らずにニヤケながら早足で歩いた。

大河君に導かれるまま十数分歩き、建物に着いた。

「着いたぞ。この建物が中村の住むマンションらしいが…」

目の前のマンションは3階建てで一階部分はバーが入っていた。

店の屋根から連れ下げれたネオン灯が妖しく光っていて店のドアに文字が彫られている事を際立たせている。

ドアには大きく《METLO》と彫られていた。

「ここだよね…?」

「その筈…」

マンションの前には《メゾン・泉 平成15年施工》と彫られた石碑が立っている。

「でも、マンションの名前が違うような気が…此所ってメトロっていう店だよな？」

僕と大河君が場所を確認しようと携帯を取り出した時、マンションに向かって花君が歩き出した。

「ど、どこ行くの？」

「入って聞いてみれば良いんだよ」

花君はニンマリ笑って答え足を早めた。

「確に…そうだな」

大河君は納得した様に呟いて歩き出した。

僕は、はっきり言ってあんな怪しい店に入りたくなかったが二人の後を渋々ついて行った。

「こんにちは」

花君が、何の躊躇も無くドアを開けたのを見て僕はヘラヘラと笑い、そしてため息を漏らした。

店に入ると、色々な臭いのアロマが混ざりあった臭いがしたが特に嫌な感じでは無かった。

カウンターで頬杖をついて煙草を吹かしているパンク系の男性が僕達に一瞥を投げ掛けたが、すぐ店内の方に視線を戻した。

「すいませ…」

「まだcloseだよ！！帰んなあ」

花君の間掛けを遮り面倒臭そうに答えた。

「いや…店に用は無いんです。此処のマンションってメトロ呼ばれますか？」

大河君が神々しいまでに爽やかな笑顔で聞いた。

「メトロはウチの店だよ…今アンタが立ってるね。上はメゾン泉だ…」

男性はコップをキュッキュッと拭きながら相変わらぬ調子で答えた。

「そうですか…では上のマンションに学生が住んでるか分かります？」

大河君も相変わらず爽やかに聞いた。

「ああ…住んでるよ」

「赤色の髪の毛ですか？」

「そっだよ」

「そうですか…ありがとうございます」

大河君は、軽く頭を下げ、店の出口に向かった。

僕も店から出ようとした時、男性に呼び止められた。

「コッチの方が上への階段に近いよ。裏口から出な」

そう言うとき男性は僕達を手招きした。

男性に導かれるまま裏口へと向かった。

裏口までの道はシートが掛けられた物が散乱していてとても歩きにくかった。

裏口から出して貰った僕達は男性に改めて礼を言った。

「礼なんて良いよ！！それより蓮にヨロシク」

そう言うとき男性はドアを閉めた。

ドアには大きくTwinと彫られていた。

「親切な人だったね、見た目は怖いけど」

「そっだね」

（twin? いったい店の名前は何個あるんだろ?）

そんな事を考えながら僕は、花君のとびっきりの笑顔に照らされていた。

上の階への階段の手前に住民専用のポストがあった。

中村君は、301号室の住人らしい。

「中村君ってさっきの男の人とも知り合いなんだねえ。顔が広いな」

階段を上る途中、花君が感心した様に言う。

「中村君は、人に好かれやすい性格なんだろうね」

僕は、最後に多分と付け加えようかと思ったが止めておいた。

「らしいな」

そう大河君はぶっきらぼうに言葉を挟んだ。

その言葉の雰囲気から僕の頭に、大河君と中村君が喧嘩しないかという重苦しい心配が戻ってきた。

（かつ、帰りたい…）

そう思ったのも束の間、僕の目の前には301号室のドアがドツカリと佇んでいる。

僕は覚悟を決めてインターホンを押した。

住人を呼び出す特有の音が聞こえた後で、インターホンから声が漏れてきた。

「取り込み中だから新聞とかセールスなら帰ってくれ！！あと、宗教なら遠慮するしピザは頼んでないぜ。もしユズなら今日は説教聞けねえ！！大事な先約があるからな」

「僕だ……」

「帰っても良いんだぞ」

僕の言葉を遮って大河君が呆れた様子でインターホンに向かい呟いた。

「この声は…大河！！」

そう言っていると中村君の声はインターホンから聞こえなくなったが代わりに家の中がドタドタと騒がしく足音が近付いてきた。

足音は、目の前のドアの中で止まった。

しかし、次の瞬間ドアがおもツいきり開いた。

僕達の間にはプアーとドアが開いた拍子に軋む情けない音が響きわたった。

「てめえら遅刻かよ！！せつかく誘ってやったのに！！」

中村君は、手に持っているしゃもじをブンブンと縦に振って憤慨している。

僕の顔に米粒が飛んでくるのが分かった。

「お前の説明不足のせいで迷ったんだよ。遅刻の原因はお前が作り出したんだ。俺達に責任は無い。それに俺は…帰っても良い」

最悪の展開に僕はガツクリした。

（やっぱりか…やっぱり予想通りか…何で大河君と中村君ってこんなんだよ…）

僕は、少し怒りを覚えた。

そんな僕をよそに、大河君の腕を中村君が掴んでいた。

「なんだ…この手は？」

大河君の表情が一気に冷たい表情になっていった。

しかし、目の前では僕の予想とは違う光景が広がっていく。

「待てよ大河！！帰んな」

その声のトーンからは落ち着いた雰囲気か漂っていた。

「何？」

「帰んな!!頼む」

「ああ分かった…」

そんな中村君の様子に大河君も驚いている様だった。

「真田も森島も上がってくれるんだよね？」

「うん!!もちろん」

花君は持っていたカバンを元気に揺らした。

「その為に中村君の家に来たんだよ!!帰るわけないよ」

僕は、さっきまで感じていた怒りを忘れて中村君に笑いかけた。

「よっしゃ!!じゃあ入ってくれ!!」

そう言うと中村君は、僕達を家の中へ招き入れた。

シェイクシェイク 3（後書き）

更新が遅れた事をお詫びします。

もう一つ、久しぶりに更新出来ると思い勢いのままに執筆してしましたら思わぬボリュームになってしまい、まだ新しい章や誤字脱字修正に取り掛かれません。

前回や前々回の後書きの発言を撤回させて頂きます。

すいません。

感想や御指摘をお待ちしています。

シェイクシェイク 4

中村君の家に入ると魚の生臭い匂いが鼻をついた。

「さあさ上がってくれ」

中村君は入って直ぐの場所に鎮座している台所にしゃもじを投げ捨てて、僕達をリビングらしき部屋に案内した。

リビングが生活の拠点になっているらしく雑誌やゲーム等の娯楽品から、生活する為に必要な諸々の品があちらこちらに置かれていた。

「まあ、狭い所だけど寛いでてくれや」

そう言うと、中村君は先程通ってきた台所に引っ込んでいった。とりあえず僕達はテーブルの周りに座った。

「中村君の家ってこんな風だったんだ」

花君が部屋をキョロキョロと見回しながら言う。

「まあ、散らかってはいるが快適そうな家だな」

大河君は、カバンをテーブルに置いて雑誌を手にとってパラパラと捲った。

僕は目の前で二人が、ごく自然に寛いでいる姿を見て少し驚いた。何故、中村君の両親の話題が出ないのか不思議だ。

もしかして気にしてる僕が異常なのか？

僕は立ち上がって台所に向かう。

立ち上がった瞬間、花君が何か言ってきたが気にも留めなかった。

リビングから出てすぐの台所では、中村君がまな板に向かいブツブツと呟きながら何かを切っていた。

「鮪は浸けといてユツケ風にした方が良かったか？でも、自家製のアレが無いしな…」

「中村君！！」

「うわぁ！！」

スカンと包丁がまな板に叩き付けられた音が響き渡る。

中村君は背後から近づく僕の存在に全く気づいていなかったらしく、かなり驚いていた。

「真田！！何だよビビんだろ！！」

中村君は怒りの言葉と共に包丁を振り上げてブンブンと振り、僕に怒りを投げつけてきた。

僕は少しビビったが気を取り直した。

「中村君の御両親は？」

「はあ？」

僕の問いかけに対して中村君は目を点にした様な表情を浮かべた。

「中村君の御両親が居ないのに家に上がって良いの？」

僕の言葉の意味がやっと理解出来たらしく中村君が目を伏し目がちにする。

「俺の両親は…」

中村君が自分の胸を軽く、しかし優しく叩いた。

「ココにいて…いつも俺を見守ってるんだ…」

その言葉を聞いた瞬間僕は、自分のデリカシーの無さに恥ずかしさを覚えた。

（そうだったんだ…だから二人は…。花君と大河君は知ってたから両親の事について何も言わなかったんだ…僕は何てバカな事聞いちやっただんだ…）

僕の目が少し潤んでくるが分かった。

「真田…俺の家族の為に泣いてくれるのか…」

「ゴメン…僕は…」

「良いんだ…良いんだ真田…。さあ、部屋に戻って待ってくれ」

僕は、中村君に優しく台所から押し出された。

直後、床をバンバン殴りつける音に混じって微かに笑い声が聞こえた。

部屋に戻ると花君と大河君が雑誌を見ながら何かについて話していた。

「高校生初の連休ですね！！どうします？」

「俺は読書で過ごす予定なんだ」

「ええ、読書？僕は服買いたんだ。だからさ、遊ぼうよ、大河君！
！ねっ」

「俺と…考えておくよ」

僕は、二人の間に座って連休の予定を聞きながら、さっき二人の神経を疑った事を心の中で謝っておいた。

数分後、中村君が桶を持ってドタドタ音をさせてリビングに入ってきた。

「お待たせ！！飢えた野獣ども」

そう言うのとテーブルに桶をドカツと置いた。

桶の中にはギッシリと寿司が詰まっっていて食欲をそそらせる光沢を放ちながら堂々と並んでいた。

「スゴいね！！お寿司じゃん」

花君は手をワナワナと動かしながら喜んでいる。

「これって…中村君が握ったの？」

僕が聞くと中村君は照れた様な表情を浮かべた。

「いや…まあそうだけど…良いじゃないか」

「見た目は良いが果たして味はどうか…」

リビングに和やかムードが漂う中、大河君が不吉な事を言い出した。

（大河君…いきなり何言いだすんだよ…）

しかし、中村君は不敵に笑っていた。

「へっ！！大河よ…お前の口も閉じる時が来たようだ！！」

そう言いながら中村君は天井を指差した。

（それって、ケンシ〇ウのパクリですよね…）

僕達は、さっそく中村君の握った寿司を頂く事にした。

まさか中村君が寿司を握れるなんて夢にも思わなかった。

寿司は、口に運ぶ度に止まらなくなる美味しさだった。

寿司の中にカフェインでも入ってるのかと思ったぐらい僕は夢中で頬張った。

花君も同じように頬を膨らましていた。

「不味くは無いな」

無表情で大河君は呟いた。

しかし、僕には大河君は出来るだけしかめっ面を保とうと努力している様に見えた。

「今日は、中村君の家に呼ばれて本当に良かったよ」

僕は、言葉通り心の底からそう思っていた。

「最高だね!!」

花君もいつも以上の満面の笑みを浮かべた。

「いや…今日呼んだ理由は寿司を食わせる為じゃ無いんだ…」

「えっ…」

今の今までのフランクな口調から、うって変わって中村君の真面目な口調に一瞬ドキリとして舌を嚙んでしまった。

僕が舌に痛みを感じた瞬間、ガタン!!という音と共に中村君がリビングの床で土下座をした。

「何…してんの？」

中村君の姿を見て花君が手に持っていた海老をポロッと落とした。

「今日呼んだ… 本当の理由はお前らにカツアゲ問題の事を謝る為に呼んだんだ」

そう言うのと更に頭を床に向かい深々と下げる。

「謝らなくって良…」

「ダメだ！！謝らずに、このまま何も無かった事になんか出来ねえよ！！俺のせいでお前達に迷惑懸けたんだぞ…」

中村君は、強い口調で僕の言葉を遮った。

「特に真田… お前には入院までさせちゃった…。本当にすまない！ケジメとして、お前に怪我させたヤツは必ず俺が…」

「何も… 無かった事にすれば良いじゃん…」

自分の耳からでも部屋に静まりかえるリビングに僕の口から出た言葉の音が小さく、しかし力強く響いたのが分かった。

「なに？」

中村君は、驚いた様な表情を浮かべて僕の顔を見る。

「僕は… 何も無かった事にして、一緒に笑い合っていたんだよ！

！公園でも言っただけ僕が君を助けたのは友達だと思ってるからだ！！それなのに…責任持つて何するんだよ？報復とか？中村君が報復する事自体が、僕から見たら偽善そのモノなんだよ」

言い終えた後、僕の顔を見ている中村君の右目から一粒の涙が頬を伝ってゆっくりと流れた。

そして土下座を崩し、あぐらをかいて、うつ向いた。

《偽善》という単語にあれだけ嫌悪感を露にしていた彼自身に、その言葉を浴びせた事に少し後悔を覚えたが訂正しようとは思わなかった。

目の前の寿司達は、作り主の気持ちと同様に輝きを無くして寂しうに佇んでいる。

花君は、神妙そうな顔をしながらも口をモゴモゴさせながら寿司を頬張っていて、大河君は雑誌に目を向けていたがページが捲られる事は無く同じページを見続けている様だった。

リビングの中には静寂と言うより、沈黙に包まれていた。

「偽善か…思えば、俺はこの言葉に全部擦り付けて色んな事から逃げていたのかも…」

頬に一滴の涙を残して中村君が言葉で沈黙を払拭した。

「中村君…あのさ聞いても良いかな？」

「何だ？」

「何で偽善っていう言葉にこだわるの？」

「真田、俺から話そう」

今まで雑誌に目を落としていた大河君が、雑誌を閉じて僕を見た。

「いや…大河、俺から言っわ」

中村君は、軽く目を閉じて何かを思い返してる様な表情を浮かべた。

今までの中村君の言動の謎や大河君との関係が一点に結ばれる時が来たんだ。

僕は、不思議とそんな事を感じた。

シェイクシェイク L (前書き)

長くなってしまいました。

シェイクシェイク L

僕は、中村君の口から綴られた言葉から全てを理解した。

幼かった頃の中村君や大河君の事、消えてしまった女の子との約束、切り裂かれた友情の証や中村君が偽善に嫌悪する理由。

その全てが重く、僕の心に乗しかかりズシリと響いた。

「人に話したのは、初めてだぜ…」

そう言つて立ち上がり、中村君は左斜め前に置かれていたタンスの引き出しを大きく開けた。

大きく引き出された、引き出しの奥から何かを取り出して、ゆつくりと元通りに締めた。

元居た場所に座り、中村君がテーブルの上に古ぼけたモノを静かに置く。

そのモノを見た時、花君の顔に悲しげな色が差した様に感じた。

「これが…女の子に貰ったお守りなんだよ。俺の…」

中村は、幼い記憶を辿る様に目を閉じて、

「思い出の宝物だ」

力強く言つた。

「大切な物だね」

僕は、お守りから溢れる柔らかな雰囲気を感じ微笑んでしまう。

「大切か…。だな！！大切だ」

中村君は、お守りを指で挟んで天井に向けて上げた。

花君は、何故か泣いていた。

理由は分からないけど、多分感動しているのだと思う。

「なあ…大河」

中村君がお守りを天井に向けて掲げながら言う。

「何だ？」

大河君は、真っ直ぐに中村君を見据えている。

「あの日聞けなかったんだけどよ…お前が、切り裂いたのか？」

中村君によって天井に向けられたお守りは、フラフラと揺れている。

大河君は、フンと鼻で笑った。

「聞かなかったの間違いだろ…バカが」

そう言っただ河君が、持ってきていたバッグを開けて、中から継ぎはぎだらけの小さなモノを出した。

「お前：コレ！！」

中村君は、驚きを隠せない様子で弾ける様に立ち上がった。

「俺が切り裂く訳無いだろ」

大河君は、継ぎはぎだらけのお守りを、指でゆっくりなぞりながら溜め息をついた。

「だな…だよな！！すまん…いやゴメンな」

中村君は、晴々とした笑顔を浮かべ笑った。

「あの日に…あの時に言えよ。今更だな…色んな事が有り過ぎた」

想いを巡らせた様に天井を見上げた後で、大河君が顔をしかめた。

「大河君…」

僕は気がつくと涙を流していて、花君も相変わらずの様子で泣いていた。

「おいおい、泣くなよお前等」

中村君が、仕方ない奴等だと言う様に笑う。

大河君は、花君を一瞬チラリと見て口を開いた。

「中村、お前はまだ忘れてる事がある。というか大きな勘違いがある」

大河君が、腕を組みをする。

「何だそれ？もう無えだろ」

中村君が、クエッションマークをそこらじゅうに出したのが見えた様な気がした。

「思い出の女の子の事だよ」

大河君は、まるで苦い物を噛み締めた様な顔をしながら言う。

「何！！あの子の居場所知ってんのか？」

中村君は、ウキウキした様子で大河君に近寄った。

というか密着した。

「おい！！近過ぎるぞ。気色悪い！！」

大河君は、密着してきた中村君の肩を掴んで乱暴に引き剥がした。

ヘアカラーの赤い色が鮮やかな軌線を描き、派手に中村君は床に倒れ込んだ。

「僕も、その女の子に会ってみたいよ」僕の頭に、話に上がっている女の子の顔が浮かぶ。

でもよくよく僕が想像した女の子の顔や体型を見ると、全てのベースは蒼ちゃんだった。

夕暮れの中、向かい合って別れを惜しむ僕と蒼ちゃん。

「欧介君受け取って下さい。私と欧介君だけのお守り…二人だけの…ね」

「蒼ちゃん…僕はお守りよりも、蒼ちゃんが…」

「えっ…はい…優しくしてね…」

そして僕は紅に染まり、はにかんだ笑みを浮かべる蒼ちゃんを…。

僕が、頭の中で想像上の蒼ちゃんと大人の戯れをしていると、中村君が勢い良く起き上がり僕に向けて指を振った。

「真田あきらめろ。その女の子は俺の…」

中村君が笑顔を浮かべテヘツと笑った。

「俺の初恋の相手である」

その言葉を聞いた瞬間、大河君がテーブルをガチャつかせた。

花君は、ゆっくりと潤んだ目を中村君に向けた。

「そっか…は」

「名前とか全く覚えて無いのか？」

僕の言葉を遮って大河君が深刻な顔をする。

「おう！！全く覚えて無え。今君はどこにいるんだい…この胸の…」
気持ち良いぐらいにキツパリ言った後、中村は自作らしきポエムを
口ずさんで近くに落ちていたクッションを抱き締めた。

「中村…落ち着いて聞くんだ」

大河君が、何故か憐れみの籠った目で中村君を見た。

「んだよ？その目」

「名前は、花だ」

「花…？あっそうそう花ちゃんだよ。よく二人で花ちゃん、花ちゃ
んって呼んでたよな。笑顔が可愛くてさあ」

中村君が悦と取れる表情を浮かべる。

（うん…？花？）

僕は、突然初恋話の結末が分かってしまった。

以前から時折、二人の話をすると彼が見せる悲しそうな表情、彼の
ルックスから言ってまず間違い無い。

となると、大河君の無慈悲な真実の爆弾を受けた中村君はどうなる
んだ？

「大河君…止めた方が…」

「いや…今日決着を着けないと二度と言えなくなる。それに、中村

の為なんだ」

僕を見る大河君の目には恐ろしい程の決意が垣間見えた。

「お前ら何くつ喋ってんだよ？」

中村君が不機嫌そうに言う。

「なあ中村、彼の名は？」

大河君がゆつくりと《彼》を指差した。

「はあ？お前何冷たい事言ってるんだよ。森島だろ！！」

中村君は、大河君を小バカにした様に笑う。

「それは苗字だろ！！名だ…名」

「えっ花…だよな？なあ森島？」

中村君は、同意を求める様に花君に聞いた。

「うん…花だよ」

花君は潤んだ目をして申し訳なさそうな雰囲気で笑みを浮かべた。

この状況を僕は、タイマー表示のない時限爆弾を抱えているようだと感じてとてもヒヤヒヤしていた。

「森島と花ちゃんに何のかんけ…」

突然、中村君が口を閉じた。

「大河冗談だろ？つまん無えぞ」

中村君の顔は笑っていたが大河君の口から嘘という単語が発つせられるのを懇願しているような目をしてた。

大河君は、残酷にも首をゆっくりと縦に振った。

「おれ…俺の初恋なんだよ…チビだった頃の…」

「初恋は淡く、そして儚いモノじゃないのか？叶わない定めだと思
い諦める」

大河君が、残酷な事を言い出した。

僕は、思わず目の前に広がる光景に目を覆いたくなった。

「ゴメンね…蓮ちゃん」

花君が、はにかんだ様子で言った。

「やめろ！！その名で呼ぶんじゃないねえ！！その名で呼んで良いのは
俺の初恋の…」

「だから、森島なんだろ？」

大河君の言葉が思い切り中村君の心をえぐった様に見えた。
直後不気味な笑い声を上げ、中村君はテーブルの上の寿司が入って
いる桶に顔面からダイブした。

「やはり、正しい事をする気分が良いな」

そう言つて大河君が、シャツの襟元を正した。

（大河君…君の善意には大きな代償が絡むんだね…）

「良かった…中村君は僕の事を忘れてたんじゃなくて勘違いがしてたんだね。僕小さい時は、よく女の子に間違えられたんだよね」

（えっ今も…間違えられるよね？）

僕は、二人に対してツツコミを入れたかったが、あえて口にはしなかった。

数秒間の沈黙の後、中村君が桶から顔を上げた。

「でも…チビだった俺達三人の約束は果たされてたんだな」

額に鮪を引っ付けながら中村君が言う。

「えっ？」

花君が額を指差しながら中村君に言った。

「『いつかまた帰ってくる』ってやつだよ」

「あっ…うん。お守り渡したの僕だから。僕が守らないと…」

花君が優しく笑った。

「ハナにも、俺と大河の事や今回の事で色々苦勞かけたな…ゴメンな」

「欧介君が言った様に僕も気にしてないよ。えっ…ハナ？」

花君が、中村君の言葉に対して目を見開いた。

中村君が、カラカラと笑った。

「今更苗字じゃ堅っ苦しいだろ。今この瞬間から、他人じゃ無えんだから」

「うん…そうだね。蓮ちゃん」

「頼む…レンって呼んでくれよ。なあ大河」

そう言っつて中村君は、大河君に寿司を手渡した。

「全く…恥ずかしい奴らめ」

大河君は、口をへの字に曲げて目の前に置かれていた皿を手に取り寿司を受け取った。

「三人とも良かったね」

僕も暖かさを感じ自然と頬が緩んでしまう。

「バカちん!!」

中村君指をビシッと、僕に向けた。

「何他人振ってんだよ。俺とツレなんだろ？オースケ」

僕を見る中村君の目はいつの間にか、僕を見下したり、あだ名をつけて笑うあの嫌味な赤毛君では無く、友達としての目になっていた。

「えっ…僕は何て呼べば？」

僕は、急に呼び名を変える事になってドキドキしてきた。

「好きに呼べば良いんだよ」

そう言っつて中村君は笑う。

「えっと…じゃ蓮で」

「ヨロシク！！オースケ」

何か、急に今までよりずっと近く、友達としての実感が沸いた。

「僕達4人で学校生活かぁ…すごい面白そうだね」

花君は、首を左右に振り笑う。

「ふっ。面倒だな」

大河君も、しょうがないなという様子で笑う。

「おっしやぁ！！宴じゃ！！今宵は酒盛じゃ」

そう言っつて、蓮は台所に走っていった。

と思っつたら、すぐに缶を抱えてドタドタと蓮が帰ってきた。

「酒が吞める吞める吞めるぞー酒が吞めるぞー」

上機嫌に歌いながら、蓮は持っていたビールをテーブルに置いた。

「オースケ、お前は黒か？それともノーマル？」

そう言つて蓮は、僕の目の前にビールを並べる。

僕は、転生する前に父さんと呑んだ事があるが、苦く不味い記憶がなくビールは苦手だった。

「えっ、じゃ…僕は黒で」

黒ビールは、もしかしたら呑み易いかも等と期待して僕は黒ビールを選んだ。

「さすがオースケ！！渋いぜ」

そう言つて、花君と大河君に希林ラガーを手渡した。

「おい！！」

大河君が、蓮にビールを押し返した。

「明日はまだ学…」

「おやおや完全無欠に見える大河にも弱点があつたんだな…素直に吞めないって言えば？」

蓮が挑戦的な笑いを浮かべ大河君を見た。

「何だと？」

中村君の言葉に大河君の目は据わってしまったようだ。

「見苦しいよなゝなあハナ、オースケ！！大河君は潔くねえ……」

「お前がどれ程のモノか見てやる」

大河君は、蓮の手から希林ビールを乱暴に引ったくった。

「ほお…沼の中村と呼ばれている俺に勝てるのか？楽しみだ」

自信に満ち満ちた様子で、中村君が腕を組む。

（君達は、いったい何歳なんだよ？

共学に通う男って飲酒オツケーなのか？）

そんな事を思う僕にお構い無く、中村君がビールの缶を高く掲げた。

「てめえら今夜は帰さ無え！！乾杯しようぜえ」

「明日の学校休むのか？」

大河君が冷静に蓮にツツコンだ。

「僕はお酒初体験だよ…呑めるかな？」

花君が苦笑気味にビールを宙に上げた。

「呑めるかな？じゃ無えっぺ。呑むんだ」

蓮が、花君に悪戯っぽく笑いかける。

「バカだな…」

大河君が、呆れた様子でプシュツとビールの栓を空けた。

「おい！！大河」

「欧介、花、明日も学校だ…程々にな。乾杯」

大河君は、あきらかに故意に中村君を無視して僕と花君のビールに乾杯をした。

「うん！！カンパイ」

花君が顔を輝かせて乾杯に応じた。

「仲間外れにすんじゃ無え！！」

僕は、三人のやりとりがすごく面白くてみんなに乾杯した。

「オースケただけだぜ。俺に優しくしてくれんの」

その蓮の言葉を最後に本格的な宴会が始まり僕の記憶はブツ切りにされた様に飛んだ。

断片的に覚えているのは黒ビールは普通のビールより苦い事と、花君の赤く染まつた笑顔と、蓮と大河君の一気飲み勝負等、すごく楽しい光景だった。

気がつくと、小鳥が僕達人間には解らない周波数で朝の会話をしていた、窓から日が差していた。

その日、大河君を除く僕達は午後から学校に登校した。

大河君は、いつの間にか朝方に抜け出したらしく普段通りの時間に登校したらしい。

「俺の勝ちだな」

大河君は蓮に向かい誇らしげに言った。

僕は職員室に呼ばれて行くと、先生にこっぴどく怒られた。

でも、教室に戻ると花君の言った様に蒼ちゃんの機嫌は直っていて、いつも通りの笑顔で挨拶してくれた。

何だったんだろうとを考えても分かんないのでとりあえず保留にして席に着いた。

（いつか分かるさー!!）

僕は、心で叫ぶ。

窓から入る風には春の匂いに混じって夏の匂いが微かに混じっている。

僕は、風の匂いを楽しみながら、また自分だけの夢の中に向かって走っていった。

シェイクシェイク L（後書き）

ついに、主要キャラ男の話を描ききりました。

なっ…長…！

物語の中では、まだ2週間しか経ってないのにこの長さ…課題が露点しました。

次の章に行く前に溜りに溜った誤字脱字修正をしたいと思います。

感想や御指導をお待ちしています。

次からは、本腰の恋愛に入りたいと思います。

もう少し、和紙にお付き合い下さい。

では…！

四ヶ所目 1 (前書き)

やっとラブコメらしくなれそうです。

四ヶ所目 1

「いや、レクリエーションって最高だな。特にバーベキュー！毎日でもやりたいぜ」

校門を出た蓮が、数時間前の出来事を懐かしむかの様に空を見上げて言う。

「楽しかったよねー。僕も毎日やりたいな」

花君も、歩きながら着ているジャージの中に手を引っ込めて、笑いながら内部からジャージをビヨーンと何度も伸ばした。

「毎日だつて？そんな予算が聖蘭にあると思うか？」

僕の後ろを歩いている大河君は、

やれやれという表情を浮かべて携帯を見た。

今日、僕達は一年生の入学レクリエーションの一貫として郊外のキャンプ場までバーベキューをしに行った。

僕は、学級委員としてクラスをまとめて安全なバーベキューを指示する立場だったが、今朝学校に到着してからバーベキューが終わるまで蒼ちゃんのジャージ姿に見とれてしまっていて、いくら記憶を辿っても蒼ちゃんの姿しか思い出せない。

「おいおい、金なら有るだろう。聖蘭は金持ちのボンボンがいっぱいいるんだしよ。なあ大河坊っちゃん？」

「それどう意味だ？」

パチツという音を発てて携帯を閉じ、大河君が蓮を強い力が籠った目で見た。

「あららゝ怒るって事は認め…」

「ふ、二人共やめようよ」

僕は、二人の間に険悪なムードが立ちこめていた事に気付き、慌て間に入った。

「そうだよー。今日は笑顔で帰ろうよ。ねっ？」

花君も、二人の間に入ってくれて笑顔を浮かべながら場を和ませてくれた。

「花、それは誤解だ。俺はこんなヤツを相手に怒らない」

大河君は、腕を組んで顔を背けた。

「こんなヤツだ？俺は、どんなヤツなんだよ？言ってみろや」

「ちょ、ちよつと二人共やめなよ」

「オースケ、止めん…ぐっええ」

僕と花君が必死に二人を止めていると、蓮のジャージの首元が突然何か強い力で後方に引っ張られていった。一瞬、怪奇現象かと思いき、ドキッとしたが数秒後、蓮の首元を引っ張った相手が分かった。

蓮の背に隠れて柚夏ちゃんが眉を寄せて立っていた。

「蓮！！アンタ何やってんのよ」

そう言いながら更に柚夏ちゃんは、グイグイとジャージを引っ張るので、どんどん蓮の顔が赤く染まっていく。

「苦しい…」

「あ、あのさ、柚夏ちゃんそろそろ離さないと…」

「えっ？」

僕の言葉の意味がやっと理解出来たのか、柚夏ちゃんは顔の色が髪の色と同じように真っ赤になった蓮のジャージを離れた。

「ゲホッゲホ…」

「レン、大丈夫？」

花君は、派手に咳き込む蓮の背中を優しく撫でる。

「何よ、大袈裟に苦しんじゃって」

柚夏ちゃんは、バツの悪そうな顔をしながら、手を組んだ。

「な…何だよ？いきなり首絞めやがって」

喉を擦りながら、怒りを帯びた様子で蓮は涙ぐんだ目を向ける。

「ア、アンタが悪いのよ。大きな声出して騒いでるから。私が止めてあげなきゃ、アンタまた問題を起こしてかもしれないわよ。全く感謝してもらいたいくらいよ」

「止めるんならな、もうちょっと優しく止めるよ。この暴力女!!」

「何よ!!」

「全く、体だけ大人になりやがって。もうちょっと、おしとやかになれっうの!!」

「バ、バカじゃないの!! 変な事言わないでよ。それにアンタには言われたくないわよ」

「と、とりあえず二人共落ち着いて話をしようよ」

「欧介君の言う通りだよ。落ち着いてよ」

僕と花君は今度は、ヒートアップする柚夏ちゃんと蓮の間に、入って一生懸命二人をなだめた。

「ふん…アホらしい。俺は先に帰る」

「大河君待つてよ」

大河君は、僕の言葉に立ち止まる事なく歩き出した。

（何で、僕の知り合いは喧嘩ばかりなんだろう…）

僕が周りで展開されている光景に溜め息を吐き出した時、僕の心を

乱す周波数が耳に届いた。

ジャージ姿の蒼ちゃんが心配そうな顔をして、僕達の元に走って来ていた。

「あ、蒼ちゃん」

僕の突然の呟きは、不思議な事に周りの騒動の言葉よりも強く通つたらしく、周りの皆の動きが止まり僕の目線と同じ方を向いた。

「あら、蒼っち？」

連が少し驚いた顔をしていた。

「皆さん、何してるんです？」

蒼ちゃんは、心配そうに僕達を見回す。

「いや…たいした…」

「聞いてよ！！蒼ちゃん。バカ蓮が、また喧嘩してたんだよ」

柚夏ちゃんが、蒼ちゃんを味方につけるかの様な言い方をした。

（ってか、いつの間に仲良くなったんだ？）

僕の頭に不意にそんな考えがよぎったが今はそんな事を考えているより蒼ちゃんの声を聞いていたくて強引に考えを消した。

「中村君、本当？」

「え、いや、蒼っち冗談だって。だから、そんな目で俺を見んなよ」
蓮は、照れた様に頭をポリポリと掻いて笑った。「信じてくれるよな？」

「え、はい」

そう言いながらも蒼ちゃんは、やはり俯に落ちない顔をして探る様に僕の顔を見た。

僕はドキツとしながらも蒼ちゃんを安心させる様に首を縦に振った。

「何が、信じてくれるよな！！よ。バカ蓮のくせに」

「痛っへえ！！」

柚夏ちゃんは、頬少し膨らましながら蓮の頬を捻った。

「夫婦漫才ってこんな感じかな？」

花君は、ニコニコ笑いながら目の前の夫婦漫才（？）を見ていた。

「ところで、蒼ちゃん今帰りなの？」

僕は一緒に帰れるかも！！という淡い期待を胸に秘めながら自然を装って切り出した。

「え、あっそうだった。私は欧介君を呼びに来たんです」

「ぼ、僕を？」

（こ、これはもしかしたらこ、告白！？）

急に胸に潜む何者が僕のハートをサンドバックの様に乱暴に叩いた。

「はい」

「ど、どして？」

「あの、とりあえず行きましょう」

そう言つと蒼ちゃんは校舎に向かって歩き出した。

僕は、フワフワした地面を歩く様にふらつきながら、まるで僕では無い誰かの足で歩いている様な感覚で後について行った。

四ヶ所目 1（後書き）

更新が遅くなりました。

すいません。

読んで頂けて嬉しいです。

感想や御指摘をバシバシお待ちしております。

四ヶ所目 2

さっきから僕のハートは僕の中の誰かに乱暴に揺さぶられ、隣で歩いている蒼ちゃんに聞こえるぐらい高鳴っている。

（この展開はやっぱこ、告白なのか？）

さっきからそんな事ばかりが頭に浮かび、ドキドキ感で今自分が何処に向かって歩いているのかさえ分からない。

いや、むしろ分からなくても良い。

蒼ちゃんと一緒に告白に向かって歩いてるんだから。

僕が、そんな事を思っていると蒼ちゃんが僕の顔を見た。

（っ、ついに告白されちゃうのかなー！！）

「さっき、本当は中村君達喧嘩してたよね？」

「えっ」

告白かと思い、身を強張らせていた僕を蒼ちゃんは再び探る様な目で見た。

「いや…その、してないよ…」

「本当ですか？」

蒼ちゃんは、僕との距離を縮めて僕の目を真っ直ぐに見た。

「え、うん。いや……」

蒼ちゃんの目は、淒く綺麗で吸い込まれてしまいそうで、つい言葉を濁してしまった。

「ほら、やっぱり。嘘ついたんですね」

「ゴ、ゴメンね。嘘ついた訳じゃ無いよ。蒼ちゃんが心配そうな顔してたから、つい」

僕は、非難する様な目で見つめる蒼ちゃんの顔を見ていられなくて目を伏し目がちに反らした。

「私…嘘つく人は嫌いです!!」

「ええ、嫌い？」

僕のハートを揺さぶっていた誰かは、蒼ちゃんの言葉を聞いて、逆上したのか鋭利な刃物を持ち出しズタズタにハートを引き裂いた。ぐわんぐわんと周りの夕焼けが揺れ僕は、ショックで地に膝を着きそうになった。

「はい、嫌いです!!でも……」

無意識に僕は、蒼ちゃんの顔を見ていた。

「欧介君は私に気を使ってくれたみたいですね…だから今回は許します」

僕の顔を見て、少し微笑んでくれた。

その言葉を聞かなかったら確実に地に膝を着いていたし、ハートは修復不可能なくらいに切り裂かれていたと思う。

「本当ゴメンね…もう嘘つかないから」

「はい。信じてますよ」

そう言うと、また蒼ちゃんは歩き出した。

（良かった…蒼ちゃんに嫌われなくて。でも告白じゃなくて、わざわざ嘘を見破る為に僕を連れ出すなんて…蒼ちゃんもしっかりしてるな…）

僕は、トボトボと後について歩いた。

歩く途中、夕日の影によって、むさぼられた様に侵食された校舎が目に入った時、変な考えが浮かんだ。

（もし…僕が存在自体が嘘だという事を知ったら、蒼ちゃんは僕を拒絶するのだろうか？）

そんな事を考えたら、心の中の誰かがハートにキンキンに冷えた冷水を絶え間無くぶちまけている気がしてハートが痛んだ。

後に、従って歩くとやがて校舎の下駄箱に着いた。

「で、今ドコに向かっているの？」

僕は、玄関に入った所で変な考えが浮かんだいたせいののか、すっかり気分が萎えていて今すぐにも帰りたかったが、一応どこに向かっているのか聞いてみた。

「もう、欧介君忘れてるでしょ？」

「あれ、何か忘れてる？」

今日忘れたのは、学生証と蓮に頼まれたお宝ビデオぐらいしか思い当たらない。

「学級委員として、クラスを引率した感想や反省点を先生に報告しに行かなきゃ」

「あつ、そうだった」

そう言えば担任が朝そんな事を言ってた気がする。

蒼ちゃんのジャージ姿を頭にファインダーに焼き付けてる内にすっかり忘れていた。

「私、職員室の前で待ってたんですけど…欧介君が来ないから探しに来たの」

「ご、ごめん…僕は足引つ張ってばかりだ」

我ながら蒼ちゃんに迷惑かけていると思うと情けなくなる。

「でも、会えたんだから気にして無いです」

ニツコリ笑って、再び僕を見た。

その笑顔が、今朝から見てきた蒼ちゃんの姿の中で一番愛しく思えた。

「さあ、一緒に職員室に行きましょう」

「うん!!」

僕と蒼ちゃんは、お互い笑い合い職員室に向かった。

今の僕には、告白よりも一緒に笑い合える事の方が価値のある物に思えた。

四ヶ所目 2（後書き）

この調子で執筆していききたいです!!
コメントや御指摘をバシバシお待ちしております!!
では!!

四ヶ所目 3

挨拶をしながら職員室に入ると、待ちかねた様に担任が僕達二人を手招きした。

「まったく、学級委員遅いぞ!!」

ブツクサ言いながら、お茶をすすする担任。

「僕が忘れちゃってて…」

「真田、学級委員なんだから…もう少し自覚を持ちなさい!!」

「すみません…」

「まあ、良い。とりあえず今日感じた事や反省点をこのプリントに書いてくれ」

担任は、目を落としていた書類を手渡した。

（感じた事をまとめる？とりあえず蒼ちゃんのジャージ姿はグッジョブで、今度から体育の時間は要チェック、そして願わくばジャージ姿の蒼ちゃんを…って何考えてんだよ）

僕は、我ながら自分のバカさ妄想にシニールな笑いが込み上げた。

「真田…何がそんなにおかしいんだ？」

「は、はひ？」

僕は気付くと、手でプリントをグシャと握っていた。

「いや…その」

「真田の感想や反省を読めるのが楽しみだな。そんなに笑える文章が浮かぶなんてな」

あきらかに僕に頭の中に感想等が全く浮かんでいかんでない事を見透かした様な言い方だった。

「いや…恐縮です」

（ヤバイ…先生、僕の反応を見て楽しんじゃってる）

僕は、苦笑しながら頭を掻くしかなかった。

「あとは前から言っていた通り、来週から中間テストが始まる」

（来週からテストか…テ、テスト！！マジっすか？ってか、完全に忘れてた！！）

僕の頭の中に、テストと言う単語がギラギラと稲光りを浴びた様に輝く。

実際の話、進学校である聖蘭の授業は難しく、半分も理解出来ていなかった。

しかも、最近は蓮と遊んでばかりで…勉強は全く予習&復習をサボっててトホホ状態。

この状態で一週間後中間テスト（5教科）、しかも高校初のテスト…皆、気合い充分で臨むに違いない。

（ヤバイ…極めてヤバイ!!）

「はい。中間テストに向けて勉強してます」

冷や汗をかく僕の横で蒼ちゃんがニコツと笑う。

（その笑顔に乾杯…って何乾杯してんだよ…違っただる僕!!）

「さすが楠木だな。真田もちろん…」

担任の視線が痛く、無意識に僕は直立不動状態になった。

（何なんですか？そ、その疑う様な目は？）

担任と同じく蒼ちゃんも僕のを見ている。

（あ、蒼ちゃんまで何だよ）

「欧介君も順調だね？」

ドギマギしている僕に向かって、蒼ちゃんが再び笑いかけた。

「はい!!もう絶好調ですよ」

僕は、とびっきりの笑顔を作って親指をビシッと立てた。

（や、やっちまった…また嘘ついちゃった）

蒼ちゃん的笑顔につい、また嘘を重ねてしまった。

多分、今の勢いなら女子更衣室に突入して高らかに中の状況を実況出来るだろう…。そのぐらい自殺行為的な発言だった。

「ほほう、プリントとテスト両方楽しみだな」

担任は、満足気に笑い椅子にもたれかかった。

「じゃあ、プリントについては後日、具体的な提出期限を言うから」

その言葉で、僕が嘘を重ねた時間は終りを告げた。

「来週のテスト頑張りましょうね。私も欧介君に負けないぐらい勉強します」

下駄箱から外に出ると、僕の嘘を信じきっている蒼ちゃんが優しい雰囲気僕を後戻り出来ない様にたたみかけた。

「うん！！僕も頑張るから…。おっと用事があつたんだ。じゃ今日はここで、バイバイ」

僕は、嘘の泉から湧き出てきたエセ誠実なオーラを纏い蒼ちゃんに向けて笑って手を振った。

「あ、用事があるんですか…。じゃ、またね」

蒼ちゃんは、手を小さく振って帰っていった。

蒼ちゃんの後ろ姿を見つめて、やがて見えなくなると、僕は足の力が抜け地面に倒れこんだ。

「な、何やって僕？どうしょ、ヤバイ、嘘ヤバイ。蒼ちゃんに…親指を」

脳内に意味の無い言葉の螺旋が流れ込む。

（蒼ちゃんの大嫌いな嘘を重ねて、テスト勉強なんて全くしてないのに授業すら分かんないのに…僕何やってんだよ）

数十分前の非難めいた蒼ちゃんの顔が浮かぶ。

嫌いと言う単語の持つ意味。このまま進めば拒絶という未来が僕には待っている。

蒼ちゃんから笑顔が消えたら、とても辛く退屈だ。

自分自信から出た軽い言葉に深い後悔を覚えた。

すると、突然誰かが僕を呼んだ。

声の方を振り向くと、花君と蓮が居た。

「欧介君？どうしたの？」

気付かない内に僕は、歩いていたらしく校門に向かう道にいた。

「いや…別に」

「オースケ、機嫌直せよ。俺が悪かった！！この通り」

蓮が手を顔の前に掲げた。

「え、別に怒ってないよ。怒ってないけど…」

言葉を隠すかの様に、ため息が出た。

「あれ、悩み事？僕に聞かせて欲しいな」

花君は、ジャージから手を出して首を傾げた。

「水臭えゝつうの！！聞かせんしゃい」

そう言うと蓮は、笑いながら肩を組みグイッと力を込めた。

「あゝ、うん。じゃあ聞いてもらおうかな」

「おしつ！！ならサテン行こう。丁度腹が減ったしな」

「お、高校生の定番ですね」

花君は、飛び上がって歩き出した。

そして、僕達は校門を出た。

校門から出ると、大河君が空を見上げて座っていた。「お前達遅いぞ」

ジャージのズボンをパシパシと払いながら大河君が立ち上がる。

「た、大河？お前帰ったんじゃないの？」

蓮は、目をパチクリさせながら指を指した。

「気が変わったんだよ。それに、指を気をつけろ…バカ」

大河君が、顔をしかめてジャージの襟を正した。

「てめえ…」

「もう蓮やめてよ！！」

花君の言葉に、蓮はショックを受けた様に口をモガモガとさせた。
「なら、大河君も喫茶店行こうよ。何か欧介君が相談したいんだって」

「欧介が相談？」

大河君がじつと僕を見る。

「別に大…」

「分かった。行こう」

「えっ、お前も来んの！！」

「別に、お前の為じゃない。欧介の話を聞く為だ」

大河君は蓮を見ながら鼻で笑った。

「4人でケーキ食べながらなら、きっと欧介君の悩みも解決するよ」

花君は、優しく僕の肩を叩いた。

（皆…）

グウークオウー

3人に囲まれて何だか少し元気が出てきた僕に、突然空腹に襲いかかってきて悲鳴をあげた。

「あ、ごめん」

「オースケの腹、グッジョブ」

「おい、意味不明な事言っなよ」

「じゃ僕の行きつけの喫茶店に案内するよ！！ケーキがおいしいんだ」

僕達は花君行きつけの喫茶店に向かって歩き出した。

四ヶ所目 3（後書き）

コメントや御指摘をお待ちしてます!!

四ヶ所目 4（前書き）

お洒落な店って落ち着きませんよね？

四ヶ所目 4

さつきから何か落ち着かない。

花君に連れられて喫茶店に来たけど、路地裏にまさかこんな良い雰囲気のお店があるなんて。

壁にはモノクロな風景や若いカップル等、色々な写真が、ところ狭しと飾られているし、テーブルも一昔前の外国のテーブルだと思う。根拠は無いが、窓から差し込む夕陽を見ていたら店の中の物がとても高価に感じた。

頭のどこからか囁かれてくる、場違いだという言葉にしないよう天井から垂れさがって僕を照らしているシャンデリアを見ていると、蓮に呼ばれた。

「おい！！オースケだろ？ココアとバームクーヘン頼んだの」

「へっ？」

テーブルに視線を戻すと、真っ黒な髪をした女性がココアが入っているらしきカップとバームクーヘンをシルバーのトレイに載せて僕に向かって微笑んでいた。

「あ、すいません。ボーっとしてて…」

「良いのよ。でも不思議そうな顔してたね」

「え、あ…何かこんな良い雰囲気のお店初めてで」

「良い雰囲気？フフッありがとうございます。花ちゃんの御友達は良い子ね」

「でしょ。さっすが綾さん、分かってるう」

綾さんと呼ばれた目の前の女性の笑顔に僕のハートは撃ち抜かれてもうまともに、綾さんの顔を見れなかった。

「じゃ、花ちゃん。友達とゆっくりしてってね」僕達が、注文した品をテーブルに置き終えると、綾さんは甘いクリームのような香りを残し店の奥へと戻っていった。

「ハナ…さっきの誰だあ？」

綾さんの後ろ姿を名残惜しそうに見ていた蓮が僕の隣に座る花君の方を勢い良く向いた。

「え、だから綾さんだよ」

花君は、ニッコリ笑って注文していたアイスマルクティーを口に含んだ。

「あ、そうそう綾さん…っておい！！違っただろ、どうゆう関係だつて事だよ」

「ああ…そういう事。ちいちゃんのお母さんだよ」

（そっか、ちいちゃんのお母さんなんだ…）

「何だよ。ちいの母ちゃ…」

その瞬間、僕は対面の蓮を見て目を見開いた。

蓮も同じように僕の方を見て目を見開いていた。

（マ、マジっすか！！ちいちゃんのお母さんなの？）

僕の脳裏に、無邪気に笑いながら花君の手を引っ張るちいちゃんの姿が浮かんた。

「ちょ、ちょい待ち。綾さん何歳なの？」

蓮が、僕が聞きたかった質問をズバリ聞いてくれたので、ついゴクリと唾を呑み込んでしまった。

「え、綾さんの歳？ううーん確か、30歳だったかな…」

「いやいや、どう見ても20代前半だろ！！」

「確に！！」

僕も驚きの余りについ声を出してしまった。

「アハハ、欧介君どうしたの？いきなり大きな声だして」

（ええっ、花君そこ笑うトコじゃないでしょ…）

花君は、突然ツツコンだ僕の言葉に何故かウケてしまって、お腹を

押さえてクスクスと笑い出した。

「ちくつしょ！！ちいの母ちゃんって事は、もう人の物かよ。いや
…俺なら」

蓮は、ワシヤワシヤと着ているジャージをこねくり回していたが何かを思いついた様に指を鳴らした。

ガシャン

突然、盛り上がる僕達三人（特に僕と蓮）を尻目に静かにホットコ
ーヒを飲んでいた大河君がカップを強めに置いた。

（た…いが君？）

僕は、突然の出来事にビクツとしてしまった。

「さっきから大声で不謹慎な事ばかり言って騒いでいるな…忘れて
いるなら言っておくが、ここは花の知り合いが働いている喫茶店だ
ぞ。それに蓮！！お前に、さっきの女性が振り向くとは到底思えな
いな」

「大河…急にどしたの？」

蓮も突然の大河君の言葉に圧倒されている様だった。

それに大河君の言葉のニュアンスから、明らかに僕に対しても言っ

ている事が分かった。

「あと…」

そう言いながらフンツと、小馬鹿にした様に大河君が鼻で笑う。

「こんな喫茶店に不釣り合いなジャージ姿で座っているのは欧介の相談を聞く為だろ？いつから花の知り合いについて熱く語る時間に変わったんだ？教えて欲しいな」

言うまでも無く、僕は大河君の顔を見れなくてうつ向いた。

蓮も同じ様に力無くヘラヘラと笑っていた。

「さ、さゝ綾さんの手作りケーキはオイシイよ。食べながら欧介君の話の聞こえ」

花君は、場の雰囲気盛り上げようと気を使ってくれていた。

「当然だな。その為に此处に座っているんだし」

大河君は、しかめっ面でイチゴのタルトに舌鼓をうっていた。

（こ、この雰囲気からどう話を切り出せば良いでしょ…うか）

僕は、そんな事を思いながらバームクーヘンを無意味に一ブロックちぎって、学校での事を三人に話した。

四ヶ所目 4（後書き）

すいません…更新が遅れました。

コメントや御指摘をバシバシお待ちしております。
では…！

四ヶ所目 5（前書き）

お久しぶりです!!

四ヶ所目 5

僕は、バームクーヘンを千切ったり口に入れて味も解らずに無意味に噛み潰したりしながら学校での事を3人に伝えた。

勿論、蒼ちゃんの対して抱いている気持ちを悟られない様に気を付けて。

「それで、テスト対策してないのに…先生に見栄張っちゃって」

（ホントは、蒼ちゃんに対して見栄張っただけど…）

普通なら『僕さ、蒼ちゃんが好きなんだ。でも…テスト勉強バツチりだあ！』って、見栄張っちゃたんだよ。ど、どうしよう！』

みたいな感じで友達に相談するモノだろう。
と、思う…多分！！

しかし、今までこんな相談や気持ちになった事が無い僕には何か気恥ずかしい。

それに、蒼ちゃんは僕の事を学級委員の片割れとしか思っていないみたいだし。

それに、ただ笑って話せる今の関係が続けば良い。

そんな気がしたから、皆には隠しておいた。

「おいおい… オースケ。お前も先公の評価気にすんのかよ」
蓮が、頼んでいた抹茶のムースを口に運んで、顔を歪めた。

抹茶が予想外に苦かったのか、僕の話した内容にガツカリしたのか
分からないが… 多分後者だろう。

「その”お前も”という言葉が引つ掛かるが、あえて気にしないで
おく」

大河君は、ホットコーヒーを掻き混ぜながら蓮に向けて視線を投げ
つける。

花君は、僕の顔をずっと見ていた。

いつもの、太陽みたいに明るい笑顔で。

こんな3人に、本当の気持ちと言えない僕は、何なんだろうか…。

友達として3人の事を見ている筈なのに、本当の気持ちは僕の口か
ら出る事は無かった。

相変わらず、夕陽は窓から差し込んでモノクロな写真に、懐かしさ
を感じさせる味を加えている。

僕がそんな事を思っていると、大河君が口を開いた。

「勉強の事は… 自分の努力次第だ。どれだけ自分自身が励んだかで
成果が変わる。それは、俺達に相談しても何も解決しない。担任に
見栄を張ったのは欧介… お前自身だ。自分の力を尽せば良い」

大河君は、僕の目を真っ直ぐ見ていた。

その真剣な目線に僕は頷くしか無くて、機械的に相槌を打った。

「おいおい…普通、『それじゃ一緒に勉強しようじゃないか!!』アハハ』とか言う場面だっしょう」

蓮は、また一口抹茶ムースを口に含んで顔を歪めた。

もしかして、本当に抹茶ムースが苦いとか? 「僕も、大河君の意見に賛成だな…」

「花!! お前もかよ」

蓮は、驚いた様に声を荒げた。

僕も、実際少し驚いたが花君と大河君の言っている事は的を得ていた。

「欧介君が言った事なんだし…欧介君が頑張るしか無いよ…」

花君は、今までの笑顔を止めてうつ向いた。

「そ、そうだよ!! 僕が言った事なんだから、僕が自分で解決しなきゃね」

僕は、少し寂しさを感じたが3人に隠し事をしてるんだから仕方ない。

「ゴメンねーこんなくだらない相談しちゃって」

僕は、頭の後頭部をワシャワシャと掻いて笑った。

それを最後に、楽しかったさっきまでが嘘の様に僕達は黙って頼んだモノを食べた。

そして、僕達は綾さんに挨拶して各々に別れた。

結局相談なんて、出来なくて友達に嘘を重ねただけだった。

今考えると、何で素直に言えなかったんだろう。

素直に気持ちを言えていたらきっと…楽しいお茶が飲めたらろくな。バーベキューの楽しい雰囲気のまま、4人で笑いながら。もうテストの事も、担任の事もどうでも良い気がする。

何か、上手くいかない。

もう太陽が沈んで、辺りには闇が広がっている。

僕の周りに広がる暗闇が僕の今の心境と重なっていた。

そんな暗い気持ちを抱きながら僕は、トボトボと帰った。

四ヶ所目 6（蓮）（前書き）

今回は、蓮の視点で描きました。

四ヶ所目 6（蓮）

「うほお！！今日のチャーハン最高だぜ。我ながら自分の腕に惚れるね」

そう俺の今日の昼飯は、自作のチャーハンだ。

今、そのチャーハンを口一杯に掻き込んでいる。

「隠し味にさ、昨日バイト先のおっちゃんにもらった豆板醤を入れたワケよ。そしたらピリつとした風味が追加されてさ、いやいや大発見」

俺は、一人で場の雰囲気盛り上げようと意味不明な料理の話を、目の前で弁当を食べているオースケとハナにした。

「俺って良い嫁さんになるかもな？」
普段なら、

『ホ、ホント！！蓮、味見させてよ』
とか、

『もっう御嬌さんでしょ！！蓮、ボケ過ぎだよ』

と、オースケやハナが言うのに今日はまるで反応しない。

いや、正確には昨日（？）からだ。

昨日、俺達がサテンでオースケの話を聞きながらダベってから何かオカシイ。

いつも、仲良いコイツらが全く話してない。

それに、ハナの笑顔にいつもの輝きが足りないと思う。

うん、何か足りないんだよね…こう、楽しさと言つか元気な証というか。

「それにしても、綾さんって綺麗だよな〜こう年上の温もりが溢れててさ、綾さんと一緒に風呂入ってさ〜色々と…ってオースケ何想像してんだよっ…!」

俺は、立ち上がって目の前でゆっくりと箸を進めているオースケの頭頂部にチョップを喰らわせた。
その衝撃でオースケは、箸で掴んでいたウィンナーを弁当箱にダイブさせた。

「あ、うん。豆板醤は大発見だね」

オースケは、そう言って落としたウィンナーをもう一度箸で掴み直して口に運んだ。

下ネタでオースケが反応しないとは…ヤベエ…入院レベルだ。

「おい、今日のお前ら変だぞ。何かあったのかよ？」

いくら寛大で高貴な心を持つ俺でも耐えられ無くなった。

っうか、初めから聞きゃ良かったんだよな。

「え、特に何も…」

オースケは、俺の質問の意味が全く解らないといった様子で目を瞬たかせた。

ハナにいたっては、軽く微笑むだけだった。

いやいや、お前らそれじゃダメだろう。

この雰囲気にもまれてる俺の身にもなれっうーの！！

俺の気持ちなど全く知らない目の前のワガママ君達は再び自分の世界に入ったようにうつ向いた。

タイガ！！

あの野郎はどこに消えたんだよ。

あいつ、いつも昼は居なくなりやがって…。

こんな気まずいムードの中に俺を置いくなっうーの！！

帰ってきたら、もう嫌と言う程思い知らせてやるぜ。

俺がタイガに対する罰ゲーム的行為を脳内で選んでいるとオースケが立ち上がった。

「ゴメン、僕図書室に行ってくる」

それだけ言い残すとオースケは、まだ中身の残っている弁当箱をイソイソと片付けた。

「お、おい！！オースケ……」

そしてオースケは、教室から出ていった。

俺の言葉は、宛てもなく宙に舞っている様な気がした。

「オースケ、図書室とか言って実はトイレだったりして……」

ハナは、全く反応しない。

それでも俺は話かける。

芸人として。

いや芸人志望じゃ無いけど。

「なあ。もしかしたら密会かもな。目撃！！白昼の図書館で女子高生とニヤンニヤン読書みたいな」

「何か…ガツカリだな」

俺の妄想話に対してなのか、ハナが溜め息混じりにポツリと漏した。

「ガツカリですと！？お、俺の事なのか？今の俺に対して言ったんか？お、俺だって下方面に走りたくなかった…でもお前らが俺に冷たくするから…」

「蓮？何言ってんの？」

サスペンスドラマの犯人が自供するシーンの様な仕草をする俺を見て、ハナがキョトンとさせた。

「ガツカリって、俺の事なんだろう？」

「違うよ！！もう、なに言ってるの」

そう言ってハナは、立ち上がった。

「ちょっと散歩してくるね」

じゃ、ガツカリって誰の事だよ。

大河？

オースケ？

いやタイガじゃないな、昨日と今日から予想するとオースケだ。

でも何で？

解んねえ…全然解んねえ。

いや、俺に解んねえ事なんか無え筈だ！！

俺は、容姿淡麗品行方正なイケメンなワケだし。

何より、ツレのピンチだ。

俺が立ち上がるしか無えわな！！

あの二人は、大事なツレだっぺさ！！

っつか、四人揃わなきゃアレが出来ないし！！

俺がやっちゃる。

万事解決して、四人でGOだろ！！

俺は、去っていくハナの後ろ姿を眺めながら覚悟を決めた。

四ヶ所目 6（蓮）（後書き）

いやいや、蓮のキャラがどんどんおかしい方向に…（笑）
コメントや感想をバシバシお待ちしております。
感じた点をお願いします。

四ヶ所目 7

僕は、蓮と花君を教室に残して廊下に出た。

モヤモヤした気持ちも有るけど、静かな場所に居たい気分だったからだ。

静かな場所…、そう考えて一番最初に浮かんだのが渡り廊下の先の図書館だった。

僕の勝手なイメージだけど、図書館なら安らげらると思う。

何も考えずに…。

目的の図書館に着き、とりあえず目についた本を掴み、席に座った。

開いた本の中から、活字の羅列が目に見え込んできたが読む気はさらさら無い。

自分の情け無さに、怒りが込み上げていたからだ。

ああ、何か自分に腹が立つ！

三人とも、友達の筈なのに、何で言え無かったんだろう。

蒼ちゃんの事、こんなにも好きなのに。

人に…友達にすら言えないなんて。

後悔しないって、校門前で誓った筈なのに。
修正した意味無いのか？

自分自身への自問自答で、苦しんでいると図書館に木霊す筈の無い、
大きな声が響き渡った。

「ちょ、ちょ待つて。今何て言っただ？」

僕が反射的に声の方を向くと、黒髪で眼鏡を掛けた学生が、大声で
叫んだと思われる学生に向かい、囁く様に話しかけていた。

「二回も言わせんな！俺は、今日舞ちゃんに告るのである」

相変わらず、叫んだと思われる、ボサボサ無造へアの学生は声の
トーンを落とさない。多分、自分が今居る場所が見えてなんだろう
な。

「拓ちゃん、ナイスボケ。オモロオ」

二人の側に座っている色黒で快活な学生が、腹を押さえ笑う。

ナ、ナイスボケなのか？

心の中でツツコミを入れ、とりあえず本を読む振りをして、片目で
チラチラと様子を見る事にした。

「濱よ、ボケでは無いぞ！」

無造作君が、悪戯っ子の様に笑い、指を振る。

「拓！お前さあ、本気なのか？」

眼鏡君が呆れた様に天井を仰ぎ見た。

「僕、冗談嫌いでち」

無造作君は、眼鏡君のアゴを指で色っぽく撫でた。

「って事は、拓ちゃん！マジで告白の大一番を決行しちゃう？」

色黒君が、興奮した様子で机を揺らしてる。

キィキィと軋む音が僕の座る席まで響く。

「当たり前だろ。男は黙って告白するんだ」

「黙ってたらず告白出来な…」

そう言いかけた瞬間、メガネ君の喉元に深々と水平チョップがめり込んだ。

「そう、男は硬派に決める。今日の俺は決まってるだろ、濱」

目の前で喉を抑えて、のた打ち回るメガネ君を見ながら無造作君は、渋い顔をして笑った。

「仲良いなあ、やっぱ二人はさ」

色黒君は、親指をバシッと突き立てて無造作君に極上の笑顔を見せ

ている。

何だよ、この三人組！

話が全く繋がってないよ。

僕は、メチャクチャな会話をするムチャクチャな三人組を見ていたら、いつの間にかさつきまでのモヤモヤを忘れて笑っていた。

中々、図書館で笑いを堪えるのは苦しくて、あまり鍛えていない腹筋が痛かった。

一頻り笑い終わると、今この瞬間まで悩んでいた事に対してバカバカしさが込み上げた。

何でこんな事で悩んでたんだろ…僕は何で一步踏み込めないのかな。逃げている、そう僕は逃げている。肝心な所で僕は今でも逃げていた。

公園で、蓮に偉そうな事を言っておきながら僕は。真田欧介は、修正をして変わったんだ。

心のどこかでそう信じていた、いや信じていたかった

だけど、根本はあの日の蒼ちゃんから逃げたバス停の僕その物だ。いつの間にかバカバカしさは、姿を変えて僕の心を黒く侵食して溶かし、包み込んだ。

「蒼ちゃん、僕は…」

「えっ何ですか、欧介君？」

驚いて振り向くと蒼ちゃんが僕と同じ様な少し驚いた顔をして立っていた。

僕は、心の中の言葉を無意識に口から漏らしていた事に今ようやく気付いた。

四ヶ所目 7（後書き）

御久しぶりです。

そして、読者様すいませんでした。

とりあえず、今は更新を続けていきます。
とだけ、言っておきます。

四ヶ所目 8

何で蒼ちゃんが、真後ろに立っているのか分からずに僕は、蒼ちゃんの顔を見続けた。

「お、欧介君：そんなにじっと見ないで…恥ずかしいです」

「い、ごめん」

蒼ちゃんは、照れた様に持っている本を胸に抱き寄せた。

そんな仕草に僕は照れて、蒼ちゃんに抱き寄せられている本になりたいと思った。

本になる事が出来れば、こんな感情で悩む事も無く、蒼ちゃんと一緒に居る事が出来る。それに蒼ちゃんの柔らかいような物体が顔面にギュウツと…堪りませんなあ。

そんな実現不可能な妄想を廻らしていると、蒼ちゃんが僕の方に更に歩み寄った。

「ここ席って空いてますか？」

「うえっ、うん。空いてるよ」

薔薇色の妄想に囚われていた僕は、歩み寄る蒼ちゃんにドキリとしてしまった。

「良かったあ」

そう言うと、蒼ちゃんは僕の対面の席に静かに腰を下ろした。対面に座った蒼ちゃんは、僕がなりたいと熱望した本と筆記用具をテーブルの上に置いた。

蒼ちゃんの細くて綺麗な指を見ていたら、顔を撫でられた感触を思い出して、ドキッと胸の中の何かが跳ね上がった。

「ビックリしましたよ。私が欧介君の姿を見つけて声を掛けようとしたら、いきなり名前を呼ばれたから」

蒼ちゃんは、小さく笑った。

そんな蒼ちゃんの笑みに僕は、力無い笑顔を返すしか無かった。「もしかして、私が居る事気付いてました？」

「うん、まあ…ねえ」

僕は曖昧に言葉を濁して、さっきから自分で開きっぱなしだった本のページを意味も無く捲った。

「ああ欧介君、名言集を読んだんだね」

蒼ちゃんに言われて、初めて手で捲っている本が何なのかを知った。

「う、うん。先生に出す報告書に使える名言は無いかと思って」

ゴメン、蒼ちゃん。

また嘘ついてます、僕。

「それ、すごく面白いアイディアだと思います。私も欧介君の真似しようかなあ」

嘘をついてる僕に見せた蒼ちゃんの笑顔と言葉に、僕の心は胸の中で溶ろけた。

嘘ついたって、この笑顔が見れるなら…また嘘を重ねちゃうよ。

僕は、そんな事を思いながら溶ろけてニヤケそんな頬に必死に力を入れて笑顔を作った。

「蒼ちゃんは、何してたの？」

「私はテスト勉強の為に参考書を探してました。けど…」
そう言うのと、微笑みながら騒がしい例の三人組の方を向いた。

「でも、あの男の子達の会話が耳に入って、つい聞くのに夢中になっちゃいました」

僕も、蒼ちゃんの視線の先を追うと三人組は、いつの間にかブツブツと小声で話し合っていた。

残念ながら、耳をそば立てても内容は解らなかった。

蒼ちゃんは、三人組を見て優しく笑うと再び僕の方を見た。

「羨ましいなあ。男の子達が」

「う、羨ましい？何が羨ましいの？」

僕は、正直驚いた。

男が羨ましいだなんて、蒼ちゃんから言われるなんて思わなかったからだ。

「だって、男の子は思ってる事や言いたい事を友達と言い合える事が出来るんですよ。それに…」

驚いている僕に微笑みながら、でも少し寂しそうな目をしながら蒼ちゃんは言った。

「あんな風に告白する時も友達同士で協力し合えますから」

《素直に》や《協力し合える》等の、蒼ちゃんの言葉がチクチクと僕に刺さった。

「そんな事無いよ。男だって皆が皆、素直に言えるヤツとは限らないし。それに女の子の方が友達の絆が強そうだし」

何故か、今の言葉を言った自分に対して嫌気が差した。

「仲良い時は、深い絆が有るかもしれません。でも…」

蒼ちゃんは今も笑顔だけど、さつきからどこか寂し気な感じがした。

「あつ、でもじゃなくて…それに告白の時でも、自分の気持ちを隠して足引っ張り合う事も有るんですよ」

いつの間にか、蒼ちゃんの笑顔が元通りに戻っていた。

僕には、蒼ちゃんが今違う事を言いかけた気がしたけど、勘違いか

な。

疑問が頭をかすめたが、深く聞こうとは思わなかった。

「そうなんだ：女の子は複雑なんだね」

蒼ちゃんも、悩みが有るんだな。

僕が君の悩みを貰ってあげるよベイベー！

さあ、目を閉じて体を俺に預けて！

なんて、カッコいいセリフが言えたらな。でも男なのに、こんな事で悩んでるヤツに悩みを貰うよ、なんて言う資格なんて無いか。

つて、また卑屈な事を考えてるよ、僕。

ああー蒼ちゃんの羨ましがる《男の子》ってヤツになりたいなあ！

蒼ちゃんの体も預かってみたいし。

「ゴ、ゴメンなさい。いきなり暗い話して……」

心の中で妄想しながら叫んでいる僕に、蒼ちゃんは申し訳無さそうに言った。

「いや良いよ」

「ありがとう。あつ、欧介君は告白したい人とか居ないんですか？前から聞きたかったんです」

「ほひい？」

いきなりのストレートな質問に反応し切れず、気付いたら意味不明な言葉を返してしまった。

そんな僕の反応を見かねたのか、蒼ちゃんは僕の目を真っ直ぐ見た。

「欧介君は、告白したい人とか居ないんですか？」

「ぼ、ぼきに告白？」

誰だ、ぼきって？

トチっている僕の目を何も言わずに、真っ直ぐ見続ける蒼ちゃん。僕は、この表情と目に弱い。

この吸い込まれそうな目に見つめられると、何でも言っちゃいそう
で。

「僕は、居るよ」

ほら、やっぱり言ってしまった。
しかも、好きな人の目の前で。

「欧介君、好きな人が居るんだねえ」

「ま、まあね。蒼ちゃんいな、居ないの？」

「えっ、私？」

「うん…」

つておい、何聞いてんだよ…自分。

もし、蒼ちゃんに好きな人が居たらショック受けるだけなのに！

「欧介君が素直に言ってくれたから、私も言いますね」

蒼ちゃんは、僕の目を真っ直ぐ見て笑った。

「私は…」

好きな人が居るのか？
居ないのか？

どっちにしたって、僕は蒼ちゃんの答えを聞いたら、少しだけ前に進める。

何故かショックを受ける不安以上に、そんな根拠の無い自信を心のどこかで感じていた。

四ヶ所目 9

人間、緊張の極地に達した状態で物事が迫ると緊張感が和らぐのは本当らしい。

蒼ちゃんに好きな人が居ても、居なくても新しい一步を踏み出せる。今は、そんな心に根拠の無い自信が浮かんでいた。

「私には……」

そんな僕に蒼ちゃんは静かに、ゆっくりと呟いた。

前言撤回！

ダ、ダメだ。

カッコ良く自分の心情を表そうとしたけど無理だ。緊張し過ぎて、心臓が上下に揺れてる気がする。そもそも、自分自身が一歩先に進めるなんて自覚出来るわけ無いでしょ。

いつから変な自信持ちちゃうヤツになったんだ僕。

それに待てよ。

よく考えてみれば、僕に恋愛の話をするって事自体、僕の事を友達もしくは学級委員としてしか見てないって王道パターンじゃん。

そうだ、その通りだよ。

蒼ちゃんから見たら、僕なんて学級委員で知り合いの男友達Aだ。
いやイニシャルで言ったらO君かな？

それともS君だったり？

いや、この際イニシャルなんて何でも良いだろ。

蒼ちゃんの中の僕は、友達止まりなんだから！

恋の終わり、と言えば聞こえは良いが僕は最初から恋の舞台にすら
上がれてなかったんだ。

いや所詮こんなもんさ、恋なんて。

世の中には、叶わない恋の方が多いんだ。

それ以上に恋として成立しない思いが多い。

そつだ、いったい何人の男子学生が恋にすら成らない気持ち抱えて
消えていくんだろう。僕もその内の一人っただけじゃん。

そう、ただそれだけ。

だから、緊張する事なんて無いさ。

蒼ちゃんの口から出る言葉を聞いて、辛くなってもいつかは忘れら
れる。

だから最後まで聞けば良いさ。

コホン。

まるで僕が覚悟を決めたのを見計らった様に、蒼ちゃんは目を閉じ

て咳払いした。

そんな蒼ちゃんの仕草が、僕の心をチクツ刺す。

「私も好きな人が居ますよ」

一瞬、ドクンッと心臓が強く鼓動したがすぐに落ち着いた。

やっぱりなあ、居るに決まってたかあ。

蒼ちゃんの確定申告に一瞬心がウズいたが、その一瞬の後は僕の心は穏やかな方だった。

「あはは、やっぱりなあ。居るって思ってたからさ」

「えっ？ そうなんですかあ… 恥ずかしいです」

照れた様に唇を動かす蒼ちゃんの表情が可愛く、そして寂しく思える。

「それで、どんな人かな？ 蒼ちゃんの好きな人って」 止めれば良いのに、僕の口は独りで動いていた。

「えっ… えっと」

蒼ちゃんは、穏やかな微笑みを浮かべ僕から目を反らし机の上に置いた、蒼ちゃんの筆箱をトントんと軽く叩いた。

「実は好きな人って言ったのは、最近好きになりかけてる人が居るって意味なんです」

恋そのモノに幸せを感じている、そんな蒼ちゃんの笑顔が僕に向け

られた。

その幸せそうな笑顔が、僕の知らない所で蒼ちゃんに恋心を植え付けた男だけに向けられると思うと、僕の中に熱い何かが込み上がって来るのを感じた。

「ア、アハハ、蒼ちゃんゴメンよ。何か急に腹痛が…先に戻るよ」
「ええ、あのお、欧介君！どう…」

僕は、込み上がるモノを抑えきれなくなる前に蒼ちゃんの前から消えたくて、自分の手荷物や本を乱暴に掴んで駆け出した。
蒼ちゃんが僕を止める様に声をかけたのが聞こえたケド、止まるつもりは無い。

図書室から飛び出すと、込み上がっていたモノが抑えきれなくなり手荷物を握り締めたまま笑った。

図書館から出る時に楽しい物を見た訳でも、おかしい話を聞いてしまった訳でも無い。

ただ、笑いが込み上がって止まらなかった。

通行する学生が、変なモノ見るように早足で僕の真横を何人も通り過ぎて行っただが、全く気にならなかった。
一頻り笑うと教室に向かって歩いた。

一人、軽快な足取りで。

ふと、知っている気配を感じ前を見ると数メートル先に花君が僕の

方を見て立っていた。

「お疲れ様、花君」

僕は、花君に向かって元気一杯に手を振った。

花君は、いつもと変わらない笑顔を僕に見せてくれた。

「ちょっと聞いてよ。図書館に居たら、いきなり蒼：いや、楠木さんがさ…」

僕は、図書館での楠木さんとの話を花君に笑いながら話した。

何だか話していると、また笑い込み上がって止まらなくなった。

花君は、話ながら笑う僕に優しい笑顔をみせながら自分のズボンのポケットに手を入れた。

「まさかあお、楠木さんからそんな話を…」

僕は頬に柔らかい感触を感じた。

「欧介君は蒼ちゃんが大好きなんだね。良いんだよ、そうゆう気持ちには素直に出しても」

花君は、僕の頬と両目の下を、ハンカチで優しく拭き取ってくれた。

そんな花君の行動で、僕は初めて涙を流してる事に気が付いた。

「は…な君、何で知っ…」

「僕達、友達じゃん。だから分かるんだあ」

ハンカチの柔らかな感触と花君の言葉が合いなあって優しく響き、小さい頃に母さんが歌ってくれた子守唄の様な、そんな暖かな響きが僕の心に染みていった。

「ぐうう…花君、ゴメン…僕は」

「やっぱり欧介君は、僕の思った通りの人だよ」

「僕は…どうしよう…イヤツですが」我ながら、今の自分の言葉は的を得ていると思った。

花君は、僕をかい被っているだけだよ。

僕の本当の姿は、自分では何も出来ない卑怯者。

花君は僕をどんなヤツだと思ってるんだい？

そう花君言いたかったが、口から出るのは情けない泣き声ばかりだ。

「欧介、とりあえず今は落ち着く事を考えろ」

いつの間にか僕の隣に大河君が立っていた。

頭で何も考えられなくて、大河君が近付いてきていた事すら分からなかった。

「た、いが君？いつの間に」

「ほら良いから、いくぞ」

そう言うと、有無を言わず大河君は僕の腕を引つ張って何処かに向かって歩き出した。

もう僕の目に写る世界の全てが涙で不思議な感じに滲んで、何処に向かっているのか検討もつかなかった。

四ヶ所目 10

大河君に腕を捕まれて、何処かに連れられている僕。

いったい何処に向かっているのか、涙で視界がボヤけている僕には分からない。

未だに僕の頭の中には、蒼ちゃんの顔が浮かんでは消える。

我ながら未練がましい男だな。

踏ん切りが付かない自分に嫌気を感じながら力無く歩く。

突然、僕を引っ張っていた大河君が立ち止まった。

辛うじて目の前に見える視界から、生徒が下校時間まで自由に使える自習室の前に立っている事が分かる。

大河君は、無言でドアノブを捻り中に僕を連れて入った。

ボヤッと歪む視界から自習室の中は、大きなテーブルが中心に鎮座していて、テーブルに向かい合うように椅子が並べられてるのが確認出来る。

僕は立っているのが、やっとだったので目の前の椅子に崩れ落ちた。

「涙…拭けよ」

大河君はそう言って、情けなく椅子に崩れ落ちた僕の膝にハンカチ

を置いて窓際に歩いて行った。

僕は、申訳無いと思いつつもハンカチで涙と鼻水を拭う。

残っている涙や鼻水、そして未練を出しきる様に何度も拭いた。

その度に、ハンカチからかもし出される甘いヴァニラの香りが、鼻を優しくノックして気分が落ち着く。

僕が涙を拭き終わると、丁度花君がドアを開けて部屋に入ってきた。花君は僕と目が合うと、笑いながら手を振った。

だけど、僕は花君から視線を外して無視する。

花君は、元気付けようとして明るい笑顔や手振っている事は分かっていた…でも、今この瞬間そんな気分じゃない。

僕が目を反らしたまま居ると、誰かが（まあ花君しか考えられないけど）僕の対面に置かれている椅子に座った。

顔を向けると、やっぱり相変わらず笑顔をかべてた花君が座っていて、僕を見ていた。

何がそんなに面白いんだ、花君？

いつも笑って僕を見やがって。

イラつく気持ちに任せて、勢い良く窓際を見ると大河君が僕の方に体を向け手を組んで窓の外を眺めていた。

何を考えているのか、分からない大河君の横顔を睨んでいたら、ふいにハンカチのヴァニラの香りが鼻に蘇って、苛立つ心が穏やかに

引いていく。

「さてと、何が有った？」

突然大河君は、僕に問いを投げ掛けてきた。
しかし、顔は相変わらず窓の外を見続けている。

「えっ？何がって…何が？」

「昼休み、お前に何があつたのかと聞いた」

僕は曖昧に言葉を濁して、上手く誤魔化そうしたけど大河はそんな僕の逃げ道を潰す様にハッキリと言い、そして僕の方をゆっくりと向いた。

「ああそれは、僕が代わりに言お…」

「花、少し黙っていてくれ」

退路を断たれ固まっている僕をフォローしようと、花君が差し延べてくれた救いの手も大河君の一言によって彼方に消える。

今の僕は袋小路に追い込まれた泥棒猫状態！
つまり、今ものすっごいピンチです！

「俺は、お前の…欧介の口から聞きたい」

た、大河君、そんな真剣な顔で僕を見ないで。

大河君が、真っ直ぐ僕の顔に穴が空くぐらい直視してるから、胸が

緊張でギューンと収縮する。

大河君を意識してるとかそういう意味ではありません。「そうだよね…やっぱり、僕もちゃんと欧介君の口から聞きたいよ」

花君…君もか！

もう僕には、袋小路から逆走する力も、目の前にそびえ立つ壁をよじ登り飛び越えて逃げる力も残っていない。

正直二人に、僕の話聞いてもらいたくは無い。

自分が失恋した話なんて、誰が好んで話すもんか。

でも、二人は友達だ。

僕と関わってくれる人間。

大事な友達。

破れなかった殻を破っても良いかな。

いや、破らなきゃ蒼ちゃんを忘れられない。

「僕は、昼休み蒼ちゃんと図書館に居たんだ」

僕の口は、ごく自然に口走っていた。

今まで隠していた事が嘘の様に、ごく自然に。

「それで話が好きな人の話になって、つとというか蒼ちゃんに居る？
って聞かれて」

花君は、緊張している様な顔で僕を見てる。

大河君は、相変わらず真っ直ぐ僕を見つめていた。

「僕は好きな人が居るから、居るって答えたんだ」

窓から入ってくる、春から夏に変わりゆく風の薫りを感じ、僕は続ける。

「僕は、蒼ちゃんに好きな人が居るか気になったから…居るか聞いて」

あの時の出来事が、鮮明に浮かんでくる。

私は、好きになりかけてる人が居ます。

そう言っただけ照れた様に笑う、蒼ちゃん。

蒼ちゃんだけが知っている誰か。

僕の知らない誰か。

「蒼ちゃんは、居るって答えて」

また、僕の中に抑え切れないモノが込み上がってくる。

「欧介君、使ってよ」

その事を察したのか、花君はハンカチを僕に差し出してくれた。

花君の優しい心遣いに心が安らいで、込み上がっていたモノが消えていった。

ついでに、今度からは僕もハンカチを忘れない様にしよう、そう心に深く誓った。

「欧介、一つ聞いても良いか？」

「う、うん」

話を終え、花君のハンカチで目頭を軽く拭いていると大河君が口を開いた。

「お前は、楠木が好きなのか？」

「ええっと」

自分で決心して話したとは言っても、いざ面と向かって聞かれると固まってしまうし、言葉も濁してしまう。

僕はそんな情けないヤツです。

蒼ちゃんを好きになってただけでも、おこがましい。

「質問の仕方を間違えたな。欧介は、今でも楠木が好きなのか？」

そう質問した、大河君の目には、さっきより力が込められている。

「た、大河君？ いった…」

「素直に答えてくれ」

「僕は……」

その時、風の入ってくる音と僕達の話す声がかき消す、もの凄く大きな音を響かせて自習室の扉が開いた。

四ヶ所目 11

かなり大きな音を立てて開いた扉の外には、蓮がガムを食べながら腕組みをして立っていた。

僕達三人は誰も声を発する事なく、蓮を見ている。

そんな僕達の視線にたじろぐ事無く、むしろ堂々と腕組みを続け、挑発的にガムをクチャクチャと噛んでいる蓮。

そして、歩みを進めると共にドカドカと地面強く踏みしめる音を立てながら自習室に入ってきた。

そのまま、僕達が座っているテーブルの正面に備え付けてあるミニサイズの黒板の前まで歩いて来る。

「あのさ、蓮？」

無言で成り行きを見守っていた僕達を代表して、花君が代表して声をかけた瞬間、蓮は勢い良く黒板に向き直り板全体に付属のチョークで文字を書き始めた。

しかもかなり乱暴に殴り書きをしながら、大声で叫びだした。

「俺がア、今日からこのクラスを担当する事になったア、中村アツッ！」

（！？）

目の前で、手首を押さえて一人で悶絶している蓮。

僕は、今起きた事について全く分からず、思わず花君の方に顔を向けた。

視線を感じたのか、花君も僕の顔を見て二人で顔を見合わせて首を傾げた。

一応、大河君の様子も見したが、予想通り蓮に冷ややかな視線を送っていた。

「あああ！俺の親指と人さし指がアクロな動きをお」

多分蓮は、書くのに力が入り過ぎて人指し指と親指を黒板でイナバウワーしたんだと思う。

「ちつくしょう！グレートなＴＯみたいに決めようとしたのによお」

ああ、蓮は最近読んでるんだね。

英〇っちゃんの、Ｇティーチャ学を。

「おい！やりたかった事が終わったんだろ？早く出てけ」

蓮の一連の行動が分かって、少しホッとしたのも束の間大河君が、蓮に言い放つ様に言った。

「あああ、大河君。何もそこまで言わなく…」

大河君の言葉に、あああわしてしまう僕。

我ながら情けないです。

「欧介、黙ってる。お前の大事な話なんだぞ」

「確かに大事な話だよな」

えっ、花君まで！

そいえば、蓮が来るまでそんなシリアスな空気だったんだ。

シリアスな空気を作ってたのは、僕だけだ。

「お前ら、俺が出て行ってホントに後悔しねえんだなあ？」

「残念だが、確実にしないな。さてお帰りは彼方だ」

そう言うと、大河君は出入り口の扉を指した。

「後悔するぞ！マジで」

何故か蓮は必死に引い下がる。

一体、何が有るんだろうか。

「はっ、花、止めない気分？」

いつもは、助け船を出す花君も今日は申し訳無さそうに、うつ向いている。

「オースケ、無理すんな！俺の話聞きたいんだろ？」

「い、いや。その…あの」

今のこの部屋の空気では、蓮を相手にしない方が良さいんだろう。僕の話の聞かため、大河君と花君は来てくれたんだ。

でも正直、むっちゃくちや内容が気になる。

蓮がこんなに必死なんから、よっぽどの話だろうなあ。

「まあ、聞くだけなら…僕は」

僕は、誘惑に負けてしまった。

だって、気になりますもん。

「だよなあ！さすが、オースケ。分かってんなあ」

チッ！

大河君は、明らかに聞こえる舌打ちをした。
そんなに怒らなくても。

花君は、仕方ないなあと言って笑ってくれた。

「では、早速本題に行きますわ」

蓮は、両手をモミモミしながらニンマリ笑う。

チッ！！

また、明らかに聞こえる舌打ちを大河君は発した。

蓮、早く言ってくれよ。

もう大河君の我慢は限界なんだよ。

ヒヤヒヤするのは、僕だけだろうか。

いや、横目で花君を見ると同じ様にヒヤヒヤしてそうだ。

「大河、悪い子には教えてやらないぞ」

蓮、要らないから。

そんな挑発、今要らないから。

更に僕のドキドキヒヤヒヤ度は加速する。

蒼ちゃんへの、気持ちの様に…。

我慢の限界に達したのか、大河君は立ち上がって出口に歩き出した。

「発表するぜ！俺様が、百合女と合コンを取りつけてやったんだよ」

（！！！！）

人間の体は電気信号で動く。

何日か前にそう聞いたが僕は疑っていた、だけどその事が今確信に変わった。

四ヶ所目 11（後書き）

感想や、意見をバシバシお待ちしております。

和紙でした、では!!

四ヶ所目 12

人間の神経に伝えられている電気信号は、どのぐらいのモノなのか僕には検討がつかない。

でも人間には電気信号があるんです。

それを確信できました。

何故なら、合コンが有るんですから。

ヤバイ、自分で何言ってるか分からなくなってきた。

一人でパニくる僕の目の先では大河君が、出口に一直線に向かっていく。

「た、大河君！どこ行くの？」

花君は立ち上がったて、歩く大河君に叫んだ。

「くだらない、そして付き合ってられない」

大河君は、立ち止まって首だけを向けた。

「へっ！大河は、合コン行くのがハズいんだろ？正直に言えよ」

「恥ずかしい？笑わせるな。俺は興味が無いだけだ」

蓮の挑発的な言葉を易々とかわし、鼻で笑い返す大河君。

「興味無いだあ？お前、それでも男かよ！日本男子なら女の二人や三人、いや四人以上モノにしるや」

蓮：日本男子がそんな価値観持つて無いと思うよ。

「馬鹿馬鹿しい。それに、お前が日本男子と言葉を使う事自体、甚だしいな」

大河君は、言い終えるとまた歩き出した。

「んだあコラ、待て大河！」

蓮は、指を痛めていない左手でかなり強く黒板を殴り付けた。

僕は、何も出来ずに身を任せてる。

いや身を任せてちゃダメだ、僕が蓮に説明しなきゃ。

僕のせいで三人がこの場に居るんだから。

僕が言葉を放とうと声帯に力を入れた瞬間、花君が立ち上がった。

立ち上がった花君に、僕らの視線は注がれる。

「いい加減にしてよ…」

小さな声だったけど、辛うじて聞き取れた。

「花あ、どした？」

蓮は、少し驚いた表情で聞く。

「いい加減にしてくれって、言ったんだ！」

花君が怒った様な強い口調になるのは、三津高以来だ。

「花…」

大河君は、先程とは一変して申し訳なさそうな顔をして席に戻ってくる。

蓮も、黒板から離れテーブルに歩みよって来た。

僕は、自分が中腰になっている事に気付いて慌てて席に座り直した。

「僕達は、何でココに居るんだよ」

「それは…その」

僕は言葉を続けられない。

「俺は、知らないんだけど…」

テヘッと頭に手を乗せ笑う蓮。

頼むから今だけは、雰囲気を読んで欲しいよ。

「だったら、自分の話一点張りじゃなくて、少しは聞いとうよ…」

ほら、怒られた。

「き、聞く暇が…」

「一番最初に聞けば良いじゃないか！」

「でもよお、合コンが…」

モゴモゴと言葉を濁らせる、蓮。

「すまなかつたな、花」

大河君は、反省しているのか謝った。

ちよつと待ったあ。

大河君が謝った？

かなり珍しい事が起きたから、僕はびっくりした。

あの大河君が、謝ったんだから。

蓮も驚きを隠せない様子で、目をパチクリさせている。

「良いよ。分かってくれば、もう」

花君の声のトーンもだいぶ戻ってきた。

花君の笑顔が、無性に恋しくなるのは何故だろう。

とにかく、花君は怒らせない様にしよう。

心に堅く誓った。

他の二人も絶対怒らせたくないケド。

「それで、もし良かったら…そのお、話を俺にも聞かせて貰えたら嬉しいッすよ」

蓮は、頭を軽く触り苦笑しながら花君に聞く。

「それは、僕が話すよ」

僕は、立ち上がって蓮を見る。

「オースケが教えてくれんのか。悪いな」

僕に、ホツとした様に笑いかける蓮。

「いや良いよ、僕の話聞いてくれてたんだからさ。二人は」

蒼ちゃんとの話を。

「そっか。オースケ、お前の話聞かせて貰うぜ」

蓮は、髪を掻き上げ僕を見据える。

「僕も、もう一度聞かせて貰うよ」

花君は、あのいつもの優しい笑顔を見せてくれた。

花君の笑顔は、マイナスイオンより癒し効果が有るなあ。

「落ち着けよ」

大河君は短く、でも優しさが感じられる言葉をかけてくれた。

ありがとう

花君。

大河君。

蓮。

三人に、話を聞いてもらえる僕は幸せなヤツだよ。

友達の有り難みを改めて感じて、僕の頭には昼休みの情景が広がった。

四ヶ所目 12（後書き）

やっと40話目に辿り着きました。

我ながら、遅すぎると感じる今日この頃（苦笑）

感想やコメントをバキバキお待ちしています。

和紙でした、では！

四ヶ所目 13

僕は、改めて昼休みの出来事を話した。

もちろん、さつきよりかは落ち着いて話せたし、より詳しく話せたと思う。

多分。

三人は、それぞれが僕を気遣っている様子で最後まで聞いてくれた。

「へえー、オースケが蒼つちをねえ」

蓮は、僕が話を終わると楽しい事が始まったかの様な明るいトーンで口を開いた。

「青春してんなあ、さすがオースケ」

さすが、って僕にその言葉は似合わないよ。
そう言おうと思ったけど止めた。

「俺と花は、その話を聞いてたんだ。お前のお陰で余分な時間がかかったな」

大河君は、蓮を睨んで足を組んだ。

冷やかな視線に、どこからか冷たい空気が流れる。

いや、大河君が流してるんだけどさ。

「余分な時間って、焦る事無えよ。ゆっくりしようぜえ、どうせ午後の授業は始まってんだし」

そういえば、そうだ。

って、もう午後の授業開始して二十分経ってるじゃないですか!?

んああ、僕のせいで三人をまた巻き込んでしまったあ。

ってか、学級委員ってクビになったりするのかな?

いやいや、今そんな自分の進退を考えてる場合じゃないし。

「ゴメン、テスト前なのに僕のせいで」

僕は、当然謝まるしか無い。

いや、申し訳なくて謝らずには居られ無かったと言った方が正しい。

「気にしないで、欧介君。テスト勉強はバッチリだからさ」

親指を立てて笑う花君。

僕を励ましてくれる為の言葉なのかは、分からないけど、僕は花君の言葉に救われる。

いつも、今現在もね。

君は、僕にはもったいないぐらいの人だよ。

「そうだ、試験の事は気にするな。俺と花はすでに終えているからな」

大河君は、まるで当たり前だと言う様に軽く鼻で笑った。

僕の中で大河君は、高校に通う必要が無いのかと思ったりしている。つい最近、大河君が図書室で本を片手にノートに何かはしり書き読書をして居る所を偶然見掛けた。

もしかしたら、テスト勉強しているのかと思って、そつと覗くと英語の様な何やら分からない外国の文字をスラスラと書いていた。そう、丁度医者が使っ様な英字みたいだ。

それを含め、まだまだ大河君についても謎だらけだ。

でも、僕は大河君にこれから学校に来てほしいと思ってる。

特に今、テスト前には大河大先生の力が必要過ぎる。

「テストも授業も、どうでも良いだろお」

蓮は、いつもと同じ様にカラカラと笑ってるくれた。

テストも授業も、どうでも良くは無かったけど、あえてツッコまずスルーした。

だって、こんな近くに諦めてる仲間が居たんですもん。

二人なら、怖くないさテストなんてね。

成績の結果は、ガクガクもんだけど。

「なあオースケ、思ったんだけどさ」

蓮が、僕をマジマジと見た。

「何かな？」

「いや、まあ待ちな。答える前に一つ聞かせてくれ」

僕は黙って頷いた。

「お前さ、蒼っちの事諦めんの？」

大河君と同じ様な質問だ。

だけど答えは、もう決まっている。

「僕は諦められないよ。蒼ちゃんのこと…」

言えた。

こんなに簡単に言えた。

何を躊躇してたんだ、今まで。

僕の真っ暗だった世界に一筋の光が差した。テレビで言うような、こんなカッコいい事は言えない。

僕的に言うと、また一つ前に進めた。

それ以上でも、それ以下でも無い。

「だよな。諦めるなんてモッタイ無いぜ！俺思っただけどな、蒼っ

ちは結構欧介の事気にしてると思っぜ」

蓮が僕の隣に来て、バシッと掴んで肩を組んだ。

「えっはあ、そんな事はあ」

そんな事無いよ。

僕なんて、学級委員の片割れですもん。

でも、もしそうなら良いなあ。

もしそうだったなら。

「何キヨドってんだよ。ベタ惚れだねえ」

僕は肩を組んで笑う蓮と一緒にユサユサと揺れている。

蓮に揺らされているの間違いか。

「蓮は、何でそう思うの？」

僕は我慢出来ずに、蓮に聞いてみた。

「へへん！それはな…」

蓮は鼻を鳴らして誇らし気に笑い、

「お前が合コンに参加するなら教えてやるよ」

耳元で僕にしか聞こえない様に、囁く様に言った。

「えっ、僕が男と女の愛のコロセウスに入って良いの？」

僕も、口をついて出てしまった言葉を蓮に囁き返した。

おいおい、何言ってるんだよ僕は。

「コロセウス？ぶはあはあ、欧介やる気満々だなあ」

僕の肩から手を放し腹を抱えて笑う蓮。

《やる気》は、もう何年も前から有ります。なんちゃって。

「おい、二人で何話してる」

顔をあげると大河君が、疑う様な眼差しで僕と蓮を見ている。

「いやあな、欧介が蒼つちを絶対俺の女にする！って言ってるんだよ」

えっ、そんなデカイ事言ってるのはい言ってるじゃない！

「欧介の目が遊いでるのは何故だ？」

更に強い疑念を込めた視線が僕と蓮に襲いかかる。

「知らね」

そんな大河君の疑念に、テヘツと笑って答える蓮。

明らかに、苦しいでしょ今は。

「何か、コロセウスとか聞こえたケド…」

花君も少し心配そうな顔をして僕と蓮を見ている。

「ああ、コロセウスってのは闘技場だよ。確かベネゼエーラの」

闘技場は分かるでしょ、高校生だし。

ってか、ベネゼエーラ違い！

何処から出てきたんだよ。

「ロ、ローマだね？しかもコロッセウムのハズ…」

「こ、細かい事は気にすんなあ。とにかく欧介の恋が叶うよう願おうぜ」

結局、強引に僕の話に繋げちゃうのかよ。

もうバレてるよ、絶対。

「お前の話は納得出来ないが、欧介の想いには納得した」

大河君は、椅子を軽くひいて足を組み直す。

「大河君、いろいろゴメン。ハンカチは洗って漂白してから帰します」

「ああ。漂白はしなくても良いから」

大河君、僕の話聞いてくれて嬉しいよ。

「僕も、欧介君の話が聞けて良かったよ。ありがとう」

ありがとうは、要らないよ。

「僕の方こそ、ありがとう花君」

花君には、ありがとうで良い表せないぐらいの感謝だ。

でも、僕のボキャブラリーでは《ありがとう》が精一杯です。

「オースケ、お前なら蒼つちをゲット出来るさ。俺あ、そう思う」
蓮はバシッと僕の背中を叩く。

突然の強い衝撃を予期してなかったので、僕はむせ込んだ。

「おつと悪い、でも男なら背中にパンチ喰らっても、叩かれても笑
つてみせるよ」

僕の顔を見て、ニンマリ笑う蓮。

「蒼つちが、お前の女になったらお前の背中で守らなきゃイケない
んだからな」

「蓮……」

「なんてなあ。あと、合コンはこの四人で行くからよ」

コソッと僕に耳打ちする蓮。

ウソお！

どうやって？

どう転んだら、このメンバーで行けるんだよ！

「さてと、教室に帰ろうぜ。俺達の事は学級委員様が弁解してくれるらしいからな」

最後の大仕事キター！。

多分、下ろされるんじゃないか学級委員。

「期待してるよ、学級委員さん」

花君は、楽しそうに笑う。

僕は嫌なドキドキ感を感じ苦しい笑いを浮かべる。

「見物だな、欧介の修羅場」

楽しんじゃってるよね、大河君！？

更に嫌なドキドキ感は、大きくなる。

「う、うん。学級委員としても恋も頑張りまあす」

苦し紛れに何言ってるんだよ、僕ちゃんは。

「ははっ、欧介は楽しませてくれるぜえ」

楽しませてるつもりは、あまり無いんですが。
でも、僕だって楽しまなきゃ損かもね。

僕だって、高校生してんだからさ。

二度目だけど。

でも、蒼ちゃんに出会えた。

大切な三人にも。

これから、どうなるのかな？

明るい道が拡がってるんだろうか。

それとも…？

僕はそんな事を思いながら、三人と自習室を後にした。

四ヶ所目 13（後書き）

最近執筆が進んでいます。

まだまだなので、頑張りたいです。

部屋の窓から、秋の香りが。

感想やコメントを、お待ちしています。
いつまでも。

和紙でした、ではあ！

四ヶ所目 14

今僕達は、教室へ向かって向かっている。

授業中なので各教室からは先生の話す声が聞えてくる。

当然廊下には、僕達四人の他は誰も歩いていない。

当たり前と言えば当たり前だけど、僕達四人以外消えてしまった様で、何だか寂しい。

でも見方を変えれば、僕以外に三人も居るんだ。

そう思えば、自然に寂しさが消えていく。

そんな事を思って歩いていると、いつの間にか教室が目と鼻の先になっっていた。

「ねえ、どうやって遅れた理由を説明するの？」

花君が、少し不安気な様子で僕を見た。

えっ、何故僕を見る？

ホントに僕が説明するのかよ！

理由など全く考えてないですぜ。

「と、突然の腹痛に苦しんでた作戦で、乗り切ろう」

苦し紛れに僕は提案する。

突発的に浮かんだ作戦とは言え、学級委員が考える作戦がコレってのも我ながら悲しい。

そして、ネーミングセンスが限りなくゼロだ。

「つまり腹痛の演技か。出来るんだな、欧介？」

大河君は、見るからに高そうなブランドの腕時計を見て僕に言う。

「うん、腹痛で苦しんでた芝居ぐらいなら何とか」

「一応言っておくが、授業終了まで残り約10分だぞ。つまり40分もお前はトイレに居たという事になる。ちなみに俺達三人もだ」

「うっ、うっ、それは」

「僕達三人は、用を済ませた欧介君を保険室に運んで、一緒に居たって事にすればアリバイはせいり……」

「いや」

花君は、我ながらナイスなアイデアだ！的な笑みを浮かべて手をポンと叩いたが大河君の言葉に遮られた。

「アリバイは不成立だな。それだと後で担任が保健医に事情を聞いてしまう場合がある。そして、その可能性は高い」

「ちえ」

花君は、残念そうに顔をしかめた。

いや、あの、いつからアリバイとかそんな単語が飛び交う様になった？

「バア力だなあ、お前ら」

今まで黙っていた蓮が、頭を手の後ろで組んだまま笑う。

「聞き捨てなら無いな、馬鹿に馬鹿と言われるのは」

大河君は、鼻で笑うと冷たい眼差しで蓮を見据えた。

「ま、まあ大河君。何か有るの蓮は？」

僕は大河君をなだめつつ、蓮に話を聞いてみる。

もしかしたら、状況を打開する助け船が出るかもしれない。

「俺は、欧介の突然の腹痛に苦しんでた作戦で良いと思うぜ。ネーミングもなかなかだ。ただな、足りないのは真実味なんだよ」

「真実味？」

何だか嫌な予感がしてきた。

「そうだ。だからな、この俺様が真実味っていうスパイスを加えてやるよ」

ガシツと僕の両肩を掴んで、今まで見た事も無い優しい微笑みを浮かべる蓮。

「ちょ、蓮。そんな怪しさ満天の優しい笑顔今まで一度だって浮かべた事無いでしょ。ってか真実味？スパイス？」

赤い奴は、怯える僕に更にニンマリ笑う。

「ははあ！許せよオースケ！俺達四人の為！そう正義の犠牲なんだ」
「ふええ？」

蓮の顔には、数十秒前に見せていた優しい笑みは消え失せ、今や悪意が見え隠れする邪悪な笑みが張り付いている。

「だ、大丈夫。きつと上手く出来るから！嫌だぐう！」

懇願する僕の体を、強烈な電流が腹部から全身に向かって駆け巡り支配した。

蓮：嫌だつて言っただじゃん。

痛みは無い、むしろ気持ち良い。

天にも昇る気分だ。

おや？

廊下に居るはずなのに、やけに景色が黄金色だ。

あらら、何で目の前にもう一人の僕が寝てるんだ？

「ちよい蓮、今のは痛かった。痛かったぞお」

僕の渾身の言葉にも目の前の三人は全く反応しない。

つか、聞こえて無いみたいだ。

それに、いつの間にか僕の両脇には羽の生えた子供達が居る。

微笑みながら天を指差す羽の生えた裸の子供達。

えっ何、また僕を天に連れて行くんですか？

ウソお、今度はルーベ○スの元に？

嫌だ、まだ行きたく無い！

謎の子供達に、強引に連れて行かれそうになるのを、必死に抵抗する僕。

そんな緊急事態の僕を尻目に、三人はグッタリしている僕の本体を両脇から抱えた。

「おっし、オースケには悪いけど俺の飛び膝蹴りも決まったし完璧だな」

満足気なセリフを吐く、蓮。

見せてやりたい、今の姿を。

「やりすぎだよ、蓮……」

花君、さすがです。

もっと言っちゃってよ。

ってか、僕の体の異変に気付いて！

「でも飛び膝蹴りよりか、痛恨の一撃って感じだね。フフッ」

花君は、無邪気に笑う。

フフッて！

フフッて笑い事じゃないぜ花君よお。

「むしろ、急所突きだな」

大河君はボソツと溢した。

いや要らないから、そんなドラ○エ的なノリ。

ってか大河君も、ドラ○エ経験者？

つつか、頼むから僕を本体に戻してくれえ！

そんな僕の悲痛な叫びはやっぱり届かず、三人は僕の本体を肩で支えながら教室に入ってしまった。

相変わらず微笑みながら天へと導いて行く、子供達の手を振り切り僕も三人の後を追いつけた。

四ヶ所目 15

起き…下さ…。

ねえ、大じ…夫？

お…け君っ…。

誰だい？

僕を呼ぶのは。

誰だい、僕を揺らすのは？

周りは真っ暗だ。

そりゃ、目をつぶっていれば真っ暗さ。

天使は、どこに行ったんだろ？

僕は逃げ切れたのか？

もしかして、もう天界運ばれたとか？

ああ、分かった起きるから！

だから、体を揺すらないで。

僕的に揺すられるより、揺らしたい。

女の子が持つてる神秘のマシュマロを。あんまり大きいよりも、手に余るぐらいが揺らしやすそう。
なんちゃって。

だあ分かってる、今目を醒ますから。

目を開けると、一瞬視界がボヤけたが、真横に立ってる人の姿は捕える事が出来た。

僕が、いつも想って乞がれている天使が横に立ってて、僕の肩の上に手を乗せていた。

「うくっ、戻れたんだ」

はつきりと、腹の痛みを感じる事が出来てるから戻れたんだろう。

「ああっ、良かった。欧介君が目を開けた」

蒼ちゃんは、微笑みながら僕の顔をマジマジと見る。

キスしてくれたら、完全に目覚めるよ。

本当の《俺》が！

そう言おうとして、辞めた。

キャラ変わり過ぎだし、恥ずかしくて言えないよ。

「やあ蒼ちゃん、昼休み振り。皆は？」

僕は、辺りを見回してマイ天使に聞く。

誰も居ない、僕と蒼ちゃんだけが教室に存在していた。

「皆さん、帰りました。下校時刻は過ぎてますよ」

そう言つて、蒼ちゃんは優しく僕の肩を撫でた。

その柔らかい手の感触が、堪らなくてクセになりそうだ。

この天使になら、連れて行つて貰いたい。

「嘘！？そんなに寝てたんだ。ゴメン、また学級の仕事押し付けちゃて」

「良いんです。私、結構好きですから学級の仕事」

『私、大好きですから欧介君の事』

そう言つて貰えたら。

でも、蒼ちゃんには気になる人が…ああ、辞め辞め。

辛気クサイ事なんて考えないでおこう。

「欧介君、もう大丈夫？かなりお腹痛かったみたいだったから」

心配そうな表情で僕の腹部を見る、蒼ちゃん。

そんな心配そうな顔に見入ってしまう僕。

何でこんなに綺麗な顔をしてるんだろ？

何でこんなに柔らかかそうな頬をしてるんだ？

何で、こんなに蒼ちゃんが好きなんだろう？

僕は触るつもりは無かった、だが無意識に蒼ちゃんの頬に触れてしまった。

温かくて柔かい感触と共に、驚いた顔をした蒼ちゃんと目が合ってしまう。

僕は、自分が起こした出来事に焦りながら誤魔化す。

「あえつと、蒼ちゃんの綺麗な頬にまつ…まっげが付いてたからさ…take outしよう」と

「ええ持ち帰るんですか？私のマツゲ」

僕の言った言葉に驚いた様な表情をする蒼ちゃん。

それ以上に、僕自信が驚いている。

take outって何？
どっから出た？

「ゴメン」

ドキマギしながら、とりあえず謝る。

絶対変態だって誤解されたな。

マツゲ持ち帰りだなんて…。

「フフフッ」

蒼ちゃんは、口元に手を当てて笑う。

その仕草が何ともまた…萌え。

でも変態な自分の発言に…萎え。

「欧介君って、やっぱり面白いね」

蒼ちゃんが、フツと笑いながら僕を見つめる。

僕は、照れて何も言えない。

「欧介君と一緒に居れたら楽しいんだろうな」

「ふえ…」

蒼ちゃんの口から出た言葉が、僕の思考を乱す。

「あの、変な意味じゃなくて…その、私本当にそう思うから」

蒼ちゃんは、頬をピンクに染めて上目づかいで見る。

「そそそ、そうかな？ たの、た、楽しいかな？ 僕といしょ、一緒に居ると」

落ち着け！

いや、落ち着けんよ。 いやいや、落ち着け自分！

少しでも気を抜くと、廊下に出て叫んでしまいそうだ。

「いめんなさい、変な事言って」

「へ、変な事じゃないよ。僕すっごい、これ以上無いぐらいヤバイぐらい嬉しくて」

恥ずかしくて下をうつ向く僕。

蒼ちゃんに聞かせてあげたいよ。

僕の高まつてる、鼓動を。

その後、僕と蒼ちゃんの間には静寂が訪れた。

蒼ちゃんの方をチラッと見ると、彼女もうつ向いていた。

何か話さ無いと、気まずい空気にだけはしたくない。

そう思えば思うほど、言葉が出ない。

でも、何か話さなきゃ。

僕が脳内で話題を探していると、蒼ちゃんが携帯を取り出した。

「えっと、そろそろ私帰ります。テスト勉強もしなきゃいけないし」

ニコツと笑い、蒼ちゃんは立ち上がった。

蒼ちゃんが帰る。

やっぱり気まずかったのかな？

僕が黙ってたから。

変な事言っちゃったし。

「待つて」

僕は、勇気を振り絞る。

少ない勇気かもしれない、でも振り絞るぐらいは有る。

「一緒に帰ろうよ」

僕の言葉に、蒼ちゃんは少し驚いた様な顔をした。

「はい。帰りましょう」

優しく笑ってOKしてくれた。

二人だけで帰るのは、初めてだ。

何か、ロマンスが起きる気がする。

根拠は無いけど、そんな気が。

四ヶ所目 15（後書き）

最近風邪が流行ってますね…。

そうです、私は風邪をひいています（苦笑）

読んで頂いた皆さん、体調には御気を付け下さい。

評価やコメント、お待ちしております。

風邪をひいた和紙でした！

では、ゴホッ！

四ヶ所目 16

二人で夕暮れの中、下駄箱を出た。

残念ながら手は繋いでいない。

それに僕は、蒼ちゃんが校内用のサンダルから皮靴を履き替えた時、本気でテイクアウトしようとサンダルに手を伸ばしかけたが、危ういトコロで自制した。

こんなテンションで無事帰れるのか？

一人で苦笑いを浮かべて居ると、蒼ちゃんが何か呟いた。

「えっ？」

僕は、彼女が何を言ったのか聞き取れなかったから聞き返す。

「欧介君のテスト勉強の調子を聞いたんです」

蒼ちゃんは、僕の顔を見た。

夕日で肌が黄金色になってる、蒼ちゃんは美しい。

夕日の光を宿してる瞳が特に。

「あの…聞いてますか？」

蒼ちゃんは少し眉をひそめた。

「ゴメン…夕日が眩しくてさ。テストの調子は、どうかなあ」

正直全然！

諦めてるっすよ、ハハッ！

とは、好きな人の前では言えない。

「蒼ちゃんは？」

「私は、まあまあです」

彼女は、少し頬を緩めます。

まあまあ〓結構出来る。

この方程式は、18年生きてれば嫌でも分かる。

「でも、数学の一次方程式の応用が分からなくて」

ああ、そいえば数学テストの最重要課題だったなあ。

まあ僕には、二度目の数学だから少しは分かるけど。

「僕は、英語の和訳が解らないトコが有ってさ」

二度目の英語だけど、さっぱりだ。

「私、英語なら分かりますよ…多分」

蒼ちゃんは、笑顔を浮かべた。

蒼ちゃんが、英語に自信が有るのは初耳だ。
そつえば、英語の時間に英文を滑らかに訳してたなあ。

「蒼ちゃんは、英語得意なんだ」

「得意って訳じゃないケド、他の科目よりは分かります」
やっぱりな、なら教えて貰おうかな。

「蒼ちゃんの訳は綺麗に訳されてて、分かりやすいよ」
いや、そんな事言えないよ僕。

「そんなあ…綺麗だなんて」

ダメだ、逃げたら。

自分の思った事を伝えなきゃ。

気付いたら、僕と蒼ちゃんは最寄りのバス停の近くまで来ていた。
太陽は、もう沈んでいた。

そのせいで、蒼ちゃんが顔が見辛い。

今どんな顔をしてるんだろう？

よしっ、言おう。

「あのさ…もし良かったら、良かったさ…」

僕なら言える。

帰るのだって誘えたんだから。

ドキドキする鼓動を抑える為、深呼吸する。

「えっ？」

日が無いから、彼女の顔は見辛い。多分、キョトンとした表情を浮かべてるんだと思う。

「僕に英語を教えて欲しいんだ。今日家に帰ったら電話するからさ……良いかな？」

最高調の心拍数だ。

蒼ちゃんに聞こえてるかも。

そう思うと更に、高くなる。

「はい、喜んで教えます」

優しい声と共に、バスのライトで照らされた蒼ちゃんの笑顔がはつきり見えた。

「い、良いの？」

僕が言葉を言った瞬間、乗車するバスが到着した。

搭乗口のドアが、空気が抜けるを立て開く。

その音が、何故か《やったぜえー》と聞こえる。

興奮でおかしくなったか、僕？

バスに車内に入り空いている席を見付け二人で座った。

彼女が座った瞬間、色の白い太股が一瞬だけ見えた。

出来れば、秘密の布トライアングルも見なかった。

いやいや、止めておこう。

そんな事を考えてる僕の隣で彼女は、紙に何かを書いていた。

僕は喜びを噛み締めながら、蒼ちゃんの横顔に見とれる。

少しして、バスの運転手が泉区美坂の到着をアナウンスした。

蒼ちゃんは、照れた様な笑いを見せて僕の手にもメモを渡した。

「欧介君、これ。またね」

そう言つて、蒼ちゃんは降りて行った。

手にメモを握りながら、蒼ちゃんを見送る僕。
体温が上昇していくのが分かる。

熱を計つたら確実に37度は有ると思う。

僕は蒼ちゃんの残り香を味わいながら、メモを見た。

そこには携帯番号とメールアドレスが記してあった。

《夜の電話が楽しみです。 蒼》

それ以上に、最後のこの言葉が可愛く思えて堪らない。

「よっしゃあ」

僕は、大きくガッツポーズをして流れていく景色を眺めた。

数時間後の蒼ちゃんとの電話の事を考えると、僕のテンションと体温が高まり、大好きな気持ちも膨らむ。

今日は、昼間までのクヨクヨしてた僕がマジでバカみたいだ。

自分のハートがどんどん強くなっていく、そんな事を思い、下車を知らせるボタンを押した。

四ヶ所目 16（後書き）

こんばんは、和紙です。
無事風邪が治りました。

その勢いでランキングサイトに登録しました。

読者の皆様、よろしければコメントや感想、ご指摘をお願いします。

現実世界は、もう冬がやってきています。

しかし作品の中は、もうすぐ梅雨（笑）

更新頑張ります。

和紙でした。
では！！

四ヶ所目 17

携帯を握る手が震えて、しかも汗ばんできた。

あともう一回深呼吸したら絶対蒼ちゃんに電話しよう！

そう思って、既に十数分が過ぎてる。

バスを降りてから、僕は猛ダッシュで家に帰った。

家についた時、呼吸の乱れている僕の姿に母さんは驚いてた。

それから素早く風呂にも入ったし、速攻でご飯も胃袋にダイブさせた。

そのせいか、さつきから腹からグオオーと不吉な音が…。

ま、まあ気にしないでおこつ。

何はとも有れ、そこまではかなり順調だったのに。

ここにきて、最後の砦の発信ボタンが押せない。

磁石の同じ極を合わせると反発する様に、何故かボタンが押せない。

もう、八時半だ。

タイムリミットが迫っているんですよ。

出来れば、夜遅くに電話したくない。

蒼ちゃんの一日のリラックスタイムを邪魔したくないし。

彼女のプライベートな時間だ。

蒼ちゃんは、どんな部屋着なんだろうなあ。

もしかして、ネグリジエですかあ？

透けてたりしたり？

ブラちゃんは…ストップ！

イケない妄想よりも、電話をしなきゃ。

夢中で何考えてるだよ、僕は。

よ、よし！

でん、電話だあ。

今から、でんううっ！

そう決意を固めた瞬間、意識の外に遠ざけていた尿意を我慢できなくってトイレに走る。

自分のナイアガラで綺麗なアーチを描き、気分を落ち着かせた。

いやあ、至福の時ですよ。

なんて独り言を溢してしまう。

部屋に戻ると、携帯がメールの着信を知らせる紫色のライトを点灯させていた。

もしかして、蒼ちゃん！？

急ぎ過ぎて本棚の角で足の小指を強打しながら、ヨタヨタと駆け寄った。

携帯を開くと、メールの送り主は花君だった。

《こんにちは！欧介君、お腹の調子はどうかな？蓮がムチャしちゃうたよね（苦笑）

》

花君は心配してくれてるみたいだけど、蓮のおかげで蒼ちゃんと帰れたんだから、ノープレさ。

《心配してくれて、ありがと。でも、むしろ蓮に感謝してますよ）笑）それより今から、蒼ちゃんに電話します》

感謝、そして軽く自慢を込めつつ花君にメールを返す。

その勢いのまま、蒼ちゃんに電話をかけた。
やっぱり勢いって大事だ。

とは、言ったものの内心ドキドキでヤバイっす。

トゥルル。

ああ、ついに呼び出しちゃってる。

トゥルル。

明るい感じのテンションでいこうかな。

トゥルル。

それとも、落ち着いた感じでいいこうか。

トゥルル。

いや、やっぱり自然な感じでいけば良いか。

トゥルル。

ちよつと遅いなあ、蒼ちゃん。

トゥルル。

もしかして忘れてるとか？

トゥルル。

た、頼むから出てください。

トゥ…。

「はい、もしもし」

僕の切なる願いが通じたのか、蒼ちゃんと繋がった。

「もしもし欧介、いやあつと真田欧介です。こんばんは」

「こんばんは、欧介君。ごめんなさい電話に出るのが遅くれてしまつて」

蒼ちゃんの柔らかい声の響きを聞いた途端、僕のドキドキとテンションが大爆発した。

四ヶ所目 17（後書き）

もうすぐ師走ですね。

皆様、最近特に寒いですから風邪には気を付けて下さい。
私の部屋は日が当たらないので、すでに師走です（苦笑）

サムサニマケズ（宮沢風）、修正液の更新頑張りますので、是非ともコメントや感想をお願い致します。

和紙でした、では！

四ヶ所目 18

電話が繋がって蒼ちゃんの声にドキドキ過ぎな僕。

まだ二言三言しか蒼ちゃんの声を聞いてないけど、甘い響きが耳から入り直接脳に響いてくる。

「あの、もしもし欧介君？聞こえてますか？」

「う、うん。ばっちり蒼ちゃんの声聞こえてるよ」

蒼ちゃんの声しか、聞きたくないから。

なんて、言えない。

「それなら良かったです。早速英語のテスト勉強のポイントを教えますね」

蒼ちゃんは、自信有り気なトーンで話す。

そのトーンに自慢する様な、イヤらしさは感じない。

むしろ頼りになる感じがする。

「どこが解らないんですか？」

蒼ちゃんは、優しく問いを投げてくれた。

何だか、幼い時に大好きだった保母さんの雰囲気似てる。

もう何年も前だ。

あつと、今はそんな回想に浸ってる場合じゃない。

一言でも多く、蒼ちゃんの声を感じよう。

「未来形の含んだ長文の和訳と、あと重要な範囲が何処なのか聞いてなくてさ…」

やべっ！

言い終えたそばから、つい口を滑らせてしまった事に気付く。

テストの重要な範囲の話は、明日にでも大河君に聞こうと思ってた。

蒼ちゃんには、こんな基本的な事も聞いてないなんて知られたく無かった。

それなのに、つい話をしてしまった。

蒼ちゃんには、どうしても素直に答えてしまふ。

この事は前から感じてる事だけど。

もしかして、恋する男ってこんな感じなのかな？

「未来形の長文とテスト範囲ですね。分かりました、聞いてて下さい」

蒼ちゃんは、僕のバカっぷりを聞いても笑う事は無かった。

多分、気を使ってくれてるんだと思う。

「まず未来形から……」

僕の近い未来にも蒼ちゃんが一緒に居て欲しい。

そう思いながら、彼女の優しさにまた一段と好きな気持ちを重ねた。それから僕は、蒼ちゃんの甘くて柔らかい声に導かれ英語のポイントと範囲を理解した。

「蒼ちゃんホントにありがとう。むっちゃ解り易かったよ。英語の才能有るね」

お世辞では無く、マジでそう思う。

「そんな事はないですよ、普通です。それに欧介君が英語のテストで良い点を取ってくれば私も嬉しいから」

蒼ちゃんは、少し照れたみたいだ。

そんな蒼ちゃんに、萌えちゃう僕。

是非、目の前で照れてる姿を見たい。

それに抱き締めたい。

ああまたいつもの、妄想癖が。

「蒼ちゃんに教えてもらえたんだから、絶対良い点取れるよ。ってか取ってみせます」

「はい、頑張つて下さい」

ホントに英語頑張らなきゃ。

蒼ちゃんとの電話を無駄にしたいく無い。

「次は僕の番だね、数学の一次…」

何気無く時計を見ると、もう21時35分を回ってた。

あまりに早く時間が経っていて、一時間も話してたなんて信じられない。

そろそろ時間も遅いし、明日にした方が良さな。

そうした方が、明日も蒼ちゃんと話せる。

僕にしては、かなり良いアイデアが浮かんだ。

「蒼ちゃんは一次方程式が分かんないんだよね？」

「はい、応用がニガテです…」

「あのさ、もう時間も遅いから明日にしない？蒼ちゃんにこれ以上迷惑かけたく無いからさ」

「迷惑だなんて、私が教えてもらうんですから…」

「でももう22時近いからね。今からだと夜遅くなっちゃうからさ…僕は説明するの下手だから余計にね。明日教えるよ、絶対教えるから！学校でも電話、蒼ちゃんの好きな方法で良いよ」

「はあい！分かりました。気を使ってくれてありがとうございますね、欧介君。じゃあ明日学校で教えてもらいます」

蒼ちゃんは、僕の提案を承諾してくれた。

これで明日も、彼女と話せるう。

ナイスアイデア、ナイス自分。

小さくガッツポーズする、僕。

「では、欧介君また明日ねえ。おやすみなさい」

やんわりと蒼ちゃんは、言う。

「うん、また明日…」

「そうそう、欧介君!？」

「えっ？」

突然僕の声を、蒼ちゃんが遮った。

ど、どうしたんだ？

いきなりの展開に見当が付かない僕、そして心臓はバクバクだ。

「明日からの授業は、ちゃんと起きてなきゃダメだよ。授業聞いてね」

彼女は、フフツと優しいニュアンスで笑う。

電話越しでも、その可愛さは伝わってくる。

つか、僕のハートにダイレクトアタックだ。

「ふ、ふあい。明日からはちゃんと起きて聞いてます」

照れながら情けなく言葉を返した。

「約束ですよ。明日から寝てないか見てますから」

再びフツツと笑う、蒼ちゃん。

冗談だって分かってるけど、今の言葉はかなり嬉しい。

「大丈夫だよ、僕約束は守るから絶対」

蒼ちゃんとした約束なら、尚更。

「欧介君の言葉なら信じます。では今日は電話してくれてありがとうございました。また、明日」

「ありがとって言うのは、僕の方だよ。ありがと蒼ちゃん、また明日」

そして蒼ちゃんとの幸せな一時は、切れた。

僕は、幸せと高まる気持ちを噛み締めながら溜め息をついた。

明日も蒼ちゃんと、話せる。

やったぜ！

興奮したまま、窓に手を掛けて開けると、虫の声と共に草の息吹を感じさせる薫りが体内に流れ込んだ。

見上げると夜空には綺麗な星が輝いていて、僕を照らしていた。

こんな幸せな夜がまた訪れれば良いな。

そんな事を思い、明日へ向かって体を休めた。

四ヶ所目 18（後書き）

こんにちは、和紙です。

皆様、予防接種は打ちましたか？

和紙自身、今年と来年は中々忙しいので今日打ってきます。

気になるんですが、後で痕が痛くなるって噂はホントなんでしょうか…（苦笑）？

もうすぐで50話です！

執筆気合いを入れて頑張りますので、コメントや感想をお願いします！

物語を面白くして行きたいので！
皆様の意見をお待ちしています！

ああ注射か…（涙）

和紙でした！

では！！

四ヶ所目 19

曇り空の下、学校最寄りのバス停に着きバスを降りた。

外の空気には、雨が降りそうな香りが混じっている。

昨日の夜見上げた星空から、今日の天気は予想出来なかった。

もう梅雨だ！

一年でもっとも、髪の毛をセットするのに時間がかかる時期。

気分もシャツもベタ付く季節。

でも、女の子の下着が透けて見えちゃう素晴らしい季節。

これだから梅雨は嫌いになれない。

ああでも、ちょっと髪の毛がうっとおしくなってきた。

僕は、元々クセ毛なので余計にそう感じるんだと思う。

空は雲っているが、僕の頭と心は快晴だ。今日も彼女と話せる。
しかも、今日は僕が数学を教えるという大義が。

このイベントで上手くポイントを稼げば蒼ちゃんの僕に対する、好感度をupでしょう！

もしかしたら、蒼ちゃんルートのCGも回収出来たり！？

いやいや、二次元世界に例えるのは止めよう。

って、朝からこんなテンションで大丈夫なのか？

自分の中の抑え切れないテンションを沈めようと格闘していると、突然誰かに名前を呼ばれた気がして振り向いた。

目線の先には、車道の後方から原付で向かってくる蓮の姿が見えた。

「オースケ！オースケ、俺だあ」

蓮がそう僕に向かって何度も叫んだので、周りを歩いてる学生にジロジロと見られる。

あんな大声で叫ばなくても、聞こえてるから。

うう…まだ見られてるし。

出来るだけ目線を下げて耐えている僕の目の前に、蓮は停車した。

「よお昨日振りだな、オースケ」

「おはよ、蓮」

ニカツと笑う蓮の顔を見て、僕が恥ずかしい思いをしたなんて事を微尽も感じて無い事を確信。

まあ慣れてるから良いケドさ。

「今日はバイクなんだね。それ見付かったらヤバイんじゃない？」

「寝坊しちまってな、バスに乗り損ねたんだよ。遅刻しても良かったんだぜ、俺は！でもこれ以上遅刻したら、担任がウゼエからさ。

ああ、ちゃんと通学許可取ってるから大丈夫よ」

蓮はそう言いながら、原付をブォンブォンとエンジンを噴かした。

「んな事より、聞いたぜえ！昨日蒼っちにラブコールしたんだってな」

蓮は僕にイタズラっぽい笑顔を向け、肩を小突いた。

もう情報伝わってるんだ！？

花君の伝達の早さには感心するよ。まあ、どっちみち報告するつもりだったから悪い気はしないケドさ。

「まあね、英語を教えてもらったんだ。蒼ちゃん、かなり英語力あるんだよ」

蒼ちゃんの的確な英語訳が、耳に蘇る。

言葉と言葉の間に洩れる息遣いまでも。

「あの子、英語得意なんだな。そいやあ英語の授業でいつも訳を完璧にしるもんなあ」

「だよね。だから英語の勉強が捗っちゃてさあ。あっそうそう、そのお返しに今日は僕が数学を教えるんだあ」

蓮に遠回しに自慢する。

ってか早くこの事を、誰かに自慢したくて堪らなかった。

「へえーお前が教えるのか？ったくいきなり仲がよろしい事で」

「いきなり仲良いつて訳じゃないよ。それに蒼ちゃんの役に立ちたいからさ、僕」

好きな人の役に立ちたいと思うのは当然だよな。

「カッコ良いな、オースケ。でも頭ん中は蒼つちとの妄想でいっぱいなんだろう？」

「そ、そな事は…」

「ぶはあ！図星だよ」

元氣良く笑う蓮。

真つ正直に、そして真つ直ぐ笑う蓮の笑い方に、僕は憧れている。

「そりゃ、妄想もするけど…」

「男は妄想で生きる哀しい男だもんな。さすがオースケだぜ」

「ま、まあね。でもさすが、なのかなあ」

僕のイメージは、やっぱり妄想の塊なのか？

薄々解つてはいたけど、友達からダイレクトに聞くとヘコむ。

もしかして蒼ちゃんもそう思われてるのか？イメージって怖いなあ。

「ああ、朝から笑わせてもらったぜえ。じゃな、教室で待ってるぜえ、遅刻するなよ学級委員！」

そう言い残して蓮は、原付の排気臭と共に走り去った。

遅刻って、まだ時間が…。

時計を見ると、8時38分を差している。

あと、7分で朝のSTが始まってしまふ。

遅刻？

また学級委員が遅刻かよ！？

クラスメートの嘲笑、困ったヤツだ…そう洩らし溜め息をつく担任、そして愛想が尽きたかの様に苦笑する蒼ちゃん。

そ、そんなの絶対嫌だ！

僕は、全速力で学校まで駆け出した。

息も切れぎれに教室に駆け込むと、すでに皆が座っていた。

クラスの視線が僕に向けられていたのが解る。

そりゃ、そうだ。

突然誰かが教室に走り込んで来たら、僕だって注目する。

というか、本日二回目ですなあ注目を浴びるのはあ。

「はあ、はあ、はあ…」

とりあえず何か言おうとしたが、息が上がって声が出ない。

我ながら何とも情けない姿。

「はあ、はあってオースケ、誰かにムラムラしてんのか？」

膝に手を付いて呼吸を調えている僕に向かって、先に教室に着いていた蓮がからかう様に言う。

「ちが、違うよ！はあ…はあ息がし辛くて」

僕はとりあえず席に向かう。

「んだよ、てつきり誰かさんとの妄想に欲情してるのかと思ったぜ！誰かさんになあ」

そう言つて、僕にニヤニヤと笑いかける蓮。

ぐう。蓮のヤツ！

余裕で着いたからって！

今の会話の意味を気付いてないか、誰かさんである蒼ちゃんの様子を椅子に座りながらさりげ無く見ると彼女は珍しく携帯をイジっていた。

僕もあの携帯みたいにイジられ…っておい！

椅子に座りながらバカな事を考えていると、丁度担任が教室に入ってきた。

担任から、明日からのテストの事や連絡事項をボーツと聞いていると、ズボンのポケットに入っている携帯が震えた。

誰だよ、珍しい。

そう思い携帯を開いて確認すると、蒼ちゃんからのメールが入っていた。

あまりの驚きに携帯を落としそうになったが、何とか免れた。
ドキドキと高鳴る気持ちを抑え、本文を読む。

今日、何か有ったかな？って心配してました。でも遅刻せずに来てくれて良かったです。P・S 今日数学の勉強ヨロシクお願いします

メールをお宝専用フォルダに保存して蒼ちゃんの方を向くと、彼女は担任の話を聞きながら学級日誌を書いていた。

さっきうつ向いて携帯を触ってたのは、僕にメールを打って居てくれてたからなのかあ。

おはよ！詳しくは、後で話すね。僕も楽しみだよ

そう担任に見付からない様に急いでメールを打ち返信した。

メールを返信し終わって、安堵しているとまた携帯が震えた。

開くと花君からの着信を知らせていた。

ちょ、教室でなぜ？

ビックリして花君の方を見ると、彼は手でハートマークを作ってニコニコと微笑んでいた。

ちょ、ちよつと花君！？

マズイっしょ、教室でハート全開は！

見方によっては疑われちゃうから、僕ら。

僕は手で照れ笑いをしながら×を花君に示した。

ちょうどSTが終わる。

僕はいつも通り、号令をかけた。

ははっ今日は幸せな気分で、朝のSTを終える事が出来た。

さてと！

今朝まで話を、花君と大河君と蓮にも説明しますかあ！

蓮には二回目だけど。

しかもヤツは朝から散々、僕をカラかってくれちゃったけど。

仕方ない。

僕は立ち上がって、三人の元に向かった。

四ヶ所目 19（後書き）

毎日寒いです…。

和紙には寒さ耐性が無いので、この時期辛いです。

コメントや、理由の有る批評、評価大歓迎で待っています！
和紙でした！
では！

四ヶ所目 20

「おはよ！花君」

僕は昨日の出来事を三人に話す為に、花君に声をかけて大河君の席に向かった。

何故、大河君の席かと言うと彼以外の席にすると大河君に伝わらない気がするし、それ以上に彼が自分から僕の元へ来てくれる確率は低いから。

まあ、小さな気遣いってヤツです。

「おはよう、大河君」

僕は爽やかさを全面に出して声をかける。

彼は今日も、凜としたオーラを放っている。どうやったら、こんなに凛々しい雰囲気を出せるんだろ？

出来ることなら教えて欲しい。

「今日は朝から元気だったな」

軽く笑みを浮かべる大河君。

普段あまり笑わない大河君の笑顔を見たら、女の子は誰でもドキドキだろうなあ。

男の僕もドキドキなんですから。

そっちの気は無いんだけど。

「まあね。昨日良い事が有ったからさ」

「良い事？ああ、花から聞いてるぞ。楠木と電話で話したんだろ？」
大河君は一瞬思い出した様な表情にしたけど、すぐに真っ直ぐな視線を僕に向けた。

温かみの有る視線に僕の心も温まる。

「ゴメンね欧介君。我慢出来なくて、つい二人に言っちゃったんだ、僕……」

花君が舌をペロツと出して申し訳なさそうに笑う。

「良いんだよ、謝らなくてさ。気にしないからね」

まあそのペロツと出してる、可愛い舌に免じて許してあげよう。

それに、こんな可愛い仕草は、花君だから、こんなにも可愛い感じなんだろうな。

「おおっ優しいですねえ」

彼はニコニコと笑って、両手で僕の右手を優しく包んだ。

ドキッ

高鳴る胸の鼓動。

いかん。

いかなげ、花君は男！

彼は正真正銘の男！

それに僕には蒼ちゃんという心に決めた女性が。

「でさでさ詳しく教えてよ、昨日の事」

自分の中の越えてはイケない境界線を、必死に越えないように耐える僕を知るよしも無く、花君はお決まりの笑顔で僕を見る。

「う、うん。もちろん話すよ！その為に学校に来てる様なもんだからさ」

「ふつ、学級委員が言う言葉だとは思えないが、聞こうか」

大河君は鼻で笑いながらも、僕の話の聞いてくれるみたいだ。

「よお！お前等、何集まってるの？」

多分トイレから帰ってきた蓮が、髪をイジリながら僕達の元へ歩いてくる。

「あれえ、どこ行ってたの？」

花君が不思議そうな顔をしながら蓮に向かって手を振る。

「ナイス質問だ、ハナ」

蓮は僕達の元に向かいながらニヤリと笑みを浮かべる。

「朝の仕事をバッチリ決めてきたんだ、スカッとしたぜえ」

腹部をパンパンと叩きながら、豪快に笑う蓮。

ちなみに、蓮の腹筋は鍛えているらしく引き締まっている。

僕は、蓮の生腹筋を見る度に自分の腹と取り換えられたらと、密かに願ってたりしている。もちろん大河君も引き締まった肉体を持っているし、以外なトコロで花君も中々筋肉質だ。

それに比べて、僕は…。

おっと、何落ち込んでるんだ。

気付けば僕の目の前で二人の口喧嘩は火蓋を切られていた。

「下品なヤツ」

大河君は、かなり冷たい視線を蓮に浴びせた。
おっと、大河君の体から凍気が溢れてきてる。

教室の気温が下がった気が…。

「下品だ？聞き捨てなんねえ！」

おっぷ。

今度は蓮の体から闘気が溢れてる。

教室の気温が急上昇してる様な…。

「じゃあ聞くけどなあ、オメエはしねえのかよ？」

蓮は、両眉を吊り上げ声を荒げる。

「排泄は、人間なら当たり前の生理現象だが？」

大河君は、彫刻みたいに形の整っている鼻をフンと鳴らし笑う。
でも目は笑ってない様な気が。

「ああ！？何、小難しい事言ってるんだよ」

「小難しい？ふん！この程度の話も理解出来ないのか。笑わせるな！
！言っておくがこれ以上、下劣な話に付き合うつもりは更々無い」

「んだと、てめえ！もう一回言ってみろ」

「お前にはが理解出来なかったのか？ならば、もう一度言ってみろ
うか？」

蔑げすむ様な氷の微笑を浮かべ、大河君が立ち上がった。

その事で戦いは秒読みになった。

ヤ、ヤバイ！

ってまたかよ…この展開。

この二人は、本当に仲が悪いんじゃないかとマジで思う。

いくらなんでも口喧嘩以上、殴り合い寸前のギリギリな状態に発展し過ぎじゃないか。

「ちょ、ちょっと止めなよ二人共」

ああほら、花君がオロオロしてる。

って僕も負けず劣らず、オロオロ状態ですけど。

「は、花君の言う通りだよ。二人共落ち着いて僕の話聞いて…」

オロオロ状態の花君とオロオロしながら二人を仲裁していると、誰かに肩を優しく叩かれた。

なんだよ、こんな時に。

イラッとしながら叩かれた方に振り返ると、心配そうな顔をした蒼ちゃん立っている。

「あ、おいちゃん」

彼女が後ろに立っている事に驚き、僕は自然と体を彼女の方に向けた。

「あのお欧介君、二人はどうしたんですか？」

蒼ちゃんが僕の後方で口論している二人を不安そうな顔をして見る。

そんな不安そうな顔をした蒼ちゃんも、僕は大好きです！

いや、この状況で何を考えてる？

「分かんない、急に口喧嘩が始まっちゃって」

「そうなんですか…。普段は仲良しなのに」

いや、そんな事も無いでしょ。

そんな言葉が口をついて出そうになったけど、危ういラインで呑み込んだ。

異様な静けさに気付いて辺りを見渡すと、クラス中が大河君と蓮の口論に注目している。

三人の方を振り返れば、花君が一生懸命止めに入っているけど二人は全く眼中に無いみたいだ。

まさにアウト オブ 眼中！

この表現の古さに、皆との歳の差を改めて感じたり。

んな事は、どうでも良いって！

いよいよヤバくなってきた。

もう一時間目が始まっちゃうじゃん！？

教師にこんな場面見られたらどうなる？

四人とも呼び出し、くらちゃうよ！

元とは言えば、僕のせいでも有る…のかどうか分かんないけど、キツカケは僕なんだから何とかしなきゃ。

学級委員の影の薄い方だと思われてるのも、返上出来るし何より蒼ちゃんの前でカッコ付けたい！

今の二人の状態は恐いけど、友達だから何とかなるさ…多分。

それに花君も一緒だし…一緒だし何とかなるかなあ？

決心が鈍らない内に実行しようと、僕は蒼ちゃんの方に向き直った。

「ぼ、僕が止めるよ！学級委員として、いや友達だから」

「欧介君！」

僕の言葉を遮る様に蒼ちゃんが叫んだ瞬間、背中に大きな衝撃を受けて僕は前方に飛び出した。もちろん蒼ちゃんの真正面に。

勢い良く飛び出した筈、なのに周りを流れている時間の定義を覆したかの様に感じる。

逆に蒼ちゃんが僕の方にゆっくりと近付く、そんな不思議な感覚に襲われた。

驚いている蒼ちゃんの見開いた瞳さえも、鮮明に確認出来る。このまま、どさくさに紛れてキス出来るかも？

不意に邪な考えが頭に浮かんだ。

が、そんな考えが達成出来るわけもなく、僕は蒼ちゃんに覆い被さる形でぶつかつた。

勢いでバランスを崩す僕達。

とっさに蒼ちゃんを抱き締め、彼女が頭を打たない様に体勢を変える。

普段の自分からは想像出来ないぐらい冷静な行動に、自分自身かなり驚きだ。

胸の中に蒼ちゃんの体を抱き寄せる瞬間、きや。

と言う可愛らしい言葉と共にセーラー服越しに彼女の柔らかい体の感触が僕に伝わった。

その甘い余韻に浸る間もなく、鈍い音と共に僕の背中に痛みが走った。

床でなのか机なのかは分からないけど、頭も打つたらしく後頭部が痺れている。

音は一切聞こえない。あえて聞こえると言えば、鋭い音の耳鳴りぐらいか。

周りが静かなのは多分クラス中が、僕と蒼ちゃんに注目しているからだろう。

「あつ痛、痛った」

そう洩らしながら目を開けると、蒼ちゃんの栗色の頭が僕の腕の中に有る。

一先ず、蒼ちゃんを守れた事を確認して安堵した。

抱き締めている両腕から力を抜くと、蒼ちゃんの頭がゆっくりと僕の胸から離れた。

そして僕の顔をまじまじと見た。

その表情は驚いてる様な、照れてる様な何とも言えない。

顔と顔とのが、近い。

この距離なら、抱き寄せれば《キス》だって簡単に出来るだろう。

また《キス》したいという、邪な願望が心に流れ込んできた。

でもその願望に任せ、僕の身勝手な気持ちで彼女の唇を奪う理由も権利なんて、無い。

「大丈夫？」

キスというの甘く邪な誘惑を振り払い、蒼ちゃんに問いを掛けた。

「大…丈夫」

蒼ちゃんは、頬を桜色に染めながら僕の目を真っ直ぐ見つめ、ゆっくりと言った。

「良かった、蒼ちゃんが無事で」

「欧介君は？」

僕は、頭と背中を強打したさ。

そんな事を言うつもりは無い。

彼女を守りたかったから、僕が変わりになった。
ただ、それだけだ。

「僕の事は気にしないで良いよ。それより立ち上げれる？」

「ええ…。あつ気付かなくてゴメン。重かったよね」

そう言い、蒼ちゃんは立ち上がる為身を起こす。

立ち上がっていく彼女を見ると、太股の間から下着の色が、一瞬僕の目に自己主張した。

その赤と白のストライプのパンティを心のフォルダに保存した。

もちろんプライベート指定だ。

だけど、下着を見てから始まった瞬間からドキツと胸が大きく跳ね、止まらない。

その活発な心臓の動きにつられて僕の下半身も自己主張しそうだったから、慌てて立ち上がろうと体を起こした。

膝に力を込め、立ち上がる。

その気持ちとは裏腹に腰に痛みが走り、立ち上がれない。

痛みで顔をしかめていると、誰かが僕の顔の前に手を差し延べた。

その手の主は、目尻に涙を浮かべた花君だった。

四ヶ所目 20（後書き）

お久しぶりです、皆様。

バレンタインが過ぎました。

私はビターが好きです。

コメント、感想、理由の有る酷評は、歓迎しています。

和紙でした。

ここで次回予告を。

今回は、花の涙の訳と欧介が蒼に数学を教えるぐらいまでは書きた
いと思っています。

では！

四ヶ所目 21

手を差し延べてくれている花君の目尻に浮かぶ滴が気になる。

その滴が涙だと言う事は、誰にでも解ると思う。

だけど、目の前で何粒も何粒も彼の頬を伝って流れ落ちていく理由が僕には解らない。

いったいどうしたんだ、花君は。

「泣いてるの？何で」

ストレートな疑問をそのまま彼にぶつけた。

「僕はまた……」

そう応えて花君は、また涙を流す。

その言葉の意味が理解できない。無意識に花君の後方に目を移すと、口をあんぐりと開けた蓮と、バツの悪そうな顔をした大河君が立っていた。

立ち尽くしている二人から、目の前に差し延べられている手に視線を戻す。

花君の手は、小刻に震えている。

僕は手を伸ばし、震えている彼の手を握った。

さつき感じた手の温かさは無く、冷たい。

僕は花君の力を借り痛みを堪えて、ゆっくり立ち上がる。

「はぁ何これ？意味分かんなくねえ？」

立ち上がった瞬間、静寂に包まれていた教室に一人の声が木霊した。声の主を見ると金持ちを鼻にかけたグループの一人、山田君だった。いや、君を付ける相手でも無いかな。

奴の事で、気に入らない事がたくさん有るし！

声に吸い寄せられる様に、クラスメートが視線が僕等から山田に向けられていくのが分かる。

「おいおい森島あ、何で泣いてんの？」

バカにしたような笑いを顔面に浮かべる、山田。その顔に嫌悪を感じる。

「はん！意味不明だよお前。何か笑える！なあ笑えるよな？」

山田は自分の仲間に向かってヘラヘラ笑いかけた。

それに同調するように、山田の取り巻きもヘラヘラと笑い声をあげ

る。

静まりかえるクラスの中で、一部からハッキリ聞こえる不快な笑い声。

その耳障りな雑音が、僕の心を苛つかせる。

目の前では花君が…いつも明るい笑顔を見せてくれる花君が、肩を震わせて涙を流している。

なのに。

「何が面白いんだ！」

僕は、腹の底から沸き上がる怒りを止められず解放した。

目の前で、友達がバカにされてる事を我慢出来るほど大人じゃない。

学級委員だからって、関係ないね。

僕の上げた怒声に、山田に向いていたクラスメート達の視線が、急速に僕に注がれていくのを肌で感じた。

でも、クラスの皆の事なんて気にしてられない。

「はっ、またお前かよ、学級委員様？」

山田のせせら笑う表情が、僕の怒りを加速させる。

「人の事を茶化すの止めるよ。幼稚な事だっと思わないのか？」

「黙れ！こんな時だけ出しゃばるな役立たずが。お前、学級委員だからってカッコつけるなよ。だいたいお前が学級委員だって事自体が四組の恥なんだよ」

「僕の事は何とでも言えば良い！でも花君を茶化した事は、謝れよ」
僕の言葉を聞いて、山田は高笑いをした。僕を蔑む様な、そんな笑

い。
「エセ学級委員の分際で下らない正義を口にするな。お前達みたいな無能は無能同士で友情ごっこでもやってな」

「何だつて！」

ついに僕は怒りが頂点に達し、抑え切れなくなった。

本気で山田を殴り倒そうと思い、拳に万力を込めて殴り掛ろうとした。

その時。

僕より先に、赤い何かが山田に向かって走った。

正体は蓮だった。飛び出した勢いのまま、蓮は山田の胸元を持って窓際の壁に叩き付けた。

上半身を強打したのか、咳と共に顔を歪める山田。

叩き付けられた山田を見て、山田の取り巻き連中が弱々しい悲鳴をあげた。

咳き込む山田や取り巻きを気にする事無く、蓮は左手で山田の胸元を拳を突き立てて絞め上げていく。

「ごっこだと、クソ野郎」

蓮は壁から山田を引き剥がして、再び壁に叩き付けた。

「友情ごっこ、だと！ざけやがって」

蓮は、怒声を張り上げ空いていた右の拳を後ろに反らした。

蓮の顔は、さっきまでの間の抜けた表情じゃなくて、入学当初に見た敵意に満ちた顔：いやそれ以上に今まで見た事もない、身震いしてしまうぐらい狂暴な表情を浮かべている。

そんな蓮の迫力に、クラス全員が怖じ気づいたのか誰一人として、声をあげない。

蓮を止めなきゃ！

僕自身、そう思う気持ちだけが先走るだけで、肝心な言葉を発する事が出来ない。

心の何処かで、山田が酷い目に合わされれば良いと思っているから余計にかもしれない。

けど、やはり止めたい。

このまま蓮が山田を殴れば、再び蓮は処分を受ける事になる。

しかも証人は、クラス全員だ。

「蓮！」

僕は無我夢中で駆け寄った。

「やめ、やめなよ」

「邪魔すんな、オースケ」

蓮は怒気を滲ませ、鋭い視線を僕に向けた。

蓮の右の拳を掴んで、疎んでしまいそうな自分に鞭を打つ。

「本当に止めてくれよ！殴ったって、また蓮の立場が悪くなるだけだよ」

「くっ離せ！俺はなあ、目の前でダチをバカにされて、ごっこか言われて我慢できる程出来てねえんだ」

蓮は力強く僕の手を振り切った。

ヤバイ！

僕の腕の中から、蓮の腕が解き放たれた。

数秒後に蓮の拳が、山田の顔面にねじ込まれる。

だが、僕の安易な想像は見事に裏切られた。

大河君が蓮の右腕を掴んでいたのだ。

「大河、手どける」

鋭い眼光を大河君に向ける蓮。

そんな眼光を浴びても、蓮を直視し言葉を発しない大河君。

「大河ア」

パンッ！

蓮が怒声を上げた瞬間、腕を掴んでいた大河君の手が離れて、そのまま蓮の頬に叩き込まれた。

えっ！？

僕は自分の心臓がドクツと脈打った。

ビックリした。そう一言で言えば簡単だけど。

大河君が蓮を、殴った？

僕の真横に立っている蒼ちゃんは、ビックリした様な表情をして胸の前で両手をギュッと握り締めてる。

そんな彼女の仕草にときめいた。

って、今はときめいてる場合じゃないじゃん！

頬を張られた蓮は、無言で大河君に顔を向けた。

張られた反動で、蓮の腕から山田は解放されていた。

「落ち着けよ、馬鹿」

小さなため息をつき、顔をしかめる大河君。

「大河…、んだよ痛ってえな！」

蓮は唇から血を滲ませて、不服そうに大河君を睨む。

「暑苦しい程、恥ずかしい奴だ」

大河君はやれやれといった様子で、ズボンのポケットからハンカチを取り出して蓮に手渡した。

蓮は舌打ちをして、乱暴にハンカチを受け取り、唇に当てがった。

「あ、ありがとう大河君。さすが君は野蛮なコイツらとは…」

山田は、苦しそうに喉元を摩りながら大河君に歩み寄る。

「礼は要らないから、黙っていてくれ」

山田の話を遮り、笑いかける大河君。

「い、いやこれだけは言わせて欲し…」

「黙れって言ったのが聞こえなかったのか？お前の声は耳障りなんだよ」

大河君は静かに、そして有無を言わせないような酷く冷たい一言を浴びせた。

その一言を受けた山田は、大きなショックを受けた様子でその場に崩れ落ちる。

そんな奴の姿が、ひどく滑稽だ。

正直、あんな言葉を言われたら誰だってショックを受けと思う。

そんな事を考えたら、山田が少し気の毒に思えた。

いや、今はアイツの事より花君だ。

花君は今も涙を流し、とても悲しそうな表情で佇んでいる。

「花君…」

「欧介、今は教室の中を何とかしよう。このままだと、非常に不味い」

花君に声をかけようとしたが、大河君に遮られた。

周りを見渡せば、机が乱れ、クラスメートが皆ざわめいていた。

「花ちゃ…花の事は今はそっとしておこう。学級委員、素晴らしい手腕を披露してくれ」

「ええっ、あっ」

大河君は、僕の反応を楽しんでいする様な笑顔を浮かべると蓮の肩をパァンと叩いた。

「いつまでも無意味に立っているな。早く自分の座席に戻れよ」

「んだよ痛ってな、大河あ！今のと頼の分、昼飯の時に倍返しだからな、覚えとけよ」

蓮は、大河君に悪態をついて花君の元に歩き出した。

花君に歩み寄ると、彼の頭に手を置いて何度か頭を撫でた。

そして山田に一瞥を投げて、自分の席に戻った。

大河君も花君に歩み寄って、肩を優しく掴んで花君の座席へと誘導した。

山田はというと、奴の取り巻きのグループに慰められながら席へと戻っていった。

「ふう…良かったあ」

隣に居る蒼ちゃんが、安心した様子で溜め息をついた。

「そうだね、ホントに良かった」

一時はどうなる事かと想像も出来なかったが、騒動は無事収束に向

かっていた。

僕と蒼ちゃんはクラスメートに、各自の座席に戻るように号令をかけて、散乱している机や椅子を元通りに整えた。

その作業の間も、僕の頭の中では花君の事がグルグルと廻っていた。

彼は何故泣いたんだろう？

何か原因が有るのかな？

まあ原因が無かったら、泣かないよね。

ああ考えれば考える程、分からなくなっていく。

とりあえず後で聞こう。

色々な考えを巡らしていると、ふいに蒼ちゃんと視線が重なった。

突然、ドクツと心臓が鼓動を打つ。

「今日は…数学教えて貰えないですね」

小さく笑う蒼ちゃん。

「えっ、ああ、い、いや大丈夫だよ。約束だから教えるよ」

花君の事で頭が一杯だったが、よくよく考えると蒼ちゃんとの勉強会だ。

花君の事、どうしよう…。

「良いですよ、無理しないで。森島君の事気になるよね？私の事は良いです。またテスト明けにでも教えて下さい。今回は、自分でもかしますから」

そう言うつと、蒼ちゃんは自分の席へと戻っていた。

「蒼ちゃん！」

僕の呼びかけに、彼女は振り返りニコツと笑顔を見せて自分の席についた。

僕も片付け終わり、やり切れない気持ちを抱えながら自分の席にいた。

どうしよう、二人ともかなり重要な件だ。

出来れば、両方とも時間を取りたい。
でもなあ、それは無理な話だ。

そんな思いに駆られていると、一時限目の担当教師が教室に入ってきて遅刻した理由を言い訳がましく話し出した。

むしろ遅刻してくれて、ラッキーだったよ。感謝したいぐらいさ。

僕はそんな事を思い、授業開始の号令をかけた。

四ヶ所目 22

一時限目が終わった。

授業が始まる前に起きた大きな出来事の影響で、授業中クラスの皆が集中出来ていないと感じた。

もちろん僕もその内の一人で、頭の中では花君の事と蒼ちゃんの事が渦巻いていた。

花君の事については、考えても考えても全く判らない。蒼ちゃんとの約束は、彼女の期待を裏つてしまうと言うか、折角取り付けた約束を自分から破ってしまうと言うか。

まあ何というか……とにかく残念だ。ああ…二人の事を考える事に夢中で、テスト範囲について重要な情報を聞き逃した気がする。

ダメだあ、朝から疲た。

机に突っ伏して、何気なくクラスを眺めていると、蓮が週刊誌を読んでいるのが見えた。

でも、週刊誌を読んでいる様子はなく、何だか物思いに耽ってる様に見える。

僕が蓮の姿を視界に捉えて数十秒経ったがページが捲られないからだ。

蓮も、やっぱり花君が気になって仕方ないんだ。花君の頭を何度か撫でる蓮の姿を思い出したら、心が温かくなった。

大河君の姿を探すと、彼は自分の席で難しそうな本を片手にノートを黙々と書いていた。

でもノートに何か書き込んでいる彼の手が、何度か止まったのを確認済みな訳で。

大河君も僕や蓮と同じぐらい花君の事が気になってるんだな。

早く、花君の温かみの在る笑顔が見たい。今は、彼の笑顔が遥か彼方に遠ざかっている様な、そんな感じがする。

花君は授業開始時と同じで、自分の席に居た。見た感じでは、もう涙は止まっている。

しかし表情に、いつもの明るさは無く、影を帯びた表情で机を見つめている。

今、花君に話しかけても大丈夫なのかな？

でも話かけるって言うても、なんて？

そんなの出たとこ勝負さ。

いやいや、今回は言葉は慎重に選んだ方が…。

そんな迷いに弄ばれていると、二時限目が始まってしまった。よし、昼食の時に絶対に話しかける。

そう堅く決心をし、授業に臨んだ。

さてと、学生なら誰でも待ちわびた昼食の時間だ。

クラスメートの多くが購買や、カフェテリアに走っていく。

ちなみに僕と花君と蓮は、いつも教室で昼食を取る。

大河君は、いつも何処かに消えてしまう。

彼の個人的な事に首を突っ込むつもりは、無いが気になってしまう。

カフェテリアにでも行くのかな？

もしかしたら、彼女とイチヤイチヤしながら手作り弁当を？

ま、彼に限ってそれは無いだろう。

とりあえず今は、気にしないでおう。

今は花君だ。

いつもは、花君が昼御飯を食べようと誘ってくれる。

だけど、今日はあんな事が有ったんだ。

誘ってくれる気分じゃないだろう。

だから今日は僕から、昼御飯を誘う。

花君に話しかける絶好のキツカケであるし、何かを食べながらなら話もしやすい。話しやすいかどうかは、勝手な理由だけだ。

ここまできたら気にしない。

むしろ多少強引なキツカケは必要でしょ。

少しでも呼吸を整え、僕は自分の席から立ち上がり花君の席に向かった。

「やあ昼ご飯食べようよ」

いつもと変わらない口調を心掛け、花君に話しかけた。

いつも通りの口調は再現出来たと思うが、内心かなりドキドキだ。

ちょっと声が上擦ったかな？

俯いていた花君は、顔をあげて僕と視線が重なった。

そして、彼の顔は綻んだ。

そんな花君の笑顔に応える様に、僕の頬も自然に緩んだ。

「欧介君……一緒にご飯食べてくれるの？」

「そうだよ、ダメかな？」

「もちろん……良いよ。断るわけない」

「良かった、花君と昼ご飯食べない午後からが始まらないからさ」

僕は適当に空いてる椅子を選び、花君の席まで持っていき座った。

さてと、何て切り出そうか。

思案を巡らせていると、僕の弁当箱の上に唐草模様の風呂敷に包まれた何かが、落ちてきてバサツと音を立てた。

反射的に飛んできた後方を振り返ると、蓮が椅子を抱えてニンマリ笑っていた。

「だああ！やつと昼飯の御時間だぜ。朝から腹減って腹減って。胃袋が溶け出しそうだぜ」

蓮は僕の隣に椅子置いて座ると、持ち主が不在の机を片手で引き寄せた。

「おつす、ハナあゝ元気か？」机に風呂敷を置いて包みを開けながら蓮は花君に声を掛けた。

「うん、元気……かな」

「そうか。なら良いんだ」

蓮は弁当箱を開けたと同時に、卵焼きを箸で摘んでゆっくりと口元に運ぶ。

「くうははあ、やっぱりな！」

口をモゴモゴと動かしたと思った矢先、突然蓮が口から卵焼きの欠片を吹き出しながら笑った。

「はっ、へえ？何がやっぱり？」

僕は、突然の蓮の行動に苦笑いしてしまう。

「蓮……お行儀悪いなあ。まったく」

花君は蓮の口から飛び出し、自分の弁当に不時着した卵焼きの破片を箸で取り除きながら、頬を少しだけ膨らませた。

「悪い悪い、でも今日の卵焼きが美味くてさ。我ながらナイスなアイデアなんだぜ」

カラカラ笑い、満足げな表情を浮かべる蓮。

「ナイスアイデアって、今日は卵焼きに何か入れたのかな？」

僕の問いかけに、蓮はフフンと鼻を鳴らして、卵焼きを僕の冷えた白米の上に置いた。

まあ食べるやあ、そんな言葉が滲み出ている蓮のジェスチャーに推され、口の中に卵焼きを運ぶ。

卵焼きを噛み砕くと、鼻腔に爽やかな薫りが通り抜けた。

「これは…生姜？」

「正解だぜオースケ。んでさ、味は？どうだ？」

「美味しいよ、生姜入りの卵焼きがこんなに美味しいなんて初めて知った」

「だろ？俺も自分で作ってビックリだぜ」

蓮は満足げに、にんまりと笑う。

「僕も一つ……もらって良いかな？」

「モチですぜ！あいよ、ハナあ」

蓮は、花君の弁当箱の蓋に自慢の卵焼きを置いた。

ゆつくりと、口に含む花君。

その仕草に、しばし見とれちゃう僕が居る。

「おいオースケ、ハナ見てニヤケてんじゃねえよ」

蓮が持参したチャーハンの香りを嗅ぎながら僕に向け悪戯っぽい笑顔を向ける。

「違っ、にやけてなんてないよ」

はあ、ダメだ！

何で花君の顔に見とれてるんだよ。

何とか、話を切り出さなきゃ。

「美味しい……蓮は良いお父さんになれるよ」

「やったぜ！花も気に入ってくれて良かったあ。ってか、お父さんは早えな。まだ愛するハニーですら居ないんだぜ。でも、ハナの言葉嬉しいな」

「本当に……美味しいから……ね」

声が震えたと同時に、花君の瞳から大粒の涙から溢れ出た。

「花君どしたの？」

「二人共……ゴメン。ホントにゴメンね」

一粒、また一粒涙が零れ落ちる。

「あつ、えっとハンカチ……あつ蓮、風呂敷借りるね」

「いや、良いけどさ。何に使うん？」

僕は蓮から風呂敷を拝借して、丁寧に折り畳み、花君の目尻に当てがう。

「ああ、なる程ね。そゆ事な」

蓮に相槌をうち、ついに切り出す事にした。

「あのさ花君、何で僕らに謝るの？」

朝の一件、あの時も謝っていた。

しかし僕自身、謝罪を受ける理由などない。

「僕が……僕が下らない事を思い付いて、出しゃばったから欧介君と蒼ちゃんが……」

蒼ちゃん。

その名前に、僕は彼女の席に目を移す。

彼女は自分の席に座って友達と楽しそうに話している。

「それって、どうゆう事かな？」

花君に視線戻し、彼にやんわりと疑問をぶつける。

「僕が……」

弱々しく消え入りそうな声で、花君は言葉を続けた。

「僕が蓮と大河君に言い争いをする様に……頼んだんだ」

言い終えると、花君の瞳からは一層涙の雫が溢れた。

「はあ、い？」

驚きと同時に蓮に視線を投げると、目が合った瞬間、蓮はしょいっと視線を逸らした。

まるで、俺は悪くないぜ！と言ってる様に。

「えっ、あつと。どうゆう事？」

「昨日、欧介君と蒼ちゃんが電話で話したって聞いたから、キツカケを作って二人をより仲良くさせたいなって…。欧介君が蓮と大河君の仲裁に入って解決出来れば、欧介君の評価が…」

まんまと、その作戦通りの行動を取る僕ってバカなんだろうか？

いや待てよ、マズでしょ！

自己嫌悪に陥りながら、ある事に気付く。

「ち、ちよつとストップ花君」

今の花君の発言は極めてマズいですよ。

しかも声、大き過ぎでしょ！

いくら教室にクラスメートが、疎らだからって本人が結構近くに居るし、万が一今の発言が聞こえてたら！？

「あのお、今私を呼びませんでしたか？」

何よりも僕の耳に優先して届く、心地良い響きにビクツとして振り向くと、やはり蒼ちゃんが僕の後ろに居た。

ですよね、やつぱり聞こえてるよね。

ああークエッションマーク浮かべてる蒼ちゃんも、可愛いですなあ。

って見とれんな、自分。

「や、やあ蒼ちゃん。今日は良い天気だね。ごは、御飯食べたのか

な？」

関係無い話で、今の話をうやむやにしよう。
そう思い、適当な話を振った。

振ったのは良いけど、何でこんな低レベルな話題なんだろう？

「はい、食べましたよ。ちょっと食べ過ぎたかな？って思ってるぐらいです。もう梅雨入りは間近なのに、晴れて本当に良かったあ」

優しく微笑む、蒼ちゃん。

その笑顔のまま、今回だけはさっきの話を忘れて、席に戻ってくだされ！

「あれ、森島君…泣いてるんですか？」

僕の心の叫びも虚しく、花君の涙を見つけて笑顔が一転、困惑した様な表情を浮かべる蒼ちゃん。

「蒼ちゃん……ゴメン。朝の騒動は僕のせ……」

極めてマズれす！

「うああ蒼っち！あーんしな」

「ええ、あーんって……」

「今だ！かつ飛べ卵焼きい」

突然、蓮が勢い良く立ち上がり蒼ちゃんの口に卵焼きを放り込んだ。

「う、んんう。なかむらくん？」

「きよ、今日は卵焼きに生姜を入れてみたんだぜ！美味いっしょ？
ああオースケ、購買行くんだろ？缶コーヒー微糖でよろしく」

うっはあ危機的状況に、助け舟が！？

ナイスだよ、蓮！

「わ、分かったよ。さっ購買行こうか、花君」

僕は蓮の起死回生の荒技に感謝しつつ、花君の手を掴んで素早く廊下に出る。

一頻り花君と共に歩いていると、ちょうど人影の無い階段を見つけ
たので、二人で腰を掛けた。ふと、ずっと彼の手を掴んでいた事に
気付いて慌てて離す。

「ゴ、ゴメン、花君の手をずっと掴んでたみたいだね」

声をかけても、俯き何も言わない花君。

うーん、ここは話を変えますか。

「それにしてもさっきはビックリしたよ」

上層階に続く階段を仰ぎ見ながら、言葉を続ける。

「まさか蒼ちゃんが、近づいてくるとはね。普段も向こうから話しかけてくれたらなあ」

無理に話変えようとして、気付けば自分の願望を話している。

何言ってるの、僕。

「全部……僕のせいだね」

やっと絞り出した、そんな悲しみを滲ませる花君の言葉が、呑気に自分へのダメ出しをする僕の耳に届いた。

「花君のせいな……」

「ねえ……欧介君」

花君のせいなんて、思わないよ。
そう訂正しようとしたが、花君の声に遮られた。

僕の名を口にした彼の声が、震えている事が分かった。

「ん、どうしたの？」

「あの……さ」

「僕……僕ってさ、欧介君にとって必要な人間なのかな？」

「えっ？」

「僕は欧介君の側に居て……良いのかな？」

彼は、そう呟きながら笑顔を浮かべている。

いや、笑顔なんかじゃない。

無理に顔を歪めている。

そんな感じの表情。

「ああ……ただ。また余計な事して邪魔しちゃったんだな……居ない方が良くね。僕なんて」

「花君……」

ふと視界に入った彼の両手は、血の気が引く程ギュツと握り締められている。

「居ない方が良くなんて……そんな訳ないさ」

僕は、白く血の気が引くほど握り締められている彼の手に、そっと触れた。

花君の手は、冷たい。
だけど柔らかかった。

ピクツと彼の手が震える。

「花君は……僕の高校生活で出来た初めての友だよ。居ない方が良い訳ないんだ」

そのまま、ゆつくりと花君の握り締められていた手を、開いた。

驚いた様に、僕に一瞥を投げかける花君。

「かけがえの無い友達なんだから」

僕の手には花君の涙が何粒も落ちて、弾ける。

「欧介君……友達で居ても良いの……？」

「もちろん。花君が居てくれなきゃ、学校がつまんないよ」

「居て良いんだ……良かった……ありがとう」

花君の涙は、温かい。

目の前で涙を流してる花君には申し訳ないけど、涙で花君の体温を感じる事が出来て、何だかに安心した。

彼が落ち着くまで僕は、学ランの袖で花君の涙を拭っていた。

「さあ、蓮の缶コーヒーを買いに行こうよ」

卵焼きを蒼ちゃんの口に放り込んだ、蓮の姿が浮かんだ。

実際、羨ましいですよ。

僕ですら、僕ですらした事ないのに！

誰が缶コーヒーなんか買ってやるもんか！

そう言いたいのは、やまやまだけど、助けられた事は事実だ。

缶コーヒーぐらい、奢らないとね。

あとが怖いし。

「うん……そうだね。蓮のお使いをしましょう」

涙が止まった、花君も立ち上がった。

だいぶ元の声色に戻ってきた。

やっぱり元気な花君の声じゃなきゃね。

「欧介君、何も聞かないんだね」

購買に近付いた時、花君が僕の顔を不思議そうに覗き込んできた。

くうう……急に覗き込むなんて。

ドキドキさせないで下さいよ。

「ああ、花君が何度も呟いてた言葉の意味の事かな？それは花君が話してくれる時に聞きたいからさ」

人には、誰だって語りたくない事があるだろうし。

触れたくない思い出も有るからね。

まあ正直に言えば……今すぐ聞きたい。

花君が、秘めてる事を暴きたい。
明かして貰いたい。

でもここは我慢、我慢。

親しい人の心を傷つけたくはないから。

一休みさ。

「欧介君が、友達でホントに良かったあ」

僕の手が柔らかな感触に包まれた。

「ホントにありがとう、欧介君」

とびっきりの可愛い……いや可愛いと言っ言葉には形容出来ないぐ
らいの笑顔を向ける花君。

君は、僕に最後の一線を踏み越えさせるつもりですか？

花君は、男。

男友達。

可愛いけど男。

残念だけど……。

自分に言い聞かせながら花君と二人、頼まれてた缶コーヒーを片手に教室へと帰った。

四ヶ所目 22（後書き）

祝 50話達成！

しかし相変わらず、連載が進まないです……。しかし、書き続けます。

コメントやご指摘、評価等待っています。

和紙でした！
では！

四ヶ所目 23

花君の仕草にドキドキしながら、廊下に戻ってくると四組の前に蓮と大河君が居た。

何やら話をしているようだ。

「ただいまあ蓮、大河君」

花君がニツコリと笑いながら二人に手を振った。

そんな花君を見て、蓮が口をポカンと開けた。
まるで信じられないモノを見たかの様だ。

「ハ、ハナ！どした？むっちゃ笑顔じゃん」

「ああー酷いなあ、僕はいつも笑顔なのに」

「えつま、まあ、そうだけどよ。さっきまで……ははっ」

「はい、蓮！缶コーヒーの微糖だよ」

僕は、蓮に買ってきた缶コーヒーを渡した。

「おおっ……ありがとよ」

缶コーヒーを受け取りながらも、花君の顔を不思議そうに見続けている。

そんな蓮を尻目に、大河君が僕達の方に歩み寄った。

「欧介、朝の一件は俺とコイツが下手な芝居をしたせいなんだ。すまない」

大河君がバツの悪そうな顔で、静かに謝罪の言葉を呟いた。

「うん……その事なら花君から聞いたよ」

「そうか……」

「ああ！コイツだと！テメエにコイツ呼ばわりされる筋合いは無いぜ」

神妙な様子の大河君に、蓮が食ってかかる。

「ふつ。俺の謝罪が馬鹿のせいで台無しだ。声を荒げてる暇があるなら、お前も謝罪をしたらどうだ？」

深いため息をつく大河君。

完全に蓮を小馬鹿にしている感じが出ている。

ああ、また口論の予感。

「バカだあと！俺は今からスバツと謝んだよ！見とけよ、俺の潔い謝りっぷりをよ」

そう言つと、蓮は廊下に膝をついた。

「ちょ、ちょっと蓮！謝らなくて良いよ、僕は気にしてないよ」

慌てて、蓮を立ち上がらせる。

こんな人の行き交う廊下で、土下座なんてマズすぎる。

「だけどよ、オースケに迷惑かけたし……あつあれは、お前には嬉しいハプニングだったかい？」

蓮……アンタ、ホントに謝るつもりあるんですか？

「正直……やっぱ悪いわ。オースケ、許してな」

まじまじと申し訳なさそうな表情で僕を見る。

「二人は悪くない。蓮も大河君もゴメンね。全部僕が悪いんだよ……」

花君の声色が、また悲しみを帯び始める。

うはっ、折角花君の元気が回復したのに。

「誰も悪くないんだ。だから謝らないで欲しいな。それに蓮の言う通り、ある意味嬉しいハプニングだったしさ」

本音を三人に伝えていると蒼ちゃんを抱き締めた瞬間の感覚が、一瞬体に蘇った。

ううぐ、直立で抱き締めたいな。

出来れば柔らかいベッドの上でも抱き締めたい。

その後、後ろに手を回して邪魔なホックを……。

おっと、お楽しみ妄想は家までとっておこう。

「花君も、蓮も、大河君も……僕の為にしてくれたんだからさ。僕は嬉しいんだよ。今までこんな経験ないから」「さすがオースケだ。懐がでけえな！どっかの二ヒルぶった奴とは違うぜ」

横目で何度か、僕と花君では無い人を見て蓮が笑う。

結構……危険な展開だ。

「ありがとう欧介。花ちゃん……」

大袈裟に咳払いをする大河君。

素直に花ちゃんと言葉を続ければ良いのにさ。

「花、俺も蓮も気にしてない。今回は、欧介の言葉に甘えよう」

大河君は笑顔に優しさを感じる。

たまにしか、見れない大河君の笑顔だ。「しかし、残念だ。バカの戯言のせいでオースケの言葉が汚された。ああ……本当に残念で堪らない」

手をかざし、すました顔でわざとらしく首を振る大河君。

なんだかんだで、僕個人的に二人のやり取りは結構好きだったりする。

「うん……欧介君の言葉に僕は救われたからさ」

「花君……」

「よっしい！しんみりするの、もう辞めたあ。それよりも……」

花君は、僕の顔を見てキラツと輝く笑顔を向けた。

「今日は、欧介君と蒼ちゃんの放課後個人授業が予定されてるんだよ」

花君にかぎって悪意は無いと思うけど、何か引つ掛かるネーミングだなあ……。

「うおっ！そうだったな、初めての個人授業 楠木蒼編 があるんだった」

蓮は悪戯っぽく、僕に笑いかけた。

「蓮！僕だって怒るぞ」

そりゃ、蒼ちゃんにそっちの個人授業したいけど。

そっち方面のネタで茶化されたくは、無い！

でも、そのシチュエーションは帰ってからの楽しみ妄想の一つに追加しよう。

「冗談だよ。落ち着けええい、オースケ」

楽しそうに笑い声をあげる蓮。

「下らない馬鹿だな」

大河君は、呆れた様子で溜め息をついた。

「んだと、テメエ」

そんなやり取りを聞いてると、授業開始5分前の予鈴が鳴り響いた。

「さあ、午後からも睡眠学習と洒落込みますか」

蓮が、缶コーヒーを片手にニカツと笑い教室に入る。

「睡眠学習は、学習では無いな。ただの怠慢だ」

そう呟いて後に続いた。

「テスト近いし、落ち込んでた分も頑張ろつと」

すっかり元通りの明るい、いつもの花君だ。

改めて良かったと、安堵して僕も教室に戻る。

そして真つ先に、蒼ちゃんの席に向かった。

「おかえりなさい欧介君。中村君の缶コーヒーは買えましたか？」

笑顔で僕を迎えてくれる、蒼ちゃん。

おかえりなさい欧介君。て甘美な響きなんでしょう。

部屋のドア開けた瞬間に言われたい。
もちろんエプロン姿で。

つと、妄想する前に伝えないと。

「う、うん。コーヒーは買えたよ」

緊張する自分を落ち着かせよう必死に、気持ちを安定させる。

もういっぱい、いっぱいですよ。

「あ、あのさ今日、約束通り数学教えるからさ。じゃなくて、教
たいから。予定は……まだ空いてる……よね？」

「はい」

蒼ちゃんは、ゆっくり優しく微笑んだ。

「もちろんです」

蒼ちゃんの言葉が聞こえた刹那、僕のハートを もちろんです
打ち抜いていった。

「しょ、しょいつは良かったあ。では、授業頑張りまひょう」

ダメだ、あんな笑顔見たら骨抜きになるよ。
実際、ハートは打ち抜かれるわ。

骨抜きになるわ。

言葉はおかしいわ。

幸せな大惨事だ。

でも、蒼ちゃんの役に立てるんだから嬉しい。

授業開始を告げる、鐘の音がなり響いた。

僕の心の中には、蒼ちゃんの言葉が優しく響いている。

四ヶ所目 23（後書き）

な、なんと前回から2日で更新！？

半期に一度の執筆スピードです！
和紙自身、驚いてます。

ようやく欧介と蒼の話が書けそうです。

まあー花ちゃんの話が、うまく纏まらなくて…。

核心は、また後日書きます。

次回からも、読者様に伝わるよう精一杯頑張ります。

コメントや、ご指摘、評価をお待ちしてます。

和紙でした！
では！

四ヶ所目 24（前書き）

作中に下ネタが盛り込まれています。

苦手な読者様、すいません……。

四ヶ所目 24

午後からの退屈な授業、かつたるい帰りのSTもやっと終わりだ。今STを締めくくる号令を、高鳴る鼓動を抑えながら言い終えた。いつもなら他愛もない話を蓮や花君と交わして帰るが、今日は違う。そう違うんだ。

蒼ちゃんと、お勉強する。

二人だけで。

二人だけの。

二人にとってのハジメテ。

は、初めて!?

蒼ちゃんとの初めて……。

放課後、二人しか居ない教室。

夕日に照らされ、向かい合う二人。どこからか、渡り鳥の鳴き声が切なげに響く。

僕は、蒼ちゃんの華奢な肩にゆっくりと手をかける。

彼女の瞳は、心做し（こころなし）か潤んでるよう見えた。

「欧介君……この問題の解は」

「黙って」

蒼ちゃんを見つめながら、ゆっくりと背中に手を回す。

「蒼ちゃんの……体を解いてみたいんだ。ここからね」

セーラー服の下から手を入れ、ブラジャーのホックに指を掛ける。

切なげに吐息を漏らす、蒼ちゃん。

「優しく……解いて」

またどこからか、渡り鳥の鳴き声が聞こえてきた。

いや。

違うな。

僕が聞いたのは、蒼ちゃんの甘美な鳴き声だ。

っうあわ！

非道い……あまりに非道過ぎる。

いくらなんでも妄想を膨らませ過ぎでしょうよ！

よくもまあ、しょうもない妄想が出ますよね。

我ながら感心……してる場合じゃない

。自己嫌悪に陥っていると、視界の端に花君と蓮が此方に歩いて来るのを捉えた。

正直あまり話したい気分では無いけど、仕方がない。

「お疲れ様あ欧介君！ついにこの時間が……ってどうしたの？顔が真っ赤だよ」

花君が、不思議そうな表情で僕の顔をぐっと覗き込む。

同時に彼の柔らかかそうな前髪が少し揺れた。

目の前でパチッと瞬きする花君の仕草に心拍数が乱れる。

「は、花君！ちよつ、ちよつと顔が近ひよ」

いい加減、花君の仕草でドキドキするのは無くしたい。

だけど無理だあ、だって可愛いんですもん！

あわあわ、誰かに聞かれたら絶対勘違いされる言葉だ。

「ははっ！楽しみで堪らないってのは分かるけどさ、落ち着けやオースケ」

僕の火照った顔を見て、楽しげに言う蓮。

「にしても羨ましいねえ、蒼っちに手取り足取り教えられるなんてな」

黒板を丁寧に消してる蒼ちゃんの方を見て、楽しげな笑いに拍車がかかった。

「て、手取り足取りって！僕は、ただ数学を教えるだけだし。そりゃあ教えてみたいけど……手を取り、足を取り」

くうはあ！

蒼ちゃんの足とか、かなり萌える。

白くて柔らかい足。

考えただけで食んでしまいたい。

「そ、そうなんだ……突然のカミングアウトに僕は少しビックリだよ。欧介君、とりあえず落ち着こうね」

明るく豪快に笑う蓮と対照的に、僕を心配そうに見つめる花君。

花君には悪いけど、落ち着けと言っほうが無理だよ。
今はね。

不意に蒼ちゃんの姿を視界に捉える。
蒼ちゃんは、もう黒板の大半を消し終えていた。

一生懸命消している蒼ちゃんの姿は、ずっと見ても飽きないだろうな。

高い所に書かれた文字を消そうと、背伸びをする蒼ちゃんがとても愛しい。

何だか、一生懸命な彼女の姿を見ていたら心が穏やかになって、不純な気持ちも消えた。

だいたい不純な気持ちを抱く時点で、オカシイけど。

「花君もう落ち着いたよ。心配させてゴメン」

「うっん謝らなくても良いよお、僕は何もしてないんだしさ」
花君は僕の言葉に少し驚いた様子だ。

そりゃそうだろうな、真っ赤に興奮してると思ったら突然落ち着いてるんだからさ。

「でも心配させるぐらい、舞い上がってたし」

事実、有頂天でした。

「まあ分かってくれたんなら、良しとしまあす。今回だけはねえ」

優しく笑う花君。

彼の笑顔は、死ぬまでに見たい笑顔ベスト3に入っていたりする。

だって元気が貰えますから。

もちろん蒼ちゃん的笑容の方が少しだけ上に位置してますが。

「さてとお、僕と蓮はそろそろ帰るね。欧介君、蒼ちゃんと仲良く勉強するんだよお」

親指をクイツと立てて笑う花君。

花君の手にそびえ立つ親指には、どんな意味が有るのかは分からないけど、何となく僕も親指を立て返した。

「蒼つちの前で立てるのは、親指だけにしとけよ!」

握り締めた拳を僕の下半身に突き出す蓮。

「おわあ、蓮！？それは意思では……抑えられない現象だから」

「コ、コラあ！蒼ちゃんが居るんだし下ネタ禁止だよ、二人共お」

胸の前で腕をクロスさせて、ホッペを膨らませる花君。

もおう可愛い……じゃなくて、声が大きいよ花君！？

今の話が聞こえちゃうじゃん、蒼ちゃんに。

「あ、はあい。森島君、私がどうかしましたか？」

黒板を消している体勢から振り返る蒼ちゃん。

ああ、やっぱり聞こえてますよね。

「はははっ。ハナあ声がちょっと大きかったな」

イタズラっぽい笑みを浮かべて、蓮は見るからに中身が入って無さそうな鞆に手をかけた。

ま、まさか？

「ええーそんなに声大きかったかなあ……僕」

花君もいつも学校に持ってきている橙色のレザーバックに手をかけた。

この状況で？

「ああ！ちよつとばかしな。でもオースケが何とかするさ。じゃな、後で首尾を教えるよオースケ！蒼っちい、また明日あ」

赤い彗星が流れかのように駆け出した蓮。

「まつ、待つてよ蓮ちゃん！？ゴメンねえ欧介君。蒼ちゃんを上手く誤魔化しておいてね。そうゆうの得意だから大丈夫だよ！夜にメールちょうだいね。蒼ちゃん、バイバあい」

フワツとシャンプーの良い匂いを残して駆け出す花君。

「はあい？え、ええー」

二人共、言いたい事を早口で捲くしたてて逃げた……だとお！？

黒板を消し終わった蒼ちゃんは、肩に黒い革製の鞆を掛けてハンカチで手を拭いながら、ゆっくりと近付いてくる。

「なんだか、二人共凄い勢いで帰っちゃいましたね。あのお欧介君、さつき森島君が私を呼びませんでした？あと何かを立てるとか、立てないとか」

首をかしげ、やんわりと微笑む蒼ちゃん。

ナニかを立てるとか、立てないとか。

彼女の口から出たフレーズに、心臓が暴れる。

「あ、蒼ちゃん。黒板消しお疲れ様です。ふ、二人は買い物に行つたよ。とにかく急いでみたいでさ。二人はあ、今日はゲームの記録を……立てるとか言っちゃってたんだよ」

「そうなんですかあ。今から買い物とゲームだなんて、楽しそうですね」

夕日に照らされている、蒼ちゃんの瞳は太陽が溶け込んだように、鮮やかに輝いている。

「そ、そうだね。二人はいつも元気だからさ」

「はい、そうですね」

「うん」

僕と対面するように机の向きをかえる、蒼ちゃん。

つて、ボーっと見とれてないで手伝えよ自分。

「でも私は……」

鞆から数学の教科書と問題集を取り出して椅子に腰をかける蒼ちゃん。

「欧介君が、一番元気だと思います」

「蒼ちゃん……」

このまま。

太陽が地平線に沈みかけてる、今のままで時間が止まれば良いのにな。

そんな想いを胸に秘めながら、蒼ちゃんに
「ありがとっ」を伝えた。

僕たちだけの勉強会が、今始まった。

四ヶ所目 24（後書き）

最近傾向として、下ネタが入ってしまいます。

爽やかなラブコメになるよう頑張ります。

コメントや、評価、御指南をよろしくお願い致します。

和紙でした！

では！！

四ヶ所目 25

二人だけの勉強会が始まって1時間と30分。

ノンストップで蒼ちゃんに、数学の公式の説明、例題の解法、問題集の演習問題を解いてきたのでさすがに集中力が切れてきた。

蓮や花君よりも元気だと思うよ。

そう蒼ちゃんに言われたから、つい頑張り過ぎちゃったワケだ。

ああ、さっき彼女の表情や言葉を思い出すと溶けちゃいそうになる。

いつその事、蒼ちゃんと二人で溶け合ってみようか？

おっと、ダメだダメだあ！

集中集中。

はあ……それにしても頭を使ったせいか腹が減った。

いやそれ以上に僕の胃袋が、何か甘い食い物をよこせと、キリキリと痛みを感じさせる。

胃袋の密かな自己主張を感じながらふと、窓の外を眺めた。

気付けば、太陽はもう殆ど沈んでいる。

夕暮れがだいぶ長くなったなあ。

もうすぐ梅雨。

それが過ぎれば夏か。

そして秋、冬。

一年は思ってる以上に早く過ぎるかも。

そんな季節の流れの中、ずっと蒼ちゃんと仲良く居れるのかな？

そんな想いに駆られてると、トントんと僕の筆箱が叩かれた。

蒼ちゃんが、口元を緩ませて僕を見つめていた。

「ああ、ゴメンね。つい……ボーっとさ」

痒くもない後頭部を掻いてしまう。

「疲れましたか、欧介君？」

柔らかい表情を浮かべながら、シャーペンから手を離れた蒼ちゃん。さっきまで教えていた単元の問題が全部解かれているのが目に入っ
た。

「おおっ！？もう解いたんだあ。蒼ちゃんは、理解するのが早いね。
羨ましいよ」

僕なんか数学を理解するのに、どれだけ苦労したか。

まあ、高校1年生2回目で出来ないとマズいし。

「そ、そんな事は無いよ。欧介君の教え方が上手だから……」

僕の羨望を含んだ本音に照れたのか、顔に微か赤らめた蒼ちゃん。

すごい可愛い。

今すぐにでも、イケない妄想を膨らませちゃいたいぐらい。

彼女に新しい悦びを……って、ヤラシイ妄想は抑えなきゃ。

「僕なんかの説明で理解してくれる、蒼ちゃんがスゴいんだって。ホントにそう思うからね」

「そんな……凄くなんか無いよ。全然」

「いや！スゴいと思うけどなあ」

しばしの沈黙。

でも気まずい沈黙では無いのが、救いだっただ。

その沈黙を破るかのように校庭から野球部の掛け声が聞こえてくる。

野球部は集団で、しきりに何か叫んでいる。

「野球部、こんな時間まで練習してるんですね」

蒼ちゃんが、窓の外に目を向けて呟いた。

「頑張ってるよね。でも日が落ちると危ないと思うなあ。飛んできた球が見えなくなるしさ」

まあ僕だったら、今頃救急車に乗ってるんだろうなあ。

「ふふっ、まだこのぐらいの暗さなら意外にも見えるんですよ」

蒼ちゃんが優しく微笑む。

「えっ、そうなの？」

「はい。野球ボールって白いですから、結構見えるんですよ」

また微笑む彼女。

そんな蒼ちゃんの笑顔から、優しい気持ちと楽しそうな雰囲気伝わってくる。

いつかは、この笑顔も僕だけのモノに。

でも……。

「でも蒼ちゃん、何でそんなに詳しいの？」

率直に素直な疑問をぶつけてみた。

不思議だった。

蒼ちゃんが野球に詳しくそうには見えない。

それに、実際に野球を競技しているようにも見えない。

じゃあ何でだろ？

「それはですね……」

僕を見つめて、ゆっくりと言葉を続ける蒼ちゃん。

視界の隅で、廊下の蛍光灯の電源が入ったのが分かった。

「私の……」

グラウンドのナイター設備の照明も点いたようだ。

嘘お！？

まだ野球部は練習するのかあ……って、今は野球部なんてどうでも良いか。

「大切な……」

「た、大切なあ」

気づけば、蒼ちゃんの言葉につられて、生唾を呑み込みながら呟いている自分。

直後、生唾を飲み込んだ事に反応したのか、胃袋がかなり大きくグウウウとお決まりの音を立てた。

はあああ、せっかくの雰囲気をぶち壊しちゃった……。

四ヶ所目 25（後書き）

こんにちは。

今回は割と早く更新出来ました。

最近、久々に欧介以外の準主役の3人の話でも書こうかなって思ってます。

まだ予定ですけど。

欧介と蒼の話が落ち着いたら書いてみようかなあ。

コメントや、御指摘、御評価をお待ちしています。

和紙でした、では！！

四ヶ所目 26 (前書き)

お久しぶりです。

今回は、二人だけのテスト勉強編ラストです。

四ヶ所目 26

僕の意志とは無関係に腹の虫が空腹を盛大に告げる。

そのおかげで、蒼ちゃんの口から語られる話が途絶えてしまう。

「ああっ！ゴメン……話しの途中なのに」

「ふふふつ。欧介君のお腹が鳴いちゃいましたね。お腹減りましたか？」

にこやかな表情で語りかける蒼ちゃん。

その柔らかい表情から、謝らなくて良いんですと言っているようだ。

「うん、正直今ならアンビリーバブル next って名前の盥^{たらい}に入ったパフェでも完食出来ちゃうよ」

「ええっ、それは凄いですね。今まで完食してる人見たことないですよ」

「そうなんだ。なら蒼ちゃんが初めて目撃する達成者は、この真田欧介だね！なあって、調子に乗りました」

いや、調子にのってなんか無いぞ欧介。
今の僕ならきつと！

……無理だ。

「そうですね、そうですねえ！欧介君が私の知ってる唯一達成した人になりますね。そうなったら私たくさん自慢しちゃいます」

蒼ちゃんは、目をキラキラさせて天井を見上げる。

あ、あのお冗談で言っただけですよ。

最後で調子に乗ったって、認めましたよね！？

「さ、さてとあー！日も落ちたし、腹も減ったしそろそろ帰ろうか蒼ちゃん」

リアルに鹽パフェを食べさせられる雰囲気を作ってしまった事に後悔の念を覚えつつも、これ以上の深みに嵌る前に帰宅することを選ぶ。

「はわああ、本当ですね。もうこんな時間になってる」

蒼ちゃんは、いそいそと自分の筆記用具や教科書を片付け始めた。

そんな普段見る事の出来ない、慌てる彼女も可愛いくて何だか癒される。

つとと、僕も見とれてないで片付けなきゃ。

「あの、今日はありがとうございました。欧介君は本当に数学を教えるの上手ですよ。私が保証します」

「う、うん。ありがと。誉めてくれて嬉しいよ」

蒼ちゃんは、自分の胸に手を添えて力強く言葉を伝えてくれた。

でも僕の返答は在り来たり！

なんで彼女の賛辞に、僕はもつと上手く応えられないんだよ？

ああクソ！

不甲斐ない自分に腹がたつ。

もつと気の効いた事言いたい。

蒼ちゃんの心まで届く言葉をさ！

「本心ですから私の。……本当に上手だから欧介君。……あつ、何回も言ったら嘘っぽいですね。ごめんなさい」

「い、いやそんな事はないよ。蒼ちゃんの言葉が嘘っぽいだなんて……そんな事絶対思わない。むしろ蒼ちゃんに誉めてもらえて嬉しい、テンションが……って何言ってるんだろ僕！あはは」

何だか甘ったるいような、くすぐったいような微妙な雰囲気教室を包み込んでいくのが分かる。

あんまり女の子に褒められた事が無い僕にとっては、今この瞬間がすごく恥ずかしくて、何かむず痒い。

体がむず痒いとか、そんなのじゃなくて何か妙にムズムズすると言うか……うーん上手く言い表せることが出来ない。

「よ、よっし！帰ろっか蒼ちゃん」

「そ、そうですね」

教室の電気を消して、蒼ちゃんと共に足早に廊下に出た。

玄関で靴を履き替え、蒼ちゃんが靴を履き終えるのを待った。

靴を履きながら、ふいに見える彼女の太ももに僕の目は釘付けだ。

頬でスリスリしたあい。

そんな衝動に駆られ、気付けば胸をドキドキと高鳴っていた。

二人で玄関から出ると外は完全に暗かった。

しかし相変わらず、野球部は練習してるみたいだ。

校門に向かう途中、グラウンドに優しい表情を向ける蒼ちゃんを見逃さない。

そんな蒼ちゃんの表情に強く惹かれる僕は、改めて決意を固める。
さつきは僕の腹のせいで聞き逃したけど、今度は絶対に聞こう。
そんな決意を改めて。

蒼ちゃんの大切な……って何だろう。

もしや、今でも大好きな元カレとかだったら!?

憧れの先輩が野球部に居るんです!

とか、だったら!?

ぐっひゃ!

やっぱ聞くの辞めようか。

さつき改めて決意した事が、すでに揺らぐ。

ああクソ！

ダメだ、ダメだ、ダメ人間だ僕は！

気になって仕方ないだろ！

後ろ向きな想像が膨らむぐらい、気になって仕方ないんだから聞いちゃえよ。

気付けばバス亭に着いていた。

今、しか聞く時はない。

「あ、蒼ちゃん！あのさ……」

「ううん、何ですか欧介君？」

よし、そのまま聞け！

聞くんだ、欧介！

「あのさ……さつき蒼ちゃんが言いかけた言葉って……何かな？」

「ふん？さつき……つてえ」

「私の大切な、とか言いかけたところで僕が腹を鳴らしたから聞けなくて……ね。だから教えて欲しくて。ああ、もちろん良かったらだけど……」

うっほ！

自分でも驚くぐらいの直球だ。

「ああ、その話ですかあ」

蒼ちゃんの顔が対向車のライトで照らされる。

その瞬間、彼女の瞳が照らされて鮮やかに輝いた。

「私の大切な思い出なんです。……キャッチボール」

「大切な思い出……キャッチボールが」

「はい。お父さんとの……大切な」

そう言つて蒼ちゃんは、此処では無いどこかを見ているような表情を浮かべた。

「私のお父さんは、野球選手なんです。結構有名だったんですよ。
楠木吾郎ってピッチャーでした」

楠木吾郎。

そういえば居たような気がする。

剛左腕の吾郎とか呼ばれてたような。

「剛左腕の吾郎だっけ？ゴメン、あんまり野球詳しくないから曖昧で……たしか奪三振王とか、ノーヒットノーラン達成とかしてたような」

「はい！そうですよお、欧介君なかなか知っててくれますね。嬉しいな」

本当に嬉しそうな笑顔で喜ぶ蒼ちゃん。

そんな彼女の笑顔が、僕の眠っている記憶を呼び覚ましていく。

「確か、大西洋グリフィンスの不動のエースだったよね？日米交流試合でアメリカ代表から三振の山を築いた」

「そうです、そうですね。うわぁ欧介君、結構知ってますね」

「す、凄いよ！？蒼ちゃんのお父さん！大スターじゃん。って目の前に剛左腕の愛娘さんが居るなんて夢みたいだよ」

さすが聖蘭高校！？

有名人や著名人、金持ちの子供が多く通うだけある。

「そんな事ないですよ。お父さんが有名なだけで、私は私ですから」

「いやでも、すごいからさ！」

うちの両親なんて一般人ですから。

そう考えるとやっぱり凄い。

ここで、ふと心に気になる事が沸いた。

今の話は、全て数年前の話であり記憶だ。

今は何してんだらうな？

「そういえば、最近は近況を聞かないけど、楠木選手はまだ現役なの？ああそれ以上に、家ではどんなお父さんかな？是非聞きたいな」

現役なら、今はどこの野球チームなんだろう？

もしかして引退してて、チームのコーチとか？

やっぱり現役引退後は、野球解説者とかになるのかな？

それ以上に、どんなお父さんなんだろう？

たまに家に帰ってきた時はやっぱり、可愛い蒼ちゃんにベッタリな
んだらうか？

うわぁヤバいな！

もし今の僕と蒼ちゃんが話てる現場を見られようモンなら、ウチの
蒼に近づくなどこぞの馬の骨が！！

なんて言われるのかな？

「言いたくない」

でもこんなに可愛い娘だったら当然……えっ！？

「う、うん？今何て？」

「言いたくない！！……って言った」

蒼ちゃんと目が合った。

今、彼女は僕を直視している。こんな蒼ちゃんの顔を見るのは初めてだ。

まるで寸前までの蒼ちゃんなんて居なかった。

今までの優しい笑顔、楽しそうな笑う顔、悲しみが滲み出ている顔。彼女はいつも色々な表情を見せてくれた。そんな色々な表情の蒼ちゃんが大好きだ。

だけど今は何も無い。
感情の全てが消された無表情。

だけど声だけは明らかに不快感を露わにしている響きだった。

楠木選手が家ではどんなお父さんなの？

やっぱり娘命親父？

彼女に質問をした時のドキドキした気持ちは、跡形もなく消えた。

……バスが来た。

「あつ、欧介君バスが来ましたよ。時間ぴった리ですね。さあ乗りましょう」

口を開い彼女は、いつもの彼女だった。

バスのライトに照らされ、眩しそうに目を細めて笑う　いつもの蒼ちゃんだった。

安堵感。

そんな感覚が僕の体を巡る。

ああ、バカ野郎だ僕は！

調子の乗ってプライベートなんか聞くからなんだ。

関係ないだろ、楠木選手がどうかなんて。
今日は蒼ちゃんの親父さんが大スターだった。

そんな大ニュースを知る事が出来たんだ。

欲張んなよ。

デリカシー無い奴は最低だ。

安堵する反面、さっきの無表情な蒼ちゃんの表情が脳裏から中々取れない。

真っ白なシャツにこびりついた泥の様に、こすってもこすり落とせず、汚れだけが残る。

今頭の中は、そんな感じがした。

蒼ちゃんと共にバスに乗車し、座席に座る。

バスが発進して、すぐに僕は蒼ちゃんに声をかけた。

早く頭の中の汚れが落ちるように。

「さっきはゴメン。蒼ちゃんのお父さんの事聞こうとして……プライベートなのにさ。本当にゴメンよ」

脳裏に浮かぶ無表情な蒼ちゃん。

早く取れろ、取れちまえ。

もう、あんな蒼ちゃんは見たくない。

「ああ……いえいえ私こそゴメンね。……ちょっと意地悪な事言っただけですから。だから怒ってないですよ私。」
申し訳なさそうな表情を浮かべながら、謝る蒼ちゃん。

「いや蒼ちゃんが謝る事は……」

「今はお父さん家に居ないんですよ。私が小学校卒業するぐらいに、お母さんと離婚したんです。だから……なんだか欧介君が羨ましいくて」

「僕が羨ましい？な、なんで？」

こんな一般家庭の凡人一家風情のどこが？

「お父さんとお母さんと三人、家族全員で暮らしているから、良いなあ……って思ってしまった。そう思ったら意地悪したくなりました」

小さく舌を出した蒼ちゃん。

その舌に吸い付きたくて堪らない、って事は置いておこう。

「ゴメン……無神経だね僕」

最低野郎！

自分の心が自分自身を罵り叫んでいる。

「いえ良いんです。言わなかった私が悪いですから。それに……」
そう言って蒼ちゃんは、セーラー服のポケットから小さな一枚の写

真とリングを取り出した。

「お父さんは、いつかまた絶対に三人で暮らせるって約束してくれました。家を出て行く前の日に、最後のキャッチボールしながら……。お父さんは、絶対に嘘つきませんから。絶対の絶対に」

ギュッとリングを握り締める蒼ちゃん。

嘘つかない！……か。

少し前に僕が軽い嘘をついた時の事を思い出す。確か、レクリエーションの時だった。

僕の小さな嘘に、蒼ちゃんは過敏に反応していた。

僕の顔を覗き込む蒼ちゃん。

そして、僕が嘘を付いている知ると、嘘をつく人は嫌いだと言った。はつきりと。

嫌い！！だと。

「それに、私がリングに想いを込めると、その想いがお父さんに伝わるって教えてくれましたから。最後の……キャッチボールが終わった後に、私の手にお父さんのリングを握らせてくれて。……私は、いつも想ってるんです。私は信じてます。昔も今も……お父さんが帰ってきてくれるまで。三人で暮らせるまで……」

「うん、きつとお父さんの言う通りだよ。蒼ちゃんの気持ちは、今この瞬間も伝わってる！そして今に、僕が羨むぐらいの幸せ家族になれるよ。絶対に！僕が保証する」

「欧う……介君。ありがとう……ございます。笑われるんじゃないかって、思いました。幼い子みたいだから、私……」

照れたような、悲しんでいるような複雑な感情が見え隠れる蒼ちゃんの表情。

「蒼ちゃんが信じてる言葉なんだ。幼くなんでない。だって蒼ちゃんにとって大切な言葉なんだからね。だから自分自身が信じれる言葉が有る事は、素晴らしい事だと思う」

楠木選手。

こんなに想ってる娘さんが居るんです。早く約束を実現して、蒼ちゃんを安心させてあげて下さい。

「優しい言葉……ありがとう。良かった、本当に……良かったです。欧介君は信じてくれた。私の話信じてくれた。……私、欧介君の事信じてますから」

「僕は、当たり前な言葉を伝えただけだから。でも……信じてくれてありがとう。嬉しいよ」

「はい……信じてますから」

欧介君だから、私は信じてるね。

そう彼女が伝えてくれた、気がした。

それと、また一つ彼女に近付けた気がする。いや、確実に近づいたに違いない。

良い意味でも……悪い意味？でも。

とにかく蒼ちゃんに嘘はつかない。

彼女が嘘を嫌うのだから！

そう心に堅く誓う。

蒼ちゃんが降りる、泉区5番地のバス停に着いた。

もう暗いから、送って行くよ！

そう伝えたが、彼女は大丈夫ですよ。

もう近いですから。

そう言って断ってきた。

そう言われた、僕は引き下がるしかない。

本当は送って行きたいが、仕方ない。

今日は諦めるしか。

「今日は数学も……優しい言葉もありがとうございました。またね、欧介君。ばいばい……です」

蒼ちゃんは、可愛い言葉を残して足早にバスを降りて行った。

最後に残っていた蒼ちゃんの言葉が可愛い過ぎて、バスが発し

ても、何だかホニヨホニヨと宙を漂うような気分になる。

それと同時に一番最初に彼女と会った日の夜を思い出した。

あの夜と同じで、窓の外の月はキラキラと煌めいてる。

間近に迫ったテストを頑張ろう。

そして、蒼ちゃんと鹽パフェを食べに行こう。

そんな事を思いながら、家路に向かう。

四ヶ所目 26（後書き）

御愛読頂きありがとうございます。
欧介と蒼の勉強会が終わりました。
今回は、蒼の一面を書いてみました。
イメージを壊された方が居ましたら、すみません……。

次回は、蓮か大河か花の話でも書いてみようかと思っています。

三人も色々遊ばせたいのです、和紙は。

もちろん書かない可能性もありますが。

コメントや御指摘、作品を思っ下さっている厳しい評価もお待ちしています。

ちなみにテスト週間の話は飛ばします（笑）

和紙でした。
では!!

四ヶ所目 27 (蓮) (前書き)

久しぶりの更新で、すいません。
今回は蓮と柚夏の話です。

四ヶ所目 27（蓮）

今頃、二人は上手くやってんだるか？

オースケと蒼っち。

太陽が地平線の彼方に消え、夜の気配を窓の外に感じながらダチへの想いを巡らせる。

まあ俺が心配しなくても、オースケなら蒼っちと楽しく過ごしてるだろな！

でもアイツのテンパってる姿が、目に浮かぶぜえ。

ハハハア！

つとお、そろそろアイツが来る時間か？

時計を見ると、もう間も無く18時になる。
今日は幼なじみの柚夏が勉強を教えにくる。

幼なじみ。

独り暮らしのマンションで勉強。

夕暮れのイケない×××。

おい！

完全にロマンスが生まれちまう展開だぜ！？

なあってな。

そんな展開は俺とユズには無えよ。

「蓮！今日は家に行つてあげる！テスト勉強を見てあげるんだからね！いきなり蓮が赤点なんか取ったら、蓮のお母さんに申し訳ないんだからっ！」

実際は、ユズが一方的な調子で、勝手にぬかしやがっただけだ。

母ちゃん……恨むぜえ。

ユズにヨロシク頼んでくれた事をよお。

ユズは、ガキの頃から俺に説教をしてきやがる。

高校でも会う度に、有り難いお小言を聞かせてくれる。

お馴染みの、腰に手を据えるスタイルで。

何だっつうの！

俺は親のカタキか？

末代までの祟りか？

もう幼なじみってか、腐れ縁だ！

まあ良い意味でも、悪い意味でもさ。

そうこうしてる内に、玄関のドアがドガバガとかなり乱暴に叩かれた。

ああ、噂をすればなんとやらだな。

「はい、どちらさん。ちなみに新聞の勧誘なら遠慮する。間に合ってるんで！あとピザと蕎麦は頼んでないから、ドアは開けられない」

8割の確率でユズだと思うが、取り敢えずインターホンに向かって言葉を投げかける。

もしかしたら新聞社や何かのデリバリーの可能性も……。

「私だよ、ユズっ！」

その可能性は露と消えた。

ああ知ってるぜ！

そんな意味を込めて舌打ちをかました途端、ユズがギャーギャーと騒ぎ出す。

「もぉ！早く開けてよ。女の子を玄関に立たせておくなんて、本当にデリカシーないわね！バカ蓮のくせに！早く開けてよ、開けなさいよ！！玄関先に居たら恥ずかしいでしょ！」

恥ずかしいとか言いながら、よく大声でドアぶん殴れるよな。一抹の疑問を抱えながら、買言葉返す。「うるせえなユズ！ドアがぶっ壊れちまうだろ！ったく何しに来てんだよ」

もう一度舌打ちして、ドアを開けるとユズが腰に手を据えて、ギョツと眉間にシワを寄せて俺を睨んでいる。

ハハッ、この顔を見るとデコピン喰らわせたくなるぜ。

「バカバカバカー！蓮！！早く開けなさいよ。来るまで暗くなりかけで怖かったんだからね、私！……部屋に入るから退きなさいよ」

俺の腹をグツと押し退けて、部屋に入るユズ。
いや……押し入ってきたの方が、正しいか？

「ああもう、男臭い！部屋を丸ごと洗濯しちやいたいわ。今度消臭剤買いに行くんだからね、私と二人で！ああもう、部屋も散らかってるし！」

「お、おい！入ってそうそう、あんま触んないよ」

あんまり物色されると、秘密の弥生ちゃん（大きいお友達Ver）シリーズが見つかったまうぜ！？

「良いじゃない、減るもんでも無いんだから。それとも何よ！何かあるわけえ？」ギョツと目を細めるユズ。

ああクソ！

この小生意気な表情を見ると、ユズの頬を堪^{つね}らなく抓^{つか}りたくなるぜ！

そんな衝動にかられながら、俺は。

やっぱり頬を抓ってしまった。

左右からの感触を楽しみながら、蹂躪するうちにグリグリとな！

だけど過度な痛みは感じさせない。

そんな案配のグリグリ。

まあ仕方無えよ、我慢は俺自身の体に良くないし。

抓られた時のユズの反応が、楽しくて堪らないんだからさ。

「ふうがあー、れん！？やめへよ！やめなあはい」

「おお？何だつて？ふうがあーしか聞こえないぜ」

「ふ、ふうがあー！はいてえよ、ふおんなほこにふおんなこほすふなあんふえ！（最低よ女の子にこんな事するなんて！）」

とまあ、こんな状態でも何となくユズの言葉は分かる。

俺つて、将来はバイリンガルつか！？

「最低つて、誰の事なんだろうな？ふうがあーってヤツの事かな？ハハッ」

「きはいきはい！ふえんなんふえ、らあいつきはい！ふつくう（嫌い嫌い！蓮なんて大嫌い！うつぐう）」

嫌い嫌いと呼びながら、悔しそうに涙を浮かべるユズ。

ヤベツ！

もう泣きやがった？

こんなにユズつて泣きやすかったか？

「な、泣くなんて卑怯だぜ。泣くことないだろよ」

急いで、両頬を弄んでいる指を離す。

「ア、アンタのせいでしょ……ううう。」

俺に抓られ、桃色に染まった頬にユズの涙が伝っていく。

ガキの頃から、何回こんなやりとりが有ったんだろうな。

何度見ても、見飽きねえな……何度見てもよ。

「悪い悪いユズ。つい……なあ。分かんたろ」

「くうううっ分かるわけないでしょ！一方的にホッペをグリグリされて……全然分かんないわよっ！何回目よバカ」

ハハッ！数なんて数えてねえよ。

なんて軽いジョークを決めよう思った時、眉間に力を込めて更に涙目で睨むユズの顔が目に入った。

そんな顔で睨むなよ、仕方ねえな。

「ち、ちよっ……蓮！何よお」

「ほら動くなつての、バカ。……あんまに睨むと眉間にシワ出来ちまうぞ。涙拭いてやるから許せよ、柚夏」

掌で優しく涙を拭いてやる。
たなこひ

ハンカチなんて要らねえ。

涙を拭くのは、やっぱり自分の掌だろ。

ユズにはガキの頃から通じる、俺流の謝罪の言葉ってやつだ。

「し、仕方ないわね。許してあげる！ただしこれが最後の最後だから、次は無いんだから」

「おうサンキュー、ユズ。次も楽しみだなあ、フニフニいてよ」

「ふ、ふーんだ！もし次したら……」

まだ涙で艶やかな瞳で、悪戯っぽく笑うユズ。

良い顔するじゃねえか。

「もし次したら、柳さんから受け継いだ延髄切りだからね」

「おいおい、柳さんの延髄切りとは穏やかじゃねえな。だけど、柳さんとは懐かしいぜ」

柳 やなぎ
湊 そういち――

通称、柳さんとは、俺の実家に住み込みで働いている渋い兄さんだ。親父の右腕で、親父がもつとも信頼してる。

昔はかなりのアウトローだったらしいが……今は落ち着いたらしく、俺の事を理解してくれてる大切な家族だ。

「ねえ懐かしいでしょ。今日は勉強の合間にこの話をしてあげようと思ってたんだから。でも私、蓮に虐められたからなあ……たくさんねえ。ふっふっふん！どうしよかなあ」

ちっユズの野郎！

もったいつけやがって。

クソ、久しぶりに中村一家の話が是が非でも聞きてえ。

こうなったらご機嫌取りするしか無えな。

俺の本気を見せてやるぜ。

「そうなんだ。まあ俺が蒔いた種だからな……でもよ」

ユズの目を見据える。

「今日は楽しい1日の終わりを迎えられるな。もしかしたら久しぶりに実家の話も聞けるし……ハハッ！今からはユズと二人で勉強出来るんだしな。もしかしたら幸せな1日って、今日みたいな日の事を言っただろな」

「ちょ……蓮、な、何よ急に」

もう一息だな。

柚夏あ敗れたり！

「ああ、ゴメンな……何か急に想ったんだ……幼なじみの柚夏と同じ学校でホントに良かったなあ！って。俺はユズに感謝してるんだぜ」

声を低くして、照れた表情を浮かべてフィニッシュだ！

「バカ……私だって蓮に……って。何よお！も、もおいいわよ」

プハッ！

ユズ、一丁あがりってか！

「し、仕方ないから教えてあげる。この前ね、柳さんと太一っちゃん、シゲ君に会ったんだ。三人とも蓮の事、心配してたわよ」

「ハハッ、三人と会ったんだ。偶然だなあユズ。あの三人、ガラ悪いからなあ。目立つよな」

太一とシゲ。

俺を慕う可愛い奴らだ。二人も俺の実家に住み込んで生活してる。

今は中三だったな。

まだまだ血の気が多くて、ガラも言葉使いが悪いから誤解されるが、俺にとっては可愛い弟みたいな奴らだ。

弟みたいじゃないな、弟達だあ！

「柳さんも太一もシゲも何だか懐かしいぜ……ははっ！三人とも元気なのか？」

「蓮を心配するぐらいなんだか、元気に決まってるじゃない！」

ふんつと鼻を鳴らし、腰に手を据えるユズ。

「ははっ！確かになあ！違いねえ」

「でしょ！あの三人……あつ、蓮を含めなきゃ。アンタ達、四人が

「元気が無い時なんて無いわよ」

「それは言い過ぎだぜ、俺はデリケートで壊れやすい……」

「はいはい、そろそろテスト勉強始めるわよ」

「……デリケートなんだぜ、ウサギみたいに」

まあ良いか！

よつと、そろそろ準備するべ！

折り畳み式のちゃぶ台と二枚の座布団を床に並べ広げ、あつと言つ間に勉強スペースの出来上がりつと！

「さあ、聖蘭高の入試の時みたいにじっくり教え込んであげる！」

「えつ、ちょい待てや！？じっくり教え込んであげるって……」

ユズの不意打ちに、素でドキつとしたぜ。

「ちが、変な意味じゃない！バカ、バカあ、バカああ」

「お、おい！もう分かったから、そんなにちゃぶ台殴んなよ。割れちまうぜ……って!？」

はああああ、木目に変な割れが入ってる。

「ア、アンタが変な事言うからよ」

「もともと、お前が言ったんだろうが！」

「ちゃぶ台ぐらい何よお」

ちゃぶ台ぐらいって……これ母ちゃんの嫁入り道具なんだぜ！

もし見つかったら……俺、親父にアボ〜ンされちまうよ。

「いつまで割れた部分を触ってるなんて女々しいわよお！ほら、勉強するんだから」

俺の手を掴み、強引にシャーペンを握らせるユズ。

「わ、分かったよ。やるっつの」

「なら、よろしい！」

ユズは満足げにそう言って、自分のノートをカバンから出した。

「おっと、その前に聞き忘れた」

俺とした事が、すっげえ重要な事を忘れてたぜ。

聞いておかなきゃならない事だ。

「ミカンは、元気にしてるのか？」

問いを声に出した途端、振り返るミカンの柔らかな笑顔が脳裏に浮かぶ。

俯いて自分のノートを捲っていたユズは手を止めて、俺の目を見つ

め、そして微笑んだ

「美柑姉、元気だよ」

「そっか！元気なら、良いんだ」

「さあ勉強開始なんだからあ、ビシビシいくわよお！覚悟しなさい
蓮」

こうして俺とユズの二人だけの勉強会の火蓋が、今切られた。

明日の朝、俺が俺だと認識出来ることを願うぜ。

四ヶ所目 27 (蓮) (後書き)

欧介の話の他に、蓮の話も始まりそうです。
花や大河も動かして行きます。

評価やコメント待っています。

和紙でした。
では！！

四ヶ所目 28（大河＆花）

聖蘭の中間考査まで、あと数日。

……だから何だと言うのか。

日頃から勉強に励んで居れば、恐れおののく必要などない。

学友達の慌てふためく姿を見ると、下らなくて笑いがこみ上がる。

下らない空間。

下らない会話！

下らない汚物ども！！

お前らのような生きる価値のない存在達と同じ空気を吸うだけで、吐き気がする！

……以前の俺は、いつもこう思っていた。

だが今は……違うのかもしれない。高校に入るまでの俺は、春日の家訓や父の教えを盲目に信じてきた。

幼い日の別れ以来、他人を見下し踏み台としか思えなかった。存在する価値すら無いとまで思った。

俺に釣り合う他者など居ない……まして同等の者など必要無いと思っていた。

他人が俺の役にたつわけが無いと思っていた。

そんな内面を、ひた隠しながら他人に善い人間を演じる日々。

だが、高校に入って俺の価値観が少しずつ変わってきた。
花、蓮と再開し。

欧介と出会ったからだ。約束を果たし返ってきた、花。

幼い日以来、絶縁状態からまた向き合う事が出来た蓮。

その二人を繋いで、俺に結びつけた欧介。

アイツと知り合ってから、何だか自分が変わっていく気がする。

春日の血と教えが全てでは無いのか？

そう考えるようになった。

だが今はまだ答えは出ない。

「まあ、大河君聞いている？」

頭の中で思案を巡らしていると、花の不服そうな声が入った。

「んっ、何だ花？」

「やっぱり聞いてないなあ！この最後の化学式はどう解くのか分かんないよお」

俺は今日は花と勉学に勤しんでいる。

俗に言うテスト勉強ってやつだ。

俺は終えているが。

「すまない、考え事をしていた」

「まあ、何回も呼んだのにい」

「耳に入らない程に深く考えに囚われていたんだ、すまない。……その化学式は……」

花に解き方と意味を教える。

「ほおほお、うーん……へえー！わああ！わかったよお、ありがとう大河君」

喜びを全面に押し出す、花。

「さすが、大河君。頼りになるなあ」

花以外に、こんな無垢な笑顔を出せる人間が居るのだろう。

いや滅多に居るはずがない。

「そういえば、今日は欧介君が、なんとなんと蒼ちゃんと二人で勉強してるんだよお」

「そうか。ふつ……だから帰り際、挙動不審だったわけだな」

隠せないヤツだな、アイツは。

「そうだよ。欧介君、喜びとドキドキで顔が赤くなってたからさ」

まるで自分の事のように、楽しそうに話す花。

こつゆう人間は、本当に価値が有る。

居るだけで安らぎや癒やしを与えられる人間。

花は昔からそうだ。幼い日の思い出の花も、いつも俺に笑顔を与えてくれていた。

「あとは、欧介次第だな。上手く行けば良いが」

「だねえ。上手く二人の絆が深まって欲しいよ。心からそう思うなあ、僕。応援してるんだあ」

「そうだな。そうなれば良いものだ」

「もちろん、蓮と大河君も応援してるよ。三人は大切な友達だから」

どこから取り出したのか、カラフルな手旗をパタパタと振る花。

「ありがとう、礼をいわせてもらっよう」

俺が女性と付き合う等、無いに等しいが……口には出さないでおう。

「でも……三人で最後。僕はもう他の人の事は応援したくない」

唐突に笑顔が陰った。

その様子から今朝の一件を思い出した。

花は何を心に秘めているのかは分からない。

だがその秘めている事が、花の心に深く根付いているのは確かだ。

「……幸せを壊すの嫌だからさ。迷惑かけたくないから……だから、三人の事を応援するのも、本当はちょっぴり怖いな」

いつの間にか、元気良く振られていた手旗は消えていた。

花の明るい笑顔が消えたように。

「それは好きなようにすれば良い。花の好きなようにすればな」

「……だが、俺を含めて欧介も蓮も花ちゃんに応援されるから、前向きになれるんだと思うよ」

口をついて、心に湧き出した言葉が出た。

最近は特にそうだ。

無意識に心に秘めた言葉を口に出してしまう頻度が増えた。

悪い気はしないのだが。

「そうだね、僕のしたいようにすれば良いよね。……うん、最後なんだから」

再び花の顔に笑顔が輝いた。

「ありがとう大河君。何だか心が軽くなったよ！よおし今以上に三人を応援しちゃうぞお、決いまり」

「ふふつ、その意気だよ、花ち……花」

「ああー！さっきは花ちゃんって呼んでくれたのにい。照れ屋さんだあ、大河君」

「ぐつ、そ、そうか？」

……いい加減この呼び名をなんとかしなければ。

俺は断じて照れているわけでは無いんだ。

これも無意識で出てしまうのだ！

そう伝えようとした矢先、花がまた手旗を降り出した。

「さあて、大河君から元気の出る言葉を貰ったし、もう一頑張りするぞお。大河先生、よろしくう」

「り、了解した」

この呼び名の恥を、阿呆なアイツに聞かれてなくて心の底から良かったと思った。気を付けねばな。

居ないハズの阿呆が、俺を冷やかす不愉快な言葉が耳に聞こえた気がする。

気のせいで有るが、無性に腹立たしい。

……まあ良い。

落ち着かねば。

「うつつ……これは、なんだろうなあ……大河先生え助けて」

また花が困り顔で俺に助けを求めてきたので、再び化学式を紐解いていった。

こんな時間を過ごすのも、最近は悪くないと思えるようになった。

だからこそ、強く想う。

父さん。

貴方の言う春日の血、春日の教えがどれ程尊いモノか分からない。

本当に万人は……多くの人間は生きている価値のない愚民共なのか。

本当に春日一族が世界を支配出来る、一握りの支配者的立場の人間なのか。

分からない。

だからこそ、俺は心に決めた。

これからは 春日の血、父の教えに固執しない俺自身の目と心で見極めて答えを出す。

これからも人間の真価を見せてくれた、三人に関わりながら。

四ヶ所目 28（大河&花）（後書き）

テスト勉強編終了！

いやぁ、時間掛かりました（苦笑）

自分は本当に亀並みの更新だと痛感しています。

さて、次回からの上手な修正液の使い方は……。

未定ですね、はい。

ですが、必ず書きます。

和紙でした、では！！

五ヶ所目 1 (前書き)

新章 侠の闘争の場編スタート!

五ヶ所目 1

初めての中間テストが終わった。

僕にしたら十数回目のテストだったわけで……だけど銘東よりも段違いに難しかったわけで。

……でも。

でも何回テスト受けても、このテスト最終日の放課後が爽快なわけ
でえー！！

ひゃふう、気分最高！

今なら何でも出来そうだ。

「ひゃつはあ、かったるい一週間が終わったぜ！長かったなあ、あ
ああー魂が解放されていく！ニフラム最高」

僕以上にハイテンションな蓮。

たくさん 학생들이 行き交う下駄箱で、天に向かって高らかに拳を突
き出す。

突き出された拳に挟んでいた褐色の革靴が遠くに弾き飛ばされた。

「だね、だねえー。ようやくテスト終わったね。でも無事に終わっ
たから良かったよー。ありがとう大河君、お世話になりましたあ」

花君もニコニコ笑いながら、上履きから白黒ストライプのスニーカー
に履き替えた。

「んっ、礼には及ばない。僅かな手助けしかしてないからな。……
危ないだろ阿呆」

花君の言葉を受けて、満更でもない様子を見せる大河君。

でも最後に阿呆とか聞こえたような。

「飛ばされて、俺の足元を守護している褐色の双子達も喜んでおるわ！……プハハッ、甘えよ大河！阿呆とか言われて今日の俺は気にもしないぜ」

拾い集めた革靴をガツと音を立て履く、蓮。

その表情には、並々ならぬ余裕が浮かんでいるようだ。

「なぜなら今からフリータイムだからだ！さあ行こうぜ、行こうぜ！今からどこ行く？ゲーセンか？買い物か？大人の健康ランドか？んまあ良いや！決まってるなら、俺様に任せな！さあ、てめえら青臭いケツを上げろや」

いや、すでに立ち上がってるから……ケツは上がってるんだけど。

それに大人の健康ランドって……あんた。

そう言いかけたが、口に出すのは止めておいた。

この蓮のテンションは、明らかに異常だ。

「さあ行こうぜ、オースケ。テスト週間は、蒼ちゃんとヨロシクしてたんだから今日は男同士の友情を深めようぜ」

僕の肩をバシバシと叩きカラカラ笑う。

あ、蒼ちゃんと……。

ああ、それにしても思い出すだけで至福だった。

テスト週間中は、数回蒼ちゃんに電話出来たし、一緒に勉強も出来た。

くはぁ！

時間巻き戻ればなあ、修正液であの時に戻れたらなあ……なんちゃって。

「ハナあ、今日は楽しもうぜえ！タイガと勉強してたんだろ？なら今日は4人で楽しもうぜ、なっ！なっ！」

「そうだね、今日は高校生初のテストが終わった日だからね！楽しもうよあ、四人で遊ぶなんて久しぶりだねえ。僕、先に行っちゃうぞあ」

花君は、とびきりの笑顔で下駄箱から飛び出していった。

花君も、負けないくらいテンション高いなあ。

そんな、花君も可愛いな。
って違うか。

「タイガ、行こうぜ。今日は休戦だ！やっぱりお前が居ないと……」

張り合いが無いぜ。なあ」

今までのスーパーハイテンションから一転して、珍しく照れているのか頬を掻きながら笑う蓮。

マジでおかしいよ、今日の蓮！？

何か変なモノ食べたのか？

赤いかさに白い模様のキノコとか？

まさかね、そんなわけ。

「……そこまで言うのなら行っても良いが……何か嫌な予感がするのは気のせいか？」疑惑を含んだ視線を送る大河君。

「おいおい嫌な予感って酷いな。別に何もねえよ、俺はダチとオモロい時間を過ごしたいだけだぜ。ほら行くぜ、ハナが外で手招きしてるよ、待たせちゃ悪いだろ！ハナあ、今行くぜえ」

悪戯っぽい笑みを残して、蓮も下駄箱から高速で駆け出した。

とり残された僕と大河君は、お互いに顔を見合わせた。

「……と、とりあえず行こうか大河君」

「そうだな。たまにはアイツに付き合ってみるか」

フツと、軽く笑みを浮かべ大河君が歩き出した。

良かったあ、思った以上に大河君も楽しそうに見える。

どうか最後の最後まで、蓮と大河君が揉めないで欲しい。

「もおう欧介君、走ってよお！早く早くう。大河君もだよ！」

花君が手をブンブン振りながら、僕達をを呼んでいる。

「ああうん、花く……」

「オースケ、そしてタイガア！何たらたら歩いてんだよ。遅いぜ、ヤベエぐらい遅え！今すぐに走れ。駆け抜けてこいや亀さあん」

両手をパァンと打ち鳴らし、急がせる蓮。

何を、そんなに慌てるんだよ。

確かにテストが終わって嬉しいケドさ。

それにしてなあ……。

「わ、分かったよ！今すぐ行くって」

これ以上、騒がれると厄介な事になるので歩みを早める。

チッ！

後方をチラッと振り替えると、大河君が明らかに不服そうに眉を歪めていた。

ああ……何か舌打ちも聞こえたような。
また揉めちゃうよ、この様子じゃ。

今から始まるテンション最高潮、気分は大解放のフリータイムに、暗雲が立ち込める嫌な予感を感じながら僕は蓮と花君の元へ辿り着いた。

予感的中しない事を願いつつ、じきに辿り着くであろう大河君の方を、ゆっくりと振り返る。

彼の眉は、やはり元には戻ってなかった。

五ヶ所目 1（後書き）

ようやく新章スタート出来ました。

ああ、目前に60話。

ようやく六合目かあ。

これからも頑張ります！

和紙でした！

では！！

五ヶ所目 2

蓮を先頭に、僕ら四人は校門を出てバス停に向かっている。

「おらおら！いくぜ野郎ども！この蓮様に付いて来いや」

威勢よく手をパンッと鳴らし、高らかに叫ぶ蓮。

うほっ！

い、いつも以上にテンション高いなあ……。

さてさて、どこに連れて行かれるのか。全く見当もつかない。

まあ、楽しめるのは間違いないけど！

久しぶりの四人でのお戯れ だし。

二人が険悪ムードにさえ、ならなければ…… だけど。

歩きながら、四人で他愛ない話を交わす。

「そいえば…… 報告があります」

花君が控えめに手をあげる。

「発言を許可する、ハナ」

「ちっ、阿呆が」

蓮に向けての舌打ちが、大河君から放たれる。

「ちょっと前に、違うクラスの女の子にアドレス聞かれちゃったんだ」

ふむふむ。

最近、花君が他のクラスの女の子から携帯のアドレスを聞かれたのか。

……えっ何？

最近……アドレス聞かれちゃったんだ。ですとおおお！

「おおお！初耳だせハナあ、マジかその話」

蓮が花君の肩にガバツと組みつく。

「うん……この前さ独りで廊下に居た時に、女の子が走ってきてさ。ビックリだよ」

「かああ！羨ましいねえ。んでさ、誰？何組？顔は？スタイルは？何系？どんな……」

「落ち着け、阿呆。花が困惑しているのが見えないのか？」

大河君が、蓮を窺^{たしな}めるように目を細める。

「これが落ち着いて居られるかあ！？ダチが乙女を恋の迷宮に叩き落としたんだぜ？うら若い乙女だぜ？どんなんか、タイガだって聞きたいだろ？オースケ、お前も聞きたいよな？」

多分、手をワラワラさせるって言うのは、今の蓮がしてる動きなんだろうなあ。

って、解説してる場合じゃない！

「は、はい！僕もぜひ聞きたい！」

もちろん手を高々と上げる。

手をあげてしまう衝動にかられた結果だ。

「やれやれ……全く。恥ずかしいヤツらめ」

大河君が顔をしかめ、小さく笑う。

彼のこの顔に、どこか優しさを感じるのは、僕だけでしょうか？

……って、気づけばバス停が目前ではないかあ！

バス停近くで手を高らかに上げながら歩いてる、僕って……。

ああ、やっぱり。

反対側のバス停の人から僕に何やら生暖かい視線があ。

「あわわ……落ち着いて蓮。欧介君ったら分かったから、手を下ろしてよあ。ううんと貰った紙が鞆に……あつ、あれ」

鞆に手をつ込みかけた花君が、何故か唐突にバス停を指差す。

「おいおい、ここでお預けかよ？お預けなら昨日、散々ユズに……」

つて、おっ！オースケ」

蓮が何か口走りながらバス停を見て、僕に向き直る。

「今日は、騒がしい夕暮れになったな」

大河君が、何かを楽しむような笑顔を浮かべる。

「えっ何が？何か特別なモノが見えたのかな？……何も特別なモノなんて……あつ、あれは」

蒼ちゃんがバス停に居た。

さっきは、人の陰に隠れて見えなかったが今はハッキリと確認出来る。

ぽあーつと僕が蒼ちゃんの姿に見取れていると、蓮が僕の目の前に回り込んだ。

「ここからは、オースケが一人で歩いてくれや」

滑るようなステップを踏み、脇に避ける蓮。

こっ、この動きは……ト○

ああ嬉しくて変なテンションに。

いやでも、一人って？

何故にいい？

「ほおおーそうゆう事ですかあ。ナイスですねえ、偉いよあ」

花君が背伸びをして、蓮の頭を撫でる。

だが今は、そんな花君のキュートな行動を気に留めてなんていられない。

「ナアハハ！ダチの色恋を手助けしたまでよ。ハナの手は柔っこいな」

ほんわかムードの二人。

でも今は、ほんわかムードなんて気にして居られないんだあ！

混じりたくたつて、気にして居られないんだあ！

「阿呆のクセに、珍しいな。……行くのか欧介？もうバスの到着時刻が迫っているぞ」

大河君が、金無垢の腕時計で時刻を確認する。

「うええっ、行っちゃって良いんですか？い、今から遊びに行くんじゃない？」

「イツて来いや、オースケ！ああでも最後まででは、蒼っちとイクなよ！お前がイツて良いのは、泉橋までだ」

う、うん？

明らかに一部、変なイントネーションが入っている。

ま、まあ気にしないでおく。

「泉橋で降りれば良いの？……割とココから近いね」

バス停、2つ向こうではないか！？

あ……あんまり蒼ちゃんと話せなあい。

ちくせう。

「ほらほらあ、一時の幸せを味わってきなよお。欧介君」

「わあ、わあ花君！押さないで、ちょ、ちょい」

花君の柔らかな笑顔には、不釣り合いな強靱な力で蒼ちゃんの元にグイグイと押されていく。

「ほらあ、一丁上がりい。ばいばあい欧介君。また後でね」

最後にゆつくりと、しかし力強く突き出され蒼ちゃんの前に躍り出た。

いや、飛び出したの間違いか。

可愛い顔して、すっごいなあ……花君。

「え……ええ、欧介君？」

「おつ、お疲れ様あ、蒼ちゃん」

キョトンとする蒼ちゃんの顔を見つめていると、バスが定刻通り到着した。

五ヶ所目 3

目の前でキョトンとする蒼ちゃん。

視界の端にバスが、ゆつくりと滑り込んで来たのが見える。

飛び出したまでは、良かった。

だけど、彼女を目の前にしたらこんなに口が渴くなんて。

さっきの勢いは、どこいったんですか？

行っちゃって良いのお？

こんな言葉、何で吐いた？

三人の前で吐いた言葉が嘘だったかのように、実際に口から吐き出せたのは、か細い一声だった。

固まる僕を尻目に、バスの扉がお馴染みのやる気のないブザーを鳴らしながら開く。

今更ながら、僕と蒼ちゃんを無数の視線が挟んでいるのに気づいた。

うつ、ヤバイ。

よくよく考えれば今の僕は、完全に列を無視した無法者じゃないかあ！？

ヤバいと思った時には、もう後ろの学生が口を攻撃的に開いていた。

「おい、お前なんだよ？」

「ちゃんと並べよ、お前！」

「その可愛い子、彼女か？彼女なのか？ああああ！だから日本つて嫌なんだよ！」

「テメエ、何年何組なんだ！？勝負しろコラあ」

蒼ちゃんの後ろに並んで居た、有象無象（学生）の方々が声を荒げた。

「えっ、だか、違？」

ああ、あきらかに上級生の率が高い……完全に先輩達に目をつけられた模様か！？

朝から校門で釘バット待って、伏せされちゃったり？

授業中、鉄板の入った鞆を持ってクラスに乱入されたらヤバい！？

明日への不安を掻き立てていると、僕の手が温かくて優しい感触に包まれた。

えっ？

この感触……って。

周りの景色が僕だけを残して、ゆっくりと後ずさったような気がした。

周りの騒音も、夕闇の風も何も感じなかった。

気づけば手を握られ、列の外へと連れ出されている。

「発車します」

運転手の渋い声と共に、再びやる気の無いブザーが鳴り響く。

蒼ちゃんの後続に並んでいた、学生が僕と蒼ちゃんに悪態をついたり、鋭い一瞥を投げかけながら、続々とバスに乗り込んでいく。

やがてバスの扉が閉まり、次の目的地に向かって走り出した。騒がしかった周囲が、嘘のように静寂に包まれた。

蒼ちゃんは、目をギュツと瞑って僕の手を両手で包み込んでいた。

心なしか、頬が桃色に染まっている。

「あ……のお」

僕の頭の中は、真っ白。

だけど口だけは、別の意志で操られた。ふいに蒼ちゃんが、目をパチッと開いた。

彼女と視線が合い、脈がおかしくなる。

自分の体温が急激に上昇するのが、分かった。

彼女は彼女で、急激に頬が桃色から紅色に染まっていくなが見てとれた。

「わわ、私必死で！何とかしなきゃって必死で！？ああっゴメンなさい、乱暴に手を引っ張ってしまっただけ」

彼女は、僕の手をギュッと握り締めたまま謝る。

いや握り締めるには、少し痛いかな？

「あつ……い、いや。その……」

「はああ！私ったら手を……」

蒼ちゃんは、包み込んでいた僕の手を放し、自分の胸元で手を握り締める。

もう耳までも紅色に浸色されている。

ふんわりとクセのかかった彼女の髪の毛が、夕闇の風でゆらゆらと揺れていた。

その風は梅雨の匂いと、彼女のシャンプーの匂いが混じらせて、僕の鼻をくすぐる。

だから、何だか落ち着かない。

……。

お互いに俯き、二人の間に気まずい空気が流れる。

これは、夜の妖精のせいだ。

きつと日が沈んだと同時に、二人に向かって風と一緒に沈黙を運んできたんだ。

って、いつからポエムを謳うようになったんだあ、自分。

「ありがとう……その」

沈黙に耐えきれなくなり、言葉が口について出る。

だけど、蒼ちゃんは胸元で手をギュッと握りしめて俯いたままだ。

「蒼ちゃんが居なかったら、多分……」

1・何人からか殴られていた

2・大ブーイングを受け、バス内での世紀末状態

3・有象無象の言葉が、

耐えきれず、僕は一目散に逃げ出していた

この三つのどれかになっていただろう。

だけど僕の言葉も虚しく、やっぱり蒼ちゃんは俯いたまま。

も、もしかして泣いてる？

それとも怒ってる？

テスト週間の帰り道、ちょうどこのバス停での出来事が脳裏に浮かぶ。

（言いたくない！）

浮かんだと同時に、彼女の語気の強い一言が耳に蘇った。

脚が小刻みに震えだした。

嫌だった。

もう二度と見たくない。

混乱し、負のイメージが脳内を支配する。

混迷の絶頂に達した僕の口が、再び見えない力が作用したかのように動き出す。

「そ、それに、蒼ちゃんの手は柔らかくて、温かくて……ドキドキするぐらい良い匂いも……」

今、自分が口に出した言葉の意味に気づき、ハッと我に還る。

も、もう何が何だか判んないです。

気づけば、心の内を口走っているんだから。

何故、今このタイミングで暴露を？

「欧介君……」

何の前触れも無く、蒼ちゃんは口を開いた。

「はい！？い、今は、ちが……」

「私の手、そんなに柔らかかった？」

「う、うん！そりゃもう、温かくて気持ち良いぐら……あっ」

「さっきの事……私に助けられたって、感謝してますか？」

「も、もちろんですよ！蒼ちゃんが手を握って、引っ張ってくれたお陰です」

「すごい勇気を使いましたよ、私。それに……大勢の人達の前で、手を握り締めて恥ずかしかったです」

「うぐうう……ゴメン」

ぐきぎっ！

花君のせいだ！

後で、泉橋で再開したあかつきには、ジワジワとなぶってくれるわあ！

「映画……見に行きたいです」

「ゴメンよ、僕のせいで大勢の前で映画を……へっ？」
映画？

この単語と今の会話が繋がりませんか？

「もうすぐ私の見たかった映画が解禁されるです。その映画……」

ああ、そゆことか。

仕方ないかあ、蒼ちゃんに迷惑かけたし。

「詫びの代わりに、映画のチケットを奢って！って事だよね？分かります……」

「ち、違います！奢って欲しいんじゃないありません」

蒼ちゃんは、相変わらず胸元でギュツと手を握り締めたまま、眉を不機嫌そうに釣り上げる。

蛇に睨まれたカエル状態の僕。

ああでも、こんな可愛い蛇になら食べられたって構わなあい！

ああ不機嫌な蒼ちゃんの顔も最高。

何より、普段は滅多に見られない表情なわけですよ。

「へっ……えっ違うの？」

「私、最近映画館に行った事ないんです。だから、少し不安で……
今度の休みの日に、欧介君に連れて行ってもらいたいです。さっきの事、少しでも感謝してくれてるのなら……」

「そ……マジで……や……た」

ま、まじで？

でしま？

まじでじ……。

「嫌なら良いです……けど」

「行きます、行きたいです、行かせてもらいます！でも、その話……本当に？」

ここにきて、さっきはよくも恥をかかせたわね！

引つかかったなあゝバアカ、嘘に決まってるわよ！

って言われる可能性も無いとは言い切れない。

って、さすがにこんな性悪の蒼ちゃんは有り得ないと思うけど……。

「本当ですよ！私……嘘つくの嫌い……だから」

伏し目がちな表情で、呟く蒼ちゃん。

あわわ、話が上手く出来すぎてる気が。

うん……？

ちょっと思い出してみよう。

（私、最近映画館に行った事ないんです。だから、少し不安で……欧介君に連れて行ってもらいたいんです）

よくよく考えたら一緒に映画を見ようなんて一声も言われてないじゃないか。

最近映画館に行っていないから、連れて行ってもらいたい。

彼女は、映画館まで連れて行ってもらいたいだけなんだ！

危ない、危ない。

危うく勘違いで恥を晒すところだった。

ああ……でも蒼ちゃんを映画館まで送って行けるなんて、ハッピーな出来事だ。

「蒼ちゃん……分かった！ちゃんと映画館まで連れて行くよ！チケットも僕が用意しておくから。この真田欧介に、任せて下さいな」

蒼ちゃんにチケット一枚おごるくらい、お安いご用さ！

よっし！

スマートかつ、スイートに送り届けて、僕の印象をアップさせてやる。

「ありがとう……欧介君。ふふっ、たまにはイジワルするのも良い

ですね」

くっ、堪らないなあ今のセリフ。

周りが真っ暗だったら、この場で抱きついてしまいたいぐらいだ。

まあそんな……勇気ないんですけどねえ。

ハッハッハッ。

テンションだけは底抜に高くなっております。

「ところで欧介君。今日は一人で帰ってるんですか？」

不思議そうに首をかしげる、蒼ちゃん。

そいえば、3人の姿が見えない。

もう泉橋に向かったのか？

「いや途中まで、大河君や花君や蓮と一緒にただけど、泉橋に集合って言い残して（突き飛ばして）、それっきりだよ」

「へえー泉橋ですか。あそこには、お洒落な店や楽しそうなアミューズメントがいっぱいあるそうですね。他のクラスの友達が大絶賛してましたよ」

「へえ、そうなんだあ。蒼ちゃんは行った事あるのかな？」

「高校生になってからは無いです。中学生の時も数回。最近は、ほとんど新しい店が出来てるらしいですね。一度は行ってみたいな」

この流れは、シナリオの分岐点？

重要なフラグ？

「な、なら……」

言え！

ならさ、折角だから今日来る？って言うんだあ！

蒼ちゃんから、誘って下さい　って言ってるようなもんじゃないか！？

「えっ……なら？」

僕の、なら発言を不思議に思ったのか、キョトンとする蒼ちゃん。
ああ、こういう時に限って口が動き出さないんだよね……。

「奈良がどうかしました……あつ、欧介君！バス来ましたよ」

「う、あはは、バスだ。はああああー」

最後の最後で、　なら　と意味不明な発言を残してしまつて肩を落としていて、僕を小馬鹿するように停車したバスがやる気のないブザーを浴びせかけた。

五ヶ所目 3（後書き）

次は本編を進めるか、蓮と花と大河が泉橋に向かうまでの話を書くか迷っています（苦笑）。

皆様の感想や評価お待ちしております。

和紙でした、では！！

五ヶ所目 4

泉橋のバス停に降り立った。

バスに乗ったまま、僕の元から去っていく蒼ちゃんに手を振る。

このまま二人で帰りたかったなあ。

結局、蒼ちゃんを泉橋で一緒に過ごそうぜ！とは誘えなかった。

脳内で、誘いの言葉を反芻するだけで口に出すことは出来なかった。

そのままバス停のベンチに座り、自分の進歩の無さを噛み締めなていると、ズボンのポケットに入れている携帯が、僕の太ももを優しくバイブする。携帯を取り出しディスプレイを確認すると、蓮の名前が浮かんでいた。

遅いから怒ってるんだろうな。

そんな不安を感じつつ、通話ボタンをゆっくりと押す。

「もしも……」

「オースケエ！？ようやく繋がったぜ！やったなあ！お手て繋ぎは楽しかったかあ？」

威勢の良い調子でまくしたて、カラカラと笑い出す蓮。

「うえっ、何で……」

「見てたんだよ、俺ら三人で一部始終な。バツチリと！ああー見てドキドキだったあ！手を繋いじゃうは、後ろの学生達からは大ブーイング受けてるわ！ハハッ」

そんな……どこで見てたんだよ。

「まあ、そんな事より早く来いよ！俺らは、カフェ カンタータの前に居るからよ！早く来いよ、じゃあ……」

「ちょ、ちょっと待って！？カンタータってどこ？」

電話を切ろうとする蓮を慌てて制する。

「あぁっと、オースケ場所分かんねえか！、悪い悪い。バス停から……」

蓮に言われた道筋で、カフェに向かう。

辺りを見回せば、蒼ちゃんが言ってたように、お洒落で真新しい建物に至る所に建ち並んでいる。

それにお洒落な女子高生や大学生がひしめいている。

何だか、場違いだなあ。

この場に、不釣り合いな自分に恥ずかしさを感じながら道を進む。

ああ、そうか。

歩み進めながら、ある事に気づく。

さつきから何人も同じセーラー服を着た女子高生とすれ違って居るが、泉橋には女子高が有ったんだ。

千代菊女子高校。

この近辺の男児なら一度は恋い焦がれる。
菊女。

女子中学生が行きたい女子高NO1と言えば、ココだ。

それに男子高校生が、彼女にしたい女子高生NO1でもある。

菊女は、この地域に残された最後の楽園と密かに呼ばれている。

校内には草木や色とりどりの花が咲き誇り、妖精、エルフやセイレーン、天女、ドリュアド、エキドナ、ゴーゴンが住まう高校だとか。

うん……まあ、それは無いと思うが。

誰だよ、こんな変な妄想広めたお馬鹿さんは!?

でも、校長が自ら生徒の美意識、仕草、気品を糾していると聞く。

それに各学年に……。

「オースケ!ここだ、ここ」

脳内の引き出しから、菊女の情報を手繰り寄せていると、ふいに蓮

が僕に向かって手をブンブン振っているのに気づく。
気付かない内に、カフェの近くまで来ていたんだな。

菊女の事に、すっかり夢中になっていた。

「よお、幸せ者の果報者！」

会っやいなや、蓮がイタズラっぽく笑いながら僕を小突く。

「み、見てたなんて知らなかったよ！あ、あれは……」

僕の言葉を遮るように、花君が突然歩み寄った。

「ゴメンね、ま……また欧介君に迷惑をかけちゃって……僕」

言いながら、花君が肩を落として驚くような負のオーラを滲み出している。

どうりで花君の周りだけ、何だかドス黒いと思った……。

「うわぁ！は、花君！？いや気にしてない、気にしてないから全然！だから元気出してよ！」

この花君の雰囲気は、あの学校の時と同じだ。

な、なんとかして花君を元気づけなきゃ！

今からの展開が、壊れちゃう！？

「本当に気にしてないかなあ……迷惑じゃなかったかなあ？おうすけ君……」

涙を浮かべ、許しを乞うような表情で呟く。

うつ……くうつつ、そんな目されたら、ギュッと抱き締めたくなるじゃない。

い、いかん落ち着け。

「全然、全く！むしろ花君が押してくれたおかげで、蒼ちゃんと手まで繋げたし、なんと映画館まで送り届ける約束まで出来たんだよ！最高にラッキーですもん。蓮の言うとおり、僕は果報者だあ！ありがとう、花君のおかげだあ」

「ほえっ、映画館に行くのお？」

涙目で、驚いたようにキョトンとする花君。

「うん。そうになりました」

「そっかあ。映画館に行く約束出来たんだね。そうなんだ、そうなんだあ。僕は役に立てたんだねえ、良かったあ」

涙を拭いながら、満面の笑みを浮かべる花君。

ふう……良かった。

やっぱり花君は、この満点笑顔じゃないとね。

安堵して居ると、肩に誰かが手を載せる。

振り向くと、大河君が小さな笑みを浮かべていた。

「ありがとう、オースケ。俺から礼を言わせてもらっ

「えっ、何が？」

「解らないのなら、良さ」

笑みを浮かべたまま、肩から手をどける大河君。

まあよく分からないけど、気にしなくても良いのかな？

「やったな、オースケ！蒼っちと休日デートかぁ。よっしゃ、この勢いで今日も頑張るまい！よっしゃ、みんな友達！奇跡の全員大集合！ってか！？さあてカフェに入ろうぜ、もうお待ちかねだぜ」

蓮が、いつも以上に豪快な笑いを飛ばし、店の扉を勢いよく開いた。

「よし、カフェで欧介君の話をたくさん聞いちゃうぞお、けってえい！」

花が天を指さして、ピヨコンと宙に飛び上がった。

うん？

なんか聞き覚えがあるセリフだな？

まあ今は良いか。

「ふっ悪くないな。でも花、お前の話も話さねばなるまい？」

大河君が、花君に釘をさすように呟いた。

その表情に、なんとなくサドっ気を感じるのは僕だけでしょうか？

「ううー。やっぱり話さなきゃなりませんかあ。僕も話す事……けつてえい」

さつきとは、うってかわって弱々しく呟く花君。

まあ何にしても、このカフェで楽しく4人で話せるって事は間違いないかな。

店に入ると先頭の蓮が店員の女性に、手を振りながら話しかけた。

「ふふっ、お待ちしておりましたあ。こちらですよあ」

「はあい、どこまでも着いていきますよ！べっぴんなお姉さん」

蓮が元気よく、女性に笑いかける。

ううーん、蓮のこうゆう所に憧れるなあ。

僕も……さり気なく、べっぴんさんとか言えたらなあ……。
店員に連れられ、店の奥へと連れられていく僕ら。

「こちらの奥のテラス席です。先にお連れ様がお待ちかねですよ」

お、男四人でテラス席かあ。

うん？

お連れ様？

「べっぴんなお姉さんに案内されて、すごい良い気分だなあ。ありがとう！さてと……」

お姉さんと楽しげに話していた蓮が、急に僕に向き直り僕の髪を弄り始める。

「えっ？」

僕の疑問符にも、無反応に髪を弄り続ける蓮。

「よつしい髪型準備完了！男前になった、オースケ」

「ええっ？男前って何が？」

蓮は僕の言葉を見殺して、次に花君の目尻に触れる。

「涙の跡……なしだな！ほら、ハナあ笑ってくれ」

「わ、笑うの？……こうかな？」

「その笑顔、最高だなあ！花の笑顔でイチコロにしてくれて良いからな。よし、じゃオースケと手を繋いでくれ」

蓮は、花君の頭を軽く撫でた。

「ふえ？手……」

僕と花君は、お互いに目を見合わせて、言われたまま……手を繋いだ。

「俺さ、お前らのそうゆう素直なトコ大好きだわ」

手を繋いだ僕らにニカツと笑顔を向け、やがて真剣な表情で蓮は大河君の前に拳を差し出した。

「……何だ？」

「タイガ、手を出せ」

真顔で言葉を交わす二人。

「何故？」

「お前に渡したいモノが有るからさ」

疑うような眼差しを向け、しばらくして大河君はゆっくりと手を差し出した。

蓮は、拳を解いてゆっくりと大河君の手を握る。

「阿呆……気色悪い、離せ」

不快感を露わにした大河君の言葉を完全に無視して、同じように片方の手を花君と繋いでいる僕の手を掴む。

蓮は、ゆっくりと僕らを見回して呟き出す。

「さっきに言っておく……お前らの恨みつらみは明日聞く！ 侠の約束だから……だから許せ！ さあて今日は、楽しもうや。侠の闘争の場だああ」

そのまま蓮に、凄まじい力で引かれる。

ほ、本日引つ張られるの二回目だああー！！

一瞬、今自分が居る空間から別の空間に弾き出された。

そんな不思議な感覚に襲われた。

「茜ちゃんとお友達い！ お待たせえ、蓮と愉快的仲間達の到着だあ」

直後、蓮が元気良く叫んだ声が耳に入る。

その声で、不思議な感覚が吹き飛んだ。

いや感覚が吹き飛んだのは、僕の視界に四人の女の子の姿を捉えたからだった。

目の前には夜景が映し出された大きな窓、そしてこちらを四者四様に見つめている四人の女の子達。

夜景の光を纏った女の子達は、すごく幻想的で見とれてしまう。

って、待てえい！

見とれてる場合じゃないぞ！

どゆこと？

このいきなりの展開は！？

これって……。

「れ、蓮これって？もしかして……」

「前に言っただろ？合コンするぞって！だから今日、決行したんだぜ！菊女と合コン」

してやったり！と言うように、顔をニヤリと歪める赤い悪魔。

だよね…やつ、やっぱり合コンですよね！？

誰が見ても分かるよね。

しかも相手は、菊女ですってえ！？

今この瞬間、聖蘭男子四人と千代菊女子四人の他校交流親睦食事会……端的に言えば合コンが幕を開けた。

五ヶ所目 4（後書き）

侠の闘争の場編、本格始動しました！

新キャラ……しかも女の子四人登場させちゃいます。

さて、聖蘭四人組とどう関わるのか……魅力的な話を書けるよう頑張ります！

コメントや評価をお待ちしています！

和紙でした！

では！！

五ヶ所目 5

飛び出した僕達四人に割れんばかりの拍手に迎えられた。

予想もしてなかった拍手の合唱に、僕の体が反射的にビクッと震える。

ダメだダメだ！

合コンなんて、頭では理解しても心の準備が出来て……うんっ！？

その瞬間、僕の視線はある一点に引き寄せられる。

まるで、ずっと昔からそう決まっていたように自然に。

左端に座っている女の子と目が合ったその瞬間、震えていた体に更なる衝撃を受けた。

稲妻が脳天から四肢の先端まで突き抜ける、それぐらいの衝撃。

こんなの……二度目だ。

そう……二度目。

一度目は、初めて蒼ちゃんに出会ったバス停。

あの時、銘東工業高校の卒業式を終えた帰り道……バス停で18歳の蒼ちゃんの姿に衝撃を受け、結果一目惚れに陥った。

その蒼ちゃんと同じ環境、高校三年間を過ごしたいが為に高校生活

をやり直した。

そして、今この瞬間……再び。

蒼ちゃんに匹敵する程の衝撃を受けた。

僕の目は、左端に座る女の子に釘付けになる。

目を離す事なんて、出来なかった。

明るい金色の髪に、全体的にはっきりと大きめのクセがかかったロングの髪の毛。

肌は染み一つなく、白く輝いてる。

キラキラと光る瞳には、星が入ってると言っても過言ではない。

ピンクの唇を見ていたら、無性に唇に吸い付きたくなる。

薔薇色の頬。

はつきりと断言出来る！

彼女は、ここに居る女の子とはレベルと言っか……次元そのものが違う。

正直言って、この女の子の魅力は……蒼ちゃんと同等……いや、それ以上か。

そんな事ない、僕は蒼ちゃん一筋なんだ！

あんな女の子に、あんなにも綺麗で魅力的なんて言葉を超越した女の子なんかに、蒼ちゃんは負けないんだ！

「ようやく来たなあ！蓮君達ってば、遅おい！遅刻なんだあ」

必死に一目惚れしてしまいそうな自分を抑えついていると、一番右の席に座っている茶髪の女の子が、大きな声で明るく叫んだ。

叫んだ事で、頭の右側で纏めた女の子の髪が少しだけ揺れめいた。

「こら、ほの！来てくれたんだから、文句言わないの」

茶髪の子の隣に座つたいる、緑の黒髪を上品に肩で流した女の子が、困つたような表情を浮かべた。

「だってさあー、ほの待ちきれなかっただもの」

「だからって、いきなり叫んだらダメなの！いつも言ってるでしょ。思つた事を叫んじやうクセ、いい加減に直しなさい。ほら蓮君達、固まつてるじゃない」

「むうう……茜ちゃんの意地悪う」

確かに固まつてる、僕ら四人。

「まあまあ、アカネちゃん。ほのちゃんも今だけは反省してるんだしさ」

「れ、蓮君！？ぶううー今だけって言うなあ」

いや、固まってるのは三人かあ。

蓮は、いつの間にか席に近付き椅子に手を掛けている。

花君なんか、僕と同じようにカッチカチの笑顔のまま突っ立っているのにさ。

大河君は……えっ!?

僕の予想では大河君は、てっきり蓮がついた嘘に対して腹をグラグラと煮えくり返していると思った。

だから、不快感を露わにした顔や仏頂面を浮かべていて、間違いないと思っていた。

事実、こんな展開になった時はいつもそうだ!

だが、大河君は……。

大河君は、優雅に髪を触りながら困ったように笑っている!

んだとお!?

こんな表情、内輪じゃ絶対見れないですぜ?

アンタ、普段こんな優雅に苦笑してないでしょ!?

いつも、すっごい冷たい顔してるじゃないかあ!

ふいに喉から溢れ出そうになった心の雄叫びを、苦心して飲み込む。

今の大河君は、完全に外行きモードって訳ですな。

恐るべし大河君。

「さあさあ、三人もいつまでも立ってないで座って座って！」

ボブヘアの女の子が手招きをして、僕らに笑いかけた。

って!?

こ、この子の胸……。

ああ、肌に密着してるセーラー服が羨ましいですな。

溢れてきた生唾をグビッと飲み干す。

「よ、よし！とりあえず、すわ、座ろっか花君」

「そうだね……そうしょうか」

花君と顔を見合わせ、ガチガチに固まった脚を何とか前に踏み出す。

途端に足枷がついてる様な錯覚を感じた。

足がとてつもなく重い。

だが、いつまでも突っ立っては居られない。

気持ちを奮い立たせて、何とか歩みを始める。

最初の一步を踏み出すのは苦労したが、一步を踏み出す事さえ出来れば後は慣性で動く……事にしておこう。

「欧介緊張するな。花もだ。この場では、自分の思うがまま振る舞えば良いんだ。緊張する必要などない」

「う、うん。そうだよね」

そうだけど……。

もしも、思うがままに振る舞ったら両手に黒光りする錠がかかる。

けして冗談では無いんです。

いよいよ、席にたどり着いた。近くで見る3人は、更に別嬪さんに見える。

待て待て。

正しくは、別嬪さんの中の別嬪さんなわけ……って僕は何を言うてる？

残る一人。

一番左端の子は、もう僕ごとき人間が別嬪さんだとか言葉なんて言う事自体が畏れ多い。

蒼ちゃん並の魅力……でもホントは……それ以上に……。

「あの……すごく見つめてますけど……どこで会いましたか？」

席に座る事も忘れて見とれている僕は、金髪の彼女に笑顔を向けられた。

五ヶ所目 5（後書き）

こんにちは。

和紙です。

リニューアル後、初投稿です。

これからも宜しくお願い致します！

和紙でした！

では！！

五ヶ所目 6

彼女の笑顔を僕は食い入るように見つめてしまふ。

目を逸らそうとしても僕の中の何かが、断固に拒否していた。

この女の子と以前会った……のか？

膨大な記憶に検索をかけたが、脳内のどこにも引つかからない。

いや検索する事すら愚かな行為だろうか。

目の前に居る……こんなにも美しい女の子と以前会ってたら、忘れる事なんて有り得ない。

「え、えっと、あたた、会った、た……かな？」

「あの……何を言ってるのか分かりません。少し落ち着いて……下さい」

「オースケ、コラー！鉄拳制裁だ、コイツめっ！」

「あ、痛い」

朗らかな調子で、まるで悪戯っ子を優しく叱るような、そんな蓮の声を聞いた途端、脳天に重く痛みが響く。

どうやら、ふとどきな僕の様子を見かねた蓮が、僕の脳天に鉄拳制裁を下したようだ。

なんか……痛すぎて、冷静に痛みを知覚出来た自分が居ますね。

でも、そのお陰が彼女から、ようやく目を逸らす事が出来た。

心做しか、僕の記憶が何個かデリートされた気がしなくてもないが。

「うわぁ……痛そう！大丈夫？やりすぎよ蓮君」

心配そうに、僕を見つめる茜ちゃん（だっけ？）。

って！

くほう、女の子に心配されるなんて、蒼ちゃん&ユズちゃん以来だ。

幸せな気分過ぎて浄化……されて……いく……。

「い、いや良いんだよ」

今更ながら、見つめ続けていた事に恥ずかしさが込み上がってくる。

「あ、あの……すみません」

「いいえ、気にしないで下さい」

金髪の女の子は、明らかに困惑した顔で笑う。

他の子達も、クスクスと笑い合っている。

ま、間違いない。

今までのやりとりで、キモ男と認定されたに違いない。

明日から菊女で笑いのネタにされるんだろうなあ。

緊張や期待で胸が高鳴る時間……生まれて初めての合コンが始まる前に終わった。

そうだ！

これからの時間、話が僕に振られる事は無いんだあ。

もう帰る……っかな。

すごく残念だが、この結果を導いたのは、他の誰でもない自分な訳だ。

ある意味、僕がこの場から消えても何の支障も出ないのだ。

「えっと、あの、じゃ……僕は……これで」

「どうしたのかしら？」

金髪の女の子が、腰を浮かし始めた僕に不思議そうな顔をする。

うつ、見つめられて動けない……。

「そ、その……」

「座って、自己紹介を始めましょうよ」

そう言つて、また笑顔になる。

輝くような、華やかで美しい彼女の笑顔。

そんな煌めく笑顔を見た僕は、気付くといつまにか座っていた。

「ふわぁー！出たぁ、姫ちゃんの必殺技ぁ！」

「ふふつ。ほの、誤解を招くような事は言わないで欲しいわ」

姫ちゃんと呼ばれた子は、僕に向けた煌びやかな笑顔を、ほのちゃんと呼ばれた女の子にも向けた。

「ぎゃふぁぁー、ほのにまで姫ちゃんスマイル向けないでえ、体が火照ってきちゃうう」

ほのちゃん……この子の感性、凄く親近感湧くなぁ。

「茜ちゃん、私……すっごく恥ずかしいよ」

「みい……私も同じ気持ちよ」

みいちゃんと呼ばれたボブヘアの子と、茜ちゃんが恥ずかしさを噛みしめるように俯いた。

ふと、隣に座っている花君が楽しそうに笑っていることに気付く。

「どうしたの花君？」

「エヘヘっ。何だか楽しいなあって思ったんだぁ」素直な言葉を口にする、花君。

そんな花君の素直で、真っ直ぐな気持ちを聞いて、何だかすごくリラックス出来た。

「確かに、楽しいね」

花君の言葉で、ようやく僕も合コンのスタート位置に立てそうだ。

気付けば、料理が続々と運ばれてきて、テーブルを占拠していく。

どの料理も食欲をそそり、今にも手を伸ばしてしまいそうなわけで。

「マナー違反だ欧介。はしたない真似はひんじまへ顰蹙を買っぞ」

やれやれと言うように小さく笑顔を浮かべ、僕の右腕を手を添えて制する大河君。

大河君の言葉で、無意識に僕の右手がナイフを握り締めてることに気付く。

「あわっ！う、うん。ゴメン……気づかなかったよ」

大河君、ありがとう。

「ドキドキ、ドキドキ」

何故か……ほのちゃんは目を潤ませて艶っぽく輝かせ、胸元でギュッと手を握り締めている。

「えっ？ど、どうしたの」

「目の前にB Lてんか……」

「き、気にしないで下さい。さあ！自己紹介しましょうよ」

ボブヘアーの子が、手を叩いて先に進むよう促した。

その横で、茜ちゃんに双肩を掴まれたほのちゃんは、グラグラ揺られていた。

「よっしゃ！四人の睦まじい会話を聞いた所で、自己紹介タイム」

勢いよく天井に拳を突き上げる蓮。

拳速で空気が震えた気が……。

それぐらいテンションが上がってるって事らしい。

「きたあ、待ってましたあ。イエーイ自己紹介タイム」

蓮に負けないぐらい、勢い良く天井に向けて拳を突き出す、ほのちゃん。

うん？

微妙に頭がユラユラしてるような……。

だが、そんな事は、ほのちゃんがつけてるフレグランスの甘い香りを嗅いだ途端、どうでも良くなった。

だって、心と体がザワツと反応するんですもん。

強いていえば、体が特に。

「ホノちゃんのノリ良いねえ。そうゆうの大好きだわ！まあ、俺は自己紹介する必要はないと思うんだけど、この際だ！御存知の中村蓮だ。結婚歴なし、犯罪歴なし、現在素敵な彼女募集中、好きなタイプは……優しさの中にも厳しさを持つ人だな。あと美味しい味噌汁。今日は宜しくね、楽しもうな」

最後にニカツと悪戯小僧のような満面の笑みを浮かべる蓮。

「イエーイ、蓮君ヨロシクう！ほらほら茜ちゃん、みいちゃん。もおー！姫ちゃん関係ない顔するなあ」

両脇に座っている、茜ちゃんとみいちゃんの手を掴んで、はしゃぐほのちゃん。

「ちょ、コ、コラ！ほの止めなさいよ」

「わ、私達に構わないで、ほ、ほら自己紹介続けて……ね」

みいちゃんに促され、花君に自己紹介が移る。

「えっと、良いのかな？先に進んじやって……うん、僕は森島花つて言います。今日は、どうか仲良くして下さい」ニコツと笑う花君。

途端に、ピタリと動きを止める女の子達。

おお、花君の伝家の宝刀は今日も切れ味抜群だ。

「ほよ……笑顔可愛い。何かさ、浄化されていく……花君仲良く

してね」

「コラ、ほの！男の子に可愛いだなんて失礼よ。か……可愛いけど……すぐく」

「ふう、不覚う……！ほのちゃんの相手に夢中だったんだからあ。さ、さあ……気にしないで、続けて下さい」

ほぼ同じタイミングで頬を桃色に染めた、ほのちゃんと、茜ちゃんと、みいちゃん。

三人は騒いでいた格好のまま、変な体勢で花君の笑顔に釘付けになったようだ。

アハハ。

今日も花君の笑顔は、切れ味抜群だな。

いつも一刀両断されてばかりの、僕が言うのも何だけど……。

「春日大河です。本日は、千代菊女子の皆さんと知り合えて光栄です。よろしく」

髪を触りながら、照れたような笑顔を浮かべる大河君。

前髪を弄る仕種が、とても優雅。

「王子様……。私の全てをアナタに捧げます……」

今まで以上に、ぽおっと頬を染める、ほのちゃん。

っつか、凄い事を口走ってる気が……

大河君の決して内輪には見せる事のない、完全な外向けスマイルに射抜かれたのは、ほのちゃんだけでは無かったようだ。

茜ちゃんも、みいちゃんも頬を染めて、見るからにポワっとしている。

「こちらこそ宜しくお願い致します。大河さん」

天使の微笑みを浮かべる、姫ちゃんと呼ばれた美しい彼女。

彼女まで笑顔にさせるとは。

大河君、君の姿と人生を僕に下さい。

いや今すぐ、入れ替わって下され！

そんな事を思っていたら、女の子4人の視線が僕に注がれている事に気付いた。

「ほらほらあ、最後は君の番だよ。欧介君」

もう自己紹介しなくても、名前知られてるよね？

そんな言葉が頭に浮かんだが、口には出せなかった。

だって緊張し過ぎて、口の中がカラカラですもん。

「ほらあ、オースケ！バッチリ決めてやれや。いつものアレだよ」

力強いガッツポーズを僕に向ける蓮。

ち、ちょっと待ってよ。

いつものアレって何です？

「大トリ登場だね。欧介君、真打ちの力……お馴染みのヤツを見せてね」

花君は、親指を立てて微笑んでいる。

あの……すつごい、やり辛くなってるのは気のせいだろうか！？

だ、大丈夫だ！

最後の常識人、大河君が助けしてくれる筈！

大河君なら、きっと助……。

「フツ、これは見物だな」

今この瞬間、神は死にました。

こうなったらヤケクソだ！

見せてやるよ、いつものアレを！

僕は静かに立ち上がる。

「いつものヤツって何かな？ほの楽しみい」

「ほのちゃん、静かに」

みいちゃんに、制されるほのちゃんが視界に入った。

だが、もう止められない。

迷いは無かった。

「ブ、ブローリです」

後の事を考えず、自分が思い付く精一杯の自己紹介ネタを叩きつけた。

五ヶ所目 6（後書き）

久しぶりの更新でした。

また書きます。

和紙でした！
では！！

五ヶ所目 7

目の前の女の子4人は瞬きをする以外、ピクリとも動かない。

あっ……れ？

マズい展開！？

こ、ここはもう一度重ねて。

「ブ、ブロ」

「オ、オースケ！すっげえ緊張してんなあ。とりあえず落ち着こ
ぜ！」

蓮が勢い良く立ち上がり、僕を制した。

反射的に見た蓮の顔には、引きつった笑顔が張り付いている。

「ああ……ゴメンね。やっぱり緊張してさ。よしっ！もう一度ハッ
キリ言うね！ブロ……」

もう一度、よりハッキリと自己紹介ネタを伝えようと思った矢先、
4人の女の子に優しい笑顔を向けてる大河君に、テーブルの下でズ
ボンを強く引っ張られた。

彼の笑顔からは、想像もつかないぐらいの力なワケで。

というか、ズボンを引き千切る勢いだ。

「ほらほらあ、欧介君。リラックス、リラックス。いつも通りに言えば良いんだよ。いつも通りに……普通にさあ。ねっ」

ニコニコ笑う花君。

だが彼の手はテーブルの下で、しきりに×を作っている。

そ、そのジェスチャーは！

うう……つまり、大失敗なんだね。

三人は、暗に止めると言ってる訳だ。

三人とも、迷惑かけてゴメン……。

って、元はと言えばアンタら三人がやらしたんじゃない！

大トリとか、いつものアレとか言ってるさ。

まあ今言っても、しょうがないけど。

「ゴホゴホッ。ぼ、僕の名は真田欧介です。あのお、ゴメンね、緊張して変な発音しちゃった」

額、首、脇に冷や汗を滲ませながら、噛んだだけでよオーラを醸し出し誤魔化す。

絶対誤魔化せて……ないと思うけど。

「な、なあーんだ、緊張して上手く言えなかったただけかあ。てつきり、本当にブロリーとか言ってるのかと思ったよ。はいっ？ブロリーとか何！？って感じだったもん」

ぎこたない笑顔を浮かべる、ほのちゃん。

その横で、ゆつくりと頷く茜ちゃん。

「そ、そんな事言うわけないよな、オースケ！いつものアレは、オースケの鉄板ネタなんだぜ……ってか！次は女の子の自己紹介じゃん、さあ宜しく紹介してくれやあ」

半ば強引に話題を変える、蓮。

うん。

やはり僕は、合コンの存続すら危うくする言葉を発していたようだ。ブロリーで押し通さなくて、良かった。

今、冷静に考えれば何故ブロリーをチョイスしたんだ？

ただ、伝説のスーパーサイヤってだけじゃん！

もしかして、深層心理で僕はブロリーに憧れてるのか？

まあ、結果的に三人に助けられて最悪の事態を回避出来たようだ。

だから、良しとしますか。

そんな事を考えていたら、椅子から元気に立ち上がった、ほのちやんを視界に捉えた。

五ヶ所目 7（後書き）

更新出来る時に、しておきます。
感想やコメントお待ちしてます。

次回は、花か蓮が大河サイドを書きます。

和紙でした！
では！！

五ヶ所目 8 (花) (前書き)

今回は、花視点です。

五ヶ所目 8 (花)

僕の隣で、まだ少し動揺を見せてる欧介君。

つてえ、僕の方が動揺してるよお！

あんな自己紹介で初めて聞いたもん。

多分……DBのセリフだと思う。

確かに、悪ノリしちゃった事はイケない事だケド……パニックにな
ってる欧介君はオモシロいからね。

つい、からかいたくなるんだもん。

それに。

へへへっ！

すごく自然に大河君、蓮との連携プレーが出来て嬉しかったなあ。

何だか、ものすごく絆を感じられた瞬間だった。

掛け替えのない大切な絆だね。

僕の……僕達の……。

「はいはあーい！ほのが自己紹介、一番槍い」

おや、ついに女の子達の自己紹介かあ。

へえ、やっぱりこの元気な女の子が一番なんだね。
何となく、そんな気がしてたけど。

でも、この子……ほのちゃんだっけ？
面白いよね。

一緒に居るだけで楽しい気持ちになれそう。

可愛い笑顔だしなあ。

僕も、こんな笑顔出来たらなあ。

「ほのは……じゃなくて、アタシは綾瀬ほのだよ。ほのって呼んでね」

とびっきりの笑顔とピースのサイン。

僕が今まで見てきた笑顔の中でも、五本の指に入る笑顔だよ。

うん、やっぱりすごく良い笑顔だもん。

隣に座ってる欧介君は、ほのちゃんの笑顔にデレデレになってる。

鼻の下が弛んでるからねえ。

うう…欧介君め。
ちよっと情け無いぞ。

まあ、やきもちを妬いても仕方ないかなあ。

でも、何か悔しかったんだ！

ふいに、欧介君と目が合った。

ちよつとイジワルしたくて、目線外しちゃった。

うん？

よく考えたら……欧介君のこの弛んだ顔、僕もいつも向けられてる様な？

多分、気のせいだね。

五ヶ所目 8（大河）

一瞬、肌で感じた冷めた空気。

アイツは、欧介は……何を言っていたんだ。

ブロリー？

新種の緑黄色野菜か何かなのか？

自分は品種改良された全く新しく、洗練された存在だと……野菜に例えて言いたかったのだろうか？

いや。

欧介は、追い詰められてそんな事を口走る男では無いな。

俺は、今食事をしている。

不覚にも、阿呆に騙された。

まだ……内輪での食事であれば許せる。

嫌な気分では、無いからだ。

だが、何故か千代菊女子と一緒にディナーを共にしている。

共にしているだけでは無い。

俗に言う 合コン に俺は身を置いている。

今し方、綾瀬ほのが自己紹介を終えた所だ。

彼女の笑顔は、花の笑顔に近い。

まあ、あくまで近いだけだ。

俺は花の笑顔しか認めない。

幼い頃から変わらない、花ちゃんの笑顔。

変わらないと言えば……蓮の阿呆さ加減も変わらないか。

うん？

先程から、いや席に着いてからか……姫と呼ばれている女子から視線を感じる。

何なんだ、この女？

正直、ずっと視線を投げかけられるのが鬱陶しい。

あまり他人にジロジロ見られるのは好きではない。

慣れていると言えば、慣れているが。

やはり気分が良いものではない。

いい加減、顔面に笑顔を貼り付けているのに疲れてきた。

演技を辞めて、睨み返してやりたいという気持ちも、沸々と湧いてきたのが正直な気持ち。

そんな事に思いを巡らしていると、新たな自己紹介が始まった。

ボブヘアの女子が、照れ臭そうに立ち上がった。

世間一般で言う……「可愛い女の子」という部類に入るだろう。

それは、目の前の他の三人にも言える。

「私は、真山まやま美月みつきです。は、初めまして！？あつ違うつ、初めましては最初に言うんだったかな……えっと……」

何なんだ……明らかに挙動不審だ。

この女子は、さき程まで、比較的落ち着いていた気がしたが。

「みいちゃん。落ち着いていて、落ち着いてえ。この日の為に、髪の毛も可愛いく切って準備してたんだからあ。四人で誓った、千代菊完全勝利宣言を思い出そうよ！」

綾瀬ほのが、ピースをして高らかに叫んだ。

多分、美月にエールを贈ったんだろう。

だが……幾つか余分だろうな。

勝利宣言とは何の事なんだ？

聖蘭に恨みでも有るのか？

「うう……ほのちゃん！？それは言ったらダメな事なのに………みんな引いちゃうよぉ」

美月の顔から困惑した気持ち滲み出ている。

「きつ、気にしないで下さいね！？ほのが言ってるのは嘘だから」

茜とか呼ばれている女子が、両手を振った。

その焦り具合が信憑性を濃くしてるのに気付かないのだろうか。

「ハハッ！みいちゃん、大丈夫だって！俺達、イケてる聖蘭カルテツトは絶対引かないからさ。むしろ、気合い入れてくれて嬉しいもんな。そうだろ？オースケ、ハナぁ！」

阿呆が威勢良く笑う。

「うん！そ、そうだね」

「僕も嬉しいなあ、エヘヘ。それに、ボブヘア凄く似合ってますよ。可愛い」

相変わらず噛んでしまう欧介と、ニツコリ笑う花。

「それにオースケなんてさ、気合い入れ過ぎちゃって真っ赤なTバ

ツク履いてるなんだぜえ。Ｔバックのキレが、エグいのなんのつてもう」

「うん！今日はティ……ええっ！？」

「へえー欧介君、Ｔバックなんだあ！ほのほ、履いた事無いよあ。どんな感じかな？お尻がスーサーするのかなあ？今度、履いてほきゅあ！？」

「コラ、ほの！？女の子なんだから止めなさいって」

「わ、私の自己紹介がメチャクチャになっちゃったよあ……」

綾瀬は、茜に口を塞がれ、美月はその横でオロオロしている。

金髪の女は、笑顔で三人のやり取りを見ている。

あくまでも何となくだが、金髪の事だけは引つ掛かる。

他の三人とは、違うオーラを感じると言えば良いのだろうか？

いや、今は気にするまい。

だが用心をするに越した事は無いな。

ふいに頭に過ぎったが、他の人間から見た俺達のやり取りも、実際こんな感じなのか？

目の前で繰り広げられている茶番。

ふっ、こんなムチャクチャなんだろうなあ。

茶番は、茶番だが……まあ、もう少し付き合ってやるか。

新しい自分へ成長出来るかもしれない。

それに……友との時間なのだから。

「真山さん、宜しくお願いします。僕も真山さんに負けないぐらい、今日は楽しみでしたよ。さあ、次の方は……」

俺は、とりあえず先に進める流れを作った。

五ヶ所目 8（大河）（後書き）

大河視点です。

五ヶ所目 8 (蓮) (前書き)

今回は、蓮視点です。

五ヶ所目 8（蓮）

オッス！

オラ、蓮！

ハハッ！

テンションも上がって参りましたってな。

いやあ、内輪で合コンは最高だぜ。

しかも、相手は千代菊！

更に、千代菊の一年生 姫 が入ってる超豪華盤。

多分、この事実にはウチのサクランボトリオは気付いてないと思う…
…もしかしたら 姫 の存在自体知らないかも？

いや……それはココら一带に住んでる男としたら、有り得ないな。

近隣の男子高校生が一度は妄想と快感を右手に乗せて……って違う
かあ。

一度は、恋い焦がれる千代菊の 姫 を合コンに呼べるなんて、俺
のイケてるアプローチのお陰だぜ。

これは仁徳？

いや、持って生まれた俺の人徳だなあ。

よっしゃ、更に盛り上げるっちゃね！

「タイガあ、待ちきれなかったみたいだなあ！？今日は朝からソワソワしてたもんな」

俺の言葉に、一瞬だけタイガの眉がピクついた。

だが、今は気にしてられない。

「さあてアカネちゃんの番だあ、待ってましたあ」

手を叩いて、アカネちゃんに自己紹介を促す。

期待してなかった朴念仁のタイガが、折角作った流れだ。

流れを潰したら、申し訳ないない&癪だからなあ。

俺が更に加速させるぜ！

「うう、いざ自分の自己紹介になったら、緊張してきちゃった……
名前は、伊集院^{いじゅういん} 茜^{あかね}です。気付いてるかもしれないけど、ほのとは
幼なじみです。みいち……」

「ほのは、小さい頃の茜ちゃんの面白い話をたくさん知ってるよお」

「コ、コラほのお！？私の自己紹介中に茶茶^{ちやちや}入れないの！それに、
そんな話言わなくて良いんだから！」

「エヘヘッ！ああ、茜ちゃん照れてるんだなあ？フフン、攻守逆転
だあ！」

アカネちゃんに向けて、勝ち誇った様にピースをする、ホノちゃん。

ハハッ！

この子、やっぱりオモロいなあ！

「……よく分かったわ。今日は、ご飯の後で御説教だからね！攻守逆転したか、じっくり確認したいし、今日は本気だからね」

「ええ！？お説教は嫌ああ！茜ちゃん、ゴメンね！？もうしませんからあ……」

さっきの勢いは、何処へやら、焦り出すホノちゃん。

「ね、ねえ？ちょっと二人とも落ち着こうよお……ここお店の中だし、それに蓮君達に笑われてるうゝ。ひ、姫ちゃん、何とかしてえゝ」

ミツキちゃんが、ドギマギした様子で《姫》ちゃんに助けを求める。

「賑やかなディナーだったわね。美月、ほのが元気なのはいつもの事なんだから。……4人に私達のいつもの姿を見て貰えて良いんじゃないのかしら？」

《姫》ちゃんは笑顔のまま表情を変えない。

プハッ、やっぱりダチ同士の掛け合いは聞いているだけで愉しいぜ！

掛け合いを楽しむ俺を尻目に、慌てるホノちゃんに向けて眉を顰^{しか}める、アカネちゃん。

彼女のそんな顔を見て、ふいにユズの顔が頭に浮かんだ。

もし、ユズに合コンしてるってバレたら……絶対不機嫌になるだろうな。

きつと、こんな感じだ。

俺の頭上に、未来の出来事を表す魔法の吹き出しが現れる。

校内で、ユズに出くわす。

「おお、ユズ！お……」

「楽しかった？」

やけにニコニコと笑顔を浮かべるユズ。

「はっ？ちよつと待て、な、何……」

「だからあ、合コン楽しかった？」

腰に手を据えて、俺の顔を覗き込む。

笑顔のまま。

「楽しいとかじゃないんだぜ。俺は、オースケやハナの為に……」

「そっかあ、蓮とミンナで楽しく《合コン》したんだ！昨日は、千代菊の可愛い可愛い《女の子達》と楽しい時間を御過ごしになれて良かったわね！普段、私とは滅多にご飯食べないクセに、他の女の

子とならホイホイ食べるんだ！……ああ、もう顔も見たくない！バカ！バカ！バカ！」

魔法の吹き出し終了。

いや、間違いねえ。

こんな展開になり、理不尽な言葉を浴びせられる。

別にユズに怒られる理由が無いんだが……何故だよ。

これが、ミカンなら笑って見過ごしてくれるのにな。

「蓮ったら、しょうがないなあ……もう」

みたいな。

全然違うからな……アイツら。

きつと、この4人の内の誰かもそんな子なんだろうな。

女って難しいぜ。

まあ、良いや！

今は合コンなんだ、《侠の闘争》に命を懸けずして何をするモノぞ！

ユズにはバレないって、例えバレても……いや、バレる事は有り得ないな！

俺様に抜かりは無いんだ！

さて、次はラストだ！

「やっぱ、友達の前とかだと素の自分に成れたり、友達と一緒に居ると何処でも飾らない関係で居られる事は、とても良い事だと思うし……ホントの友達だと思う。だから、四人はホントに仲良しなんだね。今まで見てて、心からそう思います」
急にオースケが真面目な言葉を声で綴った。

「……って、僕は突然何を言ってるんだあ？……ゴメンね、いきなり。何か、僕達も茜ちゃんやホノちゃん、美月ちゃん、姫ちゃんみたいに仲良いからさ。だから、同じなんだなって。改めて、友達って良いなあ……って思ったんだよね」

静まり返った女の子達。

もちろん俺達も静まり返ってるのは、言うまでもない。

「欧介君……たよ」

「えっ？ほのちゃん？」

「見直しちゃったよ！ほのは、今この瞬間、君を見直したあ！」

ほのちゃんが、ナイフとフォークを掴んで立ち上がった。

だけど。

「ひいひい！？」

勢い良すぎたのか、ナイフが手から飛び出し、オースケの丁度目の前の位置に突き刺さる。

ハハッ。

ほのちゃん、天才だな。

「コラア！？折角の欧介君の言葉が台無しじゃないの！ほの！！はしゃいだらダメだって言ってるでしょ」

「うわぁーん、茜ちゃんの鬼い！？赤鬼い」

「うう……せ、折角静かになったと思ったのにい。また騒がしくなっちゃったね。でも、欧介君の言葉良かったです。真っ直ぐな言葉で」

ミツキちゃんが、瞳をキラキラ輝かせて笑う。

「そんな……ただ思った事を口にしたただけだから」

オースケは、頭をポリポリと掻いた。

オースケ。

お前。

やっぱり最高だな。

最高のツレだよな、俺達は！

気付いたら、俺は席から立ち上がって、ハナとオースケの肩をガツチリ組んでいた。
もちろんタイガの肩にも手をかけてる。

「うええ……蓮、ちょ、ちょい」

「フフツ。蓮ちゃん、ご機嫌だね」

「阿呆……何だ、肩に手をかけて」

「楽しいから、肩を組んでる！ハハツ、そんだけだぜ」

ツレの肩に手を掛けるのに、それ以外理由なんて無いぜ。

「さあ、最後は《姫》ちゃんだよ！バツチリ決めてな！」

俺は、高まったテンションに任せて、千代菊一年の《姫》に自己紹介を促した。

五ヶ所目 8（蓮）（後書き）

次回からは、欧介の視点に戻ります。

感想や理由の有る批評をお待ちします。
意見なども気軽に聞かせて下さい。

和紙でした！
では！！

五ヶ所目 9

今、僕はく合コン>の場に居ます。

……この僕が合コンに参加してるなんて信じられない。

でも、事実なんだよね。

今、女の子達の対面にソワソワを抑えながら座ってる。

すごくドキドキするんだ。

ほのちゃん。

美月ちゃん。

茜ちゃん。

3人とも、すごく可愛いくて。

しかも、すごく仲良しで。

ってか、やっぱり同じ空気を吸っててダメなんじゃないか僕は!?

こんな僕みたいな、惨めな腐れ外道が。

「オースケ、ナイスだぜ」

ガツチリと僕の肩に腕をまわしてる蓮が、楽しそうに僕の耳元に囁いた。

ナイスと呼ばれたせいか、それとも僕は耳元が弱いのか…何だかムズムズする。

でも、そんなムズムズが吹っ飛びそうだ。

今から、蒼ちゃんと同じ衝撃を感じた、女の子の自己紹介。

女の子の自己紹介を待つのが、こんなにドキドキするのも蒼ちゃん以来。

「さあて、メンズの皆様お待ちかね！姫ちゃんの自己紹介だよお」

ほのちゃんが、ニコニコ笑ってパチパチと手を叩く。

蓮も立ち上がって、同じ様に手を叩いた。

「…阿呆が…」

ボソッと、大河君の呟きが耳に入ったが気にしないでおこつ。

つか、ほのちゃんが連呼してくれてるお陰で……姫って名前だつて分かってるからなあ。

噂の姫ちゃんが、ゆっくりと立ち上がった。

思わず、生唾を吞んでしまう。

「私は白雪はくせいと言いますです。今日は、新しくお友達が増えて嬉しいです」

照れたような、でも神々しさを感じる微笑みを浮かべる白雪さん。

「おい……欧介」

「……ふえい」

「口は閉じた方が良く。だらしないからな」

「うえっ……あっ、ありがとう大河君」

大河君に言われて初めて、自分の口が全開になってる事に気付いた。

それにしても。

名前が 白雪 姫 かあ。

すごいピッタ……。

「白雪 姫ちゃんかあ。ぴったりの名前だね」

花君がニコニコと笑う。

「ありがとうございます、森島君。」

「おれなんて要らないよ。本当の事なんだからね」

あっ…。

ああ……。

花君、それ僕のセリフ……。

しかも自然に、サラサラ会話してる…何か悔しいな。

「来て良かっただろ、オースケ」

「う、うん」

カラカラと満足そうに笑う連。

「上手くその気にさせて、お持ち帰りしても良いんだぜ…にやんてなあ！ハアハハッ」

「ちょ、蓮！？声が大きいって！」

ヤバイって、聞かれてたら不味い…

「あのお、何をお持ち帰りするんですか？」

白雪さんが、小首を傾げて微笑む。

くはあっ！

よりによって、一番の高嶺の花に聞かれちゃってる。

ここは、ほのちゃん辺りが喰い付く話でしょ？

こうなったら、目が合った人に助けを求めよう！

救いを求めて、皆の顔を見回す。

「よよお！このチキンは美味しいぞお！ほらほら、みいちゃん、茜ちゃんも食べて食べて」

口いっぱいにチキンを頬張り、ニコニコ笑うほのちゃん。

「コラ、ほの！両手に骨付きチキン持って食べないの！」

「でもでも、その食べ方は、ほのちゃんらしいよね」

茜ちゃんと、美月ちゃんも何だかんだ楽しそうだ。

「うわあ、美味しそうだなあ。ほのちゃん、僕にも一本取って」

「うん良いよお。はい花君。えへっ、ほのの王子様もどうぞお」

「王子様？……ありがとうございます」

「大河君、やったじゃん！王子様だって。僕が言つのも変だけど、確かに大河君は王子様っぽいね」

「ふっ……そんな事より、花。口にソースがついてるぞ」

「えっ、嘘！？」

「ちえ！朴念仁が王子様かよ。ホノちゃん、気を使いすぎだぜ！とりあえず、オレにもチキン頂戴な」

「ぶう！！蓮君！大河君は、ほのだけの王子様なんだから！」

何だろ……。

この疎外感……。

何でみんな、盛り上がってんの！？

ってか、蓮！？

アンタが、こぼしたちゃったお持ち帰り発言だよな？

何、堂々とみんなの会話に参加してるんだよ！

「あ、えっと、お持ち帰りってのは……その……」

袋小路に迷い込んだ僕に、白雪さんは相変わらず優しい微笑みを浮かべている。

その微笑みが、僕を袋小路に追い詰めてる事に、どうか気付いて下さい。

「ほ、骨付きチキンがお、美味しそうだから！お持ち帰りしようかなあって！」

白雪さんから、目を逸らさずには居られなかった。

五ヶ所目 9（後書き）

あけましておめでとございます。

久しぶりに更新します。

これかれは、無理なく200文字程度で更新しようかと思えます。

和紙でした！

では！

五ヶ所目 10

思わず出た、骨付きチキンのお持ち帰り発言！

完全に言い逃れ発言……。

不自然かな……いや、不自然じゃないよね！

突発的に出た言葉にしては、筋の通った話だ。

多分、これで大丈夫なハズ。

僕の予想通り、白雪さんは、納得した様子で手をポンと叩く。

ホッ……。

良かった、これで安心……。

「申し訳有りません、店員さん」

突然、にこやかにウェイトレスを呼ぶ白雪さん。

えっ？

何だ何だ？

「あ、あの白……」

「この骨付きチキンの持ち帰りって出来ますか？」

はあっ！？

困惑する僕を尻目に、白雪さんとウェイトレスの間でテイクアウトの段取りが進んでいく。
と、止める――！

僕の中で、もう一人の僕が話を止めると叫んでいるが、成り行きを見守るしか出来ない。

「真田さん、良かったですね。御料理のお持ち帰り出来るそうですよ」

「う、うん。あ……ありがとう」

白雪さんの素敵な笑顔を向けられると、まあ良いかなんて思ってしまう。

ふと、骨付きチキンのプライスを見て、そんな思いは吹き飛んだ。

意外に、御高い御値段だ。

皆で食べる骨付きチキンは、皆で分割するけど……お持ち帰りじゃ1人で払うしかない。

「どうしました、真田さん？」

ナプキンを口に当て、僕を見据える白雪さん。

「り、料理が美味しいな……ってね」

「まだお持ち帰りしたい料理が有れば、おっしゃって下さいね。私

が御伝えしますから」

彼女は、笑顔で小首を傾げる。

これ以上お持ち帰りしたら、明日から僕は、皿洗いする羽目になるんだよね。

いつそ口に出せたら、どんなに楽だろう。

「う、うん。そ、それよりさ。白雪さんは、この店に良く来るの？」

「ええ。実は、知り合いのオーナーが経営してますので。よく御馳走になってます」

な、なら！

一生の御願いだから、骨付きチキンも《御馳走》にしてくれ！

……ダメだ、今は骨付きチキンの事を忘れよう。

「えつとね。ほの達は、学校帰りによく来るんだよ欧介くん。パフエが美味しいんだあ」

ほのちゃん……君は、何でこのタイミングで会話に入ってきたのかな？

今まで完全に知らん振りしてたのにさ。

何で、骨付きチキンの言い訳の時とか、お持ち帰りの段取りの時と

かに、話に加わらなかったんだい？

言いたい……彼女に思いの文をブチ撒けてしまいたい。

五ヶ所目 10（後書き）

若干、変な切り方で終わってますが……あしからずご了承ください。

短くても定期的に更新していく！

今年の目標です！

和紙でした！

では！！

五ヶ所目 11 (前書き)

お久しぶりです。

五ヶ所目 11

ブチ撒けたい。

だけど、止めよう。

女の子に不満をブツブツ言っ何になるんだろ。

折角の初合コンを台無しにするのは嫌だ。

そうだ！

家に持ち帰って、父さんと母さんと一緒に食べよう。

たまには、美味しいモノを家族で食べたい。

「すみません」

「どうしたんですか？」

白雪さんが、不思議そうに小首を傾げる。

彼女の不思議そうな顔に、僕は曖昧にしか笑えなかった。

彼女のどんな顔も魅力的だから。

ウェイトレスさん呼び止め、骨付きチキンを2本追加する。

ウェイトレスのお姉さんは、爽やかな笑顔で頭を下げた。

お金の心配はある。

多分…2本分の代金は親から返ってくるハズ。

代金が返ってこなきゃ、1ヶ月は家に直帰しなきゃいけないなあ。

「ふおおー」

花君が、ソースを頬につけて声を上げた。

花君……だからソース付いてるって。

「うわあい！欧介君から、ほのへのチキンのプレゼントだあ」

ごめんね、ホノちゃん。

プレゼントしないから……。

「何で追加したんですか？」

白雪さんが真っ直ぐと僕を見つめる。

見つめられるのは苦手。

「あのさ……恥ずかしい話だけど、両親にも食べさせたいなって。あんまり親に美味しいモノを買ってあげた事無いから。美味しいモノを家族で食べたいなって、ふっと思って。今、みんなで食べてるように美味しいから絶対」

マザコンかファザコンと思われてしまったか？

何で親の話なんか出したのか。

口に出して後悔するのは何度目なんだろう。

現にシーンとしている皆。

「あなた……」

白雪さんが、目を見開く。

「私……欧介君みたいな男の子好きです」
美月ちゃんが、目を潤ませてる。

「欧介君みたいな彼氏が居たら、幸せよね」

茜ちゃんが優しく微笑んでる。

「ほのの……心が盗まれそうだよ……。ううん、もうあげちゃいたい」

胸の前で両手を握る、ホノちゃん。

女の子達から褒められてる。

……この僕が褒められてる!?

何で?

みんな、普段から当たり前にしてる事ですよね?
普段、僕が親孝行してないだけで。

「欧介君、僕も大好きだよ。ずっと」

花君が、ニコニコ笑って告白してくれた。

ダメだダメだダメだあ！！

花君は男なんだ！

可愛いくとも男の娘……じゃなくて！
男の子なんだ！

「俺の《お持ち帰り》パス、効果抜群だろ？」

ニカッと笑い、僕の脇を、うりうりする蓮。

蓮は…確か僕に総てを擦り付けて、みんなと楽しそうに雑談してたのは、僕の記憶違いだろうか？

大河君は何かを考えてるのか。

何だか分からない表情を浮かべている。

白雪さんも同じような表情。

五ヶ所目 11（後書き）

気づかない内に、連載開始六年が経ちました（苦笑）

コメントやアドバイスをお願いします。

和紙でした！

では！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4108a/>

上手な修正液の使い方

2011年6月27日21時01分発行